THE RECONSTRUCTION

改造

思想と文藝

研究と批判

勞働組合同盟罷工研究號

河合榮次郎
神戸正雄
高橋誠一郎
山川均
曄道文藝
賀川豐彦

佐々木惣一
小川未明
桐生悠々
谷崎精二
宮地嘉六
佐藤春夫

九月號



改造九月號目次

■評論と研究

プロパガンダ……………巻頭言…一

政治の社會的任務……法學博士 佐々木惣一……二

勞働組合同盟罷工研究

勞働組合と同盟罷工……慶大教授 高橋誠一郎……一六

勞働運動の戰術としてのサボタージュ…………山川均……二九

同盟罷業の倫理的考察……早大教授 杉森孝次郎……四一

罷業の損失と其解決策……法學博士 神戸正雄……四四

最近同盟罷工の新傾向……關西勞働同盟會理事 村島歸之……四八

如何にして罷業を緩和すべきか……法學博士 暉道文藝……五八

治安警察法誘惑煽動の意義……法學博士 山岡萬之助……六三

產業國家論…………賀川豊彦……六五

社會政策の分岐點……農商務省參事官 河合榮次郎……八三

新人評論

不眞面目なる勞働論者へ…………新妻伊都子……一〇九

新妻氏の所論に答ふ…………山川菊榮……一一六

新聞職工の罷工 同盟休刊の批判



罷工と新聞財政の改造……桐生悠々…一一九
人生觀社會觀倫理觀なき罷工……小川未明…一二八
新聞休刊事件の側面觀……惠美東臺…一三一
矛盾せる新聞社の言動……法學博士 戸田海市…一三三
新聞競爭の内面暴露……和合亭人…一三五
新聞同盟休刊に就て……岩野泡鳴…一三八
勞働組合と新聞騒動……松井柏軒…一三九
帝都十六大新聞休刊顛末……横山勝太郎…一四三
（經濟）關西資本家勞働者の自覺程度……近藤泥牛…一四七
（時評）時評 △中央企業 △國際汽船 △日本紡織 △現物團爆發 △日本麻絲 △日本鋼管 △絹綿紡績 △新潟鐵工 △炭礦業の暴利…一五一
（人物評論）齋藤實と水野錬太郎……山本實彦…一五三
（評傳）勞働者の觀たるマルクス……遠藤無水…一五九
（監獄插話）面會人控所……伊藤野枝…一七五
新聞職工の罷工が生むだ悲劇……澤田撫松…二〇一
大阪財界消息…（一五） 咬豆茶話…（一二八） 勞働委員の噂…（一六四）
（小說）
■美しい町……佐藤春夫…一
■ある職工の手記……宮地嘉六…一六
■空望……谷崎精二…四四

▼早稻田大學長 法學博士 平沼淑郎先生著

函入金文字入美裝 定價金壹圓八十錢 送料十二錢

（最新刊）

社會及社會問題研究

眞に社會問題を論ぜんとせば最も權威ある本書を讀め

目次大要 ＝社會革命運動、革命の原因、革命の根本。勞動運動、社會主義と無政府主義、同盟罷工、階級戰爭、マルクスの學說、サンデイカリズム、世界的道德の危機、經濟發達階級の分類、人類の競爭社會生活と社會團體、經濟的優者と經濟的劣者、侵略主義、不均衡より生ずる爭闘等數十章に涉りて詳說す。社會變轉社會改造の危機に瀕するの秋著者多年の蘊蓄を傾盡して玆に解快を與ふ。社會問題研究者は須らく一讀を要す。

▼法學士 藤田良雄先生著

函入金文字入美本 正價金壹圓參拾錢 送料十二錢

（最新刊）

デモクラシー研究

今や世界改造の危機に瀕す 著者從來抱懷するデモクラシーの本領を見よ

目次大要 ＝デモクラシーと世界の現狀、民主的輿論、敵愾的熱狂、自由と軍國主義、社會主義と戰爭、民主主義の現狀及將來、資本家對勞働者、デモクラシーの信條、根本的の民性、社會問題の起因、生產の要求、衝突の原因、本邦の現狀、解決の方法、等數十章に分ちて研究詳論する今やデモクラシー的思想世界を風靡するの時著者が熱血を濺ぎてのあらゆる方面より究明して解快を與ふ社會研究者は速かに一讀せよ。

發兌 東京日本橋 水天宮側 東盛堂 振替東京七五〇六 電話浪花二一四四

箕作文學博士一代の偉著！

フランス大革命史

全二巻前篇發行
菊判天金七百頁、挿畫三色版一
二色版二、光澤寫眞版十
カット六十、地圖五葉
改正定價金五圓
郵稅不要

前篇三版發行
後篇脫稿近刊

フランス大革命は明かに古代と近代の文明を分つ一大分水嶺なり。現に世界文明國を脅威しつゝある近代生活上の諸問題として大革命に胚胎せざるなく、其の史實は一々深刻に現代の不安と共鳴せざるなし。箕作博士の大革命史一度出づるや旬日にして初版五千部を發行し盡し、學術書として最高の比率を示せるもの、本書の內容が如何に痛切に時代の胸臆に觸るゝものあるかを知るべし。

果然世評は最大級の讃辭を以て本書を迎へ、或はカーライル、マコーレー以來の名著にして、爲政家、經世家、貴族、地主、資本家、勞働階級、中産知識階級必讀の良書といひ（朝日）其の他或は外國史家の糟粕を嘗めざる獨創の觀察を稱し（時事）著者の歷史家としての明斷と見識を讃へ（萬朝）時期最宜しきを得たる意義深き出版物として推奬せり（日々）今や全部の稿成り、前篇に踵いで直ちに後篇の印刷に着手せんとするに當り、俄に博士の易簀に遇へるは實に學界近時の一大恨事なりと雖も後篇製本出來、全部完成の日近きにあり。以て博士が遺せる最大の業績として、其名譽を不朽にすべきことを疑はざるなり。

東京神田　**冨山房**　振替五〇一

男爵 澁澤榮一閣下題字
海軍中將 佐藤鐵太郎閣下序文

海軍中將 村岡恒利閣下著

世界を風靡せんとする
勞資問題の調和

定價金壹圓郵稅八錢
四六判二百五十頁
洋裝美本

□本書は人生の根本義を說いて、國民が國家に奉仕すべき道の要諦を解說したるものなり。現代に於て資本と勞働の不調和を論ずる聲の旺なるは畢竟全國民が、其の國家的使命に對して彼等が之れに奉仕すべき志を忘れたるが爲めのみ。

□希くは全國民をして、「國家に奉仕し、人生に奉仕する事の意義と價値とに就て曉る所あらしめよ。」而して全階級を擧げて國家の發展に盡さしめよ。

□陸軍中將、大阪砲兵工廠提理村岡恒利閣下が時流に憤るものありて進んで本書を公にしたる所以ならざる可からず。

□男爵澁澤榮一閣下と、海軍中將佐藤鐵太郎閣下の本書の卷頭に題せられたる文字は共に本書の價値の永遠を證する者なり。而して佐藤中將は其序の一節に曰く「人生の勤勞は生活を營むの母にして、且之を安固ならしむる所以なり」と。然り、而して本書は日本國民をして毫も外來思想に惑溺する事無く人を使ふ者をして其使ふ道に忠ならしめ業に從ふ者をして其生活に光榮と權威とあらしめ全階級が協同一致して日本の產業的發展に資するの途を與ふるもの苟くも現代の混亂せる社會狀態に對して、憂忡の情禁ずる能はざる者は必ず一書を備へて其子弟に國家的使命を知らしめざる可らず。

東京市京橋區南傳馬町
目黒分店
振替東京二三三五七番

一切の事例を闡明す

（歐米勞働問題に關する）

前總領事 窪田文三著 【好評三版】

歐米勞働問題

菊判 クロース上製 八百二十五頁 定價四圓五十錢

市內小包送料十二錢
地方小包送料十八錢

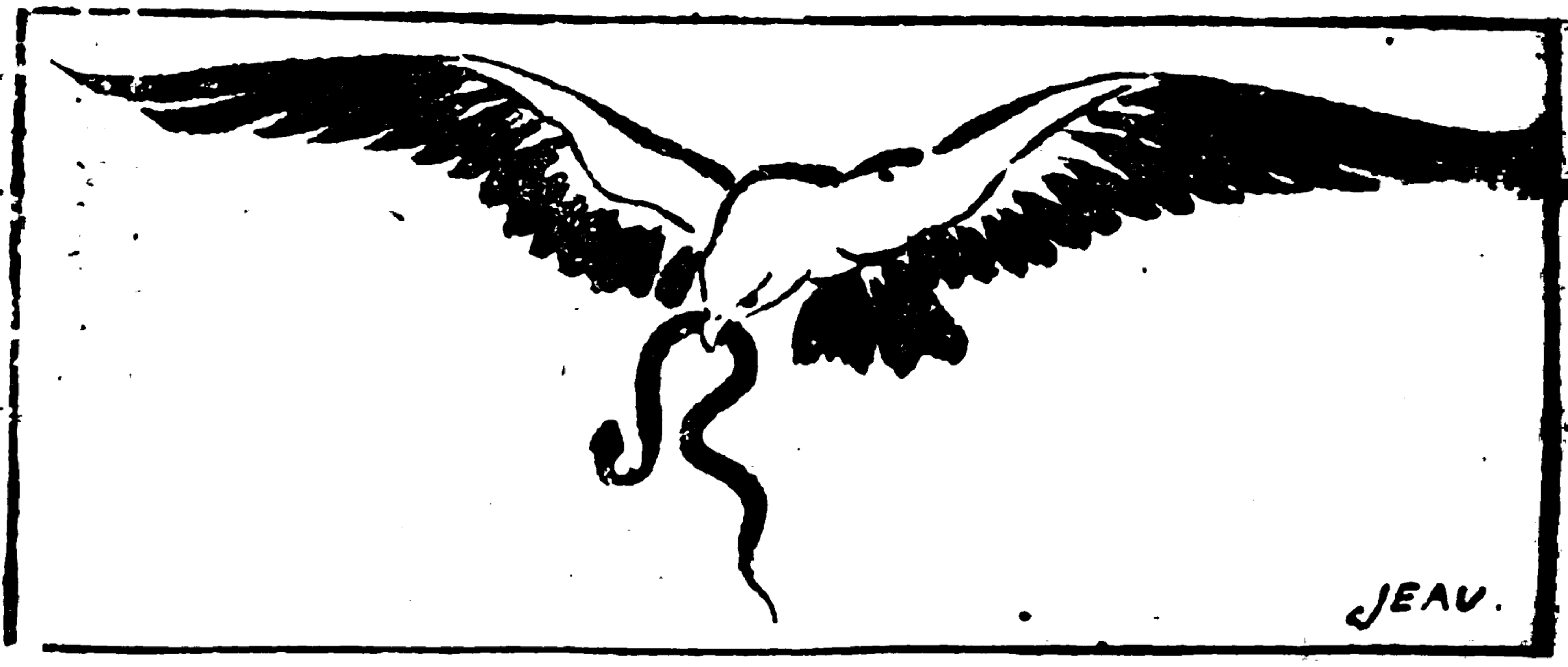
過去一世紀間、歐米各國が、社會經濟上の病患として苦みたる勞働問題は、戰後經濟の反動期に際し、燎原の火の如く襲來し、今や我國は、外に國際勞働法の制定あり、內に幾多の勞働問題の發生を見るに至れり、今にして注意を怠らば產業の發達を阻害し、危險思想を醸生し、社會上悲慘なる問題を惹起せん、著者多年、本問題の調査研究を進めつゝありたるが、其の苦心の結晶たる本書は、遂に公にせられたり、凡そ勞働に關する一切の問題を網羅し、歐米勞働問題に就き、斯くの如く完備せる權威ある著作は、他に求め得べからず、資本家、勞働者、政治家、法律家、行政官、學者學生を問はず、苟も本問題に關係あり、其の研究解決を欲する士は必ず一本を座右に備へ不斷の顧問に任ずべきなり。

序文

內務大臣 床次竹二郎
東京商業會議所會頭 藤山雷太
工學博士 阪田貞一

發行所 東京市麴町三丁目 振替口座東京七八四七 丁未出版社

賣捌全國各地書林



改造九月號

プロパガンダ

◦天は吾人に涼風を還すべく秋を送つた。吾人はいかに活躍すべきか時は國民を存亡の巷に誘出してしまつた。手薄の準備しかなかつた國民、否、何等の戰鬪準備さへなかつた我國民には、天の試錬がすこし早すぎた。同盟罷工、勞働組合、對米、對支、對思想、對朝鮮策等と詮じつむれば、そこに何等の準備もなく、施設もなく、經綸もなく、手腕もないではないか。

艱難を降した神は、すこしそそつかしかつた、何等かの豫知、暗示を與へておいて、腕つ試し、腕つ試しをするのなら、天をも、時をも、神をも憾まないが、國家の前途や、國民の生活難を思へば、神にも、佛にも文句を並べたくなる。この艱難早着の責任は軍閥が半ば以上を負はねばならぬのだ。しかし、去つた女房には愚痴はいふまい。

近頃「純日本式解決法」なる文字が發明された。日本は日本の日本であつて、その日本人の問題に對しては、日本自身で解決するという譯であろうが、それなら、外交も必要でなく、國際聯盟や、軍備も不必要で、釋迦や、基督も外國人だから、一刻も早く立退きを喰はしていい譯になる。それなら、鐵が不足であるにしても、米が不足しても、原料を外國から輸入せずに、高いいびきで桃源の夢を見ておればよい譯で、此以上の幸福はない。だろう事ならこんな近道を通りたいものだが。

そんな馬鹿げた、鎖國の夢が貪れぬから、そこに人種の爭鬪も生れてくる、階級戰爭ぞ物騷なものも舞込んでくる。過激主義や、國際聯盟や、資本帝國主義等と戰はねばならぬのだ。日本人の病弊は、鎖國的であることゝ、因循姑息なることにある。立派な主義、即ち人道主義や、正義のレールを堂々と歩いていながら、いつも沈鬱の詩人の如く、肺患の病人の如く、失戀の痩男の如く、力なく、不愉快に道行きしておる。

誰が自ら進んで、その沈默の痩男と手を握ろふ。

秘密外交、沈默主義の政策の誤謬から、世界に孤立せんとしつゝある我國は、宣傳の必要を認めよ。廣告の偉大なる效力に眼さめよ。西洋人は、宣傳に巧みである。廣告術が旨い。新聞に、口舌に、何れも、自己衷心の叫びを忌憚なく發表する。

過激派の宣傳に見よ、外交上の宣傳に見よ、我が勞働委員を特派するに當り、從來通りの東洋式を擧ばずして、特に宣傳に巧みなる人を選べ。實力ある、活眼を有せる、活動家を派せ。大臣級、大使級、貫祿、爵位こんなものは外國では鐚一文にも通用せず。眞劍の角力には長袖抑つて煩ひをなすものぞ。

思想と評論



政治の社會的任務

法學博士 佐々木惣一

一 政治と社會問題

一 人類の生活は、社會と關係せしめて考へられるとき、社會的のものとなる。人類の生活に關しては諸種の問題が起るのであるが、此等の問題が社會關係即ち社會の組織や社會の活動と關係を有するものであるとき、又は社會關係と關係せしめて考へられるとき、之を社會問題と云ふ。即ち社會問題は人類の生活の問題ではあるが、併しそれは單に如何に生活すべきかの問題ではなく、如何なる社會關係に於て生活すべきかの問題である。換言せば生活の爲めに社會關係を如何にすべきかの問題である。之を特定の時代に就て云ふならば、或時代に於て社會問題の起るのは其の時代の

現存の社會關係の改革を要求するのである。之に就ては、如何なる方向に社會關係を改革すべきかの目的上の問題と、其の方向定まつて扨て如何にせば其の方向に社會關係を改革せしめ得るかの手段上の問題と、二方面を分たねばならぬ。其の目的上の方面は今暫く之を措き、其の手段上の方面を考ふるに、經濟、敎育、倫理、立法、行政等の種々のものがある。此の意味に於ては、社會問題は決して獨り經濟問題としてのみ考ふべきものではなく、同時に又敎育問題、倫理問題、立法問題、行政問題等となるのである。立法及び行政は之を總括して政治と云ひ得るのであるから、社會問題は政治問題としても考へられねばならぬ。政治問題としての社會問題は即ち政治に依つて社會關係を改革することに關する問題である。之を政治の方面より觀ると、社會問題の解決は政治の大なる範圍を占め又は少くとも其の主要なる部分を成して居る。之は前世紀以來の趨勢であつて、今後益々之に傾くべきこと、何人も知る通りである。

二　所で政治が社會問題の解決をなさんとするに當つては、其の社會問題を全體として理解して其の解決の根本方針を樹て、其の方針に從て個々の具體的の政策を實行することを必要とする。唯漠然として個々の目前の問題を、連絡なしに事務的に處理することを能事としてはならぬ。即ち社會問題に關する政治は其の問題を全體として觀て目的を意識して行はるる秩序的活動であらねばならぬ。

然らば如何なる根本方針を樹つべきか。政治は云ふまでもなく吾々人類の有して居る價値觀念を實現するの手段であるが、政治に依つて實現し得らるべき價値は個人價値ではなくして、社會價値である。此の點に於て政治問題としての社會問題が倫理道德の問題としての社會問題と異るのである。倫理道德は個人價値を實現せんとするものである。而して其の社會價値は如何なるものかと云はゞ、種々の意見もあらうが、結局社會關係が人類の人格に相當したる生活を可能ならしむる如きものたるべしと云ふことに歸着する、と私は思ふ。蓋し人類の生活は相互に影響を及ぼす。其の影響を個々の人類の單獨の影響と觀ずして、人類の全體の影響と觀るとき、玆に社會的影響なるものを生ずる。即ち人類は常に何等かの社會的影響を受けて生活して居る。そこで此の社會的影響を受くるものとしての前提の下に、人類は其の人格

に相當する生活をなし得ねばならぬ。之を正義と云ふてよからう。此の意味に於て社會價値は正義であり、政治は正義を實現せしむるが爲めに行はるるものである。詳言せば、政治は常に人類の生活が社會的影響を受くる狀況に注意し、其の影響に依つて人類が其の人格に相當する生活を爲し得ざるに至ることのないやうに力め、此の如き傾向あらば之を防止するがために、社會的影響に關與して其の威力を減殺せねばならぬ。之が社會問題に對する政治の根本方針である。併し此の方針に從て個々の具體的の政策を行ふに當ても、固より種々の困難な問題を生ずるのであるが、先づ注意を要するは、社會問題の起因、社會問題の當事者である。それは其の起因の如何や當事者の如何に依つて自ら政策も異るべきであるからである。今私は個々の政策を論じようとするのではない。それには私は猶ほ研究の不足を感ずるのであつて、茲には唯右の起因や當事者の點を考へ、其の點よりして、社會問題に對する政治の態度を一言したいのである。

二　起因より觀たる社會問題に對して

三　社會問題の起因は、勿論生活の狀況に存する。普通世人は之を生活出來ないから起るのであると云ふが、併し之は正確ではない。精密に云ふと社會問題の原因は生活の不安と生活の不滿との二つに別れるのである。生活の不安は生活出來ないと云ふ事實より生ずるのであつて、此の生活の不安を根柢とする要求は衣食住の要求である。然るに生活の不滿は、單に生活出來ないと云ふ事實より生ずるものではなくて、生活の狀態を不當なりと感ずるより生ずるのである。生活出來ない場合には多分此の感じが起るものであり、且此の如き場合が實際上多數であらう。然しながら必ずしも生活出來ない場合にのみ限らず、生活出來る場合でも尙ほ生活の不滿の感じの起ることがある。それは人類が自己の生活を他人の生活と比較して、懸隔を覺り又は甚しい懸隔を覺り、其の懸隔の合理性を考へ、之を不合理と思ふからである。此の生活の不滿を根柢とする要求は單純なる衣食住の要求ではなくて、思想の要求である。此の要求の問題をも生活問題と名づくることは差支ないか、然しながら、此の場合に注意すべきは、所謂生活問題に衣食問題としての生活問題と

思想問題としての生活問題との別の存することとである。從て社會問題なるものを觀るに當つては、單純なる衣食住の問題と思想問題とを綜せねばならぬ。然るに、我國に於ては往々社會問題を單純なる衣食住の問題と考へて居るらしい口吻を聞く。學者の中にすら、現今多數の貧民が居るから之に生活を與へようとするのが社會問題であると說く人を見るが、之は私の見る所では、社會問題の本義を明にしたものではない。寧ろ思想問題としての方面が社會問題の重要な部分ではあるまいか。此のことは後に說く所と相俟て明となるであらう。

四　生活の不安を除くには、勿論生活を與へることを必要とする。且之を以て十分とするのである。故に單純なる衣食住の問題としての社會問題に對しては、政治的解決の中心は救助の方法を講ずることに在る。然しながら、根本的に考へるときは、何故に、生活出來ない者に、政治に依つて生活を與へねばならぬのであるが、換言せば、政治に依つて生活を與ふることが社會價値たる正義であると云ふの理由は何處に在るか、と云ふ問題を生ずる。個々の人類が生活出來ない他人に生活を與ふることは、勿論、道德倫理の上から見て與ふる者の個人價値の實現であるに相違ないけれども、之を以てしては、社會が全體として、生活出來ない者に、政治に依つて生活を與ふることが、正義であると云ふ結論を生じない。それが正義であるのは、私の見る所では、人類が生活出來ないと云ふ事實が人類の生活に對する社會的影響其のものである場合でなければならぬ。而して苟も社會的に生活を爲す人類が生活出來ないのは、多少の程度こそあれ、常に社會的影響に因るのである。且其の影響は現代に於て益々大となりつゝある。是れ何れの時代に於ても生活出來ない者に救助と云ふことが政治として行はれねばならぬ理由であつて、又それが現代の政治に於て特に然うであるべき理由である。宜なる哉現今の文明諸國に於ては救助が行政の重要なるものの一とせられ、從て救助に關する法制も一の體系を成して制定せられて居る。然るに我國に於ては救助に關する法制は非常に不備のものであつて、實際の上では缺如して居るのと殆ど同樣である。之を早く完備せしめたい。

五　然るに生活の不備は、單に生活を與へることのみに依つては、之を除くことが出來ぬ。從て之が政治的解決の

中心は單に救助の方法を講ずることに在つてはならぬ。人類の生活の間の懸隔を無くすることと又は其の懸隔を合理的のものとすることが、政治の目的であらねばならぬ。そこで根本に、政治に依て右の懸隔其のものを無くすることと又は其の懸隔を認めつゝ之を合理的のものとすることの何れを、政治の方針と[illegible]べき問題を[illegible]する。

此の問題は總ての人類の人格の內容が同樣のものなるや否やに依て決せられる。それが同樣のものであるならばそれに相當する生活は實質上同樣のものであらねばならぬ。而して人格の內容が同樣のものなるや否やに就ては、先づ觀方の區別を要する。其の一は事實としての觀方であつて、事實としては人格の內容は同樣でにない。其の二は要求としての觀方であつて、要求としては人格の內容を同樣ならしむることを希望する。然るに人格の內容の差異は遺傳と境遇との結果であるから、之を同樣たらしめんとの要求を實現するには、先づ境遇を同樣ならしめるの要がある。境遇を同樣ならしめても遺傳の結果を人爲的に防止することが出來ないならば、人格の內容は少くとも遺傳に依て差異を生ずるであらう。そこで、人格の內容を成るべく同樣たらしむるの要求を實現するが爲めに努力を爲すべきであつて、此の努力は其自身政治の問題であるが、併し事實として人格の內容に差異を有する以上、玆には之を前提として立論せねばならぬ人格の內容に差異ありとせば、其の人格の活動の結果たる生活にも、事實上懸隔を生ずるのである。それ故に政治は一方、人格の內容を成るべく同樣ならしめて、成るべく生活の懸隔を避くると共に、他方、生活の懸隔を合理的ならしむることを力めねばならぬ。生活の懸隔の合理的なる場合は、人類が人格に相當した生活を爲す場合である。故に政治は人類をして其の人格に相當したる生活を爲さしめるやうに努力せねばならぬ。單に生活を與へることのみを以て滿足すべきではない。政治的手段の中心は人格を尊重することであつて、救助を與へることではない。現今の文明諸國の社會問題に對する政治の態度は實に玆に基くのである。然るに我國に在ては、少くとも政治問題としては、社會問題に於て人格の尊重なることに重きを置かざるやうに見ゆる。之は遺憾の至りである。

六　尤も救助の問題（即ち單純なる衣食住問題）及び人格尊重の問題（即ち思想問題）の兩者は觀念上の兩方面で

ある。實際上社會問題として示さるる總ての問題毎に必ず右の兩方面ありと云ふのではない。各個の社會問題に就て觀るときは、或は救助問題たるに止まるものもあり、或は人格尊重問題たるものもあり、或は兩者たるものもある。然るに、前に述べた如く、我國に於て社會問題を以て貧乏人に生活を與ふる問題なりとするの見解あるは、社會問題を單に救助問題とのみ見るのであつて、私どもの贊成し難い所である。

翻て問題發生の過程を考ふるに、右の單純なる衣食住問題と思想問題とは必ずしも論理上の前後の關係に立つものではない。併し心理上の事實としては、單純なる衣食住問題先づ起り、之に次で又は之と同時に思想問題が起るのであつて、思想問題先づ起り單純なる衣食住問題之に次ぐと云ふことはない。蓋し人類は先づ生活出來ないと云ふ事實に付て不安を感じ、次で此の事實に付て不滿を抱き、更に進んで生活出來るにも拘らず、生活の狀況に付て不滿を抱くに至ることを普通とするからである。

併し右の心理的過程は、其の經過する時間より觀るときは、長き間隔を有することもあり然らざることもある。大體的觀察としては、歐洲に在ては生活の不安の問題のみが相當の期間を經過した後、生活の不滿の問題が起つた。從て社會問題は單純なる衣食住問題より漸次思想問題へと進み來つたのである。之に對する政治も救助の見地より人格尊重の見地へと漸進して居る。之に反して我國に於ては之と異り、今や、生活の不安の問題起り、之に伴隨して、殆ど之と同時に生活の不滿の問題が起つたのである。即ち社會問題は單純なる衣食住問題より急速に思想問題へと進んだ。勿論之は我國の社會問題を全體として觀て云ふのであつて、個々の問題に就て觀るときは、今尚ほ單純なる衣食住問題に止まつて居るものもあらう。目下叫ばれて居る勞働者の要求は、之を別々に觀るときは種々の意味もあらうが、併し、それを悉く、單に衣食住を與へよとの意味と解するは早計である。人格を尊重して之に相當したる衣食住を與へよとの意味と解すべきものが多いと思ふ。各地に起つた小學教員團の要求や東京に起つた俸給生活者團の要求に至つては、固より然うである。即ち我國目下の社會問題としては、單純なる衣食住問題と思想問題とが雜然として混合して居る。其の結果

我國の社會問題は如何にも紛糾を極めたもの如く見ゆる。之は當然のことである、何故ならば、問題が單純なる衣食住問題より思想問題へと漸進するときは、個々の問題の數は多くても、其の意味を明瞭に理解し得るのであるが、問題が彼から此へと急進するときは、問題の數は少くても、其の意味を明瞭に理解し得ないからである。然しながら之は敢て憂ふるに足らない。此の事たる、一方にたては、一般に我國の社會事情が急激に變化する傾向の現れと云ふの外はない。獨り社會問題のみに限るのではないのである。彼の立憲思想の實現の如きも之と同様であつて、憲法施行後三十年の今日に於て尚ほ往々實質上極端なる專制思想と云ふべきものが行はれるのは、全く社會事情の變化が急激なるが爲めである。又他方に於て、それは早く社會問題の當事者の自覺を來したものとも考へられる。元來社會問題が思想問題として現はれるのは、人類が人格を自覺するの結果である。此の自覺なき限は、人類は假令生活出來ないとても、單に生活を與へよと希望するに止まり、生活出來ないことの當否を考へるものではない。而して何時かは此の自覺を生ずるものとせば、早く之を生ずるのは、其自身は決して憂ふべきではない。唯此の場合には其の自覺と見ゆるものが眞の自覺なるか疑はしいこともあるから、其の自覺と見ゆるものを眞の自覺たらしむべく努力するの必要があるのである。それは主として教育の力に待つべきものであつて、此の意味に於て社會問題の當事者殊に勞働者の教育が最も重要のものとなる。

上述の如く、單純なる衣食住問題と思想問題とが雜然として紛糾して見ゆること其自身は何等憂ふるに足らずとするも、此の場合には特に必要なる一の用意がある。それは雜然たる社會問題中右の兩方面を明にして之に對應することである。政治が思想問題たる社會問題を、單に救助を與ふることに依て、解決しようとして、人格尊重の意味を顧みないならば、それは到底錯誤たるを免れない。此の如き方針は却て社會問題をして益々紛糾せしむるであらう。社會問題が思想問題に進むときは、それは人格の自覺に基く叫であるから、單純なる救助は、其の方法を誤るときは、人格の侮辱とさへ感ぜらるることもあるのである。

三　當事者より觀たる社會問題に對して

七　人類は單純の個人たると同時に或階級の所屬者である。そこで社會問題も亦此の兩面に關係せしめて考へられる。

單獨の個人の生活の問題としては、社會問題は、或特定の個人に生活を與へ又は其の生活を其の人格に相當せしむることの問題である。

然しながら、階級所屬者の生活の問題として考へられたる場合には、社會問題は階級の向上の問題であつて、或特定の個人の生活の向上の問題ではない。即ち教育家たる某の生活を如何にすべきかと云ふのではなくして、教育家たるものゝ生活を如何にすべきかといふのであり、勞働者たる某の生活を如何にすべきかといふのではなくして、勞働者たるものの生活を如何にすべきかと云ふのである。此の點よりして社會問題に個人問題と階級問題との區別を生ずる。併し論理上別異なる右の兩者は心理的事實として極めて密接なる關係を持て居るのである。問題の發生の過程より考ふるときは、具體的の個人の生活を如何にすべきかと云ふ問題が起り、之と接觸して、其の個人の所屬する或階級の生活を如何にすべきかといふ問題が起るのである。故に事實としては、社會問題は階級問題と云ふてよい。此の如く階級問題としてその社會問題の起るのは、人類が階級感情を有するからである。即ち階級感情に依て個人問題としての社會問題が階級問題としての社會問題に進むのである。

然らば人類が階級感情を有するのは如何なる理由に基くか、それは、人類が一方に於て階級の固定を意識し、他方に於て各階級の生活の差異を認識するからである。

八　階級の固定とは人類が永久的に或特定の階級に所屬するものとせられて居ることを謂ふ。換言せば人類が一の階級より他の階級に轉ずることの不可能なることである。人類が階級の固定を意識するや、階級感情を有するに至ることは當然である。反面よりいふならば、階級の固定の存せざる間は、階級感情は起らず或は緩和せらるゝのである。

類は永久或特定の階級に屬するものなりと考ふる場合に於て、其の階級の所屬者の利害を單に自己の利害なりとせず、其の階級の利害なりと感ずるに至る。其の結果、單に自己の爲めに叫ぶのではなくて、自己の屬する階級の爲めに叫ぶといふ一種犠牲的の觀念を生ずるのである。

然しながら、階級の固定及び其の意識の存することが、單にそれのみで階級感情を生ずるのではない。各階級の生活に何等の差異がないならば、人類は如何なる階級に屬するかに頓着することなく、一の階級の所屬者が自己の生活を他の階級の所屬者の生活と比較することをせず、從て實質上の階級感情を生ずることはない。勞働者や俸給生活者が階級感情を有するのは、自己の生活が他の階級所屬者の生活に比して貧弱なることを認識するからである。

九　右は社會問題を其の當事者より觀たのであるが、之を既に述べた社會問題の起因と連絡せしめて考へることは有益である。それは、社會問題の起因と其の當事者とが敢て論理上の關係に立て居ると云ふのではなく、唯社會上の事實として或連絡を示して居ると云ふに過ぎない。

社會問題が單純なる衣食住問題であるときは、それは大體に於て個人問題である。兩者を連絡せしめて云ふときは、其の社會問題は人類を個々のものと觀て之に生活を與へることとの問題である。之に對する政治は唯救助として現はれる。蓋し人類の發達が苟も生活を與へられさへすれば滿足すると云ふが如き狀況に在る間は、同時に階級の固定の意識や生活の差異の認識を爲すの程度に到らないものであつて、卽ち階級感情を有しないのである。

然るに社會問題が進んで思想問題となる頃は、それは大體に於て階級問題である。兩者を連絡せしめて云ふときは其の社會問題は或階級の向上を計つて、依て以て其の所屬者の生活を人格に相當せしむることとの問題である。之に對する政治は唯救助としてではなく、人格の尊重として現はれねばならぬ。此の場合に於ける兩者の連絡も前に述べた如く論理上の關係と云ふのではない。唯然し人類が自己の生活の相當のものなるや否やを考へると云ふ程度に自覺を有する時代は、卽ち又其の階級の固定を意識し生活の差異を認識する時代である。卽ち階級感情を有するに至る時代で

ある。

然れば、社會問題が階級問題として現はれて居る場合に、之を單純なる衣食住問題と見るのは淺薄の見である、之を思想問題として見なければならない。從て之に對する政治も單に救助を與ふることを主眼とすべきものではない。右の階級感情を生ずるの原因たる生活の狀況と社會關係との關係を考へ、其の階級感情を緩和し得る生活を與へるやうに、社會關係を改革せねばならぬ。詳に言ふと社會關係を改革して、階級感情の原因たる階級の固定及び各階級の生活の差異に對して、何等かの干與を試みなければならない。

十　階級の固定に對する政治的干與を考へるに當つては、先づ階級の固定の原因を考へなければならぬ。階級の固定の原因には、制度上のものもあり、社會上のものもある。先づ制度上のものは即ち國家の制度に依て階級を設定するのであつて、我國に於ても維新前まではそれであつた。此の制度上の固定は階級の固定中最も拘束的のものであつて、國家の制度其のものに對する否認の思想のない限は、人類は制度上與へられたる階級から脫退することが出來ない。從て其の階級感情は最も强烈に働くのである。之と同時に階級道德なるものも起る。例ば我國の封建時代に於ては士農工商の階級が固定して居つたのである。武士の爲めと云ふ感情や武士の體面にかけてと云ふ道德を持つて居た。之に對して、町人は積極的に町人の爲めと云ふ感情を持たないにしても、消極的に武士に對する反抗的感情を持ち、又、町人にのみ通用を許さるる道德を持つて居たのである。次に社會上のものは即ち社會的事情に依て階級を生じ、其の結果人類が特定の階級に永續的に所屬せしめらるゝのである。例へば業務や收入獲得の方法や財産等に依て別れるのである。性に依る階級の別などは社會的の原因に依るとは云へないけれども、制度上のものでないと云ふ點に於て、之に含ましめて置く。そこで、社會上の原因に依る階級中、業務に依るものは普通制度上のものと一致する。制度が階級の別を立つるに當つては、普通業務の別を標準とするからである。例ば我國に於て士農工商といふが如き階級を設けて居た如き是れである。然しながら、制度上の原因がない場合に於ても、業務其のものから、自然に、階級が生ずるのである。資本家と謂

ひ、勞働者と謂ひ、教育者と謂ふの類である。併し業務上の階級なるものは、必ずしも永久重大の意味を保留し得るものではないのであつて、業務を異にする者と雖、他の特殊の共通點を標準として、新なる階級を生ずることがある。例ば收入獲得の方法を標準として、俸給生活者、財産生活者と云ふが如き階級を生じ、更に進んでは、一般に無產者、有產者と云ふが如き階級を生ずるが如きである。現今の社會問題は、實に無產者、有產者の階級問題に進むの傾向を示して居る。決して單に資本家、勞働者の階級問題とのみ考ふべきではない。加之、男女の性の別に依ても一種の階級を生ずるのであつて、今日所謂婦人問題なるものは、男子、婦人の階級問題に外ならない。

十一　階級の固定に對する政治的干與は、如何にして之を實現すべきか。

階級の固定の制度上の原因は今日に於ては封建制度の撤廢と共に全く除却せられた。即ち制度上に於ては人類は如何なる階級にも固定的に所屬して居ないのであつて、其の階級を任意に轉換することを許されて居る。然しながら人類が制度の許す所に從つて、事實上任意に其の階級を轉換することの出來るか否かは、全く、人類の社會的の實力如何に依る。即ちそれは人類の生活が受くる社會的影響如何を觀るの外はない。而して、大體から考へると、現今の社會關係に於ては、階級の轉換を難んずるの事情がある。第一に、業務上の階級を轉換することが既に困難である。尤も業務に依て階級の固定することは、敢て今日に限らず、性質上一般に然うであるけれども、然しながら過去に於ては今日ほど困難ではなかつた。例へば勞働者、資本家の關係を見るも、勞働者が資本家となり得ると云ふ望のあつた時代が過去に於てあつたのである。併し、今日では其の望はない。且第二に今日に於ては、業務の差異其のものは生活上意味を持つのではなく、業務に依る收入が生活上意味を持つやうになつた。例へば官吏たると實業事務員たるとは何等の意味の差はない。官吏には實業事務員たると勞働者たるとも、少くとも重大な意味はない。全然意味がないと云ふてもよい。其の結果、業務を離れて、單に生活資料を得るの手段を標準とし、財產に依て生活し得る有產階級と、勞務に依てのみ生活し得る無產階級との區別が殆ど唯一の意味ある階級である。此の階級は財產の有無に依て生ずるのであるから、大體に

於て、固定的のものである。

今日生活上意味ある有產無產の階級が固定的のものであるとせば、此の意味の階級感情の起るのは已むを得ない。それ故に政治は此の意味の階級の固定に干與せなければならない。

然らば其の干與の方法は何うであるか。之に就ては、根本問題として、政治に依て、有產無產の階級其のものをなくすること、又は此の階級其ものを置くも其の固定をなくすること卽ち何等かの方法を以て其轉換を容易ならしむるの工夫を爲すこととの當否及び能否の論が生ずべきである。併し、之は非常に重大なる問題であつて、私は遺憾ながら、今日に於ては未だ之が定見を有するほどに研究を積んで居ない。そこで、右の根本論は暫く別とし、右の階級其のものは存在せしめ、又右の階級の固定をなくすることが困難であるとするも、其の階級の實際生活上の意味を緩和することは出來ないかと云ふ問題がある。爰に於てか階級の固定に對する政治的干與と云ふ問題より轉じて、各階級の生活の差異に對する政治的干與と云ふ問題に移るのである。

十二　有產者の生活が無產者の生活に比して豐富であることは云ふまでもない。之は財產の所有者は財產を任意に利用し得ると云ふ制度上の原則がある結果である。此の原則が何等疑問を招くの餘地なしとするならば、財產の所有者が任意に之を利用して、從て有產者の生活と無產者の生活との間に、如何なる差異を生ずるとも、政治は之に對して干與すべきものでないこととなる。然しながら、此の原則が絕對的の正當を主張し得るのは、財產の取得が全然其の取得者の個人的の努力にのみ歸せらるゝ範圍に於てである。且今日まで世人は一般に之を其の個人的努力に歸するものと考へて居るのである。然るに少くとも今日の社會現象に於ては、有產者の財產の增加は其の個人的努力以外の原因に依て生ずることが多い。甚しきに至ては、全く其の個人的努力なくして、之を生ずることもある。此の如き個人的努力以外の原因は、其の財產取得者たる個人から觀れば偶然の如くであるが、實は偶然ではないのであつて、社會的の事情である。卽ち個人の財力中社會に依て與へられたるものと考ふべき部分が少なからずある。勿論、其の社會的事情を利用し

て之を自己と結合せしむることに付ては、相當の努力を要するのであらうけれども、然しながら、社會的事情なくんば、其の財力を得ることが出來ないのであるから、有產者は右の社會的事情の恩惠に付て、社會に貢獻するの責務を持て居ること疑ない。それ故に政治は此の意味を實現する具體的の手段を講ずべきものである。其の具體的の手段は、要するに財產の利用力を制限することに歸着する。それは種々の形式に於て現はれることが出來るであらう。其の直接の形式としては、例ば住居の規模又は數を制限するが如きである。其の間接の形式としては、即ち重き租税を課するが如きである。

十三　かく考へ來るときは、今日の社會問題を單に生活を與へよとの衣食住の要求と觀ず、社會關係を正義に依て改革せよとの思想の要求と觀ること、之が政治の根本見地であらねばならぬ。(大正、八、八、一四)

正。誤。　八月號は取急ぎたる爲め校正粗漏の點多かりしは洵に申譯無之候殊に米田庄太郎氏の論文中I・W・Wとあるを全部L・W・Wと誤り佐藤春雄氏の小說中〇君を〇君と誤りたる等乞御諒恕候

大阪財界消息

■株式に對する過當なる配當や重役の過大なる賞與に對比し被傭者勞働工の所得は餘りに少ない彼等は事業經營に干與する權利を獲得したいとも思つて居ないが事業の利益に對しては分配を適當に取得しようと云ふ理想を懷抱してる其れば此一二月來著しい物價の昂騰で生活上の逼迫を沁み〲感ずるやうになつて愈よ總ての理想を實現させねばならぬことゝなつた■そとへ株式會社の利益配當の制限など云ふ資本主義打破の聲が起つて來たのに乘じ大事を成すは此時機にありと云ふ風で資本勞働の協調どころか其關係が甚どく緊張し來つて無産知識階級たる被傭事務員も勞働工も擧つて利益分配權利の獲得に熱中するようになつた■戰時中好況なりし丈け昨年十一月の休戰から本年三四月まで戰時工業の反動劇しく職工の解雇到る處に行はれ失業救濟が勞働問題中の最喫緊なるもので大阪府市でも澄に救濟係を設定して失業より起りそうな社會問題の圓滿なる解決に力瘤を入れたそれが財界景氣の立直りかけると倶に何時の間にか失業問題が勞銀値上げと早變りした之は恐らく資本主側も勞働者側も豫想外の新現象であつたらう■そこで被傭事務員達は隱忍自重してるが氣早の職工達は一面日に〲昂る一方の物價に攻め付けられて勞銀値上の要求は彼等の輿論となり時代思想に實融し少しも理解のなさそうな因業な顏付や態度を示す資本主に對して最後の手段として同盟休業と云ふ開豁的值上運動の手段を用ふることゝなり此方法は隨所に勃發し彼等は此手段に依りて相當に目的を貫徹しつゝあるのである■之は戰後に勞働者の地位が俄に世界的に向上したと云ふ譯ではなく其直接原因は物價騰貴に伴ふ生活不安で之に次で資本主の暴利獨占に腹の虫が承知しないと云ふ點であらう彼等が勞銀値上を呼ぶ割に八時間勞働制の要求をお副え物にし、働くことは何んぼでも働くから安樂に食へる丈けの金を拂つて異れと云ふ生活を基礎とせる切迫詰まつた要求と云ふよりは愁訴歎願であるのだそれでも資本主側は容易に頭を縱に振らぬ今日では同盟休業を遣らねば資本主も顧みて異れぬと云ふ惡い慣勢を作り出した■兵庫に居る武藤山治氏などは鹿爪らしく君子聖人ぶつて今日人權問題として天下に叫ばねばならぬ紡績女工の悲慘なる狀態に付ては餘り考慮しないで頭を外へ向けて軍人遺族救護などゝ言つてござる武藤氏ですら此態度だから其他は推して知るべしであらう勞働階級の自覺よりか資本主の内省が必要だと云ふことを感ぜねばならぬ■吾等の人格を認めよとか云ふ勞働階級の聲は實は學者先生達の繰返し教を垂るゝに拘はらず關西地方では存外そんなことには冷淡である彼等仲間の醒めたる人とか知識ある人とかゞ隨分骨を折つて指導をして居るであらうが大多數は勞銀値上で資本主に屈服し彼奴等は金で面を張つたら文句なしだと資本主の横暴は益々長ずる斯う云ふ次第で勞資協調は結局金で面を張ることに過ぎぬ狀態である■近頃鐵工組合が成立し彼等自ら進んで住宅建設を目論見或は共濟組合の機關を設けたりして勞資協調の實際化だと誇つてるやうだが從來資本主を脅威する道具と見られてた職工組合が存外資本主に從順なのを見て關西の資本主側の意向は一變し職工組合の設置を却て便利とするやうな傾向も萌して來た■同盟罷業も場合により必要だと上方出身の中橋文相の公言を耳にした古馴染の片岡直輝氏苦笑して曰く中橋はモウ事業經營家ぢやないからなアと實際關西の事業家は之れから勞働階級からどんなに征服されるであらうか、それは一に勞働階級の自覺如何によることだ(泥牛生)



勞働組合と同盟罷工

見えざる力の畏しき影が見えぬながらに
我等の間に浮動する　（シェリー）

慶大教授　高橋誠一郎

一

巴里講和會議に附隨して行はれた國際勞働法規の決議は其一箇條として、勞働を以て貨物又は商品として認めざるの大原則を宣明してゐる。然しながら此紙上の宣言が事實として公認せらるゝのは何時の日であるか。國際聯盟に加入せる各國、殊に我國に於て事實と爲つて現れるのは何時の日であるか。

人格的奴隷は解放せられた。土地に對して不可分の關係を有してゐた隷民は解放せられた。然しながら「貨幣價値に依つて一切の物の量定せらるゝ所に在つては(Omnes omnia pecuniis

metiuntur)」貨幣の紐に束縛せらるる奴隷、貨幣の笞に鞭打たるゝ奴隷は戰慄す可き程度に於て存してゐる、完全なる解放は一切の所得主體が悉く皆勞働者と爲つた社會に於てのみ獨り期待し得られるのである。完全なる自由は一切の所得形態が悉く皆勞働所得と化した時代に於てのみ獨り期待し得られるのである。(誤解を免れるが爲に附言する、私の謂ふ「勞働者」は決して肉體的勞働者のみでない、私の謂ふ「勞働所得」は所謂「賃銀」のみを指すものではない)。國際聯盟に加入せる歐米亞の諸國は孰れも皆、强力に依つて他人の勞働を略取し(是を今日の言葉で言へば「貨幣に依つて他人の勞働を購入し」と爲る)、而して是を以て其特權と看做す者の存する一方に於て、他方には又此强力に屈從し、其勞働を絞取せしむるを以て自己の義務と看做す者の存する社會である。遊惰無爲にして放逸なる奢侈、鄙陋なる快樂に耽りつゝある階級の存する所には必ず奴隸制度は存するのである。戰勝の光榮に誇る資本主義の國々に階級としての勞働者の滅止、貨幣所得の消失を望み得る將來は遠い。

勞働者なる特殊の階級が「事實」として存在するならば、而して其消滅が遠い將來に屬するとしたならば、勞働が完全に商品として取扱はるゝを免るゝの前に於て、先づ最も有利なる條件を以て販賣し得る貨物たらしむることが必要である。而して勞働者に對して、其地位の改善が今日の國家、現在の社會制度の下に在つて、如何なる程度まで克く之を企圖し得可きかと經驗せしむることが必要である。現在の社會制度に對する最終審判の日は將に來らんとして、而も容易に到らない。勞働問題は今日の問題である。現在の麵包に窮しつゝあるある者に社會改造の高遠なる理想は何等の價値もない。今日の勞働者は先づ彼等が唯一の所有たる其勞働を出來得る限り高價に販賣し得る所以の道を求めなければならぬ。勞働問題は今日と雖も猶ほ第一に「胃の腑の問題」(eine Magenfrage)であり、純然たる肉體的實感、若しくは有形的生存に關するものである。

二

ウォリアム、トオマス、ソオントンの On Labour. が初めて公にせられたのは一千八百六十九年のことであつた。洵にピイルソンの所言の如く、それはまだウォリアム、スタンレー、ジェヴオンスが其 Theory of Political Economy を書く以前 カアル、メンガアの Grundsätze der Volkswirtschaftslehre. が現るゝ以前のことであつた。隨つて經濟價値の學說は著しく未發達の狀

態に在つたのである。勞銀基金說に關しても既にリチャード、ジオンス・フランシス、デー、ロング・クリッフ、レスリー等は之に對する論駁を開始しつゝあつたに拘らず、一般人士は猶ほ依然として之を信奉して居つた。此學說に據れば、勞銀は生產に使用せらるゝ資本の高と自己の勞働力を他人の使用に委して其生計の資を得んが爲めに職を求めつゝある勞働者階級の數との間に存する比率に依つて決定せらるゝものである。ソオントンの明晣なる頭腦は斯くの如き學說の裡に潜む誤謬を指摘するに於て、殆ど何等の困難をも發見しなかつたのみならず、彼は獨り批評の世界にのみ踞跡せずして、自己の學說を構成せんと努めた。就中最も重要なるものは勞銀は大體に於て勞働者が雇主に對抗して其利益を主張し得るの努力、即ち彼等が組織の力に依賴するものであると言ふに存するのである。勞働者が貧困にして結合すること能はざる狀態に在る時は、勞働の價格は雇主の間に於ける結合に依つて決定せらるゝのである。而して世界の歷史を通觀するに、總ての時代、總ての場所に於て貧窮は實に勞働者の通態である、

ソオントンは彼が這般の意見を擁護するが爲めに擧示したる主要なる論證を概括して曰く「勞働は保存せられないものである(Labour will not keep)と。即ち商工業者は其貨物を蓄藏するとが出來る。是等貨物の價格が低きに過ぐると思惟したる場合には其騰貴を見るまで待つことが出來る。然しながら勞働は貯藏せられることが出來ぬ。若し勞働者が其時間を利用することが出來なかつたとしたならば、其勞働力は一時潜在しなければならぬ。彼の狀態は宛も價格如何に拘らず。其貨物を賣却せざるを得ない者のそれである。加之、彼に在つては斯くの如き狀態は一時的、例外的なものではなくして、正常なるものである。是に於て乎、吾人は勞働組合の效用を見るのである。同盟罷業に依つて、若しくば又之を行はんとする威嚇に依つて彼等は勞働の價格を引上ぐることが出來るのである。斯くて彼等は雇主を强制し、需要供給の法則に由つて決定せらるゝもの以上に高率の勞銀を支拂はしむることが出來るのである。斯くの如きは正にソオントンの學說である。而して勞働組合に對する輿論の同情がまだ英國に於てさへ今日の如く强大でなかつた時、殊にシェフイルドの暴行が起つてから幾許の時日をも經過しない時に於て、彼は同盟を以て勞働者をして其地位を强固ならしむ可き最良の方策として認めたのである。彼は「勞働と資本の對立」の題下に於て順次に「勞働組合の目的」「其手段方法」「其

効力」並に「其利益及び弊害」を論じてゐるが、而も彼は大體に於て之を以て教化的のものと看做し、而して窮極資本と勞働との間に更に密接なる結合を來すに資す可きものと認めてゐる。彼が仰望した標的は「資本と勞働との提携」であつた。

ソオントンは勞働組合に依つて初めて勞働問題の前途に一條の光明を認め得たのである。勞働所得は是に依つて獨り所謂「勞銀鐵則」若しくは「生計最少限說」の適用を免るゝを得るのである。勞働組合の效力を認めずして、勞働の商品たることを認めた學說の歸結は最も陰慘たるものである。基督敎的情熱に燃ゆるマインツの僧正ケツテラーが全然奔逸熾烈なる革命兒フェルディナンド、ラサールの見解を承認して謂へる言に聽け。「現代に於ては勞働は有ゆる他の貨物を支配する法則に從ふ可き一個の商品と爲つた。Die Arbeit ist eine Waare. 勞働の代價たる勞銀は必然他の商品の價格と等しく需要及び供給に由つて調整せらるゝものである。然しながら競爭は製造業者をして最低可能なる生產費に於て生產せしむるに至るのである。而して若し彼にして能ふ可くんば、彼よりも高き價格に於てのみ能く同一貨物を供給し得可き者の全部を悉く市場より驅逐せんことを努むるのである。又往々にして衰滅の危機に瀕しつゝある一部の工業を支持し、而して他の手段に依つては全然不可能なる其存在を暫く延長せんが爲めに、生產者は費用價格以下を以て販賣を行ふのである。斯くの如き經過より生ずる必然の結果は富に崩潰と敗滅とである。而して財貨の價格が生產費に依りて決定せらるゝ時に於てさへ、勞働の價格は人間の欲望即ち食衣住の最少費用に依つて調整せらるゝのである。製造業者は其競爭者を壓倒せんが爲めに彼が力の限りを盡して生產原費を削減せんことを努むるのである。勞働の供給にして過多なる場合には勞働者は凶災の場合に於けると等しく、彼にして若し活んことを欲せば、自ら絕對の須要品に對しても削減を加ふるの已むなきに至るのである。製造業者は市場の主である。而して「最少の報酬に對して勞作せんとしつゝある者は誰ぞ」と問ふ。斯くて此邀請に對し、勞働者は彼等が欲望の急迫に驅られ、相競ふて其勞働の數量に比して價値著しく劣れる勞銀を懇請するに努むるのである。最後に他の貨物に對すると等しく此人的商品が費用價格以下にて提供せらる可き詛はれたる日の到來を見るのである。即ち率直に謂へば必要は不幸なる勞働者を驅つて、彼及び其家族の最も緊切なる欲望をも滿足せしむるに足らざる勞銀を哀請するに至らしむるの刹那に逢著するのである。是に至つて

彼の勞銀は食衣住の用に供ふ可き最も嚴密なる意義に於ける必要品をも獲得するに足らざる故に、之をも剝奪し去つて彼と其家族とに對して何物をも殘すことがないのである」。今や勞働者即ち人類大部分の物質的存在が市場の動搖並に財貨の價格に依賴するの事實を疑ふは不可能と爲つた。是よりも更に悲む可く更に悼む可きものあり得可きや。「是實に現代の歐洲を通じて開かれたる奴隷市場である」云々と(Die Arbeiterfrage und das Christenthum.)。

三

勞銀の決定を以て本來傭者被傭者間の自由契約に依る可きものと觀るのは眼前の「現在」に捕へられた錯覺である。勞銀は元と兩當事者の自由契約に依つて決定せられたものではない。中世の歐羅巴では手工のギルドが工業上の事項に關し一切の支配權を掌握して居つた。而して其顯著の效を現すに至つて幾多の工業には勞働契約上の諸事項は同數の親方及び職人より成立する監督機關若しくは當事者双方の意思を徴したる後、市政官に依りて決定せらる可きものなりとい規定が存してゐた。而して親方及び職人が互に分立して各々別種の階級を形成するに至つてから勞働契約の決定に職人の參與し得たる規定は消滅して、勞銀は偏へにギルドの親方若しくは市政官に依りて決定せらるると爲つた。英國では徒弟條例に準據し治安判事及び市政官は[illegible]く勞銀率を決定するの任務を有してゐた。然るに雇主が其勞働者に對して漸次優勝の地位を獲得すると共に單獨の意思を以て勞銀の高を決定するに至り、徒弟條例は廢止せられて、雇主對勞働者の反目軋轢は愈々激甚と爲るに至つたのである。

我等は固より現代の歐洲に於ける勞働組合を以て昔時のギルドに源を發し、而して之と密接なる關係を有するのみならず、其性質亦全然之と同一なりと做すの推定に贊同することは出來ぬ。舊時の手工のギルドは實に自ら資本を有し、極めて少人數の職人若しくは徒弟と共に自ら勞作し、併せて其製作品に對して完全なる所有權を設定するを得たる親方の組合に外ならざるものである。然るに近世の勞働者は自己の勞働を雇主に鬻ぎ、製作物に對して所有權を有する者は雇主であつて、勞働者は毫も之に與ることのないものである。此點に於て近世の勞働者は對然昔時の親方と區別せらる可きものである。隨つて手工のギルドと勞働組合とは勿論其手段に於て、其特殊の目的に於て、其作用する條件に於て、各組合員相互の關係に於て、生產の方法に於

て、將た又製作品に對する所有權の點に於て全然其性質を異にしてゐるものであるが、而も兩者は共に永續的結社組織に依つて組合員の利益を伸長せんとを期する點に於て相類似するものである。勞働組合は古昔のギルドと等しく、舊産業制度の崩潰に際し時代の推移に伴れて窮迫の狀態に陷つた者が新たに無制限なる發達を遂げ來たる强者の壓迫に對し、自衞自護の手段として案出せられたるものである。故にブレンタノの如きは勞働組合を以て啻に其發生の動機に於て舊時のギルドと類似せるに止らず、其組織が今日の勞働者に取りて必要なるは猶ほ從前市民のギルドが商人門閥家に於けるが如く、手工のギルドが當初全手工階級に於けるが如く、次で特殊の勞働階級發生の後に於て手工の親方に於けるが如く、又職人組合が往時の職人に於けるが如きものであると稱してゐる。

勞働組合はウェッブ夫妻が其大著History of Trade Unionism.の開卷第一頁に於いて謂へるが如く「雇傭の條件を維持し若しくは之が改善を目的とせる勞働者の永續的組合」である。而して各個の勞働組合は二個の方面を共有してゐる。一は戰鬪的で他は友愛的である。洵にセリグマンの言の如く、勞働組合が友愛的組織として遂行せんとする目的は幾分舊時のギルドと類似せるものがある。即ち勞働組合はギルドと等しく特殊の組織を有するに非ざれば、滿足を得るに困難なる同業者の人類として一般普通なる欲求に備へんとするものである。舊手工組合の主たる任務は外に對しては特殊工業の利益を擁護し、內に在つては各個手工業者の職業上の利益を管掌すると同時に、之と關聯して厄難、疾病に際して其組合員を救護し、死者を埋葬する等に在つたのである。而して專ら是等の目的を達するが爲めには當時宗教上の組合存し、之に加入する者には同一の注意を與へたるに拘らず、ギルドは尙は全然此種の組合に其任務を委付することがなかつたのである。斯くて一工業に從事する勞働者の職業上に於ける特殊の利益を管掌するの一事は近代勞働組合の特色として自ら他の組合と相違する點であるが、失職、老餘、災難、疾病、不具並に死亡の場合に備ふるが爲めに各種の補助的基金の設備存するに拘らず、組合は又是等の場合に組合員を扶助することを怠らないのである。而して又集會及び講義、圖書館の建設及び新聞雜誌の發行に依つて勞働者を教育し、「酒精に代へて、更に之よりも美味にして且つ醒むることの遲い智泉」を汲ましむるに努めてゐる。實に勞働組合は勞働者の全人格を抱擁し、人間諸般の希望一切を滿足せしむることを企圖するの

慨がある。

　而も勞働組合の更に重要なる職能は其產業上の勢力を增進し而して組合員の所得を增加せんことを求むるに在るのである。勞働組合の行動は此點から觀ると二個の項目に分つことが出來る。被傭の條件を標準化せんとするの企圖と作業を限定せんとするの努力とである、第一の項目の下には標準勞銀率及び正常勞働時間の確保を得んとするの努力を擧げなければならぬ。今日の經濟組織の下に在つては勞銀は企業家に依つて其貨幣資本から支拂はるゝものであつて、其生產費の一部を形成し、其之に當つる部分は全く生產物の價格に依賴するものである。卽ち勞銀增加の可能なるは生產の總收益を增加するの可能なるや否やに依るものであつて、後者の增加不可能なる場合には勞銀の上騰は單に企業家所得の失費に依つて行はれ得可きのみである。而も斯くの如く企業家利潤の失費に依つて勞銀を增加するは事情の特に勞働者に利にして、企業家に不利なる場合に之を實行し得可きものであるが、此種の一般的勞銀引上げは勞働者の側に於て共同的行動を取るの困難と資本市場の廣大なるとに由つて其實行の機會は頗る乏しきものと爲る。加之、毫も企業家所得を減殺せずして勞銀を增加し得可き場合と雖、之を引上げなければ同じ額だけ企業家所得を增加し得る所以であるが故に、勞働者は相互競爭して企業家と「個人的契約」を締結するを避け機敏に自己の利益を獲得せんことを努め、多數團結して所謂「團體的契約」の手段に依つて之と勞働條件を協定し、企業の好地位より生ずる利益を自ら利用し得たる場合に於て勞銀の增加は漸く可能と爲るのである。標準勞銀率は必ずしも勞銀の畫一を意味するものではない。畫一は單に同一の仕事に對する同一の支拂に求めらるゝのみである。標準は最低のそれである、最高を畫せんとするのではない。此點に於て幾多の工業に於ける勞働組合は往々にして個數勞銀を主張するのである。要は最低標準の維持と引上とに在るのである。之に反して正常勞働時間の確定は最高を畫せんとするものである。過超時間の勞働を許す時は企業家は驅て定時外の勞働を甘んじて行はんとする者のみを使傭するとと爲り、終には各時間に對する支拂は必然減少するとと爲るのである。勞働時間短縮の企圖は實に勞銀の標準を引上げんとするの企圖に外ならない。吾人は玆にも社會の資本主義化が產んだ現代生活畫一化の一面を觀るのである。

　勞働組合が作業を限定せんとするの努力は職業に對する權利の主張、徒弟年期の制限及び生產高の限定と爲つて現れる。第

一の主張からして往々組合と組合との間に紛爭を生ずることとなるのである。第二の制限から過長なる徒弟年限の主張、徒弟數の限定又は新加入者に對する多額の入組合料の徴收と爲るのである。而して第三の點から屢々新機械新技術の使用に對する反對が起る。而して其異議が棄却せられた時、彼等は往々にして「ノロノロ政策"go easy"又は"ca canny"」に依つて作業の高を制限せんとするのである。而して此古い蘇國の俗語から出たカ、カンニー政策並にそれから源を發した佛國の消極的サボタージ Sabotage perlé 即ち「惡しき支拂に對する惡しき仕事」の思想から來た Travailler à coups de sabots、木靴(sabots)履きの遲鈍なる勞働者の如く働くに依つて最少可能なる勞働の高を提供するの行爲からして、進んで積極的サボタージ、即ち企業家の資料又は器械に對して損害を與ふるの擧に出づることがある。サボタージの諸形式中佛國刑法を以て所罰し得るは是等有形の損害のみである（第四百四十三條）が、それさへ實際に適用されたことがない。斯くて又彼等は組合員外の勞働者を迫害し、米國などで主として行はれるやうに組合勞働者の手に生産せられた生産物に添用する貼紙を發行し、標準勞銀を支拂ふ工場を單に勞働階級のみならず、一般消費者にも推擧するのである。而して其反對に勞働組合の賃銀率を承認しない工場に於て製造せられた商品の販賣を妨害するものは非買同盟である。彼等は又組合に對する忠實の感情を其組合員に鼓吹し、之に背く變節者に對しては往々ボーイコットを行ふのである。是は一般に雇主に對して不忠實なる勞働者を解雇することを要求するの形式を取るのである。而して雇主にして之を肯じない場合にはストライキを以て之を脅すのである。斯くの如くして幾多の訴訟を誘起するに至つた。固より斯くの如くして當該勞働者に加へられた損害は戰慄す可きものである。有ゆる他の工場に入ることを遮ぎられた彼の前途には獨り流浪と飢餓が横るのみである。然しながら法理は組合が單に組合其者並に勞働階級の利益を擁護するを目的とし、個人的怨恨から之を行つたものでない以上は、彼等は法に據つて彼等に賦與せられたる權利の正當なる行使を爲しつゝあるものと看做すのである。獨り斯くの如きボーイコットに依つて共同業者に與へたもののみでなく、ストライキに出つて雇主若しくば第三者に與へた損害に對する組合の民事上の責任如何は頗る困難なる問題である。縱令斯くの如きを以て勞働組合に伴ふ弊害であると見ても、是が爲めに勞働組合其者を抑制せんとするは角を矯めんとして牛を殺

すものである。

四

勞働組合の政策は彼等が是等の職能の夫々に對して置く重要の程度の異なるに從つて固より同一ではない。雇主に對して組合員を保護するを以て第一の目的とせるものは主として傭者被傭者間に於ける個々の契約に代へて團體契約を以てするとを企圖し、而して其目的を貫徹せんが爲めには屢々同盟罷工の危險を冒さんとするのである。之に反して友愛的利益を與ふるを以て其主たる任務と做すものは、如何なる對價を支拂ふも以皆平和を追求するの政策を持し、同盟罷工に由りて上述せるが如き諸般の用途を有する組合基金を枯渇せしめざるとを努めてゐる是等のものは孰れも正常若しくは舊組合主義の典型に屬するものである。彼等の目的とする所は勞働階級の貴族團體を形成せんとするに在るかの觀がある。而して彼等は進んで企業者と同盟せんことを求め、甚しきに至つては企業家に依つて援護せらるゝ時は、其組合員は「黄色(jaunes)」と爲るのである(斯くの如きは即ち「赤色(rouge)」黨員の名けた所である。然るに所謂新組合主義の領袖等は集産主義若しくは少くもフェビアニズムの方向に勞働組合を指導せんとし、雇主をして勞働條件を承認せしむること若しくは組合基金の保全よりも、寧ろ有ゆる資本家及び企業家の職能を責任ある政治的權威に歸屬せしめんことを熱望するものである。之に反してサンヂカリストは階級戰爭の哲理を高唱し、企業家階級との協定は固より國家及び立法機關の介在に依頼することなくして、ペルーチェの所謂「直接行動(L'action directe)」を以て單純なる同盟罷工、又は「總同盟罷工(Grève général)」の手段に依り勞働階級に取りて必要なる諸權利の全部を取得せんとするのである。斯くの如き政綱は佛國「勞働總同盟(La Confédération Générale du Travail)」即ち所謂C.G.T.に於て其機關を見出した。斯くてそは國家並に第三階級に取りて恐怖と不安の因と爲りつゝあるのである。英國に於ても所謂「産業的組合主義」者は非國家主義を標榜し、精練不精練の別を問はず、有ゆる勞働者階級を抱擁して純然たる産業的社會を建設せんことを期するのである。斯くの如き勞働組合の過激思想化は畢竟組合組織の薄弱にして、組合基金の潤澤ならざるものに於て見ることの多いものではなからうか。

斯くの如くして次第に紛糾し、次第に分岐し行く組合運動は孰れの點に歸一せんとするのであるか。是まで英國の勞働組合

運動は何等特殊の理想を有せず、寧ろ大局永遠の利害を等閑視して、偏に臨機應變の時宜主義を取つて來た。トルストイの「戰爭と平和」の第三卷を讀むものはナポレオンほどの緻密なる頭腦を有する者が苦心慘澹の結果案出した作戰計畫が實際の戰果に對して何等の影響をも有さなかつた事實を發見するであらう。現在に於て描出した將來の狀態は矢張現在の狀態である。四圍の變化は必然幾多の變革を勞働組合運動の前途に齎す可きであらう。然しながら勞働が完全に貨物たることを免れ、完全に現代の勞働問題を解決し得るの日は勞働者が自ら產業支配の權を掌握した時でなければならぬ。其時こそ產業上に於ける專制政治が破れて完全なる民主政治の實現を見るの日である。其時こそ勞働階級が勞銀制度の桎梏を免れて、產業生活上に於ける眞の自由を享有し得るの時である。而も斯くの如き理想鄕に到達するの日は未だ遠い。英國に於てさへ勞働組合運動は有名な倫敦ドック勞働者同盟罷工以來不精練勞働者の階級にも及んだとは謂ひながら、未だ之に屬する者は勞働者全數の四分の一に達してゐない、

五

同盟罷工は一般に勞働組合唯一の目的、本然の職能であると思惟せられてゐる。然しながら是は重大なる誤謬である。洵にジードの所言の如く十分なる組織を有する組合は宛ら戰はずして勝利を得る名將の如く同盟罷工を行ふことなくして其目的を貫徹し得るのである。實に同盟罷工を宣言すると最も少きものは最も完全なる組織を有し、最も有力なる組合であると謂ふことが出來る。而して同盟罷工は何等の組合存せざる工業に在つても其多數を有するものに於けると等しく發生するものであることを記憶しなければならぬ。而も尙ほ同盟罷工は有ゆる他の手段が失敗に歸した時、勞働組合の取る可き最後の手段たるものである。

貴族院議員にして茶話會（實に不眞面目にして不快なる名稱である）に席を有する田尻稻次郎子爵は今期の帝國議會に對し成規廿一名の贊成者を得て、愈々多年の宿論たる同盟罷工及び鎖出法案を提出することに決定したと傳へられてゐる。而して之に就いて同子爵の談が最近の新聞紙上に揭げてある、其一部に曰く「政府の役人達は同盟罷工に對して何も考へて居ない許りでなく、當然公認す可き勞働組合をすら公認して居ないのである。即ち成行に放任して居るのであるが、現狀を以て推移し

たならば、事業界産業界は大打撃を蒙り、紛亂時代を現出するの惧れがある。加奈陀に於ては一千九百〇六年ストライキ法案を制定して公共的獨占事業に對しては罷工並に鎖出を禁じてゐる。我輩は疾く已に其必要を感じ屢々政府當局に同法案の制定を促したが、役人等は「我邦にはまだそんな必要は」などゝ空嘯いて居るのである。奚んぞ知らん今日の狀態は果してどうであるか。我輩は此際尠くとも政府、公共團體及び公共組合等の事業に係る同盟罷工は國家國民を累する事甚大なるものあるを認め、之を法律を以て禁止するの必要上、今期議會に同法案を提出するの決心を固め、左の提出案を作成したのである」と（八月十日中外商業新報に據る）。

「當然公認す可き勞働組合をすら公認せず」して、而も「之を自然の發達に委せん」とする政府當局者の態度には一般民衆と資本家との間に兩端を持する狡猾さを認めなければならぬことは吾人が既に他の機會に於て論じた所である。「鞏固なる組合組織なき勞働運動は最も危險なるものである。殊に久しく之に向つて壓迫を加へて居つた權威が其手を緩めた場合に於て更に其然るを見るのである。而してそは勞働階級が毫も政治に參與するの權利なき場合に於て更に一層の危險を增加するのである。「國內に利害關係を異にする二國民を形成するものは是れである」ことも既に述べた。當然公認せらる可くして未だ公認せられない勞働組合法制定の爲めに努力し、之に對して公正なる法律的基礎を與へんとせずして、先づ同盟罷工法案を提出せんとする出尻子の眞義は那邊に存するか。事業界産業界の紛亂時代を現出するを惧ると稱して、多數勞働者が其利益を主張せんが爲めに取らんとする正當なる手段をも拒否せんとするものではなからうか。斯くて結局企業家資本家の利益を擁護せんとするのではなからうか。草案は同盟罷工と共に雇主が單獨若しくは同盟して勞務者の就業を拒む所謂鎖出（ロック・アウトの譯語）に關する規定をも包有してゐるが、斯くの如きは從來英國の結社法が等しく勞働者及び雇主に對して效力を有す可くして、而も事實上同盟締結の爲めに所罰せられたものは勞働者のみであつたと等しく、實際の運用如何に由つて壓迫は一方のみに及び得るのである。

英國では一千八百七十五年に於けるConspiracy and Protection of Property Act の通過以來、單なる同盟罷工は原則として、刑事上の犯罪を構成せざることとなつた。唯だ契約違反の場合に於て雇主は罷工勞働者及び恐らくは又其煽動者から損

害の賠償を受けることが出來るのみである。佛蘭西では一千八百八十四年三月二十一日結社權の承認せらるゝに先立ち、一千八百六十四年五月二十五日を以て同盟罷工に對する刑罰を廢止し、其權利を承認した。唯だ暴行、脅嚇若しくは詐欺的行爲に關する刑法第四百十四條の規定が存するのみである。それさへ時勢遲れなりとの非難の高いものである。

今回の田尻子等の草案は其第二條に於て政府公共團體及び公共組合の事業に係る同盟罷工を禁じてゐる。最近に於て歐洲各國は何れも皆此種同盟罷工の苦い經驗を嘗めてゐる。而して是等の各國は或は其官吏に對して勞働組合を形成することを禁じ或は之を許すも同盟罷業の名義を以て其勤務を中止するの權利を拒否し、而して之を以て不軌暴動と看做し、少くも之を免職するの態度を持してゐる。八月十日の新聞紙に掲載せられたるが如く、リヴァプールに於て警官の一部が同盟罷業を行へるを利とし、暴漢徒黨を成して店舖に闖入し、損害を加へ、物貨を掠奪し、兵士は銃劍を以て暴徒に對し、三隻の軍艦は秩序維持の爲めにマーセー河に到着せり云々の戰慄す可き報知を耳にする時は正に斯くの如き規定の至當なるを認め得可きの觀がある。而して又第三條以下に於て、（一）運輸交通、通信荷役、（二）瓦斯及び電氣の供給、（三）給水、（四）鑛及び石炭の採掘、供給、（五）其外公共の利益と爲る可き事業に係る同盟罷工若しくは鎖出は行政官廳の許可を受くるに非されば之を行ふことを得ず、是等の事業に就き勞務の條件若しくは報酬に關し、使用者と勞務者との間に爭議を生じ、其協議調はざる時は行政官廳に陳情す可く、行政官廳は爭議調停し難き事由ありと認むる時は猶豫期間を指定し期間滿了後同盟罷工又は鎖出を許可す、而して之に違背し若しくは之を煽動したる者は千圓以下の罰金又は一箇年以下の禁錮に處し、行政官廳の命令に從はざる者は五百圓以下の罰金に處すと規定してゐる。鐵道、給水、給燈の如き公共事業に於ける罷工を禁止せんとするの法制は、泰西諸國にも例の多いとで殊に其最良なるの觀あるものは此草案の粉本たる加奈多の法制である。然しながら吾人は是等の法制にどれだけの根據があり、どれだけの效力があるかを疑ふものである。殊に支配階級の利益に動され易い行政官廳の裁定に委するは不當である。之が爲めには必ず先づ特殊の仲裁裁判所を設立しなければならぬ。

凡そ吾人の生活に取つて必要缺く可らざるものは決して茲に列擧せられた政府、公共團體並に公共組合の事業及び公共事業のみではない、所謂「公共の利益と爲る可き事業」中には果し

て那邊までを抱有せんとするか。ジードは言ふ「若し電氣及び鐵道の勞働者が同盟罷工を行ふの權利を拒否せらる可しとせば何が故に麵包屋の使用人の同盟罷工をも禁ぜざる。一都市は麵包の供給を缺くよりも、寧ろ燈火の供給なきを忍ぶを得可きである」と他方に於て斯くの如き法規を勵行するが爲めに立案者の掲げたるが如き罰金若しくは禁錮は果して那邊まで有效であるか。同じ佛國經濟學者の言ふが如く勞働者にして無一物なる時は如何にして彼等より罰金を徵し得るか。然らば獄舍か。範圍の極めて狹少なる罷工ならばいざ知らず、如何にして數千數萬の人を逮捕し、裁判し、禁錮するを得るか。然らば解雇か。恐らく是が唯一の有效なる所罰であらう。然しながら雇主及び國家は何時たりとも其勞務を怠り、又は之を拒否せる勞働者を解雇するの權利を有してゐる。然らば即ち特別法の必要を見ないのである。

同盟罷工は如何なる種類の勞働者によりて行はるゝとを問はず、唯だ單に他の生命財產に直接の危害を加ふる場合に於てのみ所罰せらる可きものである。法律の力は輿論の力を借るに非ざれば國家社會の存在を脅す大規模の同盟罷工を抑制することは出來ぬ。官僚的政治家は問題の紛糾する毎に常に強壓的方策に出でんとする。昔佛王の宮廷に於て、國内の紛爭に國王の惱み疲れたるを見て一延臣乃ち強壓的方策を提唱して言ふ、「王國を支配するものは唯だ斧鉞あるのみ」と。フランソア、ケネー傍に在つて問ふて曰く「而して、閣下よ、斧鉞を支配する者は何者なりや」と。對手の沈默するを見て經濟學の祖は自ら答へて言ふ「そは輿論なり。卿は輿論の上に卿の行動を始めざる可らず」と。法規も銃劍も獨り輿論の援助を得て之を有效に使用することが出來る。同盟罷工者も亦輿論の同情を得て初めて眞の勝利を得ることが出來る。而して經濟上に於ける輿論を代表するものは一般消費者である。一般消費者の利益は究竟の支配者でなければならぬ。一般消費者の利益を蹂躙して暴富を獲んとしつゝある企業家の横行する我國に於て小規模ながら同盟罷工の頻[illegible]せんとしつゝあるは敢て怪むに足らぬ所である。利潤の增加せる所に勞銀の引上げを希望するは當然である。勞働運動を拘束するよりも寧ろ之に對して妨害たる規定を廢棄し、其前途に自由を與へることが目下の急務である。（八月十二日夜大磯王城山莊に於て）

(2) 勞働運動の戰術としてのサボタージュ

山川均

一、日本最初の譯字「怠業」

七月二十三日の新聞には、博文館印刷所の男女職工千五百名は、賃銀三割增其他の要求條件を提出し、若し要求が容れられねば、明二十四日より一齊に『怠業』を行ふと云ふ記事が現はれた。サボタージュは同盟罷工と共に、資本家に對抗する勞働運動の戰術として、勞働組合によつて正式に採用せられて居る所もあるし、又た實際に於ては、賃銀制度のある所、勞働者が本能的にサボタージュを行つて居らぬ所はないと云ふことが出來る程ではあるが、我國ではサボタージュと云ふ用語は、多くの人々には尙は耳新らしい言葉であつて、『怠業』てふ譯語の附せられたのも恐らく今回が初めてゞある。多數の勞働者が同盟して、組織的のサボタージュを行ふといふ報道も、恐らく今度が初めてゞあらうと思ふ。

殊に無意識的、若くは半無意識的のサボタージュは、實際上には寧ろ同盟罷工に先つて、同盟罷工以上に廣く行はれて居るものではあるが、意識せられたる組織的のサボタージュ、勞働運動の一戰術としてのサボタージュは、同盟罷工を以て勞働者の當然の權利と認めて居る人々の間にも、尙ほ非難の聲を聞くし、勞働運動の內部に於てすらも反對が少くない。所が其れにも拘らず、同盟罷工に對しては、何づれの國でも、多かれ少かれ、直接か間接かの壓迫を伴ひ、從つて犧牲を伴ふので、各國の勞働運動は漸次にサボタージュを採用し、採用せさる迄でも漸次にサボタージュに對する反對、又は嫌惡の度を少なくする

傾向のある事は、争はれぬ事實である。そこで今日に於いてサボタージュの意義と性質とを明らかにして置くことは、最も緊要のことであらうと思ふ。

二、サボタージュの意義

勞働組合運動の一戰術として、最も廣くサボタージュの行はれて居るのは佛蘭西であつて、佛蘭西語のサボタージュは、今日では殆ど世界的の通用語として用ひられて居る。

サボタージュなる言葉は、サボー（木製の靴）から來たもので、此問題の權威と云はれるエミイル・プウゼーによると、「木靴を作る」ように働らくと云ふ意味ではなく、重い不樣な『木靴を穿いて歩るく』ように仕事をすると云ふ意味から來たものである。是より先き、英國では『ゴー・カンニイ』と云ふ言葉が行はれて居つたが、佛蘭西語のサボタージュも、ゴー・カンニイに則つて造語せられたものであつて、ゴー・カンニイは蘇格蘭語の方言で『ぼつ〳〵歩るく』の意である。

そこでサボタージュの本來の意味は、勞働の効程を少なくすることであつて、此範圍に於ては、怠業と云ふ譯語が當つて居るが今日組織立ちたる戰術としてのサボタージュは、少しく意味が廣められて居る。アーツロ・ヂオヴァンチはサボタージュを定義して、次の如く云つて居る。

（一）他に救濟方法の存せざる場合に、雇主より一層有利なる雇傭條件を獲得し、若しくは約定せられたる雇傭條件の實行を强制し、又は在來の雇傭條件維持の目的を以つて、一人又は多數の勞働者が、工業界にあつては其生產物の揚がりを遲緩にし、又は減少し、商業界にあつては事業を拘束し、利潤を減少せんとする一切の意識的行動である。

（二）罷工破の就業を不可能ならしめ、之によつて罷工期間中、作業の完全且つ眞實の停止を來たさんが爲めに、永久的の破壞ではなくて、單に一時的に其運轉を不可能ならしめる目的を以つて、生產に要する機械裝置の上に加へる、有らゆる巧妙なる操作

を指すものであると云ひ、『サボタージュは是だけであり、少しも是れ以外には出でない。故に其れは破壞的ではない。其れは生命に對しても、財產に對しても、暴行とは何等の關係もない。即ちサボタージュは生產組織體を魔睡させ、資本大王の寶庫を警戒し增加する火と鋼鐵の食人鬼を眠らせて、無害の狀態にする爲めの痲睡藥以上のものでも、以下のものでもない』と云つて居る。

斯ような意味でのサボタージュは、一八九七年、勞働總同盟のツウルウス大會の問題となつて以來、初めて勞働運動の組織的戰術として承認せられるようになり、今日ではサボタージュ

と云へば、著るしく佛蘭西的色彩を帶びたものとせられて居るけれども、サボタージュは佛蘭西の特産物ではなくて、佛蘭西は之をゴー・カンニイてふ名稱と共に、英吉利から輸入したものであつて、サボタージュは佛國に輸入せられる前に、早くからゴー・カンニイてふ英國風の商標の下に、英國勞働者によつて、組織的に實行せられて居たものである。

其一例は一八八九年のグラスゴウ船渠ストライキであつた。當時船渠人夫は。一時間二錢の賃銀增額を要求し罷工を起したが、傭主側では素氣なく要求を拒絕したばかりか、莫大な費用を投じて、地方から農業勞働者を驅り集めて罷工者に代らせた北結果、罷工は總崩れとなり、從來の條件その儘で全部復業することゝなつたが、愈々復業する時に組合の幹事は罷工者を集めて斯う云つた。

『……諸君は今日、從來の賃銀率で復業しなければならぬ。ところが傭主側では、此數週間吾々に對して罷工破りをして居る農夫の仕事に對して充分滿足の意を再三表示した。吾々は彼等の働き振りを見て、彼等の謂はゆる滿足すべき仕事とは、如何なる種類のものであるかを熟知する。即ち彼等は、ブリッヂの上で重心を取ることすらも出來なかつたこと、又積込み陸上げの貨物の半分は海中に落としたことをも見た。一言にすれば、彼等は二人掛かりて、吾々の一人ぶりの仕事をも能くし得ないことを見た。然るに傭主は、彼等の仕事で滿足して居たと云ふのであるから、吾々にはなすべき一事あるのみである。吾々は即ち之と同一種類の勞働を與へればよい。そこで諸君は農談勞働者のやつた通りに働くがよい。彼等は無能極、海に落ちることすらもあつたが、勿論、諸君は海に落ちる必要はない』

この勸告は徹底的に服膺せられたが、數日ならずして、傭主は一時間二錢增しの要求に應じたと云ふことである。

此のゴー・カンニイの理論を宣傳する爲めに、一八九五年に出來た一小冊子のうちには、次の如き文句がある。

『諸君が若し、二圓の値打のある帽子を買はうとするならば、諸君は二圓拂はなければならぬ。若し諸君が一圓五十錢だけしか遣ふまいと思ふなら、諸君は下等品で滿足しなければならぬ。帽子は商品である。諸君が若し一枚五十錢のシャツを半ダース買はうと思ふなら、諸君は三圓拂はなければならぬ。若し諸君が二圓しか遣らまいと思ふなら、諸君は五枚だけ買ふことが出來る、

『然るに親方は、勞働と技術とは、帽子やシャツと等しく、商品に外ならぬと揚言する。

『宜しい、吾々は諸君の言葉通りに解釋しよう。そこで若し勞働と技術とが商品だとすれば、其所有者は帽子屋が帽子を賣り、雜貨商がシャツを賣るのと同じ權利を持つて居る。商人は一定量の價値を、等量の價値と交換に引渡すものである。安い値打に對しては、諸君は品質の惡るいか、さもなくば分量の少ない品物を受けるだらう。勞働者に相當の賃銀を與へよ、彼れは諸君に對して、最高の熟練に於ける最善の勞働を供給するであらう。

『之に反して、勞働者に不充分の賃銀を與へるならば、之れ諸君は彼れの勞働、最善最多を要求するの權利を喪失すること、尚ほ一圓に對して諸君が二圓の帽子を要求し得ないと同一である。』

この平易な言葉のうちに、ゴー・カンニイの理論的根據は充分に盡されて居る。即ちゴー・カンニイとは、『安からう、惡るからう』といふ日常の原則を組織的に應用したものに外ならぬ。斯ようにサボターヂュの本來の意味は、安い賃銀に對しては、當然能率の少ない勞働を提供すると云ふことであつた。

斯ようにサボターヂュは、一個の組織的運動方法として、早くから、英國の勞働團體によつて主張せられ、且つ實行せられて居たが、間もなく海峽を超えて佛國に渡り、更らにアルプス山脈を超えて伊太利に侵入した。サボターヂュが理論に基づく組織的の方法として、初めて佛國に主張せられたのは、恐らく一八九五年であつた。當時全國鐵道從業者組合は、鐵道從業員の組合組織の禁止を目的とする有名なメールラン・ツラリュ法案に對する反對運動をやつて居つたが、萬一議會が此法案を通過すれば、總同盟罷工を以つて應ずべしと云ふ提案が問題となつて居た。此問題が議題となつた聯合組合大會で、全國鐵道從業者組合の幹事ゲラアルは、鐵道從業員は團結の自由を防衛する爲めには、如何なる手段に訴へることをも辭しないものであつて、若し必要があれば總同盟罷工を行ふの決意ある旨を述べ更らに總同盟罷工に代はるべき、一層巧妙にして廉價な方法に言及し、『……僅かに一錢を或方法で有意に利用すれば、吾々は一隊の汽罐車を運轉不能とする事が出來る』と聲言した。此一語は、既に總同盟罷工の風說によつて威嚇せられて居た世間をして愕然たらしめた。

けれどもサボターヂュは、一八九五年七月二十三日のゲラアルの演說によつて、初めて佛國に現はれたものではない。グラスゴウ船渠罷工に先だつこと六年の一八八一年、中央電信局に起つた次の出來事は之を證明する。

當時電信局員は、午後六時から午前七時迄での夜業勤務に對して、五法の賃銀を受けて居つたが、時の郵電大臣コーシュリイに對して、賃銀倍額の要求を提出して居つた。ところが數日間待つたが回答がない。去りとて罷工は到底不可能であつた。すると或る朝のこと、巴里全部の電信が不通となつた。當時巴里では、未だ電話の架設を見なかつたので、全市の混亂は非常であつた。郵電省からは技師、監督などが多くの工夫を引率して、中央局に出張して有らゆる電信線を檢査したが何處にも故

障がない。斯くて五日間を經過して、不圖五法の夜勤の手當を十法にすることに氣が附いた。すると翌朝からは不思議に全線が通ずるようになつたが、故障の原因も故障の個所も、遂に分明しなかつたと云ふことである。

けれどもサボターヂュが佛國勞働團體の爲に、理論上からも實際上からも、運動方法の一つとして認められるようになつたのは一八九五年のゲラアルの演說以後のことであつた。

三、歐洲に於ける怠業

一八九七年には、ツウルウズで勞働總同盟の大會が開かれたが、セイヌ縣知事は、市營事業從業者の組合に對して、大會列席の爲めにする暇賜の要求を卻ぞけたので、セイヌ職工組合同盟は組合自由の侵犯と見做して猛烈に反對した。ツウルウズ大會は第一日の會議で、セイヌ縣知事に對する譴責の決議案が提議せられたが、此時エミイル・プウゼーは、『知事は勞働者大會の譴責に何等の痛痒をも感じない。抗議するは行動するに若かず』と主張し、『政府は其本來の任務を完うせるものに過ぎざるを以て、大會は政府を譴責するを無用と認め、市營事業の勞働者が、セルヴス氏の拒否に復ひる爲めに、其勤務に十萬法の損害を生ぜしめんことを勸告す』と云ふ決議案を提出した。

此決議は大會に大波瀾を惹起し、遂にボイコット併にサボターヂュ委員會を選んで審議せしめることゝなつたが、委員會の報告書は、資本者に對抗する、同盟罷工以外の方法として、ボイコットとサボターヂュを是認したあとで次の如く云つて居る。

『……剩ます所は、如何なる形式の下に、吾々はサボターヂュを佛國勞働者に推薦し得るか、の問題である。傭主は常に、吾々の屈從の度を益々甚だしからしめる爲めには、吾々が從來用ひ來つた唯一の手段たる部分的罷工によつて、其竄食に抵抗することの、最も困難な時期を選んで居ることは、吾々の熟知する所である。窮迫のうちにあつて、罷工の力が無い爲めに、勞働者は資本家の新要求を甘受しなければならぬ。然るにサボターヂュを用ゆれば、勞働者は能く之に抵抗することが出來る。彼等は最早や、全然資本によつて左右せられるものではない。……

『且つサボターヂュは一見新奇にして、而かも新奇でない。勞働者は常に、一定の方法こそなかつたが、個人的には之を實行して居つた。彼等は本能によつて、傭主が其要求を増加した場合には、常に其生産を遲緩にした。彼等は知らず識らずの間に、『安賃銀に安仕事』てふ方式を應用して居たのである。

『更に或る產業に於いては、出來高拂を以つて時間拂ひに替へて居るが、此代用の原因の一つはサボターヂュであつたと謂ふことが出來る……斯くの如く、此の戰術は誰だ散漫に實行せられて既に効果を奏したなれば、一度び資本家に取つて不斷の威嚇となつた時、何故に、

一層の効果を齎らさないであらうか。

『時間拂ひを出來高拂ひに替へることによつて、資本家はサボターヂュを免かれ得べしと信ずるは誤りである。……サボターヂュは請負仕事の都合にも應用することが出來る。唯た此場合には行動の性質を異にする。即ち生産を制限することは、勞働者に取つては其賃銀を制限することであるから、サボターヂュは勞働の量に應用せられないで勞働の質に應用せられなければならぬ。又た請負仕事には、勞働者が自宅に於いて自己の原料を用ひる場合と、傭主の工場に集中せられて居る場合がある。第二の場合には、商品に於けるサボターヂュと共に設備に對するサボターヂュが行はれるものである。……』

委員會は次の如き結論を以つて、其報告書を結んで居る。

『傭主の要求に基づくと、勞働者の自發によるとを問はず、傭主勞働者間に爭議の起つた場合には、そして同盟罷工が所要の結果を勞働者に齎らさないような場合には、宜しくボイコット又はサボターヂュ又は兩者を同時に應用すべきものと認む……』

此決議は熱狂を以つて本會議を通過したが、翌年開かれたランヌ大會では、幾多の組合代議員によつて、幾多の實驗が報告せられ、大多數を以つて通過した。一九〇〇年の巴里會議は、ミルランが初めて社會黨から内閣に抜擢され、組合運動界にも政治熱が盛んになり、殊に『社會的平和』の叫びが高まつて、階級闘爭的の行動は甚だしく非難せられるといふ形勢の下に開かれたにも拘らず、會議は七十六票に對する百十七票の多數を以つてサボターヂュを是認した。此大會によつてサボターヂュは佛國勞働組合運動の有力なる運動方法の一つとして、理論上からも實際上からも、明白に確立せらるるに至つたものである。

四、暴行と怠業の別

斯ようにサボターヂュは、本來は、同盟罷工の不可能な場合に、罷工に代へて用ひる方法であつて、此意味に於けるサボターヂュは、ヂオヴァンニチの定義の前半中に含まれて居る。然るにサボターヂュの應用は一層擴大され、一八九七年のツウルウズ大會ボイコット及びサボターヂュ委員會の報告に見られる如く同盟罷工を完全にする補助的の手段として、之に併用せられることが少くない。巴里パン燒職組合の幹事ブウケーは、罷工の補助的方法としてのサボターヂュに就いて、次の如く論じて居る。

『單に勞働を停止することは、罷工の目的を實現するに足らぬ場合がある。闘爭の好果を確保する爲めには、工具、器具、機械其他の生産機關も亦た罷工することが必要である、又た缺く可らざる事である一言にすれば、是等のものを運轉せざる狀態に置くことが必要である屢々罷工破り(スリップ)は工場に入いつて、是等の機械工具等が良好なる狀態にあることを發見する。罷工者は是等の生産機關を健全狀態のまゝに殘

したといふ一大過誤によつて、彼等は致命的に、其敗北の第一理由を殘して置いたものである。……

『斯くの如く勞働の完全なる停止が、眞實のものとなり、勝利の結果即ち工場の活動の完全なる停止を來たし得るのは、傭主と勞働者とが同一立場に立つて、勝負が公平に行はれる場合に限られ居る。……』

是によつて見ると、サボターヂュを罷工運動の領域内に誘導したものは、傭主側の罷工破りであつたことは明らかである。

然らば罷工に伴ふ機械や工場の破壞等はサボターヂュであるかと云ふと、チオヴァンニチの定義によれば、是等の暴行は生産機關の永久的破壞であつて、サボターヂュとは全然目的を異にするものと謂はなければならぬ。尤も罷工破りの就業を妨げる爲めに是等の暴行の行はれた場合には、之をサボターヂュと認む可きか否かは極めて機微なる問題であるが、假りに之をサボターヂュと認めるとしても、極めて拙劣なサボターヂュたることを免れぬものである。

尤も或種の暴行を以つて、サボターヂュと認めて居る人もある。オーギュスト・パウロウスキイはサボターヂュを次ぎの四種に分類して居る。(一)傭主には有害にして、消費者には有利なるもの、(二)傭主に有害にして、何人にも直接の利害を齎らさぬもの、(三)暴行の状態を呈し得るもの、(四)集合的にして暴行に亘るもの、之れである。第三はチオヴァンニチの定義第二項に當る行爲を指したものであつて、必ずしも暴行とは謂はれない。第四は機械その他の破壞であつて、チオヴァンニチによれば、明白なる暴行は即ち暴行であつて、固よりサボターヂュを以て目すべきものではない。

五、滑稽な怠業と開口怠業

サボターヂュの理論上の根據は、斯くの如く、極めて單純であるが、之が應用に至つては殆んど無限であつて、多くの實例のうちには、隨分罪の無い、滑稽味のあるものが少くない。

一九〇八年の頃、米國のベッドフォルトでは土木工事の親方が來る何日から工夫の賃銀を幾らに減額すると云ふ通知をしたが工夫等は一人も不平を云はなかつた。ところが愈々其期日の前の日になつて、工夫一同は近隣の鍛冶屋へ往つて、一齊にシャベルを小さくして、矢張り默つて働いて居た。『小賃銀に小シャベル』之が親方の質問に對する彼等の答へであつた。

或時フィラデルフィアの毛皮裁縫工が賃銀増額を要求して罷工した。傭主の方では、譯なく代りの罷工破りを入れて仕事を續けて往つた。ところが出來上つた毛皮の外套は悉く註文の寸法

よりも一時づゝ小さいので、悉く廢物となつた。罷工者が工場を去る前に、寸法を一時づゝ小いさくして居つたことが、後から漸やく發見された。

巴里の辻貼り廣告人夫のサボターヂュも振つて居る。彼等は充分に糊をつけて、何時もよりも一層注意してビラや廣告を貼りつけたが、糊の中には蠟が混ざつて居た。二時間もして糊が乾くと、ビラは一枚殘らず剝がれて仕舞つた。

是等は如何にも罪の無いものであるが、之に反して辛辣なものには、一九〇八年七月の伊太利メドックの鐵道罷工では、罷工前に電信線を悉く切斷したことがある。リヨンの市街鐵道の罷工では、罷工破りを苦める爲めにスキッチにセメントを流し込んだ事もある。

或る六階建ての大建築が出來上つて見ると、烟突の中に誤つて左官道具とセメントが落ちて居たゝめに、改築を餘儀なくされたと云ふような實例もある。

是等の場合には、サボターヂュは何づれも沈默のうちに行はれるものであるが、之に對して開口サボターヂュと稱せられるものがある。開口サボターヂュは、一口に云へば、傭主が消費者に對して常に行つて居るサボターヂュを摘發することである。今日の營利事業は多かれ少かれ、一般世間に對して秘密を有しないものはない。食料品其他の日用品には、如何はしい原料が用ひられて居る。土木や建築には、氣の附かぬところに手が拔いてある。

是等の秘密を外にしては、今日の營利事業は全く成立たないと云つても過言でない。能ク是等の秘密の保たれて居るのは勞働者や使用人が一身上の不利益を顧みて緘默して居るからである。そこで開口サボターヂュは、勞働者の緘默の口を開いて、傭主の事業なり商品なりに包まれて居る有らゆる不正と欺瞞とを發露する事である。此方法も現に多くの場合に實行せられたことがある。

六、サボターヂュは罪惡乎

以上によつて吾々は、略ぼサボターヂュの何たるかを知ることは出來た。そこで剩すところは、斯くの如き意味に於けるサボターヂュは、勞働運動の武器として推賞するに足るか何うかと云ふことである。同盟罷工は勞働運動の戰術として、敵からも味方からも、均しく異論の無い所であるが、サボターヂュに至つては勞働運動の陣營内に於てすらも、尚ほ異論のあることは

先きにも述べた通りである。

社會黨の内部からもサボタージュに對しては盛んに非難の聲が揚がつて居る。曾てジョーレスは一九〇七年、佛國下院に於いて、サンヂカリズムの問題に關連してサボタージュを非難したことがある。米國では一九一二年のイーヂアナポリス大會に於いて、米國社會黨は其黨則中に、『政治的行動に反對し、勞働階級の解放を助くべき武器として、犯罪、サボタージュ又は其他の暴行の方法を主張する者は、除名すべし』と云ふ一項を加へたことがある。斯ように米國社會黨はサボタージュを犯罪と同列に置いて排斥したが、各國の法律は、必ずしもサボタージュを犯罪と見做しては居らぬ。けれども、サボタージュを道德上の犯罪と見做す人は決して稀れでない。

サボタージュに對する第一の非難は、消費者の利害を顧みないと云ふことである。時としては、サボタージュは消費者に危害を及ぼすとすらも云はれて居る。此非難に對しては、プウゼーは次の如く答へて居る。

『……勞働階級の誹謗者等は、眞に犯罪的であり、眞に驚く可く眞に惡む可き他のサボタージュに對しては、曾て憤ほりを示したことがない。而かも此種のサボタージュは、近代社會の生活の神髓を介して居るものであつて、即ち人間の犠牲を收獲する……。資本家のサボタージュである。

『子供の主要な營養分たる牛乳に混ぜ物をして、成長しつゝある世代の根幹を喰らつて居る商人は、サボタージュの實行者である。滑石や白堊の如き廉價にして且有害な成分を穀粉に混合し、日常生活第一の營養品たるパンに混ぜ物をする製粉者とパン製造者とは、サボタージュの實行者である。棕櫚とコヽア油とで拵らへたコヽアの製造者は、サボタージュの實行者である。豌豆粉とキクヂサの根と橡の實とを混ぜたコヒーの製造者は、サボタージュの實行者である。扁桃の外殼と橄欖の實の核とで造つた粉末胡椒を賣る食料商は、サボタージュの實行者である。葡萄糖のタフイーと、ワセリンと蜂蜜と澱粉と栗の挽き割りで造つたクリームを賣る菓子屋は、サボタージュの實行者である。硫酸を混ぜた酢の製造者は、サボタージュの實行者である。澱粉と人造バタとで造つたチーズを賣る酪農業者は、サボタージュの實行者である。樫の葉から蒸溜した麥酒の釀造者は、サボタージュの實行者である。紙底の靴を造り、粉炭を以て火藥を作り、蒸れ返つた小麥や腐つた罐詰を軍隊に賣り込んだ、大愛國者にして公共心に滿ちたる御用商人は、サボタージュの實行者である。建築及び鐵道請負業者、家具製造者、化學製品と人造肥料の製造者。一言にすれば、種類と大小とを問はず、「全べての産業の船長は悉くサボタージュの實行者である。全べて是れサボタージュの實行者であつて、唯だ一つの例外もない……サボタージュは資本家の世界を支配して居る。工業界にも商業界にも農業界にも、到る所サボタージュの無い所はない。

『現在社會 浸潤し、吾々が空氣中の酸素を呼吸するが如く、現代社會の呼吸する元素を構成して居る此種の資本家的サボタージュは勞

働者のサボタージュよりも、遙かに非難すべきものである。勞働者のサボタージュは、單に資本家の銀行勘定を衝くものである。然るに資本家のサボタージュは人民生活の本源を切つて、民衆の健康を破壞し病院と墓場とを滿たすものである。勞働者のサボタージュによつて生じた創口からは、黄金が流れ出るに過ぎないが、資本家のサボタージュの爲めに鑿らされた創口からは、人間の鮮血が迸つて、流れを成して居る。更らに勞働者のサボタージュは、俠的、愛他的の原則によつて鼓吹せられるものである。其れは傭主の貪慾に對する保護と防衞の爲めである。自己と其家族の生存の爲めに闘ひ、同時に、一般勞働者の生活狀態を改善し、其解放を目的とする弱き者の武器である…」

要するに、サボタージュを以つて、一般社會に對する道德上の罪惡として非難するの說は、少くとも一般社會が營利主義の上に立つ間は、到底薄弱な非難たるを免れない。單に消費者たる一般社會に不便を與へるといふ事實は、必ずしもサボタージュの非難とはならぬ。何故ならば、同盟罷工も亦た屢々消費者の不便を作ふからである。そして同盟罷工も亦た、精密に此理由によつて、曾て社會的罪惡と見做されて居たからである。

サボタージュが、積極的に、消費者に危害を及ぼす實例として、巴里のパン燒職人がパンの中に硝子の粉末を混じたとか、藥劑師が故意に危險な藥品を調劑に混ぜたといふような事實が傳へられて居るけれども、サボタージュの主張者は、斷乎として斯かる事實を否認して居るばかりか、反つてサボタージュの原則に反したものだと云つて居る。彼等の主張によれば、パンに硝子を混ぜるよりも、パンの量目を增すことが一層有効なサボタージュであり、危險な藥品を混ずるよりも、引合はぬほど優良な藥品を使ふことが、サボタージュの本旨である。若し假りに斯くの如き事實があつたとすれば、云ふ迄でもなく最も拙劣にして最も誤りたるサボタージュの應用である。

七、サボタージュの非難

サボタージュに對する最も有力にして、最も傾聽すべき反對論は、サボタージュの實行は勞働階級の道德的水準を低下し、階級としての闘爭力を減少し、階級としての創造力を破壞すると云ふ說である。サボタージュは、普通にサンヂカリズムの運動方法と認められて居り、プウゼーの如き、イヴェトーの如き、トム・マンの如きへーウッドの如き實際運動家は多く之を是認して居るが、サンヂカリズムの哲學者と見做されて居るソレルの如き、又はペルトの如き、若くはミシェルの如き人は、何づれも右の此理由を以つてサボタージュに反對を表して居る。ソレルによれば、社會主義の社會は、單に資本制度によつて發達せ

しめられた生產要點と、技術上の協力によつて發達せしめられた科學とを相續するばかりでなく、長き工場生活によつて涵養し來つた協力の力をも相續するものである。然るにサボタージュは、勞働者の技術上の熟練を破壞し、其專門的の價値を低減する。勞働者の專門技術者たる價値は、現在にあつては勞働者の唯一の富であると同時に、明日の世界に於いては、勞働者が至上權を要求すべき理由とするものだからである。河田嗣郎氏は其近著『社會問題及び社會運動』のうちに、之と同樣の理由を以つてサボタージュを非難せられて居る。

『サボタージュは勞働者をして其業務を怠り、其技術を退化せしめ其精神を麻痺せしむる。そが組織的に永く行はるゝ間には、勞働者の實は退化し、勞働者としても人としても甚だ頼もしからざる、少しも油斷の出來ぬ陰險なる者となるを免れぬ。然るに今サンヂカリズムは勞働者を解放し、勞働者が支配する產業組織を造り出さんとするものである。さるに若し此の將來の社會構成の材料たり統領たる可き勞働者が、斯く劣惡のものと爲るに於いては、實に之れ腐敗せる材料を以て建築を爲さんとするもので、將來に大いなる堅固の建築を計畫し乍ら先づ以て其材料を腐敗せしむる方法を採ると云ふは、如何にも心得ぬ話である。されば所詮サボタージュは勞働者解放の武器としては不適當なものである。建設的のものたらずして破壞的のものである……サンヂカリズムがサボタージュの靴を穿つ限りは、サンヂカリズムの將來は闇黑である。之を奉ずる勞働者は呪はれたる者として、自ら敗滅の地獄に向つて急ぐものたるに外ならぬ……』『社會問題及社會運動四二一頁』

河田氏は心理學上の推理から此結論に到達せられたものであるか、若くは實際の勞働運動に於ける、實驗上の事實から此結論に到達せられたかは、固より知るを得ない所である。けれども大體に於いて、サンヂカリズムの理論家がサボタージュに反對し、實際運動家がサボタージュを是認するといふ傾向になつて居る事は注意に値ひする。

然しながら其れにも拘らず、サボタージュは創造的階級として、革命的階級としての、勞働階級の階級的品質を下げると云ふ非難は、サボタージュに對する非難中、唯一の有力なる非難たることを失はぬものである。それと同時に、此非難はサボタージュが社會に對し、若くは資本家に對する罪惡であるといふが如き道德論、感情論を超脫して、純粹に、勞働階級に與へる效果問題に入いつて居ることをも忘れてはならぬ。そして效果問題を決定する場合には、實驗上の事實が最も有力なる發言權を有することは云ふ迄でもない。

八、戰術としての考察の餘地

アーツロ・ヂオヴァンニチは此種の批評に答へて、サボターヂュを以つて、却つて勞働階級の精神的向上を來たすものであり、之を機械に應用するに當つては、其れは決して拙劣なる生産要具の破壊ではなくて、機械に關する緻密精巧なる、最高の知識と熟練とを有する者にして、初めてよく實行し得るものだと云つて居る。ヂオヴァンニチはまた、少數のサボターヂ實行者を軍事探偵の任務に比して次の如く云つて居る。

『紐育のシテー・ホール・スクェヤーにはナタン・ヘールの記念碑が建つて居る。ヘールは若い米國の革命家で、偵察の爲めに英軍に入り込んで居るうちに、見附かつて刑せられた。彼は一大英雄と見做され學校兒童の龜鑑とせられて居る。又た一七八〇年十月二日、米國の革命家は、ハドソン河上のタパンに於いて、英國の軍事探偵ジョン・アンドレェを同一情況の下に捕へて處刑した。彼れの捕へられた此同じ地點に、今や英國人によつてゞはなく、其逮捕者たり處刑者たる米國人によつて記念碑が建てられて居る。此實戰に於ける光榮は、一層貴とく且つ偉大なるパンと自由との戰にあつては、何故に恥辱と見做されなければならないか‥‥諸君が若し、勞働階級と資本家階級との間に、交戰狀態の存することを認めるなら、斯くの如き行動は、確かに資本家的道徳の前に於いてすらも、倫理的に是認せらるべきものである‥』

要するに此點は、サボターヂュが勞働運動の一戰術として、推薦するに足るか否かを決定すべき唯一の論點であると同時に尚ほ多くの考察の餘地を存して居るものと謂はなければならぬ。

けれども賃銀制度の下にあつては、勞働者は殆ど本能的にサボターヂュの傾向を持つて居ることを忘れてはならぬ。若し同盟罷工の如く正面の鬪爭方法が、不當の抑壓を蒙るとしたならば、勞働運動が勢ひサボターヂュの如き方法に活路を求めることは、止むを得ざるの勢ひであるかも知れぬ。サボターヂュを以つて、眞に勞働階級自らの爲めにも廢頽的の運動方法であるとしたならば、勞働運動を此廢頽的傾向に驅るの責は、果して何者の負ふべきものであらうか。

(八・一〇、主としてプウゼーに依る)

(3) 同盟罷工に對する倫理的考察

早稻田大學教授　杉森孝次郎

一、罷工は自衞本能の發現

組合の目的は、之を露骨に言へば、即ち組合を信ずる勞働者自身及び學者の腹を卒直に敍述すれば、第一に同盟罷工を可能にすることにある。組合の倫理は取りも直さず同盟罷工の倫理である。併し乍ら玆では直接に同盟罷工の倫理的意義を簡單に考察して見やう。

何故（なぜ）勞働者が同盟罷工をするかといふならば、第一の答は人間の本性に出來するといふにあらねばならぬ。即ち自衞本能をいふのである。資本家が全力を利用して政黨を買收し政府を繰（あやつ）り新聞を左右し輿論を形成することが出來るのみならず、知識なく貯蓄なき孤立せる個々の勞働者を相手取つては、其弱點に乘じて不當の利益と權勢とを、勞働者を犧牲にすることによつて追求することがあらうとも、普通の人情として少しの不思議もない。どちらかといへば資本家には大なる小人が屢々あらう。小英雄の型が資本家の中には尠くない。理性とか情愛とかいふ要素よりも慾と智慧の勝つた連中が多い。支配を悅ぶ輩である。利用し得られる限りの機會を自家の慾望と權力を伸す目的の爲めに利用することを躊躇するやうな覺々たる良心などは持つて居ない。要するに資本家氣質は力の信者たる處に存する。

二、衞る最上方法は攻むるにあり

斯くの如き資本家と正當に協力する爲めには、資本家の慾望と恐怖心に愬ふる方法を、臨機採用する自由を確保することが必要である。同盟罷工は即ちその方法である。そして組合は即ちこの自由を確保する手段である。例へば一人の勞働者が正直に自己が標準價と信ずる賃銀で己が勞働を賣らうとする際に資本家が同意しないと假定する。その場合にその一人の勞働者が罷工を敢てしても資本家はビクともしない。けれども工場の職工が悉く罷業するとあれば資本家が慾望と恐怖心に驅られて反省

する見込が立つ。同盟罷工は即ち資本家と競爭する爲めに職工同志が協力する一方法にほかならない。ナポレオンが衛る最上方法は攻めるにあるといつたのは、人間の本性を見た人の言である。同盟罷工にもこの意義がある。

三、常設產業會議の必要

資本家といふものを產業界から根本的に無くしてしまはうといふ目的で、同盟罷工を辯護し且つ奬勵する人は姑らく之を別問題として、產業には資本と勞働とが分業的に必要であるといふ考へを常識として、或は學說として持つて居る人についていふならば、資本家が全力を、及び全力に伴ふ權力を不正當に利用することが惡である如く、勞働者が同盟罷工といふ手段を濫用することは惡である。眞の意味に於ての正義を資本と勞働との間に維持するために、或は創造するために、已むを得ずして用ゆる方法としての同盟罷工であらねばならぬ。同盟罷工は所謂最後の手段であらねばならぬ。

實をいへば同盟罷工に依らないで同盟罷工の目的を遂げる方法を講ずることが今後の產業界の急務である。常設產業會議を各工場本位、各地方本位、各國本位、及び進んでは國際本位のそれぞれの規模に於て造り、勞働者側を代表する、責任ある委員と資本家側を代表する責任ある委員とがその會議の成員であつて、國家が、又將來についていふならば國際組織を代表する制度機關が、或程度の發言權を帶ぶる、同じく責任ある委員をその會議に選出する。資本と勞働との確執にむかつて仲裁役をも演ずる。かやうにして同盟罷工と同盟解雇とを未發に制し、又既に發したる後にも成るべく圓滿なる解決を急速に齎らす便宜を常設するのである。勿論この產業會議を可能にするためにも勞働者の組合を資本家の組合と同樣に認めることが必要である。然し組合なしでは責任ある委員を選出する便宜がない。

四、勞働組合の總團結

同盟罷工をすればその職工等は一時生計の途を失ふ。持久せずして資本家の軍門に再び哀を乞ふことになる。これを防ぐためには組合が必要である。平素一定の醵金をなし組合員の失業費を辨償してやる。併しながらこの目的を確實にするためには一工場の、或は一地方の勞働者が團結するのみならず、すくなくとも一國の勞働者が團結する必要がある。又各種の勞働組合の總團結が必要である。英國でいふならば鐵道、機關、炭坑、

其他の各種組合の全體的組織を完成することが最近の勞働運動擁護者の一努力となつて居る。一九〇九年に瑞典の總同盟罷業が資本家の總同盟に遇ふて散々な負け方をして以來勞働組合が聊か神經過敏になつて居る。勞働組合の總團結を有力なものに仕上げなければ資本家の同盟の前に敗北するほかないことを豫想して危懼して居る。資本家が本氣になつて相組めば勞働者が普通の程度に協力して同盟罷工を敢てしても、先づ以て資本家の勝利に歸するであらうといふことは勞働運動の最も熱心なる信者が、まじめに心配して居る一事である。最近の新聞社間に起つた問題なども、幾らかこの點に光明を投ずる。

五、國內的罷工より國際的罷工へ

何といつても勞働運動が今尙主として國內的に限られて居ることは爭はれない。平時に於ては勞働運動は國際的色彩を最も强烈に滯びて居るやうに見える。併しながら一旦戰爭的氣運が國際間に動き出す時には、勞働運動の國際的色彩が午後の朝顏の如くに褪せてしまうことは今度の戰爭に於て痛酷に例證された。國際的に同盟罷工を可能にする時代には世界がまだ到達してゐない。戰爭前に白耳義の勞働組合が普通選擧を目的として總同盟罷工をやつた。そして英國の勞働組合に向つて石炭を白耳義へ送らぬやうに同盟罷工することを頼み込んだ。英國の炭坑夫組合はその旨を運輸勞働組合に通達した。けれども結局石炭は滯りなく白耳義へ送り込まれたことがある。今度の戰爭に於ても賃銀を增し時間を減すためには同盟罷業が頻りに起つたけれども、勞働者の平素の主張である非戰論を實行するために軍器彈藥の製造を各交戰國の勞働組合が相呼應したるが如くに同盟罷業するといふ擧には出でなかつた。國際勞働法規に成程望を屬すべき點が幾多存するけれども同盟罷工が目下尙國內的規模に於てしか行はれないといふ事實には倫理的に考へても政治的に考へても面白い意味がある。（八、八　五）

(4) 罷業の得失と解決策

法學博士　神戸正雄

(一)古くて新らしい問題

同盟罷業に就いての意見を徴せられたが、先づこんな古臭い問題が、いまだに論題とされて居る我邦社會の幼稚さ加減には呆れざるを得ぬ。尤も之に對する正當公平な理解といふことは、六づかしいことであつて、人々利害關係の夫々異る結果として、兎角何時まで經つても之につき異説はある。大體世間で之を相當に理解し來ても、尚ほ中には其缺點などを探し出して、矢張り然うでないなどと、何時までも意地張る人はある。此意味では歐米にも今尚此問題の理解が一定した譯でなく、矢張り未決の係爭中の問題といふことが出來る。必ずしも日本のみでとはいへないが、併し日本に於ける此問題の理解の程度は到底歐米には及ばない。

(二)正當防衛としての罷工

予は同盟罷業が理想的に良いものとは信じない。併し唯だ此が時に避くべからざるものであり事情により正當なものと思ふ。其の良いものでないといふのは、道義上に於て並に經濟上に於てである。其の何故に道義上良いものでないかといふと、此は畢竟、勞働者團體が資本家に對して爭鬪を爲すものであり、而かも其利慾の爲めに爭を爲すものであり、決して美はしき社會上の出來事又は人の行爲と認むることを得ぬ。理想として推稱することを得るものではないからである。而かも此が時に避くべからず、事情に依り正當であるといふのは、一方相手方たる資本家が勞働者の受くべきものを不當に侵蝕して敢て辭せざるに對して、勞働者として其の權利の侵害に對して回復を爭ふものは正當にして且つ避くべからざるが爲めである。即ち今日の營利主義の行はるる時代には、資本家は出來るだけ多く自ら利しやうとし、勞働者其他の利益などにはさう遠慮しない傾がある。

之に對して勞働者が自己の利益を保全する爲めに爭ふのは正當なる防衞手段である。併し此の如くにして、人々が相抗爭して居るのは決して理想的狀態ではなく、出來るならば各人の道義心が進んで、資本家も勞働者の利益を尊重して少しも侵さず、勞働者も資本家の利益を尊重して侵さず、以て何等の爭鬪に出でずして、自らの間に利益の調和、非正當なる分配の行はるることを望まなければならぬ。併し人間社會が此域に入るとは實際太だ六づかしい。第一に人々に其を行ふだけの道義も入るが、知識も十分なくてはならぬ。何れだけが資本家の當然收むべきものであり、何れだけが勞働者の當然受くべきものであるか、其に於て爭ひなき確然たるものを見出すことは太だ難い。或は公平無私、全智全能なる國家權力が之を決定し指定することも想像し得るが、彼とても永久に亘りて斯の如き態度を維持し得るや覺束ない。今日まで此につき色々空想は試みられたが、偖て實行となると疑問である。此に於てか、矢張り現代の經濟組織の根柢を維持して、勞働者の正當な要求の達し得らるる途を開くの外なきことになる。隨ふては資本家としては先づ其れ自らの利益を計るものといふことを前提とし、其に對して勞働者が同一の態度にて抗爭し、いざといへば同盟罷業によりて目的を達するといふより外なきことになる。同盟罷業は乃ち、今日の世にては避くべからざる正當事である。特に彼等が單獨人として行動せずして、共同して事を爲すのはいふまでもなく、彼等の如き無資の者は單獨では、資本家と爭ふに於て微力であり、共同によつて初めて之と爭ひて目的を達し得るに因るのである。其目的が或正當をもつ以上は、單獨行動でなく、多衆の共同行動であつても齊しく辯護し得るものである。

（三）經濟的公共的の損失

斯く道義上は假令理想でないにせよ、或正當を認め得るものといふのであるが、經濟上は大體不利なものである。資本家に取つて不利なるは勿論、勞働者自らにも少くとも一時、其罷業中は不利であり、其結果として目的を達した場合は良いとしても、目的を達せさりし場合には全く不利といふことになる。加之彼勞働者が目的を達して、勞働條件を良くしたとしても、其が永遠に亘つて彼の利となるかは疑問である。其が永久の彼の利となることもあらうが、さうでないこともあり得る。或は罷業の結果、勞働時間は短縮せられ、賃銀は上つたとして、而かも其後に於ける勞働の能率は一向に上らず、爲めに資本家が相續いて

廢業するとにでもなると、勞働者は失業に襲はれ、更らに或は一旦引上げられたる勞働條件の低下を餘儀なくさるることもなり得る。加之、一般社會特に消費者から見ると、少くとも罷業の當時、物の供給を斷たれ又は其價が騰貴して非常に困ることとなり得る。特に其が必要品又は必要的勤務に關すると甚しい。例之、其の麵麭燒業に關し、或は電車、鐵道、郵便電信電話、瓦斯電燈石炭等に關するときは社會は大に困まる。啻に其罷業當時に於てのみならず、此當時の損害が後になつて資本家生產家から消費者に轉嫁せらるる危險が多く、罷業の結果、勞働條件の良くなつた埋合せをも消費者に對する供給價格の中にて得んと努めらるることとなり、斯くて消費者が永久にも不利を被り得る。で恐らく全體上から見て同盟罷業が經濟上有利とはいへない。而かも尙ほ此が承認せらるるのは、前の道義上の理由に因るので、即ち勞働者の正當なる要求を達するが爲めに避くべからざる方法であるが爲めである。道義上の要求の爲めには經濟上の利害を超越して見なければならぬ。

（四）罷工に因る一面の利益

併し又更らに進んで考ふると、同盟罷業が必ずしも全體上不利を齎らすとも限らない。勿論罷業により其當時、生產の結果を減ずるだけは、勞働者自らも、資本家も消費者も皆な不利を受くるが、斯くて勞働者資本家が不利を受けただけ、其後に至つて之を取返へさうとして一層奮闘努力することともなり得る。特に又此罷業の結果として勞働條件の良くなつた場合の如き、資本家としては生產の技術及組織の改良を以て之が埋合せを得やうと努むることとなり、勞働者も其地位の向上を善用して、益々其勞働能率を高めることを努めたならば、或は生產の効果が前の時よりも遙に大となり、勞働者の地位が高まるのみならず、資本家の經濟上の都合も良くなつて、別に消費者に向つて埋合せを求むるにも及ばずといふこととなり、社會の何れにも損害を與へずして、結局、勞働者の地位の改良されたるだけ、又は時に其以上にも永久に利益を齎らすこともあり得る。同盟罷業の結果が常に斯くなることを期することは出來ないが、此もあり得ることであり、隨て此同盟罷業は成るべくは避けた方が經濟上有利であるが、既に此が避くべからずに起つた以上は、之をして斯の如き結果を得せしむるやうに導きたい。

（五）同盟罷業解決の手段

同盟罷業の結果は時と場合とにより斯の如くに相違を生じ得るから、之を公認するとして、出來るだけ其損害を少くする爲めに、種々の制度を設けなくてはならぬ。第一には其穩健なる方法にて行はるるやう、穩健なる職工組合を認めなければならぬ。第二に穩健なる方法にて之を行ふのは禁制しないが、人の生命財産に損害を及ぼすだけにては、之を處分するの法を設けなければならぬ。第三には出來るだけ速かに爭の解決するやう別に公平なる國家的制度としての仲裁々判制を定めなければならぬ。そして其手續も簡單にし、其裁判も出來るだけ迅速に行はれなければならぬ。又其決定の基礎材料については國家が平生十分に注意して集めて置かなければならぬ。第四には一般民衆の生活に甚しき困難を與ふるとあるべき特殊の業務に於ける同盟罷業については、特別の制裁を要する。其他同盟罷業を行ふ勞働者も其重大なる結果に對して愼重に考慮し、敢て輕率に之を行ふてならぬと同時に、一旦行つた以上は、其よりして良好なる結果の得らるるやう折角奮勵するの覺悟がなくてはならぬ。又資本家も消費者も國家も、同盟罷業については相當に理解して、其相當公平なる解決の一日も早く着くやうに盡力しなくてはならぬと同時に、其結果の有利になるやうにも、努力しなくてはならぬ。又特に資本家としては其を起す必要なからしむるやう、自ら進んで勞働者に與ふべきものを與へなければならぬ。

（六）罷業を許さゞる官公吏

以上は經濟上に於ける同盟罷業についていふたのである。其について之を承認したにしても、其あるが故に、軍隊や學校などで之を爲して良いとはいへない、營利的ならざる官公署の役人などの同盟罷業の肯定を爲すとも斷じて出來ない。現代の營利經濟の下に、勞働者が資本家に對し、之を爲すのは已むを得ぬ。消費者が生産者に對し非買同盟を爲し、小作人が地主に對し不作同盟を爲すなどゝいふ風に、利害相反する者が相互に抗爭するのは已むを得ぬ。が併し營利關係を持たず、公益上の目的の爲めに統一的に管理せらるる場處にては、純粹に道義上の理想を以て批判しなければならぬ。學生が學校の處置に不滿をいだいて同盟休校するなどは、以ての外の心得違である。軍隊に於ける兵卒、官公署に於ける役人亦然りである。唯だ役人と官公署との間には報償干係があるから、其だけに於て經濟上の批評が許され得なければならぬ。役人の生活の脅かさるる程に報

酬の不良なる場合に彼等が之を訴ふることを得なければならぬ。彼等が餓死するまで沈默せざるべからずといふことはない。併し其あるが故に、彼等の同盟罷業も亦差支なしとはいへない。之に依つて生ずべき公益上の損益を補償することは出來ない。氣の毒ではあるが、彼等は訴へて聽かれざれば辭職し轉業するか、踏止まつて打死するか何れかに行くより外ない。公益業務に干與するものには此際轉業よりは、むしろ打死する位の覺悟があつて欲しい。併し官公署としては又は國家公共團體としては、常に一般の經濟上の變遷に注意して、斯くの如くにして役人困難を訴へるの前に、相當の處置を爲すべきものである。特に上長官に於て此注意を要する。軍隊や學校にて此經濟問題につきての不平に對しても、其管理局に於て單純に道義上の義務を以て服從を強ゐてはならぬ。矢張り常に部内の心情を聽取して、彼等を納得せしむるだけの處置を採らなければならぬ。此等の方面の同盟罷業に於ては固より先づ起した人々の方に罪ありとしなければならぬが、併し多くの場合に恐らく管理者の方にも落度のあることを見逃してはならない。

(5) 最近同盟罷業の新傾向

村島歸之

一、給料増加、食料値下等の團體的行動の事實に關しては特に其記述を平靜にし附和雷同の者を生ぜしめざる樣考慮せられたし

一、同上の運動又は協議其他不穩の狀況に關するものはその眞否を確め流言蜚語等に亘る記述は之を避け事實に關しては當局に於ても努めて迅速に各地の情報を蒐集すべきを以て適當の連絡を圖らん事を望む

一、同上目的を以てする會合又は宣傳に關する檄文投書張札等の内容は之を記載せられざらん事を

○

七月二十日附を以て右の如き注意書が警察から各新聞社へ廻

されて來た。夫れほどまでに七月から八月へかけての同盟罷業の數は多かつたのである、元來が暗示作用に依る傳播力を持つてゐる同盟罷業の事とて七月二十一日、博文館印刷所の職工二千名が一度び蹶起したと傳へらるゝやその日から同業では三省堂印刷所、日清印刷が動搖し出し翌二十二日には日本書籍、精美堂印刷部の罷業を見、夫れから引續いて築地活版、秀英舍、東京凹版、日本印刷及東京二三の新聞社印刷職工の同盟罷業となり若くはならんとしたのである。更に之を印刷職工以外に見ても二十二日には日本人造肥料、日本製靴、淺野スレート、二十三日には東京織物、二十四日には小石川機械製造所、築地機械製作所、千住下野製紙、二十五日には深川豐住木工、四谷日本紙器といふ風に恰も燎原の火の如き勢ひで傳播して行くのであつた。而も上に掲げたものは偶々東京のみに限られたが同盟罷業は啻だに獨り東京のみには限られてゐない。東京の印刷職工の罷業は名古屋、大阪、神戸の印刷職工を動かして東京と同樣一二の新聞の休刊をさへ見た。大阪では約五千の石工が罷業した。岡山では三井物産の造船職工約千二百名が罷業した。各地の新聞は假令人殺しの記事は無くとも同盟罷業の記事の一件も掲載されてゐないといふ日は殆どない。兵庫縣の調べに依ると大正五年以前にあつては一箇年間における縣下の同盟罷業件數が十件の上を超へた事は絶無であつたといふのに、本年は僅か七月一箇月間で既に十二件の罷業を見てゐるのである。之を全國の統計に就て見たならば蓋し驚くべきものがあるに違ひない。最近の同盟罷業の解剖を行ふに先つて今日までの本邦における同盟罷業の狀況を觀察して見たい。警保局の發表する處に依ると大正三年より七年に至る同盟罷業度數及件數は次表の如くである。

本邦同盟罷業表（自大正三年 至大正七年）

	一月 度數	一月 人員	二月 度數	二月 人員	三月 度數	三月 人員	四月 度數	四月 人員	五月 度數	五月 人員	六月 度數	六月 人員	七月 度數	七月 人員
大正三年	一	二一	―	―	二	四五	八	一、〇五九	四	一、四〇一	八	三、三〇八	八	四一二
大正四年	三	三七三	十	六三三	五	二九六	一三	一、二四四	七	七八一	四	一三九	八	一、九六七
大正五年	一〇	六四四	一一	九四五	六	六七七	五	三三四	六	一八一	一三	九四七	一一	六二六
大正六年	一一	一、三二〇	一四	一、六〇四	一三	三、七八六	一六	一、五四二	一一	一、〇八二	三	二、八〇九	七六	一六、六〇〇
大正七年	一九	八〇二	二五	一〇、八八九	二九	三、八五七	八	二、六九一	二九	四、〇六五	二五	一、三五五	四二	二、五五九
計	四一	三、三六九	五五	一四、〇六九	八五	七、六六七	六九	六、七七二	五九	七、四一一	八一	一八、五一二	一四四	二三、一四四

八月 度數	八月 人員	九月 度數	九月 人員	十月 度數	十月 人員	十一月 度數	十一月 人員	十二月 度數	十二月 人員	合計 度數	合計 人員
二	四九	四	六七五	八	五三三	四	三二三	一	一八	五〇	七、九〇四
八	一、四八八	六	四五	一	一三	二	一五七	三	五二一	四六	七、八五一
一三	一、八六六	一一	七九	一五	二七〇	一一	九七	一五	二七八	一〇八	八、四一五
八	九、〇六八	二六	五、〇四九	二八	二、八一一	二〇	一、四[illegible]	二三	二、〇一〇	二九八	五一、五〇六
一八	二六、八五六	四七	八、四七八	二四	五、一一七	一一	八五三	九	四九一	四一七	六六、四五七
一五	三〇、八二九	一三	一三、四三四	八六	六、七	五	五、六七五	四	五、二八	一、一〇七	一一七、九二五

即ち大正三年においては僅か五十件（今日においては恐らくは一ケ月間の件數か）にしか過ぎなかつた。同盟罷業が二年後の大正五年には百八件即ち倍以上に增加したさへ驚くべきであるのに更にその翌年には又その約四倍、その翌々年の七年には大正三年の約八倍に激增してゐるのである。

然らば斯くの如き同盟罷業の增加を釀致した原因は抑も如何といふに大體之を左の五つに分ける事が出來ると思ふ。

一、物價の著しく騰貴してゐるのにも拘らず賃銀率の上り方が之に伴はず兎もすれば生活難に陷る事

一、戰亂の影響を受けて各會社が莫大の利益を收めてゐるにも拘らず勞働者に對する待遇厚からざる事

一、戰時中仕事の輻輳に依り殆ど徹夜業を課し可成り多額の歩增、手當を支給してゐたのが平和後漸次仕事の減少と共に之が廢減を行へる事

一、勞働者において漸く權利思想に目覺め來れる事

一、工業の勃興に伴ひ職工の需要多きを以て職工は常に多きを望みつゝある事

一、階級的觀念の漸く明かになり來れる事

就中第一の物價の騰貴が直接の原因をなすものである事は下に述ぶる如く同盟罷業の目的が大部分賃銀値上にある事でも判明しやう。

上揭の統計において同盟罷業の最も多いのは八月で七月之に次ぎ九月第三位を占めてゐるが之は米價の最も高値を吹く頃である爲めで、賃銀値上の要求も此の米高の際に起るのを例とするのである。米價は『圓に二升』の域を超へて今や六十錢近くの高唱へである。諸物價も之に伴ふて騰貴して政府專賣の煙草すらも素晴しき値上を發表した。薄給者は稼いでも〳〵追付かない。行き着く先きは監獄の門か、棟木の紐か。最近の同盟罷業の頻發するのも理の當然の事と云はねばならない。

○

警保局の調べでは本年一月以降三月末日までの罷業件數四十八件、人員五千五百六十名と發表してゐるが、一年中の同盟罷業月なる七、八月に入つて愈々その數を增した。就中博文館印

刷工場職工の大罷業と前後して各地において之に應じて立つものが頗る多かつた。今、東京、大阪の新聞に掲載されたもの丶みに就て表を作つて見ると實に左の如き多數に上るのである。

大正八年七月中　件數三十六件　參加人員一八、九三〇人

	人員	目的	結果	日數
兵庫三飾磨郡木場鹽田勞働者	三百名	賃銀値上（三割）	成功	一日—五日
神戸市奥平野浮水池工事人夫	五十名	同上（二割）	半成功	十三日—十八日
神戸市東洋鑄工會社輸列場工	二百名	同上（三割）	半成功	十三日—十五日
川崎造船所兵庫工場製鐵職工	二百名	賃銀減少反對及責任斷數付加反對	半成功	十三日—十五日
東京石川島造船所鐵工部職工	二千三百名	臨時手當本俸繰入及手當の増給	成功	十九日—二十一日
大阪住友鑄鋼煉鐵工場職工	六百名	賃銀値上（四割）	半成功	二十日—二十二日
京都奥村電機商會鑄物職工	百三十名	同上（三割）	失敗	二十九日—三十日
大阪日本染料製造工場職工	百五十名	同上（三割）及十時間勞働等	—	二十九日
東京大井町日本光學工業	二百五十名	賃銀値下反對	—	九日
東京月島服部機械製作所	二百五十名	同上（五割）	半成功	二十一日—二十二日
東京本田鐵工場	二百名	同上（三割乃至五割）	—	二十一日—
東京日本蓄音器	百名	同上（三割）	半成功	二十二日—二十十日
東京精美堂印刷部	二百名	同上（三割）	半成功	二十二日—二十七日
東京日本人造肥料	百名	同上（二割）	成功	二十二日—二十四日
東京織物	百五十名	同上（五割）	—	二十三日—
東京小石川機械製作所	三百名	同上（三割）	—	二十四日—

東京築地機械製作工場	二百名	同上（二割）	──	二十四日──
東京南千住下野製紙	三十四名	同上（二割）	──	二十四日──
東京四谷日本紙器	千名	同上（三割）及休日半給給與	──	二十五日──
東京月島日本製靴	百二名	同上（四割）	失敗	二十二日──二十三日
大阪市内石工職全部	四千七百名	同上（五割）	半成功	二十四日──二十五日
鐵道院鷹取工場職工	三百五十名	同上（三割）	失敗	二十七日──二十九日
名古屋市日本車輛製作部職工	四百名	同上（三割）	──	十八日──
愛媛縣宇和島水電工夫	四百名	同上（八割）及十時間勞働	半成功	二十四日──
富山米穀取引所事務員一同	──	同上（五割）	半成功	二十六日──二十八日
愛媛縣樹桑製絲女工	百二十名	──	──	二十九日──三十一日
神戸日本郵船會社支店給仕	三十八名	賃銀値上（三割）	失敗	二十八日──八月一日
東京松尾鐵工所職工	百八十名	技師排斥	──	十日──
日本製靴會場工場職工	百六十五名	賃銀値上（三割）	失敗	二十日──
東京博文館職工	二千名	同上（三割）及夜業短縮	半成功	二十一日──二十七日
東京下谷東京凸版	三百名	同上（一割五分）	──	十八日
東京深川豊住木工	十三名	同上（三割）	──	二十五日──
横濱船渠	三千名	同上（四割）	──	二十六日──
東京芝日本計器	二百名	同上	──	二十六日──
東京深川淺野スレート	百八十名	同上	──	二十二日──二十六日
東京日本印刷	七十名	同上	──	二十六日

同　八月上旬

姫路市内製材職工	五十名	賃銀値上（三割）	半成功	一日—二日
兵庫縣鳴尾リーバー、ブラザー職工	五百名	臨時手當増給（一割）臨時賞與支給（三割）	成功	一日—一日
岡山縣三井物産玉造船工場職工	千二百名	賃銀値上（三割）	半成功	一日—四日
佐賀縣唐津貯炭場石炭仲仕	六百名	同上（三割乃至五割）	—	二日—
長崎市本博多町宣誠社印刷職工	四十名	同上（三割）	—	一日—
小倉市東京製鋼所工場	五百名	同上（三割）	—	一日—
神奈川縣鶴見淺野製鐵	四百名	同上（四割）		三日—
同鶴見埋築會社	船員二百五十名 人夫三百六十名	同上（五割）	半成功	三日—五日
東京府大森日本特殊鋼職工	百名	同上		三日—
德島市製紙職工全部		同上（三割）	—	一日—
神戸三菱倉庫支店仲仕	六十名	同上（二十割）	失敗	五日—六日
京都石材職工	二百名	同上（五割）	—	七日—
大阪藤田組八幡所製材所	全部	同上（三割）	—	五日—
福岡山大宿木ヶ仲仕		同上（二割）	—	七日—
東京芝日本電氣	七百名	同上（三割）	—	五日—
東京府下大崎山本鐵工所	七十名	同上（六割）	—	六日—
兵庫縣明石町印刷職工	二十一名	同上（七割）	半成功	四日—五日
神戸市兵庫土砂運搬人夫	五十名	同上（四割）	半成功	六日—六日

即ち新聞紙上に現れたる七月中の同盟罷業件數三十六件、此人員一萬八千九百三十八人、一件平均參加人員五百四十八人、同上八月上旬の同盟罷業件數十八件、人員五千五百一人、一件平均人員三百六名。又七月一日以降八月十日まで四十日間の罷工件數五十四件、人員二萬四千四百三十一人、一件平均四百七十人と云ふ勘定になる。之を五年前なる大正三年一箇年中における罷工件數五十件、人員七千九百四名、一件平均人員百五十八人なりしに比すれば五年前の一年間の罷工件數、人員は今日の四十日間の夫れにも劣るのである。殊に注意すべき事は五年前の同盟罷工が一件の參加人員僅か百五十八人に過ぎなかつたものが今日においては一件四百七十人といふ多數を數へてゐる事である。尤も後者は新聞紙上に現はれたもののみに就て統計を取つたものだから之を以て政府の統計と比較するのは間違つてゐるが、之を政府調査の大正八年三月までの罷工件數四十八件、人員五千五百六十人、一件平均百八十八人と前記五年前の夫れとを比べても尚且參加人員において二割の増加を示してゐるのである。近時の同盟罷業が漸次組織的であつて秩序ある訓練されたものとなつて來た事が想像されるであらう。

○

次に上掲本年七八月四十日間の罷工の目的を分類して見ると

賃銀値上を要求するもの……四十九 ┐
賃銀値下に反對するもの……二 ┘五十一
監督者の排斥……一
不明……一

と言ふ割合で九割九分までは賃銀問題に關した要求である。無論斯うした現象は今日始めて起つた問題ではないが從前にあつては感情問題に原因した罷工の割合がモット多かつたのである明治三十八年以降大正四年に亘る十箇年における大阪府下の罷工八十五件中六十七件（七割八分）が賃銀に關する問題（値上要求四十五件。値下反對二十二件）であつたのと比較して、二割以上の差があるのである。後者の罷工中には監督者に對し反對せるもの六件、監督者の復職を要求せるもの三件、監督者の任用方法に就ての要求二件があつたのである。

既に最近の罷業が感情問題に基く罷業は殆んど絶無で九割九分までは賃銀問題に關してゐるとすれば彼等は一體どの位の賃銀値上を要求してゐるのか。上記七、八月四十日間の五十四件の罷工中

二十割……一　八割……一　七割……一
六割……一　五割……六　四割……五

三割……二十　二割……五　一割五分……一
三割乃至五割…二　不明……四　其他……二
合計……四十九

卽ち全數の五割までは三割を要求してゐるのである。而して成功步合も此の邊が最も多い事は上揭の統計に依つて見らるゝ通りである。三割の賃銀値上の要求！　果して無理か無理からぬか讀者の判斷に委す。

然らば之等の罷業の結果は如何であらう。總件數五十四件、新聞紙上に結末の發表されてゐないもの二十八件を除き二十六件の中、十六件卽ち約六割までは要求の全部は貫徹しなかつたとは言へ兎も角、兩者の互讓に依つて要求の半以上を貫徹したのである。そして全く成功せるもの三件（一割）全然失敗せるもの五件（三割）といふ割合である。之を警保局調査、大正三年以降八年三月に至る五ケ年三ケ月の罷工千八十五件中における結果別

要求貫徹（成功）一九五　　妥協成立（半成功）四七七
要求拒絕（失敗）一四九　　要求撤回（同　上）二六四

に比べると稍成功步率の高まつてゐるのを見るのである。之れといふのも最近の同盟罷業が漸次組織的となり、職工の團體的訓練が出來た結果に外ならない。

○

何を指してか罷業を組織的なりと言ふか、何をか團體的訓練と言ふ。先づ上記の如く罷工人員の漸次多くなりつゝある事その一である、日露戰役の前役、足尾鑛山におけるが如き暴行の殆んどその後を絕つた事その二である。罷業に當つては必ず委員を選出して交涉の任に當らしむる事その三である。サボタージュ、ピクチッグの如き方法を採るもの〻殖えた事その四である罷業基金に意を致すに至つた事その五である。勞働團體の後援を求むる事その六である。尙此外に多くの事實があるであらう第一に就ては旣に述べた。第二、暴行の無くなつた事は去五月生野鑛山鑛夫千百名が同盟罷業をやつた際、筆者が親しく見聞した處に徵して爆藥が彼等の掌中にあつたのにも拘らず彼等は夫れに手も觸れず、部屋頭を通じ町長の調停を依賴して正々堂々と鑛山に交涉した一事でも判明する。當時鑛山では鑛夫が火藥庫を襲擊するを怖れて徹宵嚴重に番をさせたが一人の鑛夫の姿すら認めなかつたといふ挿話さへあるのである。第三の委員制度は殆んど全部の罷業において行はれてゐる。交涉委員、會計委員のあるのは勿論、新聞記者委員といふのさへ設けてあるの

があつた。部師の會合の指揮は在郷軍人なる職工が號令して一糸亂れず協議を進めるさへあつた。兩三年前富士瓦斯紡績の罷業の際は、罷業職工が工場を退場するに當つて軍人出身の職工の指揮で二列縱隊を作つて門を出たといふ實例もある。第三、サボタージュはサンディカリストの好んで行ふ處であるが、我國には別にサンデカリストに敎えられずとも從前から「やなぎ（柳に風の意味か）」又は「あみだ（阿彌陀佛の如く凝として働かずといふ意味ならん）」と稱し行はれて來たのであつた。夫れが近頃となつて屢々行はれるに至つた事は注目に値する事實である。サボターヂュとは言ふ迄もなく"ca canny"（=go slow・or be careful not to do much 徐々に歩む、又はのらくらする）と呼ばれたもので故意に勞働をなまけ又は故意に勞働上の過失をする事、機械器具を破損せしむる事を言ふのである。

七月十三日の神戸東洋燐寸の職工の罷業も之であつた。軸木を列べる軸列職工が出勤し乍ら仕事をしないために剩餘の軸拔こ軸摘、標貼、函詰、側塗、包裝職工約三千名が仕事をする事が出來なかつた實例がある。又同月二十七日同じく神戸市外の鐵道院鷹取工場で約三百五十名の職工が罷業した際にも監督が巡視した時は各職工何れも仕事をしてゐるが、監督が他の部を巡視してゐる時には凡べて手を休めて働かうとはしなかつたといふ。斯うした方法が行はれ出した事は大に注意を要する事である。ピクチッグ（Picketing）とは罷工者が罷工中その職を他の勞働者に依つて補充せられないやう見張する爲めに置かれる所謂「見張り」「歩哨」の謂である。上記東洋燐寸、鷹取工場に於ても之を放つたといふ。其他之を實行した實例は甚だ多い。第五第六は共に勞働團體に關する事である。

友愛會は日本において勞働團體らしい勞働團體の唯一のものであるか今日までに會として前後約六十同罷業の調停をやつて來てゐるがその大部分は半成功以上の成績を擧げてゐる。無論友愛會が罷工を奬勵するものではない。現に理由薄弱なりとして友愛會が抑壓した罷工は頗る多いのである。職工が罷業に當つて勞働團體の後援を求むる事は理の當然ではあるが、その勞働團體も現在では一厘の罷業基金もないのだから物質的の援助は全く望む事が出來ない。然るに近來友愛會本部としてこそ罷業の資金を融通はしないが地方の支部に於て援助の意味を以て少額宛でも各支部から醵出する傾向のあるのは之亦注目に値ひする事である。曩に（五月五日）東京大島製鋼所器械工場器械職工全部が罷工をした際に他工場の職工及同工場外の友愛會支部

から約二百五十圓の同情金を贈つて同罷工が一週間の永き日時を要したにも拘らず中途敗北の憂目を見る事もなく要求の大部分を貫徹した事もあつた。今、當時の會計決算を抄錄すると左の如くである。

収入

金二十二圓三十三錢	大島製鋼所鑄鋼工場
金三十四圓十四錢	同　熔解工場
金十七圓二十三錢	同　木型工場
金三圓八十錢	同　電氣工場
金五十七圓三十三錢	同　鑄鋼工場
金四圓二十錢	同　試驗工場
金二十一圓三錢	同　雜工場
金八圓九十三錢	同　鍛鋼工場
金二十一圓八十五錢	同　水壓鍛錬工場
金三十三圓	同　仕上內業部
金五圓八十錢	同　汽罐工場
金四圓	同機械工場起重機部
（以上小計二百三十四圓六十四錢）	
金五圓	友愛會東京鐵工組合
金五圓	全國セルロイド組合
金七圓	友愛會城東支部
金二圓	同　芝浦支部
金九圓	大島製鋼所辨當屋
金五圓	產婆　篠田たつ氏
金六圓	個人的寄附

收入合計金二百六十八圓六十四錢

（備考　外に友愛會龜戶支部より菓子の寄贈あり）

支出

金六十九圓四十二錢	蕎麥代
金三十四圓八十錢	勞働大會講演費
金二十一圓	記念品
金十八圓十七錢	交通費
金十二圓九十錢	茶菓子代
金六圓六十五錢	印刷費
金四圓三十八錢	通信費
金四圓四十五錢	機密費
金七圓五十錢	寫眞代

支出合計金百七十九圓二十九錢

收入の部に產婆さん（演說を聞いて同情して寄附したので同職工とは格別關係のある者でないといふ事である）の寄附のあるのも一奇であるが、支出の部において全支出の大部分が蕎麥代である事は更に面白い。思ふに罷業中職工は寄合場所に集合しては蕎麥を喰べたのであらう。六十九圓の蕎麥といへば約千杯にも當らう。斯くて彼等の罷工は蕎麥の如く細い乍らも長く持續する事が出來たのであつた。

要するに最近同盟罷業の數は著しき增加を告げるに至つたが殊にその罷業が大規模となり組織的となつて來た事は特に注意すべき事であつて、最早斯くの如き大勢となつた以上、官憲も資本家も職工を見る事「長いものには卷かれろ」「地頭と泣く兒には勝たれぬ」として唯々諾々工場主の言ふ事を聞いてゐた舊時の職工を以てしてはならない。彼等は今や自覺してゐるのだ。自覺せぬものは官憲、資本家諸君自らである。

(6) 如何にして同盟罷業を緩和すべきか

法學博士　嘩道文藝

一

我國の勞働問題も、最近に至り、急進的に開展し、愈よ、眞劍の問題となつて來たから、之に對する對應策も亦眞面目に考究せられねばならぬ時機が到來したので、爲政家資本家の方面より、勞働問題の解決に付き、種々な案が提出せられて居るが、余の見る所では、多くは、勞働問題の核心、勞働運動乃至同盟罷業の眞の目的が、奈邊に存するかを十分に考究した上で、案出せられたものとは受け取り難いのである。一般には、封建時代の大名が仁政を施した樣に、資本家が溫情を以て勞働者に臨み、之に恩惠を施せば、勞働問題の火の手は、鎭定せられる樣に、考へられて居る傾があるが、此の如き考へは、問題の見方を誤つて居るものである。少しく其の然る所以を說かう。

人類の生存發達の跡を顧みるに、多くは、多數者が少數者に壓制せられ、其苦惱より逃がれ出でんとする努力の歷史ならざるはない。中古以來强權を逞ふした、宗敎上政治上の壓制は、故國に於ける壓制に堪へずして、自由の新天地に逃がれた自由の民が、亞米利加に自由の國家を建設したのと、次で起つた佛國革命と云ふ大鐵槌とによつて、自由思想が民衆の肺腑に打ち込まれたので、大に其鋒先を挫げたのである。先づ宗敎上では

完全な自由が認められ、政治上では專制主義が衰へ、民主主義が勢力を得、各國競ふて立憲政治を行ふ樣になつたので、自由な社會が一先づ出來上つた樣であつたが、經濟生活の基礎條件である私法制度の根本原則——私人所有權、契約自由、財産相續——は其儘に維持せられ、何等の變革を受けなかつたから、新たに建設せられた政治上の自由は、機械の發明に伴ふた産業革命と結びつき、漸次に資本の集中合同を産み、有産階級の勢力は頓に增大し、貧富の懸隔甚しくなり、經濟上の權力は少數の資本家の手に歸し、此に經濟上の專制を現出し、經濟上の專制は政治上の專制に代つて、亡びかゝつた壓制の歷史を再び繰り返すに至つたのである。即ち十九世紀の自由運動によつて、無産階級が、幾多の犧牲の對價として、獲得したものは、實のない殼に過ぎなかつた。彼等は政治上の自由を得たと云ふ空虛な美名に一時醉はされたに過ぎぬので、其間に漁夫の利を占めた者は、小數な有産階級であつた。今や彼等は金權の壓制に苦み、之から遁がれんと、悶躁いて居るのである。

現代は、政治上の封建制度又は專制主義に代つた、經濟上の封建制度又は專制主義が、猛威を逞ふして居る時代である。故に十八世紀十九世紀の民衆の努力が、政治上の封建制度又は專制主義を倒すことに向けられた樣に、二十世紀の民衆の努力は、現代の經濟上の封建制度又は專制主義を倒すことに向けられるのは當然の順序であつて、近來頻々として起る、工場勞働者の同盟罷業は此の努力の魁を爲して居るのである。此の如く同盟罷業は、經濟上の專制主義に對する抗爭であるから、政治上の專制主義に對する抗爭が、政治上の立憲制度を確立することを目的とした樣に、同盟罷業は經濟上の立憲制度を樹立することを終局の目的として居るものと見ねばならぬ。勞銀の値上、勞働時間の短縮等に關する具體的個別的の要求は、其裏面に潜んで居る抽象的一般的の大なる要求即ち經濟上の立憲制度に對する要求の片鱗を示すに過ぎぬのである。從て經濟上の立憲制度が確立せらるるならば、個々の要求から起る抗爭は自から其跡を絕つに至るであらう。されば、此の理を解せず、根本に於ては尙ほ、企業家資本家の專制主義を擁立し、是認する溫情主義を以て、克く同盟罷業を緩和し、勞働運動を遏止し得と爲すは、問題解決の根本策を誤つて居るものと爲さざるを得ない。

二

資本家と勞働者との關係は、民法上の雇傭契約關係である。

故に法律上の形式から見れば、勞働者は雇傭契約の當事者として、資本家に對立し、全然對等の地位を以て、兩者間に雇傭關係を成立せしむるものであつて、資本家は何等特別に優越せる地位を持つて居らない樣であるが、法律上の形式論と離れて、資本家勞働者間の雇傭關係の成立を社會的に實質的に觀察するときは、兩者の地位は決して平等なものでなくて、勞働者に比し、資本家は頗る優越な地位を保持して居るのである。即ち勞働者も資本家と等しく、雇傭契約を締結すると否との自由は之を確保されて居るが、雇傭契約の內容を爲す勞働條件の決定に付ては、勞働者は殆ど容喙する權利を持たないので、資本家の專斷に屈服せざるを得ないのである。之を譬喩的に云へば、勞働者は資本家が組織して居る金權國に入國すると否との自由を享有して居るが、一旦入國するときは、金權國に滯在中は、資本家の金權に絕對に服從せねばならぬのである。恰も外國人が我國に入國すると、絕對に我國の統治權の支配に服せねばならぬと同一である。我國の資本と勞働との關係の現狀は、正しく此に述べた如き有樣である。現時の資本勞働の關係が上に見たるが如きものであるとすれば、勞働者と資本家との關係は、形式上は民法の雇傭關係であつて、對等關係であるが、實質上は資本家が勞働者を支配する關係、勞働者が資本家に服從する關係で、不平等なものである。故に墺國維納大學名譽教授で、法律家としての立場から、社會問題殊に勞働問題を研究した人としては、世界唯一の法律學者と云ふを妨げぬ、アントン、メンガー氏が「今日の勞働契約は、名は民法の雇傭契約と云ふ債權契約であるが、實は人身支配の契約で、此契約によつて、資本家に生ずる權利は、家長が家族に對し、親權者が子に對して有する權力よりも、一層強度のものである」と云へるは、至當の言であると謂はねばならぬ。

現今の經濟組織の前提を爲す契約自由の原則に依りて、各人の受くる恩惠は、契約締結の自由と、契約の內容を定むる自由とを享有するによつて、始めて完きを得るのである。然るに勞働契約に付て之を見るに、勞働者は契約締結自由だけは享有して居るが、其內容を定むる自由は全然之を享有することが出來ない、蓋し個々の勞働者は極めて無力であつて、勞働契約の內容を爲す勞働條件について、資本家と爭ふも、螳螂が斧を以て、龍車に向ふが如きもので、何等の成果を產まないからである。之に反して、資本家は、契約自由の原則の與ふる全部の恩惠に十二分に浴して居るのである。勞働條件は資本家の欲する儘に

定めらるゝのである。

勞働契約の如き、人の神身に至大の影響を來たすべき契約の成立について、獨り資本家のみ優越の地位に立ち、勞働者は全然無力であることは、如何なる方面から、考へても、至當であると爲すことが出來ぬから、兩者の地位を對等のものとする策が講ぜられねばならぬ。而して其策は、勞働條件は凡て國法を以て之を一定し、資本家の手から勞働契約の內容を定むる專橫を奪ひ、勞働者と同樣に、資本家も勞働契約締結の自由だけを享有するに過ぎずして、內容決定の自由は之を享有せさるものと爲すか、或は、勞働者の團結を公認し、其自動を許し、資本家と同等に、勞働者も勞働契約の內容決定の自由を享有し得るものと爲すかの何れか一に依らねばならぬ。勞働契約に關して內容決定の自由を契約の當事者の手から全然奪取するには、完全な勞働保護法の立法を要するのであるが、幼年工、女工の保護すら完全でない我國に於て、此の如き立法は近き將來に之を期待することは出來ぬ。從て勞働者の地位を資本家に對抗し得るまで向上せしむるには、第二策を取るの外はないのである。卽ち國家をして、勞働者も亦契約自由の原則の恩惠に十分に浴し得る途を開かしむるの外はないのである、而して現今の勞働運動の眼目的要求が此點に存することは、看過すべからざる點である。

勞働者をして、契約自由の原則の與ふる全幅の恩惠に浴せしむるには、先づ第一に、勞働者が鞏固な團結を結ぶに妨となる制裁法規を改廢せねばならぬ。憲法上認められたる結社の自由によつて、勞働者が團結を爲しても、他方に團結の威力を發揮することを不可能ならしむる、刑罰法規が厳然として、背後を脅かして居つては、勞働者の團結は有名無實に終らざるを得ない。故に治安警察法第十七條の如きは、なるべく速かに、之に改正を加ふる必要がある。刑罰法規の改廢に次で必要なことは勞働團體に法人格を與へ、團體と團體員である各個の勞働者との權利義務の關係を、明確ならしめ、團體が團體として行動し得る樣に爲すことである。之が勞働者の要求する經濟上の立憲制度の骨子である。勞働團體に法人格が與へられ、團體が威力を發揮するに妨げとなる刑罰法規が改廢せらるれば、勞働者は團結の力に依りて、勞働條件の決定に付き、資本家と對等の地位に立つて協議することが出來る樣になり、資本家專斷の弊に對する不平を擧げることが出來るのである。

三

法人格を持つた强力な勞働團體が認められれば、勞働團體と資本家の間に、勞働條件に關する協定が出來るのは自然の成行である。而して其協定が假令勞働者にとりて、滿足なものでなくても、彼等の意思が參加して、出來たものであるから、資本家の横暴を叫ぶ理由がなくなり、勞働鬪爭は非常に緩和せらるることは、之を疑ふの餘地がない。故に同盟罷業を緩和する唯一の策は、國家としては勞働團體の法人格を認め、其活動の障害を爲す法規を改廢し、資本家としては勞働團體と勞働條件協定契約を締結することに存すと謂はねばならぬ。

事物には表裏あり、利害の相伴ふは避くべからざる所であるから、勞働條件協定契約も當事者たる勞働者資本家に利益のみを齎らすものでない。勞働者は之に依りて、精神的物質的の利益を受くると同時に、特に勤勉にして堪能なる勞働者は、勞働時間及び勞銀に關する協定に依りて、其の活働の自由を妨げらるるの不利を被るべく、特に不熟練な勞働者は、協定された勞銀を受くる價値のないものとして、其の職を失ふに至るであらう。又之を資本家の方面から見れば、資本家は勞働條件の協定によつて、同盟罷業より受くる損失及び同業者より勞働者を奪はるゝ危險を免るゝの利益を得ると同時に、協定に拘束せられ、市場の要求と企業の經營とを、速かに一致せしむることが出來ない不便と、企業の經營に同等の利害關係を持たない、勞働團體の代表者から、工場の秩序維持に付き、監督を受ける不快とを忍ばねばならぬであらう。此の如く勞働條件協定契約は勞働者にも資本家にも多少の不利益を齎らすのであるが、之を同盟罷業から生ずる不利益に比較すれば、極めて些細なものであるから、之あるが爲めに、勞働條件協定契約の效果を論議すべきでない。同盟罷業は啻に資本家勞働者の當事者に非常な不利益を生ずるのみでなく、一般消費者に影響する所必ずしも尠からぬから、國民經濟の上から云へば、多少の犧牲を拂つても之を遏止し、之を豫防する途を講ずるの必要あるは、論ずるまでもない。

勞働條件協定契約の事例は歐米諸國に尠なからぬのであるから、我國の爲政家資本家は、速かに範を彼に採り、曾て立憲政治を採用し、政治上の鬪爭を未然に防止した樣に、資本勞働の反目が極端にまで走らぬ先に、資本勞働協調の途を開き、無産階級の現代の經濟組織に對する呪の叫の第一聲である同盟罷業を緩和

することは、余の切望して止まざるところである（八、八、一三）

(7) 治安警察法第十七條の誘惑煽動の解釋に就て

法學博士　山岡萬之助

一

現今社會の趨勢は、殊に政治經濟の關係に於て、多衆運動を爲すに至つたので、如何に其秩序を立てねばならぬかは、大なる問題である。此問題に付ては、政治家は勿論、法律家に於ても、十分研究をしなければならぬ。

抑現在の法規の下に於て、同盟解雇、又は同盟罷業共れ自體は、法禁行爲でないことは、勿論何人も承知のことであらうが、之に如何なる條件加はれば、犯罪として處罰せらるゝやは、難解の事項である。刑法に於ては、同盟解雇、又は罷業を爲すに至りたる事情が、虚僞の風說流布、又は僞計、若は威力に基づくものなる場合に於て、犯罪と認め、治安警察法に於て、他人に對する暴行脅迫、公然の名譽毀損、又は誘惑煽動に出でたる場合に於て、犯罪とするのである。

二

そこで煽動とは何んなことであるかと云ふと、他人に對し、或る行爲を爲すことに傾く程度の精神上の影響を與ふることであつて、極く廣き意味を持つのである。即ち他人の意思を挑撥的に決定せしむること、言葉を換へれば、他人が當該行爲を爲す意思を直接に導く場合は勿論、廻り遠き方法を以て、他人の意思を刺激したる場合も、尚ほ煽動である。故に、極く隱密に出

孰の方法を執つても、苟も他人の意思に影響を與へたる以上は煽動たるを缺かないのである。又他人の煽動に基づいて、其意思を實行する行動を爲したることは、罪の成立に必要でない。併ながら、煽動罪の成立には、犯人に於て、他人が、法の定めたる行爲を爲す決意を、爲すに至るべきことの認識を要するのであるから、冗談半分に言ふたことから、他人が決意をしても、罪とはならない。而して煽動の方法に付ては、法律は、何も規定して居らぬから、印刷物の配布、演說又は掲示、其他如何なる手段を以てするを問はない。又多衆に對しても、一人に對しても宜しいけれども、唯た或る手段を講じた丈で、何人も知らない間は、罪は完成しないものである。言ひ換へれば、何人か其內容を知つたことが明なる場合に於て、始めて罪の完成を認むべきである。今煽動を教唆と比較して見ると、教唆は、教唆せられたる者が、教唆した者の意を受けて、其行爲を實行しなければ、犯罪とならないのであるから、煽動とは、大に異なる所があるのである。

◘

次に誘惑とは、他人に對し、行爲を爲す決意を、高調せしむることで、煽動よりも廣き意味を持つのである。即ち犯人の與へたる、精神上の刺激が、他人の決意に對し、第一次であることを必要としない。故に誘惑は、行爲を爲す意思ある者に對しても、成立し得るのである。亦た誘惑は、僞計詐術に依ることを特色とするもので、虛僞の計略を用ゐることは、勿論人心を誘導する所の、一切の方法を包括する。但單純なる詐言は、含まないと同時に、詐僞の觀念に這入らない所の、贈與、約束の如きものでも、他人を眩惑する限りは、罪となるのである。

■

以上は煽動と誘惑との概念を述べたのであるが、此概念に適合する、行爲あればとて、直に處罰せらるゝ譯ではない。法律上罰せらるべき場合は、同盟解雇、又は罷業を遂行する爲めに使用者をして、勞働者を解雇せしめ、或は、勞働申込を拒絕せしめ、又は、勞働者をして、勞働を罷めしめ、或は、雇傭の申込を拒絕せしむる目的を以て、他人を煽動、又は誘惑したるときに限るので、例へば賃金の値上には、同盟罷業に限るを以て業務に就くべからずとの旨を述べたるときは、煽動であつて、同盟罷業を繼續すべし、若し目的を達せざれば、より良き就職口を周旋すべき旨を述べたる如きは、誘惑となるのである（完

(8) 産業國家論

—生産者組合を基礎とする新國家哲學—

賀川豊彦

一 産業民主か、工場民主か、

凡ての階級を破壞し、凡ての特權を無くして、社會的にデモクラシーを樹立せんとするのが、社會民主の本領であるが、その根柢には人道主義的分子が餘程多い。元來歐洲の奴隸を開放したのはストイックの凡神論で有つたが、近世の社會民主の哲學の根柢にはルソー以來自由民權の血を湧かして來た人道主義の哲學が有る。然し素朴的人道主義の社會民主論は、今日では生物學的にも哲學的にも、實に危い所に立つて居る。ダヴィニズムの襲擊とニーチェズムの奇襲によつて、社會民主の生物學的並びに、哲學的根柢は誠に危險に瀕して居る。然しトルストイの樣に凡ての文明の惡傾向を否定し、人間性を高調し、この人間性の前に王も、資本家も、勞働者も、階級も、特權者も非特權者も平等にあらねばならぬと云ふ主張は決して馬鹿にならない說である、

然し産業民主を主張する人々から見ると、この人間性を基準としてデモクラシーを說くことは無意味なことで有つて、勞働者が工場に閉じ込められ、運輸機關に縛りつけられ、坑山の穴の中に追ひ込められて居る間は「人間平等」など云ふことは要するに抽象的なことで有るから、先づ産業的境遇から革命してかゝらねばならぬ。とかう云ふのである。

現代國家の二重政治

又、實際近世の民主的精神の勃興は機械力と工場組織によることの著しいことは認めねばならぬ。即ち今日では機械と工場は全く民衆の力によつて動くので有つて、機械の無い昔には今日見る樣なストライキとかボイコットとか云ふ樣な民衆運動は無かつたものである。それ

、で有るから、今日の民主々義の根柢に產業的解決が無ければならぬことは、古代の民主々義や文藝復興期や佛蘭西革命時代の民主思想と大に異つて居る點である。

全く二十世紀の民衆は機械と工場が產んだ民衆で有つて、昔の民衆の様に都市と貿易が產んだものでは無い。で、それだけ民衆運動の根本的解決をせねばならぬ。

で、今日の民衆が產業的生產物でありとすれば、社會問題の解釋者が、之を唯物史觀的に取扱ひ、之を經濟的にのみ取扱はんとするのは如何にも尤もな様に見える。即ちマルクスなどの行き方がそれであつて、產業的に解決すれば、近代民衆の問題は全部解決し得ると考へたものである。それで彼は資本の問題だけに打衝つて行つた、之は彼の科學的努力としては、實に立派な點で有つて、多少社會改良に志ざすものが、いつでも感謝することを忘れてはならぬ點で有る。

然し、なる程　近代の民衆を都市に集めたものは機械で有り工場であり、また市場である。そしてそこに資本が集り、その資本が今日では社會秩序の唯一の秩序維持者であるには違いないが、そこで考へ無くてならぬことは、機械の衙をなし、工場を組織する爲めに、集つて來たものが、矢張り人間で有つたと云ふことである。即ち資本主義文化を統一したものはアレキサンダー大王でも無く、ナポレオンでも無く、安田善次郎の金で有り、ロックフエラーの金で有り、ロスチヤイルドの金で有るかも知れぬが、金で都市と工場に集められたものは矢張り人間で有つた。そこで、人間の集つた古代の都市では直に民衆の力で共和國を組織し、自治の世界を出現させたが、產業的に集められた、人間は、都市生活と工場生活の二重生活を送ることとなり、都市に於ては自由市民であるけれども、工場に於ては、資本と稱する　無性無人格の統治者に絶對的服從を誓はねばならなかつた。そして、彼は自由市民の假面をきせられて、その本體は無性無人格の賃銀奴隷として太陽が空にある間は、工場に佇まねばならぬので有つた。そして之に自覺し來つたのが歐洲に於ては一八四八年第一期の無產者階級の旗擧げの時で有つた。即ちあの時以來、無產者は、都市の自由民と云ふことは虛僞である、先づ工場に於ての自由民にならねばならぬと云ふことの稍具體的運動が起る様になつたので有る。

工場自治の問題

然し、マルクスやエンゲルスの考へでは今日の工場そのものを直に、自治體とする考へは少しも無かつた様である。彼等の考にはまだ、國家とか、共

産とか云ふことが先に考へつかれて、兎に角資本主義を根柢から顛覆させて、之を共産的の時代にすればそれで問題は無くなると考へたものである。即ちマルクスなどは之を全々唯物的に考へ、平面的に考へ、では如何なる形式でその産業民主の形式に近づく可きかに就ては『勞働者に團結せよ』と敎へた許りで、その團結の方法や形式などに就ては敎へることが少なかつた。共産黨宣言の中には、勞働組合のことを一寸と論じて、それも善いとして居るが、それがどんな形で進化すべきかを豫言して居ら無い。然しその豫言の注文をするだけ無理で有つたかも知れぬ、彼は産業方面からのみ人間を研究したので、人間の方面から産業を研究したのでないからである。然し凡て人間の運動は、それが産業であらうと、政治であらうと、發明であらうと軍事であらうと、人間の範圍即ち心理性と社會性を脱出し得ないものであるから、マルクスとしては、もう少し、人間的に經濟學を組織してくれる筈で有つたと思ふ。然し不幸にして彼は勞力價値說の外は全く運命的にまた唯物史觀的に經濟學を說いたものだから、彼の經濟政策に再び人間性が復活することなしに濟んだ。

それで、たとへマルキシズムが成功して、資本國有の國家が露西亞の樣に來たとしてもそれがどれだけ、人間としての勞働者に幸福であるかは頗る疑問である。なる程、もう、資本主義から來る脅迫は無いかも知れぬが、それで社會組織の完成したものであるかは頗る疑問である。

過激派の工場經營法

最近に露西亞の工場を研究したクララ・アイ、テーラー嬢が、過激派の工場經營方針に就て報告して居るのを見ると實に面白い。それによると、モスコウ附近の工場は大抵一九一八年の夏國有になつて居るが、國有と共に勞働組合の自由が保證せられたので、賃銀はもと一日一ルーブル以下で有つたものが、七八ルーブルに昇り、その上に最低賃銀が保證せられて居るので生活は餘程向上して來たと云ふ。がその賃銀支拂の方法が頗る痛快なもので有つて、一%は保健積立金に一〇%は工場總資金に、四%は失業基金に、また二%は勞働組合費として政府の命令で頭から天引、即ち、賃銀の一割七分は稅金として取られてしまふのである。勿論之は臨時の制度であらうが、國有の工場に勞働者の賃銀から一割を天引して資本として投資させると云ふのは實に矛盾した話であると云はねばならぬ。マルキシズムの政治家が、人間を取扱ふ政治に於て、たゞ産業のみ革命すればそれで革命の凡てが成功

して居ると云ふ淺見を持つて居るならば、それは必ず失敗であらうと私は思ふのである。その理由は、今日の產業組織は人間が臨時に編成したものであり、產業の爲めの產業の形になつて居るから人間が壓迫を感じるのだが、之を人間の爲めの產業と變更してしまへば反つて幸福なものになることは明かである。それを更に人間とその心理性を無視して、人間を唯物的に取扱ひ、たゞ唯物的史觀的に推移すればそれで足りると考へるならば、牛の角を矯めて、反つて牛を殺す樣なものである。それで私は資本を云々する前に、產業民主を主張する前に、工場内の人間を人間として取扱ふことを主張し、工場を一個の自治體と見て、社會民主にもあらず、產業民主の唯物主義のみにも走らざる、工場民主々義を先づ主張するものである。

即ち私は、今日の工場を唯產業機關と見ることに絕對に反對である。長時間工場に勞る生產者の群の爲めに、我等は先づ工場を人間社會の單位として、たゞ物貨の製造所として機械視せず、人間の創造的衝動の試驗所とし社會生活の單位を工場に發見せんとするのである。

農場勞働者の場合

然し農園勞働者に就ては、それが工場と見られぬ範圍内に於て、農夫組合から反對があるかも知れないがそれは心配の無いことで有つて、農園勞働者は今や段々、農場を化學的に取扱ひつゝある爲めに、近き將來に於て工場と農園とは殆どその作業に於て異ならざる程科學的なものとなり、また多人數の協力を要するものとなるであらうし、そうで無くても、米國などに於ては、今日段々農夫組合が有力な勢力となり、ネブラスカ洲を動かし、中央諸洲を動かして居る樣に、農夫組合を一つの生產組合と見れば、工場を自治體の單位と見る樣に、非常に適當な一組織が發見せられるのである。

かうして、農園と工場とが共同の目的の爲めに團結してくると、そこで發究すべきことは、何故今日の國家組織が新文明に適せざるものであるかと論ずる必要が起るのである。

二　今日の國家の何處が惡いか？

國家は新しき發明

國家と云ふものが出來上つたのを遠ちの昔からと思へば大間違である。國家も人間が最近に發明した一つのインスチチユションである。昔は國家と云ふものは無かつた。家族と酋長と、征服者と被征服者が有つたけれども、自治體としての國家は一つも無かつた。國體と云ふ

ものはいつも自治自由自尊の民衆の合體である。この意味にだて今日まだ國家にまで成長し遂げて居らぬ國家と自稱するものが澤山ある。レニンは歐洲の國家組織に疑惑を持つて居るそうであるが、國家が發生した歴史は全く『我』の發生と同一經路を持つて居るもので有つて『我』の發生し無い、奴隸民族に皆て國家の發生した事實が無い。地中海に大きな二つの島がある。クリート島と、シシリ島である。然し前者は常に獨立自尊の自由自主自治の精神に富んで居た爲めに、埃及文明を、希臘に輸入する飛び石となつた程、立派な文明と國家を持つて居た。然し、シシリ島は嘗て自由自尊の文化を持つて居た歴史が無い。同じ二つの島にもかうした區別があるのである。シベリアには酋長と土民が千萬を以つて數へる程居る。彼等は鳥居龍藏氏に云はすれば、我等の祖先の元種民族である。けれども彼等に國家は無い。たゞ大和民族のみが國家を組織した。

我の發生と國家組織

國家組織は、それであるから、全く『我』の發生した民族にのみある。その『我』は酋長一人の我でもいかぬ。君主一人の『我』でもいかぬ。家長一人の『我』でもいかぬ。國土の凡ての人々に『我』が發生し、その人等の意識的結合によれる組織體であらねばならぬ。それはルソーが立つた樣な、民約では無い。卽ち約束と契約の結合したものでは無い。又トルストイがルソーから受け繼ぎして、有機的社會など云ふものは無いと云ふて、道徳的無政府主義を主張し、今日の國家は要するに、人爲的に權力階級が勝手に固めて、勝手に『有機體哲學』と云ふものでその實行を辯護して居るものでも無い。國家の起原はトルストイが云ふ通りにそんな簡單に說き去り得るものでも無い。そうかと云ふて、ヘーゲルが說く樣な――そして、その弟子多くの御用學者の樣な日本の所謂憲法學者をも入れて――理念一つで國家が創造出來ると考へる樣な、簡單なものでも、それは無い。

人間の國家は有機體では勿論無い。この點はトルストイが、『我等何を爲すべき乎』の中に指摘して居ることはあたつて居る然し、トルストイが云ふ通りに、個性の完全の爲めには、國家組織と稱するものをも犧牲に供しても善いと云ふ程、國家組織と云ふものは薄弱なものでは無いのだ。

人間の國家と云ふものは、實は有機體より結合力の強いものだと云ふても善い程のものである。それは、自意識の世界を信用し無い人には全く不可解な世界である。ここはヘーゲルの理念と云ふことで國家を說明せんとする所に強味のある所である

それで、國家はトルストイの云ふ通り有機體では無いが目醒めたるものの意識的結合であるのだ。

この意識的結合と云ふものの中には自意識的社會性と云ふもののの六ケ敷しい所があるのだ。

社會性と國家の關係

植物にも動物にも皆社會性を持つて居る。似人猿類も社會を持つて居る。然し今までの科學の說明する所によれば、最も高等な社會組織を持つて居ると云はれて居る、昆虫社會の蟻でも、蜂でも彼等は決して我等が持つて居る様な、自意識的社會と云ふものを持つて居るものでは無い。蟻の社會でも、蜂の社會でも要するに、一人の女王の產んだ大きな家族――三萬、五萬と分化した組織に發現する奇蹟的家族にしか過ぎないので有つて、我等が人間社會に於て超家族的社會を見て居る眼で蟻と蜂の社會を見るならば非常な間違をするのである。彼等には人間の持つて居る種類の社會は持つて居ら無い。また脊椎動物を通じて、似人猿類に至るまで、人間の様に超家族的社會を組織するものはどれだけあるであらうか、相互扶助の力で結合する社會性に豐んだ多くの動物が有るけれども人間の様に、超家族的意識で結合して居るものは絕無であると云つても善からう。

人類社會は全く本能と欲望と必要と憧憬とを持つて出來上つたもので有る

超家族國家の發生と我の自覺

には違いは無い。然し人間の社會は全く本能と欲望と必要だけに――それであれば有機體としての說明は充分出來る――閉じ込められて居るものでは無い。男女の分化、生理的分化、經濟的分化の必要上、社會性が、サムナーの云ふ通り、より多く人間の無意識的風俗習慣と稱する無意識的社會分子を持つて居るものであることを私は決して拒むものでは無い。この無意識的社會習性は社會性を硏究するものに取つては最も興味のある點ではあるが、習性で支配せられる、傳統的國家が一つの使命を持つて居るものであるにしても、それが、純粹な『我』誕生としての國家組織に對する一個の準備であると云ふことの外は何等意義の無いものであることは云ふを待たない。

つまり、今日の社會なるものは、私が先に述べた、男女兩性の分化より起つた社會組織、卽ち家族種族乃至は民族、又生理的分化より起つた職業の分化、女は哺乳、紡織、男は狩獵漁業その他、男の中にも生理的に各種の分業がある。走る人、角力する人、擔ふ人、召使はれる人、番をする人等生理的理由によつて、自己の職業を分化させたものも有らう。然し經濟的原因に

よつて社會性は更に有機的に複雜になつた。之等は多く、本能的に、無意識的に必然的に、而かあるを要した社會性である然し更に近世社會は人間の心理的分化と社會性それ自身の分化によつて、意識的に目醒めて來て、人間に取つては多く新しい企である國家なるものが生れた。

國家はどの意味で新しいか

では、『國家』と云ふものはどの意味で新いしかと云へば、其の國家は皆習慣的社會性から出來上つた、家族國家で有つた。それは恰も蟻と蜂の社會と少しも異ら無かつた。いやそれが文字通りの家族國家で無いにしても、その憲法に於ては、主權は常に母長であり、父長であると云ふ理由によつて說明されて來たものであつた。エヂプトに於ける『パロ』の神權繼承法の如きがそれで有つた。それが、近世紀になつて、レネサンスの感化と新教の勃興と共に、著しい『我』の目醒めが有つて、古代希臘共和國に於てすら見出し得なかつた民主思想が、カルヴヰンや、クロムエルの力によつて歐洲に流布せられたものである。卽ちカルヴヰンや、クロムエルの力によつて、家族國家は全く倒れて、北米合衆國の憲法に現れて居る樣な概念的國家が現れることになつた。そして之が人道派の裏書きする所となり、フランス革命となり、新しき意味に於ての國家意識を構成するに至つたものである。

然し不幸なことには、この概念的國家は家族國家より抽象的なものであり、空漠なもので有つた。勿論『我』の凡てを解放した積りで有つたが、『我』を何によつて國家に代表せしめるかに就て全くその方法を知ら無かつた。然しその時に丁度產業革命が有つた爲めに、この抽象的國家思想は、何等訂正を見ること無くして資本主義の中に吸收されてしまつた。と云ふのは、資本主義的支配力と云ふものは、嘗て家族國家に於て見なかつたもので有つて、家族國家に於ては、金が有るからと云つて、威張り得るものは一人も無かつた。それは或點に於ては、人格的（一部分で有るにしても）支配のある所で有つた。然るに、レネサンスと新教に發生した抽象國家は、平等權を人民に認める點に於て、血統によれる特權階級を認めるよりか、金力によれる特權を認める方が遙かに、平等に近いと考へたものであるし、また金力階級は、抽象國家に壓迫を續けたもので有るから、此處に普遍性を帶びた金に參政權を委ねることとなつた。そして租稅の高によつて、上院下院に代表者が送られることとなつた。

貨幣國家出現せる理由

即ち、金が抽象的人格を代表し得ると云ふことは人間が嘗て考へも及ば無かつた點で有つて、高級の産業組織を有つた、或特殊な文化の型に這入つた人類社會のみが考へ得ることである。

考へて見よ、私が一億圓手形の所有者だとする。そして野蠻人にその手形を見せて、この手形一枚ありさへすれば、私は日本の男爵にもなり得れば貴族院議員にもなり得ると話すと彼は信ずるであらうか？否彼は私を笑ふであらう。それは一枚の紙片の權利で有つて血統の權利、武力の權利で無いと云ふことを。然し實際新教とレネサンスの導いてくれた近世國家はこんな所へ我等を導いたのは實際であるのだ。それは紙片の權利でありそれは恐ろしく文化した進化の袋小路に行詰つて居る特權者の抽象國家と化してしまつたのである。然しその新しいことに於ては何者がその右に出づることが出來やうぞ。紙片の附與する權利、銀行の保證する權利、これが今から五百年前に世界で想像し得たことであらうか、近世國家は此點に於て誠に新し味を持つて居るのである。

然し忘れてはならぬ、この新しき國家組織も決して裏面に動く『我』の呼吸無くして發生し無かつたと云ふことである。紙片の權利も要するに「我」を完全に國家に代表せしめる方法を充分に發明し得なかつた爲めに起つた窮策で有つたのである。紙片にさへ權利を附與した國家は絶大な國家であつた。それは勿論幼兒にまで權利を附與すべき筈で有つた。然し、發生の途上に有つた意識國家の組立法を發明し得なかつた人々がこの金と云ひ、紙幣と云ひ手形と云ふ社會的平等性及遍在性を帶びた物に、最も極端に政治に於ける平等權を代表せしめんとした一種の窮策であるとは云へ、思ひ切つた政策で有つたことは認めねばならぬのである。

三　國家の主體と主權の進化

アナキズムの誤謬

金によつて代表せられる參政國家は破天荒の革命を遂げたことは事實である。然しそれが皮相的のもので有つて人類進化の邪となつたことは爭はれ無い。それでアナキストの連中は今日の國家組織を根柢より顛覆せんとし、レーニンの如きは、紙幣政治と特權國家を根本的に否定して、無産者專制を國家の基底に置かんとして居る。然し之等は皆行き過ぎた考へで有つて、國家組織の進化から考へても決して正當な判斷と考へることは出來ない。アナキストの批

判に就ては私は此處で述べる暇はない。

然し極く割引して、アナキズムの最純なるクロパトキンや、」トルストイのアナキズムを採るにしても、そのアナキズムは、『愛は法律を知らず』と云ふ道德的無政府主義とも云ふ可き、」中世紀末より近世初頭に流行した、アンナノミニアン（無律法主義者）の再興であることは否定することは出來ない。その云ふ所に面白味がある。愛に權威と主權の爭奪のある筈が無い。そして近世國家は權威と主權を或種の特權能力に位置せしめるから、必しも愛より出發したものでは無い、それで、意識國家を要求する或種の個性には、今日の國家――卽ち習性國家形體――の因襲に滿足が出來ないのは、實に同情すべき點がある。

然しそれかと云つて、社會性なるものが凡て自意識的なものであると云ふことは、社會性の極く一小部分であるから、成長しつゝある社會性に向つては、また、意識國家を凡てに於て要求することが無理であるのだ。

社會の成長性と綜合性

社會性が目醒めたのは、人類が初つてからあることだ。相互扶助の精神は生物からもう既に存じて居た。然し、同類同心の吸引力を以つて集つてくると云ふギデングスの同化說を人類社會が自覺する前に人間は、計り得ざる、無意識的超自然力が人類の成長を社會性の方向へ衝き出して居るかの様に感ぜざるを得ないのである。それをイエス・キリストは『神の國』と名をつけて居るが、之は人類の心理生活が、一個性の完全を以つて與へられずして、有機體が四百兆の細胞を以つて人體を組織する如く、心理性の社會的分化は人格がまるで破片になつて、天地に蒔き散らされて居るかの如く、人類趨異の階梯に於て、一人として、神として完成した人間が存在し無かつた。一人は宗教的天才で神に近いことを示現したが、彼は必しも宗教の範圍を出無かつた。一人は音樂に於て、神に近かつた。一人は繪畫に、一人は科學に、一人は勤勉に、一人は貞節に、一人は預言に、まるで眞理と人格は拾ひ集め無ければ完成し無いかの如く分化して行つた。それのみならずこの分化は時間的に成長することを待たねばなら無かつた。そしてこの時間的に成長する社會的人格と、綜合せねば神に似た人格が完成し無い社會性は、たゞ『愛は法律を否定す』と云つた種類の簡單な哲學では解決し得られるものでは無い。

社會に於ける愛の使命

この社會人格の成長性と綜合性は、その宇宙的保存力によつて、初めは家族的國家の形式によつて保護されて來た。卽ち、征服者と云へども、もし彼

にして、この成長性と綜合性を庇護する能力ありとせられた場合には變則ではあるけれども、民衆は之を許容した。之はユダヤ人が王を選擧した場合に於ても、また近世國家が王を選擇する場合に於ても、よくこの邊の心理が現はれて居る。これはこの成長性と綜合性が、文化の或階梯に於て神秘の色彩を持つて保護せられる爲めには必要な形式と方法で有つた。そして今日に於ても或所に於ては、實際この形式と方法の必要な所が有ることは否むことは出來ない。即ちアナキストの形式に於ては全然この成長性と綜合性を個性の中に求めんとするものであるが故に、その哲學の基底に於て、愛なるものゝ出所さへも疑はねばならぬことになるのである。私から之を云はせば、愛とはこの成長性と綜合性に對する庇護本能にしか過ぎ無いので、トルストイの樣に、主我的愛（或は個人主義的愛と云ふが善からう）を說いて、もし敵を愛する愛が完成し、女を人格として愛する愛が完成して、肉的に子を産ます慾望が無くなつてもそれで、道德的完成が果されるならば、それで人類としては滿足であると云ふ風に考へるならば、それは非常な愛に對する謬れる考を持つて居るもので有つて、愛とは要するに、この社會性の成長力と綜合力に對する神秘的本能そのものを意識的にまた無意識的に自覺し、擁護することの外に、何等意味無いことである。

即ち社會人格の成長性の爲めには、家族國家の形式を取ることもあるし、その綜合性の爲めには、立憲國家の形式を採ることも爲つたのである。社會は要するに未完成のまゝ時間の中に推移して行く。

社會は新しいものである

然し此處に忘れてならぬことは、社會人格が明瞭に自覺されて來たことは、最近百年間であると云ふことである。それは近世科學の賜である。汽車と電車と電話と電信によつて社會人格の綜合性は高まり、各種産業の科學的發達と共に社會人格が一種深く神秘なものであると、自覺されて來たのである。それまでは、社會學と云ふ科學も、社會主義と云ふ主義も、社會と云ふ名詞さへも無かつたものである。最近社會科學の進化は全く、新社會が出現して來たからである。即ちこの社會性の爆發は全く、生物學的に云つても不可思議な現象で有つて、人間の外に、そんなに入りこんだ社會性を持つて居るものは無いのである。

それであるから、近世の國家組織が變則なものであるにしても、私はトルストイや、クロパトキンや、スチルネルや、バクニンの樣に、その社會組織の根柢そのものを否定する權利は全

く無いと思ふのである。どんな社會組織でも、無いよりましである。それは成長と綜合の秘藏庫たり得るものである。勿論あるものは云ふであらう、否、それは成長と綜合を殺すものであると、そして近世資本主義國家に於て殊に然りであると、

資本主義國家の使命

然し私は此場合に於ても資本主義國家の爲めに少しく辯解したい。それは私が既に述べた通りで有つて、資本主義國家と云へども、それが、成長と綜合の社會人格の爲めに組織されたものである以上、凡ての場合に於て罪惡のみに充ちて居るとは云ひ得ないと思ふのである。（唯物社會主義者の或るわからぬ連中はいつでも此點を宗教的信仰を持つて說く）然しマルクスも資本主義國家を社會主義國家への發展の一階梯として居る以上、そして彼によれば資本主義國家を通過するより外に、社會主義國家に到る筋道が無かつたと考へる以上、資本主義國家を拔きにして、家族國家より一足飛びに、社會主義國家へ飛び得ないものであると考へるより外に理屈は無い。この論理――マルクスの經濟的運命說――より行けば資本主義國家も最善では無いが、何かの使命は持つて居たとせねばならぬことである。

實際私は、血統と封建制度によれる家族國家を倒し得たものが、資本主義國家だとすれば、それが、文化に對する貢獻だけでも、感謝せずには居れぬのである。また實際、資本主義國家、今日我等が享樂して居る資本主義國家は、封建國家に比して、どれだけ民衆に幸福を與へて居るか比較にならぬ程である。汽車と、電車と、電話と、無線電信は、兎に角資本主義が與へてくれた。之れだけでも、資本主義國家に感謝すべきことは澤山ある。封建時代には、土地と勞力は凡て國有で有つた。然し資本主義文化は、土地と勞力を個人に返してくれた。そして金だけを資本主義的專制主に卷き上げた。然し、金は奴隷を解放し、農奴を開放し、凡ての點に於て、社會性を滑らかならしめた。社會主義國家と云へども、その社會性を或意味で圓熟ならしめた點に於て資本主義國家に感謝せずに居れるであらうか。此點に於てマルクスが、社會主義國家に先き達つに資本主義的文化ありと階梯的に考へたのも無理からぬことである。

成長する文化と國家

然し、文化は成長する。資本主義國家の缺點はこれから始まる。資本主義は貨幣で天下を統一してしまつた。社會性の綜合は貨幣によつて完全に連絡せられた。

然し貨幣の表示する所は、既に先に述べた通り、人格的のも

ので無かつた。一種の崇物症的に囚れ易い表象で有つた。不幸にして、近世社會とその國家組織は、遂にその病根に捕はれて身動きも出來ぬこととなつた。ベルグソンが云ふ。甲虫と蟹は進化の爲めに、キチン質の外皮層を以つて自らを裝ひ、自己防衛につとめたが、あまり外皮に重きを置き過ぎて、遂にその甲羅の爲めに囚はつたと。資本主義國家の貨幣によつて、社會性を統一したことも、丁度このキチン質の蟹の甲羅によく似て居る。それは社會性を保護する點に於て、家族國家が崩壞した後には誠に妙を得て居た。然しそれはキチン質と同じく、同じ細胞から産み出したもので有るが、皮膚の上層の置かれた時には既に死物で有つた。

蟹は甲羅を脱ぐ時に、先づエンチーム液を出して全身を軟かくし、一度生死の域を通過して、脱皮せねばならない。そして貨幣で固めた、資本主義國家も、それが資本主義文化を保護する爲めには非常に便利なもので有つたが、それ以上、成長する爲めには——そして社會性には成長が主要部分であるから——この貨幣と云ふ死物のキチン層を脱皮せねばならぬことになつた

貨幣文化の脱皮

で、貨幣文化は使命が有つた。それを脱皮するが今の問題になつて居る。それで、たとひアナキストが、この貨幣文化の破壞を叫んでも、問題が成長にあるのだから、我等はたゞ破壞にのみ心を碎くことを許され無い。資本主義國家をエンチームで脱皮する方法さへ考へ出せばそれで善いのである。

既に考へて來た通り、社會性が、常に成長するものであるものであるが、家族國家より資本主義國家に進化して、どんな風に社會に變つたかと云ふに二方面に於て著しく變化したのである。

第一は國家の中に國家が發生したことが一つ、また第二は所有權的國家即ち、空間的國家より、生産的國家即ち時間的國家に移りつゝあると云ふことである。

國家中の國家

國家中の國家の發生に就ては、既に世人がよく注意して居る樣に、最近に於て、社會性の著しき發達の結果、一人の資本家と企業家は、昔一人の大名が考へも及ば無かつた、大事業を起し、また昔の大名が考へも及ば無かつた勞力を雇用し、收用する。工場に、農園に、海上に、地下の坑道に、資本家は、國家內の國家を支配するのである。その爲めにストライキ起り、ボイコット、ロック・アウト（締出）サボタージ、と國家內に於ける國家に反亂が起る。之將に昔の內

亂以上であると、米國前大統領タフトが云ふて居る。一つのストライキに二億圓、三億圓の損害は決して珍らしくは無い。一九一六年夏、紐育の針織職工六萬がストライキした時には、資本家が受けた損害だけでも二億圓に近いと聞いた。工場内には政府の手は延びず、工場に於ける一年の負傷は大戰爭以上である。全米國に於て一年に二百五十萬件の負傷ありと云へば、日露戰爭に幾十倍する負傷率である。かうして今日の國家組織は最早や近世の產業國家に不適當なものとなり終つた。

英雄の凋落

更に、昔の國家は土地の上に執着して、アレキサンデル、豐臣大閤、ヂンギス・カン、ナポレオン、シーザー、ハンニバルを英雄と云ふものにして終つたが、新しき國家はもう空間と土地に執着し無くなつた。

今日の國家はもう、空間を離れて、時間の上に延び上らんとして居る。即ち土地經濟の國家より、工場生產の時代に這入つて來たのである。即ち空間は狹くても化學的機械的生產によつて、時間的に發展せんとして居る。即ち、廣大な土地よりも、エヂソンと、スタインメッツを所有する文化の方が更に貴いものとなつた。即ち、所有權的國家は、生產權的國家に成長して居るのである。

即ち今日までの國家は、六法全書を作り、その解說と註解と應用とを製造する國家で有つたが、今日の國家は、新しく工場法と勞働法と、賠償法と、國家保險法を作つて、凡て生產生活に於ける時間的保證を國家が與へねばならぬことになつた。

レニンの誤謬

それで、レニンは空間的國家に見切をつけて時間的國家組織に移る可き準備をして居るのである。然し彼の場合に於ては、その經過を自覺し無いものであるから、所有權國家より時間的生產國家に推移すると云ふべきものを、無產者專制の時代を來らしめると云ふ恐ろしい名詞を使用して居る。

つまり、今日の貨幣國家に於ては、キチン質が團結した爲めに、社會人格の成長に適し無くなり、國家内に國家が發生し、所有權國家に屬する人々が、自己の全く關知せざる生產者社會の立法をすると云ふ不都合なことになつて居るのである。此處が、近世資本主義國家の危機と云ふ可き所である。

或人々は心配して居る。資本主義國家が倒れると、どんな不都合な國家がその次に現れるであらうかと、然しそれは少しも案ずるに及ば無い。それは生產者に適する時間的國家を創造すればそれで善いのである。

四　時間的生産國家の運命

社會によれる社會の進化

然らば生産的時間上の國家と云ふものはどんなものであるか、それは、貨幣によつて代表せられざる社會組織で有つて、人格それ自身の意識的結合によつて、成長と綜合と分化を保證し、社會性によれる社會人格の進化そのものを信ずるものである。

社會人格は空間に投げられた砲彈の樣なもので有る。その砲彈の中には多くの榴散彈にも比すべき個性がこめられ、その個性の綜合によつて、社會的人格を完成し、或進路の曲線を畫きつゝ、時間的に成長し居るのである。我等にその終點は見え無い、然しその彈道の角度と方向は進化史と文明史的傾向によつて略想像がつく。社會人格は要するに成長し、變異して居るものである。社會性に不變の範疇が有りとすれば、それは時代的に變異して居ると云ふことと、成長しつゝありと云ふことの範疇である。それで主權の所在地は常にこの成長性の上に置かれねばならぬ。卽ち、この成長性は、社會人格の破片である個人より、社會性そのものに移り行き、非人格的なものに置かれたものが——血統とか、爵位とか、位置とか云ふ——純粹の人格者に移り行くものであるのだ。卽ち、主權とは時間的に成長する社會人格にあると云ふて善いのだ。

成長者は生産する。それで近世國家が生産とその資本に注目して來たのである。

マルクスの資本論と新國家論

マルクスが資本を固定した土地の上に求め無くて、流動する金融の上に發見したことは大出來であつた。卽ち産業革命の初頭に於て、最初に勝利を得たものはこの流動性の融通物で有つたのだ。生産者の人格は時間的に變異することに於て、金融機關によつて不完全で有つたけれども辛ふじて表示し得るとは可能で有つた。教員も、電信技師もその能力を貨幣價値で賣り、そして他の價値を貨幣で買ふた。時間的に通用し得る貨幣は便利なもので有つた。

人格價値の復歸

然し人格者は、人格者として表象價値に換算されること無くして直に社會人格に沒入する必要が起つた。それが、貨幣文化の專有者と、人格運動の社會價値を信ずるものゝ爭鬪を初めた理由である。

卽ち、人格運動者は、人格の結合卽ち組合運動を以つて直に國家の單位（ナシヨナル　ユニツト）としたいと考へるのである。今日では千人の人格は國家の單位では無くして、千人の人格を使用する百萬圓の資金

が人格以上の價値として、國家組織に貢獻することになつて居るのである。

そして、この人格者を國家が單位として認め無いのみならず、今日は反つて、これ等の人格者が貨幣によつて壓制され、束縛され、拘禁され、賃銀奴隷として苦しめられて居るのである。

そこで、國家改造の第一歩は、生產者をこの資本主義より解放することである。然したゞ、資本主義より解放すると云へば、マルキシズムで止るのであるが、我等は更にそれより一歩を進めて、新國家の新組織を考察する必要を感じるものである。

五　國家學へ輸入したる時間の問題

空間支配の國家の破綻

時間的生產國家に於て特權を有するものは第一生產者である。今日の資本主義國家に普通選擧が來ても、それはアメリカの普通選擧の樣なもので有つて、生產者を益することが實に僅かである。アメリカには既に八十有餘年普通選擧が有つた。然し、私が先に述べた通りに、一國家内の國家の組織により、市民が工場外と工場内の二重生活によつて、殆ど普通選擧によつては利益を受くることが無いのである。それは、今日の政治なるものが空間的支配に向つて居るので、時間的生產に對しては何等の意見も無く、その世界に對しては全く資本主義者に之を委ねて居るのである。それで、空間支配のみを考へ物質界の政治のみを考へて居る舊式政治國家であれば、とても人格を國家組織に組み入れることは出來ない。此處に國家的破綻が有る。ユークリッド幾何學が、空間のみの幾何學を立てゝ、近世投影幾何學の時間的工夫に考へ及ば無かつたと同じ樣に、アリストートル以來今日までの政治學が、全く行き詰つて居るのは此點である。

科學の時間函數と政治學と時間

それで、今日の科學が時間的函數をその中に組み入れる如く、政治學、又國家學に於ても、時間的に生きる人格を通じて生產し得る、生產者組合を基準として、國家を改造せねばならぬのである。それには、今日の普通選擧によれる社會民衆議會は頗る亂雜なもので有つて、納稅する理由によつて貸座敷の主人も議員に選ばれ（神戸市會には定員四十八人の市會議員の中に二人まで貸座敷業者である）高利貸業者も、小作人いぢめの地主も、政治ゴロも、皆議會に出る。そうして、消費者のみを代表するもの、又は、生產者を略奪して私腹を肥やすもののみが、今日の政治を支配することになるのである。即ち今日では有產者階級と云ふ

よりか、消費者階級が生產者階級を支配して居る樣なことになつて居るから、いくら生產者が普通選擧の投票權數で爭ふても共基準が違つて居る爲めに、改良すべき所は遂に改良せられずして終るのである。

國家の單位としての自治體

それで、もし普通選擧を有効に利用せんとするならば、國家の單位(ユニット)を單に今日の樣な皮相な、自治體と稱する空間的所有權支配の多數決議會に置くことなしに、時間的生產權を支配する人格の組合そのものを單位とする必要がある。今日の自治體と云ふのは一小部分の自治で有つて、生產過程は凡て資本家に委ねてあるのだから、それがなんで自治體と呼ぶことが出來やう。それは消費者專制主に不都合ならざる範圍に於てのみの自治體で有つて、人格の發展卽ち生產を基礎にした自治體では無い。

それでもし純粹の自治體を組織せんとするならば、それはどうしても、生產者組合を基礎とし、工場を空間的單位とし、工場立憲から始めてかゝらねばならぬ。

六　工場立憲と產業立法

英國の產業議會

工場立憲から、生產者を主體とする縣會、民衆議院を作ることになると、それはどうしても、英國のJ. I. C. 卽ち Joint Industrial council の形を採つて進化して行かねばならぬ。それは、勞働組合を基礎として、資本主義者に工場立憲を政府から強ゐたものであるが、一九一九年四月四日全英產業議會で全會一致で決議したものなどは餘程參考になるものである。それによると產業議會に於て決議すべきことは今日の議會と衝突せざる何事にても決議なし得ることになつて居り、それは直に實施せられ得ることになつて居る。

英國產業議會は四百名から成立して居つて、二百名は資本家側より選出され、二百名は勞働組合より選出されることになつて居る。そして決議は凡て別々に資本家と、勞働組合とによつて決議（多數決による）され、資本家側と勞働者側兩者の贊同を得たものは直に實行せられると云ふことになつたのである。

卽ち英國は今日、三院制度を採用して居ることになる。卽ち上院と下院と一九一九年四月四日に成立した產業議會との三院である。然し之に對しては、ロバアト・スミリー を頭領と仰ぐ鑛夫組合を始め、紡績組合、鐵道從業者組合が微溫的として排斥して居るので、一九一九年一月以來、八月に到るも終熄に至ら無い、英國に於ける、勞働不安があるのである。

然し、組合派（ユニオン）の連中の激烈な批評が有るにしても、英國の第三議會の今日までに爲し遂げた事業は決して小さい事業では無い。それは勞働時間を一週四十八時間に制限することに成功し最低賃銀制度を各種工業に確立し、（特別委員が三ケ月毎に之を改訂する、之は産業議會の協賛を經て、勞働大臣が任命するものである。）

英國産業議會の修正

然しこの産業議會が、英國の第三院となり資本家の支配を根柢より顛覆し無いと云ふ理由によつて、勞働組合の激烈な痛撃を受けて居るが、もしも之の痛撃を免れんとするならば、先づ上院下院を一つにして消費者議會を代表せしめ、第三院即生産者の産業議會を以つて對立せしめ、そして、行政機關としての政府及内閣をその上に置くとするより外に方法は無いことと私は思ふのである。此立法機關の要素に就ては、大正八年八月の雜誌雄辯に『生産者議會の要求』と云ふ論文で論じて置いたから、私はもう此處では述べる必要が無いが、此論文に於て、私は社會性の成立の要素から國家を論じ、その單位と主權所在地を説いて、新しき國家なるものが、時間的生産樣式を基礎とする人格組合を單位とし社會人格を主權として、成長の變異性の中に適應し得る國家組織を形成せねばならぬと云ふことを説いたのである。即ちこの時間的に成長すべき國家組織は、勞働組合を基礎とせずして決して成立し得るものでは無い。

七　生活の政治化、政治の生活化

人格の自由と國家

然らば、その新しき立法議會に於ては何を議するかと云ふに、今迄の樣に特權階級の所有權に關する立法に就てでは無くして、凡て創造と創作と生産に關する時間的立法に就てゞある。

然し、新しき國家組織の喜びとするところは、たゞ立法と司法と行政がより多く社會化したと云ふことだけでは無い。それが凡て動的（ダイナミック）に愉快に勞働し、作業する人格。主體が自治體の表面に顯れてくることである。即ち、貨幣と稱するキチン質の死物を脱して自由に人格が延び上り得る機會が與へられることである。

勞働組合の文化的改造

然し、そこで私は今日の勞働組合に注文が有る。今日の勞働組合が、その人格主體としての自覺と準備が充分あるかと云ふことである。私は必しも而か思は無い。たゞ、賃銀値上げと、時間短縮にのみ腐心して、

時間的に創造する人格主體としての事業を主眼としなければ、遂に生產者議會も再び貨幣國家に墮落せねばならぬことになるのである。で、その爲めには、勞働組合は、もう少し宗教的藝術的又科學的色彩を帶び來り、中世修道院に於て、勞働と、宗教と藝術と科學が統一せられた如く、より多く人格綜合の機關とならしめる必要がある。そうなると、長時間閉じ込められて居る工場が、反つて研究室となり娛樂室となり、嬉びとなり、樂天地と變るのである。そうして天國はもう地上に來たものと考へても善いのである。

如斯して生產者が、生活そのものを政治化し、政治そのものを生活化することによつて不生產的な殺戮的軍隊主義や、殖民地略奪の帝國主義は國家より逃げ出し、今日我等が經驗する工場内と工場外の二重生活より脫出し得ることになるのである。かくて初めて國家組織は、社會機能を全くし、國民經濟なるものゝ意義が、社會人格の成長に對する豫備行爲で有つたと云ふことが初めて知覺せられるのである。

總同盟罷工か
宗教的悔改か

では、どうしてこの新組織に推移するかと云へば、それは革命でも、階級爭鬪でも無い。一つの革命が必要だとすれば、それは知識革命である。私は暴力の革命を信じ無い。

生產者組合を基礎とする國家はまたサンヂカリズムの國家の樣に、生產者專制の世界で有つてはならない。それは、人間の生產を最大事業と考へ、人格を政治の基底と信ずることによつて消費者階級に立つ人々に向つても彼が人間であり、人格である以上、專制を敢てすることが出來ない。それで、私は新組織への推移は、たゞ組織あるのみと考へる。然し。貨幣主義者が、この人格運動を否定するならば、それはたゞ最後の手段として、　　　道は無いと思ふ。然し、この　　　行く道には、多くの組織と連絡と、知識的準備が必要であるからして、　　　　この進捗は凡て、好意と、愛と、寛容と、宗教的節操を以つて臨まねばならぬ。この意味に於て、私は新しき國家運動は、たゞ一個の經濟運動、社會運動に止らずして將に一種の精神運動であると考へて居る。即ち私は、　　形式で來る新社會よりか、宗教革命によつて生れた　　國の夢を見て居るのである。それは悔改めの形式で來た。即ち今日までの唯物症的文化より悔改む可き精神運動が盛んになれば、新しき國家は、宗教的情緒を以つて芽を吹く

のである。それがより詩的であり、また美術的である。か？ 我等はこの二つの道の何れかを選ぶ可き岐路に立つて居る。今は我等には産みの難みの日である。

（八月十四日）

(9) 社會政策の分岐點

農商務省參事官　河合榮次郎

一）勞働問題の民主化乎專制化乎

我が工場法の大正五年九月一日に於て實施せらるゝや時の政府は之を以て社會政策的立法の先驅なりと稱し日本の社會政策は此に始めて發途に就けりと稱したり。當時余は竊に疑ひて思へらく之果して社會政策的立法なるや單純なる一行政法規たるに過ぎざるや否やと。工場法を以て衞生保健の爲にする行政法規たりとすると將又社會政策的立法たりとするとは假令法規自體の內容は同一なりとするも其の實施の意義に於て重大なる差異ありとす。若し之を以て衞生保健の爲の一行政法規たりとせば之が實施は我國法制史上に於て又勞働史上に於て敢て特筆すべきの價値なしと雖も若し之を以て社會政策的立法なりとせば之が實施は我が國法制史上に於て優に一新紀元を劃したるものと云ふべく日本の政治は此に一飛躍を爲したるものと云ふことを得べきなり。當時政府は社會政策を實施したりと稱したるも果して、現代社會政策の眞諦を理解し其の思想的背景を捕捉したるや否や疑はしく、工場法を實施するに際し、之を以て勞働者階級の經濟的境遇を改善し社會的公正の實現を圖らんとしたりとは解釋し得ざる所尠からざりしなり。

千八百二年英國に於て始めて工場法の制定せらるゝや其名稱は「徒弟の健康風紀に關する法律」と稱し主として工場地方に於ける衞生狀態を顧慮したるが爲めに制定せられたるものにして千八百三十九年プロシアに於て始めて工場法の制定せられたるはライン州に於ける徵兵司令官の提議に基きたるものにして工場地方に於ける壯丁の體格の劣惡なるが爲に工場法規を制定

して勞働者の健康體格を改善せんと企圖したるものなりとす。英獨に於ける工場法制定の理由かくの如きものあり而して十九世紀の前半は個人自由の學說の旺盛なりし時なるを以て出來得る限り國政の範圍を狹隘ならしめ以て個人の自由に干涉せしめざらんとせり。かくの如き時代に於て制定せられたる勞働法は僅に警察上の理由によりてのみ之が制定を認められ其の立法の根據を警察權に求むるの外其の途なかりしなり。此の時代に於て制定せられたる勞働法は後代の勞働法の先驅を爲したるものにして固より現代社會政策的立法の萠芽と目するを妨げざるも而も其立法の趣旨に於て又其の立法者の思想に於て甚しく後代の立法と其の揆を一にせざるものなるを認めざるべからず。我が工場法も亦社會政策的立法と稱するよりも寧ろ警察的法規なりと稱するを妥當なりとすべし、當時の我が國情と政府當局の主義思想に顧みるに之を以て社會政策的立法なりとするは除りに飛躍に過ぐるものあればなり。

ダイシー教授が名著「英國に於ける法律と輿論」に於て曰へるが如く勞働法規は其の制定の當初に於ては寧ろ保守黨の貴族富豪の努力に俟つ所多かりしものにして是等の政治家は其人格高潔にして同情心に富み勞働者の爲めに一身を挺して奮鬪したる人々にしてその勞働法發達の上に及ぼしたる功績は永く忘るべからざるものなりと雖、元來其の思想は保守的にして政治上の立場は寧ろ自由進步の運動に反對したるものなりとす。此に我等が忘るべからざるは勞働問題は一應保守的思想とも競合し得るものなることにして、其の思想人生觀の全く背馳する學者政治家と雖暫らく勞働問題なる大旆の下に於て提携し得るものにして勞働法規も亦各種の動機思想の下に之を制定し得るものなりとす。此點は本邦現時の勞働問題に就て特に然るを覺ゆ今や我國朝野を舉げて勞働問題を叫び社會政策を論ずるも其思想と人生觀とを全然異にする人々は等しく工場法を改正し勞働保險を實施し勞働調停を案出し失業問題を解決せんとしつゝあり之實に雜然として吳越舟を同じくする觀なくんば非ざるなり。

然れども吳越は暫らく舟を同じくするも來るべき所に來らんか當然舟を異にせざるを得ざるなり、名は等しく勞働法規なりとするも其實際は之が根柢となるべき主義思想によりて多大の差異を生ぜざるを得ず、我が工場法が果して勞働者階級の幸福の爲めに制定せられたるものなるや將又警察的理由に依つて制定せられたるものなるやは早晚之を明瞭にせざるを得ず。又今は勞働問題なる名目の爲めに各種の人々は雜然として集合すと

雖やがて思想主義を異にするものは袂を別ちて各々向ふ所に進まざるを得ず、而して我國今や勞働問題の論議大に進みて實際の施設又進捗したるを以て早晩此の分岐點に立ちて呉越舟を異にすべきの時來るべし、此の分岐點は八時間問題にも非ず一週休日の問題にも非ず又幼年工廢止にも非ず徹夜業廢止の問題にも非ずして實に勞働組合に對して如何なる態度を採るべきやにありとす。勞働組合の問題に到達して始めて各人は其思想政見の異同を明瞭にして去就進退を決せざるを得ざるべし、我が國が果して既に社會政策的立法に着手したりしや否やは此の問題の解決によりて決せらるべく本邦社會政策の分野は此に始めて明白なるべし。　我國が開明專制を以て勞働問題に臨むべきか將又民本主義を以て之に對すべきか、政治界に於て既に略解決せられたる此問題は今や勞働問題に就て吾人の解決を促さんとす、日本國民の勞働政策の分岐點は實に此の一點にありと云ふべし、之れ勞働組合の問題が我國民文化史上に重大なる所以にして又我が勞働史上特筆すべき所以のもの職として此に在りとす。

二　勞働契約の缺陷と組合組織

抑々勞働者は資本家と對等の關係に立つものにあらずして甚しく不利の境遇に在るものとす。蓋し勞働契約の締結に際しては二つの條件を必要とす。第一は市場に於ける取引に對する明敏なる頭腦手腕にして第二は契約締結者が其の背後に經濟的餘裕を有せざるべからざることなりとす所謂市場の取引には契約當時に於ける經濟界の狀況及び將來の豫測、一般勞働の需要供給の關係、市場に於ける勞働賃銀の相場其他契約の締結に必要なる一切の豫備的知識を必要とするものにして資本家は是等の事情を調査する機關を有し且教育あり手腕ある人物を具備して取引の衝に當らしむることを得べしと雖勞働者は是等の豫備的知識を缺き且取引の應酬に熟せざるを以て不利なる條件の下に勞働契約を締結せざるものとす。之に加ふるに資本家は經濟的餘裕あるを以て勞働條件にして已の意に滿たずんば之を容れず再他の勞働者を求むることを得べしと雖勞働者に至りては一般に貧困に瀕し緊急に職を求めざるべからざるの立場に在るを以て遂に契約締結を急ぎて不利なる條件を甘受せざるを得ざる窮境に在るものとす。

勞働者の契約締結上に於ける不利なる條件は勞働者特有の境遇より由來するものにして現經濟制度に於けるが如く勞働者と資本家と互に個々獨立に契約を締結するに於ては永久に勞働者

は此不利なる境遇より脱却して自己の生活の向上を圖ることを得ざるものとす。

十九世紀の初め自由民權の說唱道せられたる當時に於て各人の自由は神聖にして犯すべからざることを認め又法律に於て一切の人民が絕對に平等なることを認め、之を以て社會制度の弊害を芟除することを得ると思ひたりしも、勞働者の有する特殊の弱點は決して資本家と自由對等に立つことを得しめずして、名は自由平等なりと雖も其實に於て自由平等の特權を有せしめざりしを以て勞働者の境遇は日に不自由と不平等の地位に沈淪して近代文明の與ふる恩惠に永く浴せず社會の幸福の埒外に置かれたるを以て之が生活の改善を庶幾し勞働者階級の向上を圖らんとするには進で勞働者に特有なる不利なる條件を補ひて名實勞働者をして自由平等の立場に置かしむるが如き制度を認めざるべからず、此に於てか勞働者をして組合を組織せしめ其の多數團結の力に依りて不利なる境遇を補ひ以て有利なる勞働條件を獲得せしめんとする運動生せり之れ即ち勞働組合なりとす

既に勞働者の組合を認めんには更に資本家の組合を認むるは公平に合する至當の順序と謂はざるべからず。此に於てか勞働者と資本家は互に個々獨立に契約を締結することなく勞働組合と資本家組合と相對して組合間に於て勞働條件を協定し組合に屬する一切の組合員は之が適用を受くるに至り往年の單獨契約に代ふるに所謂集合協約 (Collective bargaining)を 出現せしむるに至れるものとす。

等しく勞働組合と謂ふも其種類決して單純に非ず之を大別すれば次の三種に屬せしむるを得べし、第一は職業的組合(Trade Union) にして此場合は特定の職業に從事する勞働者組合にして例へば米國に於ける鐵道機關車運轉手の組織する Brotherhood of Locomotive Engineers の如く單に鐵道の機關車運轉に從事する勞働者に之を限定するものとす。第二は產業的組合(Industrial Union) にして此の場合は敢て特定の職業に限定することなく特定の產業に關連する勞働者は一切之を網羅するの趣旨にして例へば米國の石炭坑夫の組合(United Mine Workers) の如きは必ずしも石炭の採掘に從事する坑夫に限定せらるることなく炭坑中に於て勞働に從事する者は勿論地上炭坑の附近に於て之と關連せる勞働に從事するものをも包含するものとす。第三は勞働者組合(Labor Union) にして特定の職業又は產業に限定せず苟も勞働に從事する一切の勞働者を糾合するものにして彼の米國の「ナイツ、オブ、レーボア」(Knights of Labor)

の如き又米國勞働聯合會 (American Federation of Labor) の如き蓋し此種のものに屬するものとす。勞働組合の種類此の如きものあると共に組合の採用する政策も亦必ずしも同じからず。第一及第二の組合は略類似せりと雖第三の組合に至りては單に特定の職業及産業に限定せられず勞働に從事する一切の勞働者の名に依りて組織せらるゝものなるを以て其の政策は單に勞働條件の改善に止まらず進んで現在經濟制度の根本的批評に至ることあるは蓋し止むを得ざるものなりとす。

勞働組合の種類斯の如きものあると共に資本家の組合にも之に相當する種類あり即ち第一は職業的組合に相當するものにして米國に於ける「ストーブ」製造業者の組織する Stove Founders' National Defense Association の如き之が一例なりとす第二は産業的組合に相當するものにして金屬工業に關係ある資本家の組織する National Metal Trade Association の如き之が一例にして最後に勞働者組合に相當するものは一切の資本家の團結たる Citizens' Alliances 又は Association of American Manufacturers の如き之が適例とするに足るべし。而して普通に「トレード、ユニオン」と稱する場合には單に勞働組合を指稱するのみに非らずして資本家の組合をも包含するものとす故に「トレード、ユニオン」に關する法制は單に勞働組合に關するのみならず又資本家の組合にも適用せらるゝものにして唯勞働者は前述せるが如く已に不利なる弱點を有したるを以て多數團結の力に依りて此の不利を補はんとし組合の運動は夙に發達したるに拘はらず、資本家は斯の如き弱點を有せざるを以て啻に團結の必要を感ずること尠かりしのみならず互に嫉妬競爭し假へ一旦組合を組織するも數年にして解散し永續すること尠かりしが近時頓に勢力を得たる勞働組合の發達に促進せられ漸く顯著なる成績を擧ぐるに至れるものとす。

(三) 勞働組合の職能

今勞働組合の有する職能を考ふるに大體次の如きものあり

(一)經濟市場の狀況に精通し契約の締結に熟練ある代表者を備ひ之をして勞働組合の爲めに契約締結の任に當らしむるものとす斯の如くにして前述せる勞働者の契約締結に關する第一の不利を除くことを得べく經濟市場の事情に精通せる資本家企業家と相對抗して巧に市場の形勢を按排し賃銀其他勞働條件に就て有利なる契約を締結することを得。

(二)勞働者は個々獨立せる場合に於ては勞働條件の不利なるときと雖之を甘受せざるを得ず一定期間を待ちて更に市場に

於ける勞働價格の上騰を俟つの餘裕なきものとす加之一般物品と異りて自勞働の供給を調節すること能はざるも若し多數團結せる場合に於ては一定の基金を積立つるを以て敢て不利なる條件を應諾するの必要なく加ふるに此の如き組合は自勞働を獨占するの傾向あるを以て之が供給を左右することを得べく以て勞働の賣買に當り不當なる競爭を避け有利なる勞働價格を成立せしむることを得。

(三)組合は單に勞働賃銀の協定に就て活動するのみならず就業時間の短縮を要求し其の他衛生上有害にして又危險の虞ある場所には相當の豫防的設備を爲さしめ廣く勞働條件の改善を圖るものにして中には資本家組合と聯合して工場監督の機關を設置し衛生醫術の研究室、病院等を施設するもの尠からず。

(四)勞働組合は豫備基金を蓄積し之を以て同盟罷業の基金とし一朝同盟罷業を爲さざるべからざる場合に於ては其の長期に亙るものと雖も罷業期間中裕に賃銀に代りて生活の費用を支給せしむるものとす。又或る場合に於て相互保險の制度を採用し一定の基金を作りて疾病、傷害、老廢、失業等の場合に於ける扶助金とし以て組合員相互の共保共助の事業を營み、又勞働紹介の事業を行ひて失業者の救濟を爲すものとす。

(五)組合は教育の機關と社交の機關を具備す。新聞雜誌を發行し小冊子を刊行して組合員に必要なる智識を供給し其の精神的向上を圖るものとす。且屢演說會を開催して當面の經濟問題を論究するものにして米國に移住せる外國勞働者は其の公民としての智識修養は全く勞働組合の教育機關に依るもの多しと云ふ。

又組合員及其の家族は一堂に會して和樂を共にするの機會多く和衷共同の精神と組合の團結心とは之に依りて涵養せらるゝこと尠からざるなり。

(六)組合は立法委員を設け主として勞働に關する立法の經過に注意し之に必要なる材料を蒐集して勞働者に對して有利なる立法の通過を圖り不利なる立法に對して其の監督を怠らさらんとす。

以上は大體に於ける組合の職能にして組合は契約の締結若は更新に際し又は契約有效期間中其提出せる勞働條件に對し資本家の同意實行なき場合に於ては同盟罷業又は非買同盟を以て對抗し以て資本家の同意を強制するものとす。斯の如き勞働組合

の成立は一般工業の發達に對して次の如き利益を與ふるものとす。

（一）曩に述ぶるが如く組合は賃銀の增加就業時間の短縮に依りて心身の休養を爲し又精神的生活を爲すの餘裕を得讀書講演等に依りて智識の開發教育に努力するが故に兩者相待ちて勞働者の生活標準を向上せしめ能率を增進し延て一般産業の發達を促進するものとす。

（二）斯の如き勞働賃銀の値上其他勞働條件の改善は勞働力に對する支出を增加せしむるが故に資本家をして勞働節約の機械の發明及び使用を導き之れ側面より産業の發達に刺激を與ふるものとす。

（三）斯の如き勞働團體の成立は經濟市場に一種の安定を與へて資本の自由投資を奬勵助長するの傾向あり分散せる勞働者を相手とせずして一定の基礎强固なる勞働團體あることは經濟市場に平和と安心とを與ふるものとす。

勞働組合に對して資本家の組合は或は勞働者の同盟罷業に對抗して之に讓歩せさらんが爲めに相互援助を爲すことあり或は資本家は其の提出する條件を貫徹せんが爲めに同盟解雇を行ふことあり。又資本家組合にも立法委員と同じく勞働に關する法律の調査其他報告を蒐集して勞働立法の經過に注意を拂ふものとす。又勞働者に關する一種の戶籍簿を調製し勞働者の經歷性格其他の事項に關して互に通告して聯絡を取ることあり。勞働者は之を稱して「ブラックリスト」と云ひ資本家は之を稱して「ホワイトリスト」と云ふ。

（四）英國の勞働法制

今勞働立法の最合理的發達を爲したる英國に付て勞働組合に關する法制の沿革を見るに大體之を三期に分つことを得第一期の時代に於ては同盟罷業の如きは當時政府の認めて以て最有害なりとしたる所にして一ケ月の禁錮及五磅の罰金に處するものとせり又千七百九十九年の組合禁止法(Anti-combination law)は二人以上團結して勞働賃銀其他勞働條件の改善を圖らんとする者は騷擾罪(Law of Conspiracy)を以て之を罰するものとし是等の勞働條件の改善の爲めに爲したる勞働者相互の契約を無效とし此契約に參加したる者は處罰せられ此契約に參加することとを誘惑したる者も處罰せられ其他嚴格なる數條の規定に依り要するに勞働組合を抑壓するの政策を執りたり次で第二期の時代に入るや千八百二十四年禁止令を公布して千七百九十九年の組合禁止に關する法律を廢止し翌千八百二十五年の法律は勞働

賃銀又は物品價格の取定を爲す爲めの集合は不法にあらざることを規定せり此法律は初めて集合協約の權利を認めたるものなれども其の後或る訴訟に於て裁判官は勞働組合は普通法の下に於て營業を妨害するもの(Restraint of trade)なりとの見地に於て組合の爲したる契約を執行することを肯ぜざるのみならず法律の保護を組合に與ふることを拒み其の判決の結果は千八百二十五年の法律の趣旨に反するものなりしかば此後勞働者の騷擾相踵ぎ遂に千八百五十九年の法律に依りて單に勞働賃銀就業時間を協定し又は平穩なる方法に依りて勞務を去ることを勸むることは妨害罪に問はるることなき旨を規定したりしが此の法律も亦裁判所の解釋に依りて勞働者に不利なる判決を下すこととなりしかば遂に千八百七十一年刑法改正に關する法律(Criminal law Amendment Act)に依りて千八百二十五年及五十九年の法律を廢止し同時に制定せられたる勞働組合法(Trade Union Act)は若し手段にして適法ならんには營業を妨害するの廉を以て之を不法と爲さざる旨を規定せり更に千八百七十五年に制定せられたる騷擾罪及び財產の保護に關する法律(Conspiracy and Protection of Property Act) は一人にて爲して不法ならざることは二人以上に於て之が取定を爲し又は之が取定を爲す組合を作るも不法たることなしと規定せり此の千八百七十一年に於ける二つの法律と七十五年の法律とは初めて完全に勞働組合を公認し集合協約の適法なることを認めたるものとす。

　其後千九百年に於て「タッフ、ヴェール」鐵道會社と其勞働者との間に激烈なる爭議を生じ勞働者は擧りて同盟罷業を爲し結局平穩なる解決を見たりと雖も「タッフ、ヴェール」會社は豫告なくして會社の業務を去り契約に違反せるの廉に依り二百名以上の勞働者に對して訴訟を提起し裁判所は其内六十名の者に對して各四磅の罰金に處したり又會社は此同盟罷業に依り事業の被りたる損害額の賠償として二萬四千六百二十六磅の額を要求せり第一回の判決は勞働組合をして之が損害額の支拂を爲さしむる旨の判決ありしが勞働組合は組合は個人に非ず法人に非ず訴訟の目的とすることを得ざるものなることを主張して控訴し組合の勝訴に歸したりしも最終の判決に於て再會社側の勝利に判決せられたり。

　此訴訟は英國勞働史上に於ける最も有名なる訴訟にして此事件は勞働者側に於ける非常なる物論を喚起し其結果千九百六年產業爭議法(Trade Disputes Act)に依りて勞働組合は訴訟の目的と爲すことを得ざる旨を規定せり之れ勞働組合が他の組合

の有する責任を解除せられたるものにして在來禁止的法律の適用を受けたる勞働組合が今や積極的に他の組合の有せざる特權を有するに至りしものとす而して又千九百十三年の勞働組合法は勞働組合が公然政治的團體たり得るの權能を與へ更に從來勞働組合の合同は法律上面倒なる手續を要したりしも千九百十七年の勞働組合合同法(Trade Union Amalgamation Act)は其手續を簡畧にし以て合同を容易ならしむることとせり今や勞働組合は一片の屆出と規約及簡單なる統計の報告とに依りて重大なる權能を附與せられ而も訴訟の目的と爲ることなき責任なき團體と爲れるものとす、或る一部の人が以て不當なる特權を有すと批評したるが如く政府は勞働組合の成立に關して寧ろ保護助長の方針を取りたりと看做すも不可なき狀態に在り今日英國に於ては同盟罷業、同盟解雇、非買同盟「ブラックリスト」及び平穩なる同盟罷業の監督は皆適法とせられ唯暴行、「サボタージ」執拗なる他人の尾行が不法とせらるゝのみなり之を要するに集合協約の適法なることは明瞭に法律に於て認められ而して勞働爭議に對する手段も亦或者は適法とし或者は不法なりとして法律上に於ける規定極めて明瞭なるものとす。

（五）佛、獨、米勞働法の變遷

前項に述べたるは勞働組合に對する英國法制の變遷にして千七百九十九年より千八百二十四年に至る迄は第一期にして此の時代に於ては組合自體を以て不法なりとして之を禁止したるものにして次で千八百二十四年より千八百七十五年迄は第二期にして此の時代に於ては組合は不法に非ず同盟罷業も亦不法に非ずと認められたるも同盟罷業に關する實際的行爲に就て嚴格なる制裁を附したるを以て事實上同盟罷業を禁止し從つて勞働組合を抑壓したると同一の結果を呈したりしが次で千八百七十五年の法律に依つて同盟罷業に關する實際的行爲に就ても其の制裁を寛大にし一人にて爲して不法ならざる事は多數を以て之を爲すを妨げずとし其手段にして適法ならんには同盟罷業なるが故にとて之を罰せざることとし此に於てか多年勞働條件の改善に障害となりし法律上の桎梏は撤廢せられたるを以て勞働組合は潰河の勢を以て發達するに至り次で今世紀に入りて制定せられたる法律は益々組合の助長特權を與ふるものにして千八百七十五年以降今日に至る迄を第三期と稱することを得べし。

勞働組合に關する英國法制の變遷がかくの如き徑路を辿り來れると等しく佛國に於ける法制亦之に類似するものあり、佛國に於ては千八百十年より千八百六十四年迄を第一期と稱すべく

此の時代に於ては組合結社を以て一般に不法なりとし刑法第二百九十一條乃至第二百九十四條は一般に二十人以上の結社は必ず政府の許可を受くるを要すとし集合に於て煽動的行爲を爲すを罰し刑法第四百十四條乃至第四百十六條は雇主及勞働者の組合を嚴禁したり。千八百六十四年より千八百八十四年迄は第二期と稱すべく千八百六十四年五月二十五日の法律に依りて刑法第四百十四條乃至四百十六條の改正あり此の刑法改正に依りて同盟罷業自體は適法にして不法ならざることを認めたるも暴行脅迫、詐術に依りて同盟罷業を爲すを禁じ更に豫め取定めに依りて罰金、禁制、同盟絶交の方法を以て企業又は勞働の自由を害するものを處罰することとせり。此の時代に於ても勞働組合自體は尙刑法第二百九十一條及二百九十二條の適用を受けたるを以て適法と認めらるゝに至らず、加之同盟罷業と雖、理論上其適法なるを認められたるも實際上に於ては嚴格なる規定あるに依りて殆と犯罪を犯すことなくして同盟罷業を企つる事を得ざりしかば勞働者の要求は遂に第三期の立法を招致し千八百八十四年三月廿一日の法律に依りて前述せる罰金、禁制又は同盟絶交の方法に依りて豫め勞働の自由を妨ぐる云々の規定を削除し更に刑法第二百九十一條乃至二百九十四條の規定は同業組合(Syndicats professionnels)に適用せざることとし次で千九百一年七月一日の法律に依りて啻に同業組合のみならず一般組合に之を適用せざることとしたるを以て此に至りて始めて勞働組合は適法とせられ同盟罷業に就ても亦其の適法たるべき範圍は狹められたるものにして英國に於ける第三期の立法と略類似せる結果となれるものとす。

獨逸に於ける立法の變遷は英佛に於けるが如く其の段階を明にするを得ざるも千八百四十五年のプロシアの營業法(Gewerbeordnung)第百八十一條及百八十二條は勞働條件改善の共同運動を禁止したるに反し千八百六十九年の北獨逸聯邦の營業法第百五十二條は明白に同盟罷業に關する罰則を廢止する旨を規定し次で第百五十三條に於て暴行、脅迫、誹毀又は同盟絶交の方法を用ゐて(durch Anwendung körperlichen Zwanges, Urohungen, Chrverletzung, Verrufoerplärung) 共同運動に加入せしめ又は之より脫せしめんとしたる者を罰する旨の規定を設け此の營業法は獨逸帝國の營業法となれるを以て即ち現行法律にして外に刑法第百十條は法律に對する不從順を煽動したる場合(Aufforderung zum Ungehorsam gegen Gesetz) を處罰するの規定あり、此の規定と同盟罷業との關係に就ては後述する所

あるべし。

以上は英、佛、獨三國に於ける勞働組合及同盟罷業に關する法制の大要を述べたるものにして後述せんとする治安警察法第十七條に關する說明に對する照應の伏線を爲すべきものとす。

翻て米國を見るに同國に於ては多數の勞働者が團結して勞働條件の改善を圖らんとするは騷擾罪に當ると云ふ英國の法制を傳襲しりたしも千八百三十年代に於て一般に賃銀の引上を目的とする組合は必すしも騷擾罪に問はるゝとなしと認められ千八百四十二年マサチューセッツ州に於ける判決は同盟罷業も亦不法にあらざる旨を述へたり之を要するに同盟罷業及び勞働組合に關し之を適法なりと認めたることに於て却て英國よりも時期に於て進みたりと雖も英國が著々として法律の力に依りて組合及勞働爭議の手段に關し適法と不法とを明示しるたに反し米國に於ては明瞭なる立法存在せす其後今日と雖も尙ほ騷擾罪を適用せんとする思想は依然として殘存し動もすれば勞働爭議の手段及び勞働組合を以て此思想の下に抑壓することなしと云ふべからず而して更に此外に千八百九十年に制定せられたる シャーマンノ「トラスト」禁止法（Sherman's Anti trust law）は一般に勞働組合をも禁止するものとして解釋せられ勞働組合は此法律の改正に運動すること久しかりしが千九百十四年「クレートン」法（Clayton Act）に依りて勞働組合を以てシャーマンの「トラスト」禁止法の適用を受けざる旨を規定したるも而も勞働組合及勞働爭議の手段に關しては何等明定する所なきを以て シャーマンの「トラスト」禁止法が勞働組合に對して與へたる恐怖の念は之を除去することを得たるも之が爲めに積極的に勞働組合の地位を認めたるにあらす米國に於ける勞働組合の勢力は强大にして集合協約は實際に於て非常なる發達を爲せるに拘らす法律の明文上に於ては英國に於けるが如く確實と明瞭なることに於て缺くる所あるは徒に尙個人自由の學說に膠着するものにして時代の要求に背反するものと云ふべきなり。

（六）勞働爭議仲裁機關

組合に關する制度と相並びて之と必然的に密接するものは勞働爭議の仲裁機關なりとす蓋し一方に資本家の組合あり他方に勞働者の組合ある場合に於ては其契約の締結若は更新に際し又は契約有效期間中に於ても勞働條件の改善又は實施に就て幾多の爭議あることを豫想し得べし而して斯の如き爭議は一工場に於ける工場主と職工との爭議と異なり時として全國に於ける同種類事業に關係ある一切の資本家と一切の勞働者との爭議に亘

るものあるが故に社會全體の安寧幸福に影響する所尠からず此に於てか是等の爭議に對して仲裁の制度を設くるに至れり。

所謂勞働爭議の仲裁は大體之を二種に區別することを得べし第一は單に兩者の中間に立ちて之か和解の用を務むるものにして第二は兩者の代表者と之に加ふるに第三者を以てし爭議の仲裁を爲すものとす各國の法制に於て寧ろ重要なるものは此後者にして英國に於ては千八百九十六年調停法（Conciliation Act）を制定し同年より千九百十三年に至るまで調停したる事件は六百九十六に上り此の中三百四十五件は爭議の爲業務を停止したるも三百五十一件は業務を停止することなくして平和なる解決を見たりと云ふ、獨逸の調停法は千八百九十年に制定せられ千九百一年改正せられ、佛國に於ては千八百九十二年に制定せられ、其他歐洲の主要國は皆之を有せざるなく、米國に於ては合衆國政府の調停法は千八百八十八年、九十八年、千九百十三年の各年に制定せられたる法律より成り、各州に於ては三十一州とアラスカ及フィリッピン群島亦之を有す。

近時勞働爭議の仲裁機關として識者の注目を惹けるものは千九百七年に於て制定せられたる加奈陀に於ける產業爭議調査法(Canadian Industrial Disputes Investigation Act) にして同法に依れば法律に列擧せらるる重要產業に付て爭議の發生するや之が狀況を調査し一切の經過を公表する迄同盟罷業又は同盟解雇を爲すことを禁止し其の調査公表の後爭議の禁止を解消するものとす之れ調停の最中に於ける不必要なる生產の停廢を避けしめ而して調査の公表に依りて事の判決を輿論に委するものとす此の法律は好個の仲裁制度なりとして學者の研究する所と爲り千九百十五年米國コロラド州に於て模倣する所と爲れり。

前述せる幾多の調停法は何れも所謂任意調停又は强制調停に屬するものにして或は調停の開始を兩當事者の合意に依ることとし或は一方當事者の請求ある場合に於ては調停を他方の當事者にも强制するものなるがニュージー、ランド及濠洲に於て制定せられたる調停法は其の決定せる事項の實施をも强制するものにして其類例稀有と云ふべく其實績に付ては未だ確實なる斷案を下し難きものの如し。

之を要するに勞働爭議の仲裁は不必要なる生產の停廢を防ぎ且當事者をして無意味なる執拗を避けて相當條件に於て協調の實を擧げしめ加ふるに資本勞働の兩階級の反目をして大ならしめざるの效あるものとす。

殊に今次の大戰に於ては戰爭遂行に必要なる產業が勞働爭議

の爲めに其生産を停廢するが如きことあらば戰爭の遂行を妨害するものなりとの見地に於て强制的に仲裁調停を爲さしめ勞働爭議の解決を爲さしめたるもの少からず例へば千九百十四年に於ける英國戰時の軍需品條例(The Munitions of War acts)は戰爭に必要なる産業爭議を强制調停に附することとし、米國に於ても亦國民戰時勞働局(National War Labor Board)を設立して戰時産業の調停に當らしめたり此戰時に於ける非常緊急の狀態より設置せられたる勞働爭議の仲裁制度は戰前に於ける仲裁制度に比して一層有效に其能率を發揮し一般社會の賞讃を博したるを以て此制度は何等かの形式に於て平和の後と雖も繼續するや疑なく斯の如くにして勞働爭議の仲裁制度は今次の大戰を一新紀元として一層發達の步を進めたるものと云ふを得べきなり。

（七）不安なる日本の勞働問題

以上は組合に關する一般的說明なるが以下少しく本邦當面の問題として之に關する意見を述べんとす。

勞働は商品の一種とするも一般商品とは異なる特徵を有するものにして其の勞働者なる人格者と不可分の關係に立つものなることと及勞働を提供する者は一般に貧困に瀕するものなることは自由競爭の經濟制度の下に於て常に勞働者をして不利なる地位に置き永く文明の與ふる幸福と恩澤とに浴することなく同情すべき境遇に沈淪せしめたり是實に國民の大多數を占むる下層勞働者の運命に關する大問題たるのみならず又實に一般社會の安寧福祉に影響すると蓋し大なるものありとす此の如き結果は勞働者特有の境遇より來る必然の運命にして現今に於ける自由競爭の制度に放任せんか其改善の時や期して望むべからざるなり之に關する改革の方法として二種類を考ふること得第一は勞働立法の制定にして國家が法律の權力に依りて勞働條件の實施を强制するものとす第二は組合を組織せしめ多數團結の力に依りて個々獨立せる勞働契約の不利を塡補せんとするものとす現經濟制度を存續して而も勞働者の境遇を改善せんとせば蓋し此の二種の方法に依るの外なきなり。

今勞働者の生活を具に調査し其賃銀の低廉なる、其の就業の長時間なる、失業に對する不斷の脅威を受くる、其勞働場所の衞生上有害にして又危害の處あるを實見するものは何人と雖是等の勞働者の勞働條件を自由競爭に放任せんとするが如き妄想を抱くもの無かるべきを以て唯問題は勞働者の境遇を改善するに直接法律の規定を以つてすべきか將又公認せられたる勞働組

合の自助的活動に依らしむべきかとの取捨に歸着すべし。

而して我國に於ての工場法及鑛夫勞役扶助規則は既に大正五年九月一日より施行せられ勞働立法に依りて勞働保護を圖らんとする政策に着手し更に勞働保險法其の他の勞働法規の制定を計畫しつゝあるを以て之を要するに問題は此の上に更に勞働組合を認むるの必要ありや否や換言すれば勞働立法と共に勞働組合の自助的活動を併用するの必要あるや否やに歸着すべきなり

吾人は勞働組合の組織を認め勞働者の自助的運動を奬勵することは啻に時代の要求として之を容れざるべからざるのみならず本邦現時の勞働者の實狀に徵して其の特に本邦に於て必要缺くべからざるものなるを信ずるものにして其根據は凡そ次の六點に在るものとす。

（一）人或は曰はく勞働者の境遇を改善するの必要あるは充分之を認むるも進んで勞働組合を認むるは徒に資本家との爭鬪を惹起し產業の基礎を危くし社會の安寧を害するものなるを以て勞働組合はなるべく之を抑壓するの方針を採り之に代ふるに專ら國家の制定する勞働立法の方法に依りて勞働者の境遇を改善するに如かざるなりと。

然れども論者にして若し勞働者の境遇を改善するの必要を認めざるものならんには暫く之を措き苟くも現今の勞働者の境遇を改善するの必要を衷心より認むるものならんには此の說の如く專ら勞働立法に依りてその希望を達せんとするが如きは殆ど空想に近きものと云はざるべからず。今日の勞働問題なるものは單に賃銀の高低、時間の長短の如き些々たる問題に非ず其淵源は遠く其の根蔕や固く現存經濟制度の欠陷に由來するものなり、その欠陷を認知し之が改善を痛感するは實に勞働者階級の雰圍氣に生活したるもののみ唯之を能くするを得るものにして現存社會制度を是認し之が存在の上に生活する者の結局理解し得ざるものなり。

假令國家の官吏が資本家と勞働者との中間に立ちて公平なる裁斷を爲し以て勞働者の境遇を改善せんと努力するとするも一般に官吏自身が其出身の關係よりして寧ろ資本家的の思想を保持する者にして而して政府は概して資本家の金力を度外視すると能はざるものなるを以て國家の官吏に公平を期して完全なる勞働法規の制定を求むるも到底望み得可らざるなり歐米に於ては十九世紀の後半に於て一般に選擧權は普及し下層勞働者と雖一票の投票權を有するを以て之に依りて實際政治を左右することを得べし、事實に就て之を見るも往年の政

府は專ら貴族富豪を基礎としたりしに反し、現代の政府は廣く民衆の基礎の上に立ちつゝあり、かくの如く名は等しく國家政府と云ふも往年の國家政府と今日の國家政府とは全くその内容を異にするものにして、かくの如き場合に於ては國家の仲介によりて比較的公平なる勞働法規の制定を庶幾するも亦必ずしも不可能と云ふべからざるなり、況んや勞働運動は夙に發達して勞働者の勢力は强大にして事毎に政府當局を鞭韃するを以て勞働立法を促進せしむること決して望み得べからざるにあらざるなり。

然れども、我國の如きは選擧權は未だ一般に普及するに至らず一小部分の階級に限局せらるゝものにして勞働組合と目すべきものなく勞働運動と稱すべきものあるなし、かくの如き國情に於て政府の勞働立法に多大の期待を爲し得べからざること火を睹るよりも明なり、我が工場法の制定せられたるは明治四十四年にして當時議院の内外に於て多大の反對ありしに拘はらず越えて十年を經ざる今日、工場法の改正は易々として實行せらるゝの狀況にあり、勞働者の境遇を改善するの必要ある。敢て十年前と今日と毫も異る所あるなし而もしかくその制定に難易の差異あるは實に之を勞働者運動の結果に歸せざるを得ざるなり、勞働組合を前提として始めて勞働立法あり、勞働運動なくして勞働立法の完成を想像し得べからず、況んや我國爲政家は一般に人格尊重の念に乏しく人間生活の貴重なる所以を味達するもの尠く、勞働者の境遇を見て之が爲めに一身を挺して奮鬪するの熱情を有するもの尠きを以て若し勞働者の幸福を增進せんことを望みて專ら國家の勞働立法に賴らんとせばその成るや果して何の日にか之を期し得べき百年河淸を俟つに等しきなり。

或は又勞働運動は產業の基礎を危くすと云ふ、然れども勞働運動の結果は資本家の利潤を減少することあるも產業の基礎を危くするものに非ざるなり、利潤の減少と產業の基礎とは自ら別個の觀念にして利潤の減少を以て產業の基礎を危くするものとなし以て勞働運動を排斥せんとするもかくの如きは公共の名に隱れて自家の利益を守らんとするものにして以て抗辯の理由とするに足らざるなり。

或は又社會公共の安寧を害すと云ふも公正の基礎に於てのみ始めて社會公共の安寧を求むるを得べく公正に背き理論に悖る經濟制度は却て社會公共の安寧秩序を破壞するものと云ふべし若し勞働者にして自覺せんか當然之が改善を要求するや

疑なきを以て論者の如きは勞働者の自覺ある迄偸安の夢を貪るものにして而して不公正の制度の下に永く默々たる生活を送るが如き勞働者は國家の一員としても決して强固健實なるものに非ざるなり。

今假に一歩を讓りて勞働立法に依りて勞働者の境遇を改善することを得べしとするも吾人は尙問題の殘れるものあるを感ず即ち外來の手段に依りて勞働者の境遇を改善するを以て果して勞働者の幸福は增進せられたりとすべきか、勞働者の求むるものは單に境遇の改善てふ客觀的事實にあるや抑又吾人の爲すべきものは勞働者に物質的幸福を與ふるを以て滿足すべきや否や、之實に勞働政策の根本問題たらずんばあらざるなり。

若し人民の安寧幸福のみを以て政治の最高目的たりとせば專制政治は最も適當なるものなるやも知るべからず、然れども人類の歷史は敎へたり、政治の結果のみが人民の求むる所に非ざるなり、政治に參與すると之實に近代政治に缺くべからざる要訣ならずんば非ざるなり、人民の爲の政治のみに非ずして人民による政治は民本政治の眞髓なり、此の問題は政治上に於て既に略解決せられ今日何人も民本政治の眞諦を贊せざるものなきに拘はらず今も尙勞働問題に付て開明專制を主張するものあり、善政主義を是認せんとするものあるは吾人の怪訝に堪へざる所にして勞働政策は單に勞働者の爲めのみならず勞働者に依る運動を認めざるべからざるなり之實に勞働政策の分岐點にして專制と進步保守と自由とは暫らく勞働者の爲めの政治に吳越同舟を繼續し來りしも此に至りて始めて勞働者に依る運動を認むるや否やに至りて吳越舟を異にせざるを得ざるなり、勞働組合に對する問題の重要なるは實に此に在り、勞働問題の根本哲學は此に至りて始めてその眞相を表現せざるを得ざるなり。

（二）勞働問題の最も合理的發達を爲したる英國の歷史に徵するに同國に於ては現代の社會政策に到達する以前に於て夙に個人主義自由主義の時代なるものありて個人人格の權威を宣傳し自由の神聖にして犯すべからざるものなる所以を敎へたりしが「アングロ、サキソン」人種の自立の精神と獨立不羈の美風とは實に此の時代に於て涵養せられたるものとす而して勞働者と雖一般人間と絕對平等の地位にあるものにして既に等しく人間たらんには其の生活の貴重にして忽諸に付すべからず之が爲めに努力せざるべからざる所以亦實に此の時代に於て

深く肺腑に穿たれたるものとす不幸にして社會の實狀は自由を與へたるもの自由を享有すべき境遇を與へず人生の貴重なる所以を敎へたるも之を修養すべき機會を缺きたるを以て遂に國家の保護と干涉とを要求するに至り國家政策の變轉を齎らせるものとす既に此の如く自覺あり訓練あるを以て社會政策の實施はよく其要求に合し本旨に副ふことを得たるものとす、例へば十時間運動の請願に於て心身の疲勞を休養し智識的發達を爲すが爲には十二時間の勞働を十時間に短縮することは目下の急務なりと曰へり此の如き要求ありて始めて短縮せられたる時間は之を活用するを得べく賃銀の値上は之を其の所に用ふることを得べきなり之を要するに歐米に於ける社會政策は之に先ちて個人の自覺と準備とを有したりしものにして此の如くにして勞働立法の實施は其效果を發揮すべきなり

顧て本邦を見るに本邦現代の社會政策は勞働者の要求に依るよりは寧ろ爲政家が時代に順應し社會の要求を慮りて案出せるものにして之が實施の前に於て勞働者に自覺あるなく又精神的準備に缺くるものあり此の如くにして制定せられたる勞働立法は果して勞働者に依り活用せらるゝことあるや否や頗る疑なきを得ず勞働者保護の社會政策は却て其本旨に戻るの結果を生ずることなしと云ふべからざるなり之れ實に社會政策の實施に當りて最先に考慮すべき重大の問題なりとす。

斯の如く我勞働者に自覺少く訓練乏しきは一は其敎育の足らざるの致す所にして此の點に於て義務敎育を徹底的に實施すること頗る必要なりと雖一般に我敎育及行政の方法の之を然らしむるものあるを感ぜざるを得ざるなり、卽ち我敎育も行政も外界より命令と權力と注入とに依りて事を爲さんとすれどもかくの如きは徒に形式を整へ統制を裝ふことを得べしと雖徹底的に其敎ふる所を體得せしむるに足らざるなり之れ我國傳來の後見的政策(Paternalism)の致す所にして一般に我國民は此政策の賜物として制度と立法とを飾るを得たるも其內的生活に於て毫も根本的覺醒を爲したるを見ざるなり

既に個人として自覺を缺き訓練を有せざる國民は國家の基礎としても脆弱なりと云はざるべからず勞働者は國民の大多數を占むるものにして此の多數の國民をして確固たる精神の訓練を受くることなくして了らしむるは啻に社會政策の問題たるのみならず實に國民の運命に牽連する重要なる問題と云はざるべからず。

然らば如何にして勞働者をして自覺せしむべきか之實に自

由を與へ獨立自助の運動を認むるの外なきなり徒に先覺者の案出せる法律制度を上より與ふることなくして自由發溂たる運動の中より勞働者をして自ら悟らしめ求むる所あらしめざるべからず而して勞働者の運動は勞働條件の改善を求むるの外他にあるべからざるを以て之即ち勞働組合の成立を承認する所以にして吾人が組合の公認を說く所以又實に此に在りとす

(三)組合は既に述ぶるが如く教育的機關を設くるものにして新聞雜誌を發行し小冊子を刊行して勞働者として必要なる知識を供給するのみならず其の講演會に於ては或は組合員相互の意見を發表し或は一般勞働問題に熱心なる先覺者を招きて其說著を聽くことを得べく之を要するに勞働者の精神的向上はかくの如き組合の成立に依りてのみ之を庶幾することを得べき也

或は組合が秩序を紊り平和を害するを怖るゝものありと雖組合員にして組合を組織し自ら共同の生活に加はらんには共同生活の何ものたるかを解し秩序の貴重なる所以を知ることを得べく斯の如くして始めて秩序を尊重するの精神は徹底するものと云ふべきなり又組合は同盟罷業の基金を有し相互扶助の積立を爲すものなるを以て是等の施設は組合員をして輕擧妄動を愼み其の思想を平穩保守的ならしむるに預るものとす、

勞働者は國民の多數を占むるものにして國家に於ける貴重なる市民の一部なり是等の勞働者は時代の推移に依りて國政の要部を占むることあるは歐米の實例之を示すが如くにして既に然らば是等の勞働者をして徒に無能無自覺に放任することとなく之が智識を開發し秩序を尊重するの精神を涵養せしむるは實に國家生活の上よりしても賢明なる政策と云はざるべからざるなり。

(四)我國の勞働者は外國傳來の思想を吸收することを知りて之を消化することを知らずとの非難をなすものあり外來思想を輸入して之を現代日本の國情に消化せしむる機關なき我國の如きは大なる危險を犯すものと云はざるべからず、若し我國勞働者一部の思想にして社會主義過激主義に走りつゝありとせば其は外國に於ける事實を紙上に讀みて之が徹底せる說明を爲すべき機關を有せざる當然の結果と云はざるべからず須く勞働組合の成立を認め之を中心として我國の勞働者に對して國際上に於ける我國の地位、我國産業の幼稚にして歐米先進國と異る所以を宣傳し勞働者をして眞に了解する所あらしめ和衷協同の實を擧げしむるに努力すべきなり。

（五）資本家階級に屬するものと勞働者階級に屬するものと共意思を疏通するの機會少きこと我國の如く甚だしきは歐米諸國に見ざるところなり若し資本家勞働者の双方組合により集合協約の成立を見るが如きことあらんには此の會合に於て協約の條項を討議するに當りて資本家は勞働者の要求の奈邊に在るを知るべく勞働者は產業の經理に付て始めて理解し其の要求の無法不合理なるを感知することあるべし之を要するに今日資本家勞働者をして相互の理解を爲さしむるもの組合の成立を措いて他に之を求むべからざるなり。

（六）我國には勞働者の利益を代表する一人の代議士あるなく彼等は其要求を述ぶべき辯論と文章とを有せざるなり國家は勞働者の利益を代表すべき要求を聽くの必要あり又勞働者をして其の意見を吐かしむることは、卽ち不平の噴火口を設くる所以にして國家の安寧よりしても蓋し必要缺くべからざるものとす。

（八）勞働立法と組合運動の關係

既に此の如く勞働組合を認むれば勞働立法と組合の運動とは如何なる干係に置くべきか如何なる範圍の勞働者に對して勞働立法を適用し如何なる範圍の勞働者に對して組合の自助的運動に放任すべきか之れ勞働法規の適用に關する根本問題たらずんば非ざるなり

之に關しては婦人未成年勞働者と成年男子勞働者とを分ちて之を說明せざるべからず

（一）婦人及未成年勞働者に對しては勞働立法を以て之が保護を圖らざるべからず蓋し是等の勞働者は一般に不熟練作業に從事する者にして且勤續年限は概して短く加ふるに婦人勞働者は結婚家庭を差控ふるの事情あり未成年勞働者は其の精神の發達幼稚にして共同團結の生活に適せざる等各種の理由に依り勞働組合を組織し自ら勞働條件の改善を企つるの能力に缺くる所あるを以て國家は特に法律の力に依りて之が保護を講ぜざるべからず更に未成年者は未だ心身發達の中途にあるものにして其健康教育は從來の國民と爲るに大なる關係あり婦人勞働者は其身體男子と同じからず加ふるに男子と異る生理作用を有し其の健康は單に當該勞働者のみならず第二の國民に影響する所大なるを以て之が保護は緊急を要し其實施は確實ならざるべからざるを以て特に立法の發動に依らざるべからざるものとす而して近時歐米に見るが如き婦人勞働者の組合にして成るの時あらんか進

んで之が活動を認むるを可とす此に婦人未成年勞働者の保護は勞働立法に依ると云ふは組合の運動を認めざるの趣旨に非ざるなり

之を英國の事例に徴するも千八百二年初めて勞働法の制定せられてより以來是等の勞働者の保護は常に法律に依りて爲されたるものにして米國の如き今尙個人自由を尊重する國に於ても是等勞働者の保護は古くより法制の方法に依りて以て今日に至れり

（二）成年男子勞働者に付ては更に勞働法規の二種類に付きて各場合を分ちて之を述べざるべからず

(1)勞働法規の中所謂禁止的法規に付ては之を成年男子勞働者に適用するに當りては事項に依りては勞働組合の自助的活動に委任するを可とす

禁止的勞働法規(Prohibitive laws)とは或る事を爲すを禁止する趣旨の法律にして例へば少年勞働者の最低年齡を規定し就業時間を規定し徹夜業を禁止し休日休憩を規定し或種の作業に從事するを禁止し最低賃銀を規定するが如き法律は成年男子勞働者に付て之を適用するに當りては其緩急取捨は事項により之を組合間の集合協約に依らしむるを適當とすべし

歐米に於ては禁止的勞働法規の適用は今や婦人未成年勞働者のみならず進んで成年男子勞働者にも之を擴張しつつあり、而して其の傾向は日に益々强からんとす我國に於て却て或る場合を勞働組合の活動に委任するは時勢の許さゞるところなりと雖歐米に於て是等の法規を成年男子にも適用するに至りしは全く長期の勞働運動の結果にして我國と其の歷史を同じくせず我國は勞働組合を發達せしむるの必要あるは旣に述べたるが如くにして事項によりては暫く之を勞働組合の自助的活動に任じ其の要求に鑑みて始めて法規の適用を擴張するは能く社會政策の效果を全くせしむるものにして又勞働組合の發達を促進するものなるを信ずるが爲なりとす

(2)勞働法規の中所謂命令的法規(Positive laws)に付ては之を青年男子勞働者にも適用すべきものとす命令的法規は或る事を爲すを命令する趣旨の法律にして例へば勞働保險に關する法律、勞働爭議の仲裁に關する法律の如きは此の種の法律にして其の他衞生危害に關する豫防設備を命ずる法律の如きも亦此の法律の一例たるべし

之を要するに婦人及未成年勞働者に付ては專ら法律の適用に依り成年男子勞働者に付ては勞働立法と勞働組合との併用に依らんとす又之を換言すれば命令的法規は其適用を婦人たると男子たると未成年者たると成年者たるとを問はず等しく之を適用するも禁止的法規は或は其の適用を婦人及未成年勞働者に限定し或は成年男子にも及ぼさんとするものとす

（九）不合理なる治安警察法第十七條

更に進んで勞働組合及同盟罷業に對し現行法規は如何なる規定を有するかを考察するの必要あり。第一に問題となるものは即ち治安警察法なりとす。同法は明治三十三年三月十日制定公布せられたものにして第十七條は勞働組合及同盟罷業を規定するものなるを以て參考の爲め左に之を揭げんとす。

治安警察法第十七條　左ノ各號ノ目的ヲ以テ他人ニ對シテ暴行、脅迫シ若ハ公然誹毀シ又ハ第二號ノ目的ヲ以テ他人ヲ誘惑若ハ煽動スルコトヲ得ス

一　勞務ノ條件又ハ報酬ニ關シ協同ノ行動ヲ爲スヘキ團結ニ加入セシメ又ハ其ノ加入ヲ妨クルコト

二　同盟解雇若ハ同盟罷業ヲ遂行スルカ爲メ使用者ヲシテ勞務者ヲ解雇セシメ若ハ勞務ニ從事スルノ申込ヲ拒絶セシメ又ハ勞務者ヲシテ勞務ヲ停廢セシメ若ハ勞務者トシテ雇傭スルノ申込ヲ拒絶セシムルコト

三　勞務ノ條件又ハ報酬ニ關シ相手方ノ承諾ヲ強ユルコト

耕作ノ目的ニ出ツル土地賃貸借ノ條件ニ關シ承諾ヲ強ユルカ爲相手方ニ對シ暴行脅迫シ若ハ公然誹毀スルコトヲ得ス

同條第一號に所謂勞務の條件又は報酬に關し協同の行動を爲すべき團結とは繼續的の團結たるか將又一時的の團結たるか明ならざるも第二號に於て一時的團結たる同盟罷業及同盟解雇に就て規定を設くるを以て恐らくは繼續的團結たる組合に關する規定と解するを得べく而して之が組合に加入せしめ又は加入を妨ぐるに暴行脅迫又は公然誹毀の行爲を以てするを禁止したるものとす。本號は是等の行爲に依りて組合の加入を強制し又は加入を妨害するを處罰するものなるを以て一面に於て是等の行爲を伴はざる組合の組織は之を禁止せざる趣旨なることを解釋し得べく此の點に於て勞働組合は少くとも同條第一號の範圍内に於ては毫もその成立を禁止せらるゝものと云ふべからず。即ち此の法律は英佛諸國に於て組合結社を禁止したる第一期の法律に相當するものに非ざるものなることを知ることを得べし。

進んで同條第二號を見るに前段は同盟解雇に關して使用者をして勞働者を解雇せしめ又は勞務に從事するの申込を拒絶せしむるに暴行、脅迫公然誹毀又は誘惑煽動を用ゐるものを處罰し後段に於て同盟罷業に關して勞務者をして勞務を停廢せしめ又

は勞務者として雇傭するの申込を拒絶せしむるに暴行、脅迫、公然誹毀又は誘惑煽動の方法を用ゐる者を處罰するものなりとす前段に付ては今暫らく之を措き後段に付て之を見るに勞務者をして勞務を停廢せしむ云々とは要するに同盟罷業に加入を勸誘するの謂にして而して勞務者として雇傭するの申込を拒絶せしむとは同盟罷業の監視(Picketing)を指示するものなるべし。暴行脅迫誹毀等の行爲自體が元來不法なるものにしてその勞働組合に關するものなると同盟罷業に關するものなると將又如何なる事項に關するものたるとを問はずその目的に拘はらず手段に違法性あるものなるを以て之を處罰すること毫も支障あらざるなり、嚢に述べたるが如く英佛獨等の法律も亦之を罰するを通例とし我國に於ても刑法に之に關する一般規定あり、既に刑法に規定あらんには特に勞働組合及同盟罷業に關して之が存在を必要とせざるもの丶如くなりと雖も一面に於て又之あるも敢て差支なかるべし。

然れども誘惑煽動に至つては必ずしも然らず、誘惑煽動なる行爲は行爲自體は決して不法なるに非ず其の行爲の目的にして適法なるものならんには毫も違法と云ふべからざるなり、其の目的にして善良なるものならんには所謂誘惑煽動は勸誘なる文字を以て代へられ穩當の印象を與ふるものにして結局誘惑煽動なるものは其自身に於て適法違法の觀念を有するものに非ず我が刑法中之を處罰するの條項一もあるなし、その適法たるや否やを決するものは全く之が行爲の目的にありとす。然らば本條に於て特に誘惑煽動を罰したるは即ち行爲の目的たる同盟罷業を以て違法なりとしたるに依るものと云はざるべからず。聞く所によれば立法當時に於ては明に同盟罷業を以て罪惡なりとしたるものなりと云ふ、之即ち本條項の問題となれる所以なりとす。同盟罷業は勞働者が其の地位を改善するに用ゐ得べき唯一の武器にして之に依りてのみ勞働者の境遇を改善し得べき所以のものなるは嚢に屢々之を述べたるが如し、而して經濟上同盟罷業の必要なるは固より、之を法律上より云ふも一人の爲して不法ならざることは多數團結して之を爲すも毫も之を罪惡なりとする理由存せざるなり、同盟罷業と云ふも要は業務を脱退するに多數の加盟するに過ぎざるなり。既にかくの如く同盟罷業自體は之を罪惡とするの理由あるなし若し同盟罷業に關する行爲を罰すとせば罷業自體が罪惡なるが故に之を罰するに非ずして罷業に伴ふ他の行爲が違法なるが故に之を罰するものにして吾人が同盟罷業の暴行脅迫誹毀を罰するを認むるは即ち之等の

行爲が違法なるが故にして罷業が違法なるが故に非ざるなり。然るに特に誘惑煽動に至りて行爲自體に違法ならざる是等の行爲を罰するは即ち同盟罷業を以て違法なりとする前提より來れる者にして英佛獨の立法に於て將に第一期に相當する思想にしてその到底現代の社會見解に適合せざるものなるや明なり、既に立法の趣旨に於て同盟罷業を罪惡なりとしたる法律を適用しつゝ今日一方に於て同盟罷業は權利なりと唱道するは妥當なりと信じ難し治安警察法第十七條の不可なる所以は先づ此點にありとす。

次に同盟罷業は權利なりと揚言しつゝ之が誘惑煽動を處罰するは前述するが如く法律論として妥當を缺くものたるは勿論、同盟罷業を權利なりとし之を適法なりとせば當然矛盾を來さざるを得ざるなり蓋し同盟罷業は多數人の行爲にして多數人が集會して一行爲を爲すに各人が同時に一齊に之を企圖することは有り得べからざる所にして必ずや二三士の率先して勸誘するものなかるべからざるなり、即ち誘惑煽動と稱するが如き行爲は同盟罷業の如き多數人の行爲には必然的に伴ふ觀念にして之なくして多數團結の行爲を想像し得べからざるなり、人之を稱して誘惑煽動は同盟罷業の要素なりと云ふ蓋し至言なりと云ふべし。既に同盟罷業を權利と認め之を適法なりとしつゝ而も誘惑煽動を處罰するは甚しき自家撞着にして歐洲各國に於て一もその例なく獨逸の刑法第百十條が法律に對する不從順を煽動するを處罰するは前述したるが所謂法律に對する不從順とは同盟罷業の如き契約の違反をも含む者なるや否に就ては判例學説區々として一定せざるも法律の不從順に契約の違反を包含するものとするは到底妥當なる解釋と信じ難し、之を要するに之を各國の立法例に徴するに一として同盟罷業の誘惑煽動を處罰するものなく而してかくの如く廣汎なる範圍に於て同盟罷業の附隨的行爲を處罰するは名は同盟罷業を是認するもその實に於て同盟罷業を違法なりとして之を禁止すると等しく、彼の英獨佛の諸國法制史に於ける第二期に相當する觀念にして假令勞働組合及び同盟罷業の適法なるを認むるもその實際に於て同盟罷業の實際的手段を抑壓するを以て同盟罷業を禁止し從つて勞働組合を無用の長物たらしむるものにして治安警察法第十七條第二號の存在は此の點に於て勞働組合を認むべしとの國際勞働立法の第二原則の趣旨に背反するものなりと云ふべし。

或は又曰はん今日に於ては誘惑煽動の範圍を出來得る限り狹義に解釋するを以て實際上支障を生ずるものに非ずと、然れ共

刑罰法規の解釋は正確なるを必要とす、之が適用者の手心に依りて或は違法とせられ或は犯罪とせらるゝが如きは不斷の脅威を勞働運動に與ふるものにして政府當局者の變更に伴ひて其解釋適用に異同を生ずるものとせば勞働者は其適歸する所に迷はざるを得ず況んや同法第三十條は第十七條の罰則を規定して一ケ月以上六ケ月以下の懲役に處するものとす六ケ月以下の懲役は勞働者の如き日々の生活にも窮する者にとりては家族に對する致命的の打擊にして斯の如き重刑を加ふる法規の解釋を以て其の時々に放任するが如きは吾人其の妥當なるを信じ難し。

加ふるに治安警察法の存在は英米佛の勞働者間に周知の事實にして彼等は之を以て自國の第二期の立法と看做し此種の立法の下に永く苦艱を滿喫し之が撤廢を運動したるものなるを以て日本勞働者の境遇に同情し遂に聲援を與へんとするの意嚮あるが如し。嘗て米國に於て勞働聯合會の會長サミール・ゴムパースに會見したるとき彼も亦治安警察法に論及して曰はく「我等は永く此の種の立法の下に鬪ひたりき米國勞働者は遂に日本の勞働者に聲援を與ふるを躊躇せず」と。事情かくの如きものあるを以て假令國內に於ては如何に解釋するも之を國外に出して如何あるべきか或は外國勞働黨の駁擊を受くること無きを保すべからず寧ろ始より之を處置するに如かざるなり。

治安警察法の問題に次で刑法第二百三十四條と同盟罷業との問題あり。刑法第二百三十四條は「威力を用ゐ人の業務を妨害したる者」は業務妨害罪として之を罰するものにして同盟罷業が果して本條に適合すべきものなるや否やに就ては我學者間に異論あると雖余は牧野英一博士と共に（法學志林第二十一卷第七號二十八頁）罷業即ち業務妨害自體が威力にして威力を用ゐて業務を妨害するものと云ふべからざるものと解せんとす然れ共多くの異說を唱ふるものあるを以て本條を改正して同盟罷業に之を適用せざるの趣旨を明白ならしむるを必要とす。更に警察犯處罰令第二條第五項の業務を妨害する者云々は如何嘗て東京石工長組合と石工組合とが集合協約を締結し賃銀及組合員使用の強制を規定したるに當り警視廳は之を以て此の條文に該當するものとして之が改正を命じ遂に之を取消さしめたりと云ふ若し將來に於て集合協約の發達する時あらんか此の條項の解釋の如きも亦一の問題とならざるに非ざるなり。

殘る問題は單に治安警察法第十七條の撤廢に止めて進んで勞働組合法なる法律を設くるの必要なきや否やに在り若し斯の如き法規を設くるに當り其の內容に於て勞働組合の活動を抑制し

却て其の存在を無意義ならしむることあらば即ち害あるも益なしと雖も若し勞働組合の成立を承認し之が發達を希望するものならんには寧ろ全國畫一的の法律を制定して其組合の組織及び機能を一定し集合協約の合法なる所以を明にし勞働爭議の手段に付ても其の適法なるものと不法なるものとを明瞭に區分し兼て組合の有する基金會計等に關して相當の取締を設け組合の內部を攪亂するが如き者現はれ未だ充分の訓練なき我國勞働者の組合をして徒に混亂失敗に陷らしむるが如きことあるを防がざるべからず然れども余は勞働組合法の制定に特に重きを置くものに非ずして勞働組合に對する政策は第一に其の運動を自由ならしむる障害となるべきものを撤去するにあり而して暫く勞働運動の進捗に放任するを可とせんか組合法の制定は其の後を俟つも決して遲しとせざるなり。

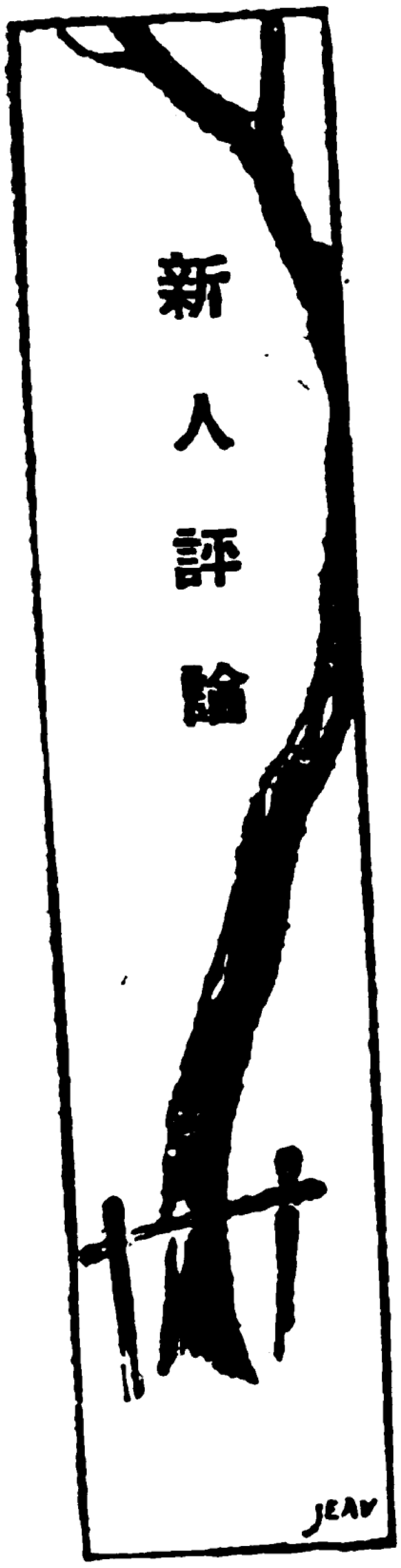
　前述せるが如く歐米に於ては勞働組合と資本家の組合とは營業に關する組合の中に等しく包含せられ勞働組合の問題は終始資本家組合の問題を伴ひて兩者は形影相伴ふの觀ありたり。我國に於ても治安警察法第十七條は同盟解雇に關して規定を設くと雖も從來の經驗に徵して同條の適用は勞働者に對して行はれたることあるも資本家に對して行はれたることなく又團結の必要は資本家之を感ずるよりも勞働者之を感ずること多く隨て我國に於ては資本家の組合公認の問題は輿論の注意を惹かざるものとす。然れども既に勞働組合を公認して集合協約の基礎を承認せば資本家組合を認むること亦必然の順序なるを以て之が組合を認め勞働者の組合と相對して集合協約を締結せしむべきなり。

　最後に勞働組合と資本家組合とを認め集合協約を締結するの制度を設けたりとせば其協約の繼續又は更新に關し勞働爭議の發生することあるを豫想せざるべからず。公共の秩序社會の幸福に重大の關係ある事業例へば重要飲食物の製造又電氣、瓦斯水道等の事業に關し勞働爭議發生して事業の停廢長きに亙る場合に於ては社會公衆の生活を脅かし幸福を妨害すること大なるを以て斯の如き特殊の産業に關しては强制的に仲裁に應諾せしめ而も調停の進行中は爭議の實行を禁止するの制度を設けて資本家の代表者と勞働者の代表者と之に加ふるに第三者なる國家の代表者を以て仲裁委員を設立し國家の代表者を以て其委員長として決定權を得せしめ確定的の判決を下すの必要あるべし。唯業務の種類前述の如く社會公共の生活に必要缺くべからざるものに屬せざるものに就ては强制的仲裁制度を設くること必ず

しも必要なりと言ふべからず。寧ろ之を以て資本家及び勞働者の任意的仲裁に止むるを以て充分なりと信ず。

斯の如き仲裁機關の制度は我國に於ては重要各府縣別に一箇を配置し別に中央に之が統一監督を爲すの機關を設くるの必要あるべく又之が仲裁調停に當りては徒に双方の要求に聽き漠然たる社會の輿論を基本とせずして賃銀、就業時間其他の勞働條件に就て詳細なる學問的調査を遂げたる後正確なる判決を下すの必要あり。之が爲めには全國に亘りて細密なる賃銀及物價の調査を爲し我勞働者の生活に必要なる生活費に關して相當の標準となるべきものを調査決定するの必要あり。我國に於ては勞働者の生活費に關して一も完備せる調査なく將來に於て最低賃銀法を制定するも勞働爭議を調停するも由つて立つべき基礎標準なきに於ては到底精確なる結論を下すを難かるべし。之が爲には先づ全國地方別に業務別男女老幼別に付て勞働者の生計費を調査し次で數箇所の模範的なる勞働者に付て極めて詳細なる生計費を調査するを必要とす。又物價に付ては既に日本銀行に於て調査すと雖果して勞働者生活に適應せしめて誤らざるものなるや否や疑なき能はず。須く實際生活に適用せらるべき物價調査の機關を設けて物價の高低と賃銀の上下とを比較研究し得べき準備を爲さざるべからず。

各國戰時の勞働爭議調停機關が非常なる發達を爲したるは曩に之を述べたるが米國の如きも其の調停機關は皆生計費調査部を置きて生計費と賃銀との關係を常時調査研究し一旦爭議發生するや直に之を標準として其の要求の當不當を決定するものにして國民戰時勞働局の生計費調査部は最低生存費と最低餘裕費との二種の生計費を調査したりしが千九百十八年六月勞働者其妻及三人の子は東部の大都會に於て最低餘裕費として一年千七百六十弗を必要とし最低生存費として千三百八十弗を要する旨計上せり。此の如き最低生計費が勞働爭議の調査機關に於て屢々參考となり勞働爭議を圓滿に判決するに與かれること尠からず。此方面の調査は我國に於ても夙に研究の必要あることを信じて疑はざるなり。



問……………新妻伊都子
答……………山川菊榮

不眞面目なる勞働論の一種

＝山川菊榮さんの名文を讀みて＝

新妻伊都子

つい先頃數ケ年振りで歸朝した許り、そちこちきまりの惡い赤毛布の匂ひが殘つているように思はれてならない私は、ある日雜誌「解放」を手にし山川菊榮さんの「五月祭と八時間勞働の話」と題する一文を讀み、正直なところすつかり恐縮（？）させられてしまひました。もちろんその文は纒つた論文ではありませんが、文中挿記された意見の斷片や、達者な文章の力で巧みに蔽はれた鋭い錐のような思想のひらめきに依り想像するを許されるならば、何うも筆者山川さんは純たる經濟問題としての勞働問題研究の區域を突破した、否な寧ろ無政府主義に近い考をお持ちの方ではないかとさへ思はれるのです、此の事たる今の私にとつては最も服し難い事であると同時に、もう一つ折角御紹介なされた御話の內容があまりに事實と違つて居りますので、積極的に自分の意見（山川さんの御意見と信ぜられるものに服し難い理由）を述べるのは、數年離れて居た故國日本の事情をもう少し見聞した後に讓らせて頂くとしても、差當り違つている事實だけでも列記して山川さんの一顧を煩はしたいと思ひ、慌たゞしく此の一文を草することにいたしました。

○

山川さんの『五月祭と八時間勞働の話』は『五月一日』は『八時間勞働要求の大示威運動』がもとで『やがて英米兩大陸を通じて全勞働階級の共同的祭日となつたものである』と云ふ意味の一節が書き出しになり、『之より後五月祭は永く北米全體の勞働紀念日たるに至つた』とも書かれてあります。處で『全勞働階級の共同的祭日』乃至『勞働紀念日』と云ふのは恐らく“Labor day.”を意味されたのだらうと思ひますが（“Labor day.”以外に少なくとも米國には勞働祭はありません）果し

て然りとすれば間違ひも些とひど過ぎます、米國の"Labor day"は一八八二年紐育市で行はれたのが始めで、其五年後には若干州が之れに倣ひ、今日では毎年九月最初の月曜日を以てニユー・メキシコを除くの外四十七州、即ち米國殆んど全部が法定祭日（リガル・ホリデー）と定め盛んに祝して居ます、既に昨年の同祭には特に大統領ウヰルソン氏が全米勞働者の爲に有名な『レーボアデー・メッセージ』さへ出して居ります。即ち九月最初の月曜日の"Labor day"は斯くして三十二年前の一八八七年から米國に於ける最も盛な法定祭日（リガル・ホリデー）の一になつて居るのです。今年は九月一日が日曜で翌二日が最初の月曜（勞働祭の當日）なので各工場は勿論官廳學校商店會社一切が例年の如く二日續きの休暇を取り、盛に祝ひあふ譯ですが、わが山川さんにして此くらひの事を御存知ない筈はなし、或はまた博學な方なそうですから、もう一つ別に米人自身も知らぬ米國の勞働祭のあることとでも御存知なのでしようか。

○

更に歐洲に就いて見ますと成る程社會主義者大會の決議以來五月一日を以て過激な示威的運動が行はるゝ吉例（？）のあつた事は事實です、然し holiday 即ち祭日（特に勞働者の）と此の日を以て決めた國のあることは、私の寡聞未だ之れを耳にして居りません。それから一九〇四年アムステルダムで開かれた社會主義者萬國大會で『五月一日の休業と示威運動とを決議した』との事ですが、當時の記錄（私の手許に在るのは International Socialist Review の一九〇四年十月號に載つている同大會記事です）に依ると必らずしも全部が五月一日に遣るとの決議でなく或る國は五月の第一日曜に行ふと云ふ事になつてゐます、それとも此の決議も二た通りあるのでしようか。（五月一日に大へん力瘤を入れられた御文ですから下らぬことながら附け加へて置きます。）

○

さあ之れからそろ〳〵内容にはいつていきます。八時間勞働制實施促進運動の歷史上、最も大切な事實の一つは一八八六年五月一日を境ひに實施を期す決議をした會議の記錄です、さすがに山川さんのお話に於ても此點は眼目の一つであつたと見えて第二節の始めに三行と四字丈け記るされてあります。ところがそれを今米國に於て勞働問題研究の權威とされて居るコムモンス教授監督の下にサムナー氏其他五名の專攻學者が協力して纏めた『合衆國勞働史』に引き合せて見ますと一寸へンに思はれるのです。山川さんに依ると此の相談は『一八八五年』に行はれたので相談にのつたのは『米國の各種勞働團體』となつてゐますが『合衆國勞働史』には『一八八四年十月七日に市俄古に開かれた國際的並に國民的八大ユニオンの大會に於て米國のみでなく加奈陀も之れに加はる事に決議したとあります、但し同盟罷工の方は頭から大まかな決議などをせず、（それがいつもの例でもあります、）各聯絡組合それ〳〵の一般投票等に依り加入勞働者個々の意嚮を定め、一方手早く同盟罷工基金の準備に着手する組合なども出來、漸を追ふて根強く節制も嚴くなり、傭主側をして戰かはずして旗を捲くものを多く出すように至らしめたのだそうです、山川さんは此運動のお話をなさるに當つて眼覺しい大運動の基點となつた此の一八八四年十月の市俄古大會とあの尨大な加奈陀も實行期成範圍にあつたことを落されたのは紙面の都合で端折られたとしても少々殘念に思はれてなりません。

○

その次に第四節に移つて山川さんは「各國の勞働階級は五月祭の收穫を悅ぶと同時にその爲めに彼等の拂つた悲慘なる犧牲をも弔せねばならなかつた」とて、さながら人道主義（ヒューマニズム）の勇者が暴王否なもつと猛烈な財

狼の爪牙にかゝつて、悲惨な最期を遂げたのを弔するような調子で、一讀血湧き肉躍る戰記的名文をものされておいでゞす。それがまたあいにく事實と大分懸け隔つて居る山川さんの所謂犠牲者（？）の方にのみ都合のよいことになつているのですが、多分これは山川さんのお使ひになつた材料を書いたものゝ罪で山川さんばかりが責任を負はる可きものではないのかも知れません、然しどの道出鱈目性を帯びている事には相違ありません、あまり長くならぬようが初の一話だけに區切つて一々事實と違つた點を擧げてをきませう。

○

實は此話——一八八六年五月市俄古の事件は『ヘイ・マーケット事件』と云ふて多少勞働問題などを噛つてた方なら御存知のことゝ、今更書きたてる迄もないのですが、山川さんは先づ次のように書き出されてゐます。

シカゴの勞働者は最も强硬で八時間勞働を得た者は莫大の數に達したが、不幸にしてその目的を達し得なかつた約四萬人の勞働者は引續いて同盟罷業を行つた。然るに資本主達は附近の地方からストライキ破りを傭つて來て働かせた。すると五月三日の朝から約一千乃至一萬の罷業職工がシカゴ屈指の大建築マック・コーミック農具製造會社工場前に群衆してストライキ破り等を罵つた。俄然何の理由もないのに騎馬の警官隊が出現して物も云はずに群衆に向つて短銃を擬した。群衆の憤怒は須臾にして激怒に變じた、斯くて約十五分間の激鬪後双方ともに無數の死傷者を出して引とつた。

以上のような話は歸朝して後ち山川さんによつて始めて伺ふので、何うもへんだと僕の參考本を二三冊引張り出してみました。すると第一に前掲の最も信頼してゐる『合衆國勞働史』には、その年の五月一日に市俄古に於て八時間勞働制實施促進のため同盟罷工を決行した勞働者は約四萬に達し然もそれから以後四日の間にその二倍以上に殖えたとあり、續いて

マコーミック農具會社は同運動に反對し二月中旬から工場閉鎖(ロック、アウト)の擧に出でた、五月三日にはマ會社工場の近所で製材所從業勞働者の會合がありスパイス氏の演説があつた、折柄同工場の終業ベルが鳴つて同盟罷工に加はらなかつた從業勞働者達が歸宅す可くゾロゾロ出て來た、それと見るや罷工勞働者のうちから彼等に對し暴行を加ふる者が出た、急報に依つて警官隊が馳け附けた、すると警官隊に向つて亦石礫の矢玉がとんだ、今はこれ迄と警官は應戰した（米國の警官は劍を持たぬ代りに常に短銃と棒を持つてゐる）その結果四名の死者と多數の負傷者が出た。

と記されて居る、次に山川さんの文には

翌朝勞働者の機關紙たる『アラーム』、『アルベイテル・ツアイツング』の二紙は筆を揃へて官憲の暴状を詰り階級戰の到來を叫んで勞働階級の奮起を促した。その結果翌日のヘイマーケットの廣場に於ける會合には、約一萬五千の勞働者が參集した、演壇に擬した車の上からは、シカゴ一流の雄辯家が相次いで熱辯を振つた。その中には『アルバイテル・ツアイツング』の主筆スパイス、『アラーム』の主筆パーソンなども算へられた。

とありますがヒルクイット氏の『合衆國社會主義史』には

斯くと見るやスパイスはアルベイテル・ツアイツング社にとび歸り英獨兩文にて有名なる『復讐檄文(レヴェンジ・サーキュラー)』五千枚を作り街上に於て撒布し『此陰忍なる殺人行爲に復讐す可く各々働者諸君はそれぞれ武裝以て蹶起せよ』云々と煽動した、翌四日夕刻を以てヘイマーケッ

ットの廣場に譟せ參ずることにした、然るに定めの翌日集まつたものは約二千名に過ぎなかつた、スパイス、パーソン、フィルデンの三名が交々演説した。

どれからとつても大した違ひはありませんがもう一つハンター氏の『暴行と勞働運動』から此の續きを抄記してみませう。

時の市俄古市長ハリソン氏は事件の成行きを案じて自から彼等の演説を聞きに行つた、そうして『何も案ずる程の事は無い』と云ふて歸路に就いた。（ヒ氏に依ると市長の歸つたのは十時頃とある）

これからが大へんです、先ず山川さんのお話を前に抜きませう。

警官達は日中は手を出さずに只成行を觀望して居た、これは夜陰に乘じて大仕掛の虐殺を行はんが爲めであつた、果然日没を待つて連發銃を携へた百五十人の警官隊が現はれて、はや群衆の上に殺到しようとした。間一髪何處よりか投げられた爆烈彈は將に襲撃に移らんとする警官隊の中に轟然爆發し、約二十人を地上に將棋倒しにした、この騒動に前衛の一隊が怯むと見るや、後方に控へた幾多の警官隊は、忽ち前進して群衆を蹴散しに懸かつた。斯うなれば全く戰爭である、連發銃の効能は著るしかつた、素手の民衆は武裝せる警官隊と極力戰つたが、遂に退却の已むなきに至り、負傷者を負うて四散した、警官側では四名の死者と二十名の負傷者を出したが、勞働者側の死傷者に至つては到底その數を知ることが出來なかつた。

何と勇ましい物語でせう、まるで太平記でも讀ませて頂くようで、讀んでいるうちに自づと五體が踊り出し、女の私でさへその邊にいる間抜けなおまわりさんを『貴様も同じ警官の片破れか！』と頬べたの一つぐらいは擲ぐつて來なければ治まらぬような氣がして來ます。ところが『合衆國社會主義史』を見ますと妙なことになつて居ます。即ち『一萬五千』は愚か最初から二千ばかりしか集まらなかつた當夜の會合は（山川さんは警官は日中は手を出さなかつたと仰せられますが困つたことに此會合は夕方七時半から始まつています）あいにくの風雨のため會衆の三分の二以上は早々と歸つてしまひ、ハリソン市長が歸つた時分にはほんの數百の少數が殘つて居たに過ぎなかつたので、之れに對し無政府主義者のフィルデインが折角熱辯を揮つて何事かを聞かせて居ました。すると突然百七十六名の警官隊が來、解散せしめやうとしました。（フィルンが平和な會合だと辯解したので警官隊の指揮官はそれに依つて部下新命令を傳へようとした一刹那だそうでした『勞働史』）突如一路次からとんで來た爆彈が警官隊の中央に炸裂し無慘一名の警官を殺し更に多數を傷附けました、それと云ふや双方共に銃の火蓋を切りました。戰闘二分間、やがて現場に殘された死者負傷者を調べますと山川さんの仰せとは反對に勞働者側より警官側の死傷が多數で、實に左の如き結果を見たとのことです。（但し勞働者側は死傷者を負ふて四散したとなれば山川さんの仰せ通りかも知れませんが……）

	死者	負傷者
警官側	七名	約六十名
勞働者側	四名	約五十名

（以上 "History of Socialism in the United States" By M. Hilquit 1910, New York and London. Fank & Wagnalls Co. 發行二二二頁より二二五頁までから拔抄）

○

こんな風に比較對照していきますと際限はありません、然しそれは徒らに讀者と編輯者を困らす丈けでせうから、山川さん流に簡單に端折つて書きますが、一番弱るのは山川さんが『アラーム』とか『アルベイテ

ル・ツアイツング』なんぞの其頃あつた市俄古の定期刊行物を『勞働者の機關紙』とされたり、スパイスやパーソンなぞを『シカゴ一流の雄辯家』に祭り上げて『雄辯を振』はせられたりしてゐることです、思ふに之れは恐らくは御存じあつての上でなされた手品(?)だらうと推察されますが、一體此の事件は『市俄古無政府主義者の活劇』としてより多く知られて居る程で、上記の兩刊行物は立派な獨逸系無政府主義者の機關紙(尤も純勞働問題に全然タッチしなかつたとはいひません、ですがそれよりか過激なアナキズム宣傳の機關として認められもし働きもしたと云ふのです)であつたことは周知の事實である筈です。勿論勞働者の中に無政府主義者のある事に不思議はありませんが、然しだからと云ふて必ずしも勞働者全部が無政府主義者だとの方程式はちと出來にくいではありませんか、でもない限り山川さんの仰せは少々出鱈目に近くなりませうし、況んやスパイス(名をアウギユストと云ひ當時三十一歳の青年十四年前の一八七二年に母國獨逸より移住す)や、パーソン(名をアルペートと云ひアラバマ州モンガモリーに一八四四年英蘭系の兩親に依り生る)など所謂『シカゴ一流の雄辯家』諸君なるものに至つては、上記二紙に關係深かつた過激な無政府主義者では無かつたのでせうか。(斯う云へば無政府主義者だからと云つて雄辯家に代りはなからうと仰言るかも知れませんが『雄辯家』としての『シカゴ一流』よりも『無政府主義者』として『シカゴ一流』だつた此の諸君をかうした通俗的記事に紹介されるに當つては、筆者としての德義上、否な讀者に對する親切から云つてもうちつと書きようがある可きではないでせうか)氣持のよい程徹底的な山川さんなどには或はお嗤ひをうけるかも知れませんが、勞働問題の解決に無政府主義的政策を加へるのはどん詰りの土壇場に至るもなほ嚴に避けたい、避く可きものだと思つて居る、今の私としては、山川さんが八時間制實施促進てふ純經濟上の勞働運動勃興を機會に、市俄古無政府主義者が行つた一飛躍を、純乎たる勞働者のみの運動であつたように書かれてゐるのは一段とへんに思はれる次第であります。

○

もう一つは此事件の結末です。山川さんに依りますと

裁判官や警官は爆彈投下の眞犯人を努めて見出さぬように極度の用心を以て探査の步を進めた。何故ならば犯人が判明すればこの八名に寃罪を着せて是等を一擧にして葬り去ることが出來なかつたからである、或る刑事は犯人の潜伏所を突きとめたのであつたが、警察は巧みにその犯人を逃亡させた、これは後にその刑事の告白に依つて明かになるまで、何人も知らなかつた秘密である。翌一八八七年十一月上の四名(パーソン、スパイス、フイッシャー、エンゲル)は遂に全く自身の關り知らぬ投彈の責を被せられて刑場の露と消えた、今一人は刑場に引かるゝ前に頭を打ちつけて自殺を遂げた、殘る三人は減刑せられて七年の間獄裡に呻吟した。超えて一八九三年剛直を以て知られた時のイリノイ州知事は、非常な困難を侵して上の事件を精査し、遂に八名に關する無罪の確證を得て、生殘せる三名を釋放した。而してその恩命の前文に彼は事件を擔當した判檢事や陪審官や警官が殘らず收賄の結果、共謀して事實を捏造し、陪審官の評決は『命令に依つて』務め作られて居たものであつたことを指摘した。

とあるのですが、これを又も手許の參考書と併せて見ますと此事件はスパイス外七名が被告でジョゼフ・イー・ゲエーリー判事の下に六月二十一日(一八八六年)から裁判開始され四十九日を費やし終つたのですが、彼等は山川さんの仰せのように爆彈を投じて直接警官を殺した罪には問

はれず、檄文及び演説を以て爆案を激成し遂に此の暴擧にいでしめ間接に警官數を殺すに至らしめたとのかどで有罪の決定を陪審官が與へ、次で山川さんの記るされたと大同小異の判決、絞刑、最期の頭を打つけて自殺したと云ふのは彈包を咬へて爆發せしめ自殺した最年少被告當時廿二歳のリンダの事かと思ひますが……)を遂げた事になつて居りますから、最初から『眞犯人を努めて見出さぬよう』冤罪を着せて一擧にして葬り去る』可く努めたなぞと云ふ事は〃がわからなくなるのです。尤も事件後六年ジョン・アルトゲルド氏がイリノイ州知事に當選就任した際、獄中に殘つてゐたシュワツブ外二名を特赦するのに當つて、發表した理由書にはゲエリー判事の陪審官選任手續の違法、證言の欺瞞其他を擧げ、當時の裁判は公平無私秋毫も缺點無しと見る能はずと記るされてありましたが、之れに對しゲエリー判事は堂々辯明書を出し、立場を明かにしたといふ風に書いてあります。斯うなると益々何が何にやら判らなくなりますが、コムモンス教授以下多數の米國專攻學者等が何彼の都合で(恰も山川さんが無政府主義者の運動を單純な民衆運動でもあるかに手心を加へたように)申合せて『勞働史』や『社會主義史』その他の著述を故意にごま化して書いたので無い限り、何うも山川さんの書かれたところが失禮ながら川鱈目のように見えてなりません、尤も山川さんに立派な反證が上りましたら、水掛論の押問答とは違ひますから私はいつでも喜んで謝りますが——。

○

途方もなく長くなりました。此邊で擱筆したいのですが何か結論のようなものを附けぬと少々尻くゝりが無さ過ぎて、自分ながら無責任のように思はれますから標題にちなんでなぜに山川さんの此一文が不眞面目に思はれたかを記します。前にも一寸かきましたが、凡そ勞働問題等に喙ばしを入れる程のものは無政府主義乃至サンヂカリストの口吻を學び或は感情に驅られて徒らな打ちこわしのための打こわしを鼓吹し、煽動するようなことは嚴に愼しむ可きだと思ふのです。尤も御本人が無政府主義乃至サンヂカリズムを信奉され、之れでなければ勞働問題は解決不可能なりと云はるゝならばこれは全然別問題です、形たりとも一個人の思想、何人のあつて之を拒ぐるの力を有せざるは云ふまでもありません。ですが私ども——少くとも私は今迄居た米國のそれに比較して何點も見ますも『之れが自分の生れた國か』と呆れぬ日とては無いのですが、さりとてその半面、あきれゝばあきれるだけ層一層、此國、わが祖國の爲め、將たわが同胞のため、微力を捧げその進展過程の捨石の一つとなりたいとさへ思はずには居られぬのです。それと同時に胸奥に浮ぶのは日本の國體てふ一事です、名ばかりの立憲君主國で朝野を通じ恐縮せざるを得ぬことだらけではありますが、と云ふて萬古不易の君主國であることと、その國の民として、その國を祖國として生れた我等であることは確固不拔の事實で、一切は之れを前提とし、之を基礎とし、急がば廻れ主義で順を追ひ理想の境に近附く可きだと思ひます。況や社會は私達無産者階級ばかり(自慢ではないが私は働いても喰へぬ仲間に加はる光榮を有する一人です)の社會ではありません、資本家中の頑迷度し難い我利々々亡者も同胞の一人なら、おかしな政府當局の指示するところに從がつて喰ふや喰はずの俸給を頂戴したさに犬馬の勞を盲目的にやつてゐる憐れな警官乃至其他の安官吏諸君も矢張り國民の一人です、そこで私は山川さんのやうに

然るに一度大戰の勃發するや『國際戰爭の如き誘惑的に依て決して惑亂せられざる』筈であつた勞働階級解放の信念は、無殘にも愛國主義の馬蹄に踏みにちられてしまひ、各國社會黨は擧て仇敵視せる

資本家政府の爲に、犬馬の勞を取るに忙しくて休止の姿となつた。と云ふような國際主義を基礎に横に階級觀念否な階級的敵愾心をのみ擴ぐるを排し、國體乃至國本の嚴存を前提とし、依然古るくさくも國民主義（ナショナリズム）或は民族主義を基礎に漸々各階級の公平平等なる福利の享受を如實にする可く相戒め相偕に努む可きだと思ふのです。斯う云へば歐米先進國が過去に有する歴史と日本の現狀とはそんな間鈍こしい願望の徒らなる空想には過ぎぬと語るでは無いかと仰言るかも知れませんが、革命や打ち毀し等は決して急ぐに當りません、その到來するの日が來れば如何に强力な政府があつて周到な抑壓制止を加へるとも何の力もありません、否な打ち毀しや革命は一二淺薄輕浮な煽動家の言論文章ぐらいでは起りつこなく、之をなす者の上にザア・カイゼル一流の政府があつて彼の如き政治を施こしてくるに越したことはないのです、果して然りとすれば我等荷しくも勞働問題其他諸般社會的問題等に筆を染めるほどのものは、政府者、資本家輩の頑迷固陋を矯むべく努力する一方、我等無產階級或は勞働者の間に往々起りがちな輕擧盲動（條理の通つた理由の下に整然として行はれる同盟罷工は含みません、サボタージュや打ち毀しアナキスト一流の暴動、暴行即ち爆彈や燒打騷ぎを指します）を戒しめ（換言すれば純乎たる經濟問題の範圍に於てのみ解決するよう）彼の歐洲の苦い經驗を能ふ限り避けつゝ理想の境に一步近附くの大覺悟を要とするのでは無からうかと思ふのです、否な終局に於て或は理想のまゝに出來ぬまでも證つて見るべきだらうと確信するのです。

○

以上の如き所信を持つ私は山川さんの如き當代日本に於て最も有力な婦人論客として翹望されているお方が、故意か偶然か事實を抂げて（或は修飾して）迄で、社會運動の犧牲者とだに云へば一切が人道の勇者尊き敬すべき志士仁人であるかのように、無批判に祭り上げ擔ぎ上げられるのは不眞面目も甚だしからうと思ふのです、まして御文章の最後の一節にある

この運動に依つて勞働者が直接利益を獲得した例も枚擧するに遑がない、特に官憲の壓迫が甚しく、隨つて騷擾が激烈であつた地方ほどその成績は一層見る可きものがあつたのである。

の如きは全然嘘だとは申し上げませんが、八時間勞働制實施促進運動の最殊勳者の一人を以て許さる可き現米國勞働同盟聯合會長のゴムパース氏（過激派めいた立場にある方はゴ氏を以て資本家の傀儡と云つて居ります、併し米國勞働者の大多數は氏の功績を認めて依然推服して居ります）が此市俄古の無政府主義者騷動のあつた當時次の如く語つて慨嘆したとの事です。曰く、

あの爆彈の効果は單に警官を殺したのみに止まらなかつた、同時に亦たその年（一八八六年）から以後數年の間我等の運動（八時間勞働制實施促進運動）をも一緒に殺してしまつた、別に我等はあの連中（無政府主義者の徒）と絕對的に何の連絡もなかつたのだが：：（" History of Labor of in the United states " p. 386）

と、それから亦その事件當時市俄古附近の民心は可成り猛烈に激動し、非常な憤慨と憎惡が無政府主義者の上に注がれ、飛ばつちりは輿論の同情をして勞働者側に少からしめたとか、氣のよい民衆諸君は上調子な煽動家の筆の尖や口の端に乘ぜられて多くの場合斯うした調子に欺かれて苦い目に遭ひがちなのであります、私は以上を山川さんの記憶の隅にとゞめて頂く事をお願ひして此の一文を結びたいと存じます。（六月二十九日）

新妻氏の所論に答へて

山川菊榮

〇

改造社からの折角の御申越に依り、簡單にお答へ致します。

一、五月一日が各國勞働階級の威力を示す爲めの、共同の祭日乃至記念日となつて居ること、そして此五月祭の起原が米國に於ける八時間勞働要求の示威運動に端緒を發したといふこと、是れ丈けのことに就ては何人も異議の無いことかと思ひます。それで新妻氏の御論點は、その五月一日は勞働祭又は勞働記念日と稱すべきものではない、米國全洲に亙る法定の祝祭日たる勞働祭は別にある、即ち毎九月第一月曜だといふことに歸着するらしく考へます。

成ほど法定の祝祭日といふ意味からは、九月のレボア・デーの方が一般的であるには相異ありませんが、ここでは法定の祝祭日のことを云つて居るのではなく、八時間勞働に關聯した記念日のお話をして居ることを御記憶願ひます。九月のレボア・デーは、八時間勞働獲得の示威運動とは、何の關係もありません。

そこで新妻氏の御論點は、詮ずるところ五月一日を祭日とか記念日とかいふ用語が妥當であるかないかといふことに歸着するようであります。八時間勞働の獲得、又は勞働階級の威力を示す世界的共同の定日を『祭』とか『記念日』とか云ふのは當らぬと仰せになればそれ迄ですが、日本では簡單の爲めに『五月祭』とか『勞働祭』とか云ひ做はれて居るのです。之は本年五月幾日かの新聞を御覽になれば、巴里及び米國邊のメーデー示威運動のことが『勞働祭』といふ大見出しで報導されて居ることにお氣付きになりませう。

新妻氏は『社會主義大會の決議以來、五月一日を以て過激な示威運動の行はるゝ吉例のあつた事は事實です、然しホーリデー即ち祭日と此日を以て決めた國のあることは、私の寡聞未だ之を耳にして居りません』と仰せになつて居りますが、仰せの通り、八時間勞働要求の示威運動の日を、法律で五月一日と決めた國はまさか無いようです、メーデー示威運動は、正確に一日には限らぬといふことは事實でありますが、大まかに五月一日と云ひ來つて居ります。

二、一八八六年に行はるべき總同盟罷工の協議を、一八八四年の代りに一八八五年としたのは確かに私の見違ひであります、御訂正を感謝します。之は私の用ゐたA・F・Lの歷史にも四年となつて居ります。

三、シカゴ事件の發端に就て間違があるといふお言葉ですか、無いとは限りませぬ。けれども其れと同時に、基督教信者が聖書の無誤謬を信ずるのと同じ態度で、『米國勞働史』に據して勞働運動の一切を裁判することは少し恐縮です。私の使つた材料にも間違が含まれて居なかつたとは限りません。けれども一方『米國勞働史』が如何なる材料に依て此事件を記述したかは疑問と存じます、恐らくは政府や警察側の報告に基づくの外無かつたらうかと思ひます。そこで私の使つた材料に誤があるとしても、此事件に對する大體の見方に於ては、一層よく勞働者側の印象を代表して居るものと信じます。

總てこの事件に限らず、警官と勞働者との間に衝突があつた時、その事實を双方で記述したならば、兩者の間には常に大なる事實の相異を生ずるに極まつて居ります。之は故意にする事實の捏造といふことよりも、寧ろ双方の立場の相異から避け難い結果と考へます。此場合に警官

の報告は一層精確であるかも知れませんが、勞働者側の記事は、一層よく勞働者側の感じを代表して居るものと思はれます。

何ほ證據人として引用されたヒルキットもハンターも社會主義者とは云ひ條、ヒルキットの態度は御承知の通りですし、ハンターの著書に至つては、自分より多少急進的な色彩を帶びた者に對しては、人物に主義に全然資本家と同じ立場から批難攻擊を加へて居るのですから、單なる史實としては最も注意を以て見らるべきものであることは、申上げる迄もないことゝ心得ます。

四、シカゴ事件は、單に二三無政府主義者の飛躍と見るべきか、それとも八時間運動の歷史中の一挿話として見らるべきものであるか、又その效果はどうかといふことは、畢竟見る人々の立場の相異で如何ともすることが出來ません。無政府主義者の參加した運動や、その横斷を、勞働運動の本流と沒交涉なものと見るべきかどうか、社會運動の犧牲者を人道の勇士として弔することとの是非なども、同じくお互の立場の相異に基くことで奈何しても致方がありません。新妻氏と異つてゴムパースを『資本家の傀儡』と見る人々の立場から云へば、彼が如きを勞働運動の『殊勳者』として『無批判に祭り上げ、擔ぎ上げられるのは不眞面目も甚しからう』と云ふまいものでもありません。民衆の眼から見た志士仁人が爲政者や富豪の目に法規を紊る暴徒と映ずるのも珍らしいことではありません。シカゴ事件に對するゴムパースの批評なども、立場立場で如何とも見られます。然し濫に彼を批難して過激派呼ばゝりされるのも聊か迷惑につき、其邊はどうとも御判斷に任せます。

何ほサンデイカリズムや無政府主義や民體に關する御高說は唯だ〲謹んで拜聽致しておくに留めます。

遊興費五億萬圓

△東京市はいよ〲來年度豫算に、遊興税、自動車税倍加、案を提出することとなり いよ〲眞劍に調査の步を進めつゝある△サテその遊冶富家の遊の額なるものを調査して見ると日本全國中約九億圓に上るとは驚くべきものぢや △現今では日本全國中京都市のみが、遊興税を徵收することになつてゐるが來年よりは東京市も遊の税が徵收さるることとなるのである △勿論料理店、待合等の每夜の勘定に電車の通行税と同じ意味で徵收さるゝから、遊興費も一割方は膨脹すべく豫測される △何がサテ一割や二割の税金を取つた所で、華族や、成金なぞには一向に應へぬから、東京市の方では寧ろ九割位の税金を徵發してもよいといふ素日公もある △しかし、市側では五分から一割の間に見當をつけて居るらしいから、成金や富豪どもも聊か安心してよい △そして東京市の一年中の內輪の遊興費が內輪にみて、ザット四千九百萬圓、これから一割の税金を徵收すれば四百五十萬圓、五分なら二百二十五萬圓である △しかし精密に調査したら六千萬圓以上あらふとは市當局の直談であるが內務省でも、市の方針には贊成らしい △そして日本全國中の遊興費の略算は約五億であるから、一割の税金を附加するとせば新に五千萬圓の財源が苦もなく生れるはづである △大阪市や名古屋市、神戸市もソロ〲調査の步武を進めつゝありと云へば、何れは花柳界に一問題を惹起することだろうが結局は泣寢入りだろう。△それから自動車税金も二倍になるべく東京市側では決定した、自動車あたりに乘る成金なら、三倍ダツて敢えて、辟易するものでもあるまいが△しかし、小資本の營業者には、何とか都合よい法案で、酷くいぢめぬ ことになるだろうとの話

咬豆茶話

△巴里の後藤新平は、或筋からの電報で、急に歸京することになつたらしいが、そう云ふと、内閣の雲行も何だか怪しくなつたらしい。或る筋とは杉山茂丸か伊藤巳代治の一人ではなからうかとの噂がある。物騒〳〵。

△對支問題や對外問題に對して、田中陸相が腰が弱いといふので、硬骨の將官連は、悲憤慷慨して一の秘密集會を催ふしたとの說がある。その言分によると、田中は自分の榮達のためには、陸軍の總てを犧牲に供するをも厭はぬといふにあるらしい。何にせよ、陸軍部内の排内田、排田中黨は、案外に根柢のあるもので、これがために、内閣の一角に龜裂を生ぜぬとも限らぬと觀測するものがある。

△德川頼倫一派の研究會入會は、可なり上院の空氣に緊張を加へたばかりでなく、政府では、あまり我儘を各方面に通じて働いたので、何だか恐しくなつたと怖氣づいたものもあるが、ナーニ德川家は政府の味方だよとの樂觀するものもある。研究會が德川君の頤使に甘んずるかは疑問である。

△今回の巴里の講和會議に調印した華族が六名ある。それは英吉利のミルナー還還のプリンスが二人、それから西園寺、牧野、珍田等で、華族の數だけは過半數であつた。尤も伊國のソンニノ男もあつたが、これは半ばから脫退同樣だから省いた。貴族崇拜は取り殘されたる骨董國のやうで、寂しい。イヤナ感じを與へたよとはさる外交官の話。

△全世界中尤も野蠻な民族は、朝鮮在住の日本官吏だらう。『改造』の如きも發送した雜誌の八九分通りは、常に未着で、營業上骨に徹するの苦痛を嘗めた。非立憲の張本、長谷川總督が罷めたので、先づ萬歲を三唱して置う。

△第十二師團長大井成元はいよ〳〵、浦鹽軍司令官たるに決定した。彼は珍しく頭腦の透明な男で、そして土性骨の硬い男だ。桂太郎には寵愛されたが、少量狷介の寺内からは、酷く嫌はれて、何時も田舎廻りを餘儀なくされたものだが、待てば海路の日和とやら、遂に軍司令官の地位に漕ぎ付けた。

△元來が、長閥出身だが、出身が小藩とかで、鄕黨からも重要視されなつかたものだが。三浦觀樹の如きは、彼を以て長州出身中の第一人だと、賞めちぎつて居たゲナ。

△遞信省の貯金奬勵も結構だが、小學兒童への強制貯金は無意味、否有害なものだ。小學兒童は一厘ダッチ儲ける道はないのに、親爺や、拼せ婆々の脛をかぢつて一錢、五錢と貯金するのだ。それで勤儉とか、正直とかの德育を遣るのだから、今の教育は矛盾も太甚しい。

△先月だつた、モウ少し小學生の貯金を奬勵してくれろと遞信から文部へ移牒すると、流石の文部もこれには弱り切つて拒絶してやつたそうだ。コンナ不眞面目の貯金が一億や、二億殖えて見たところで、國民は決して強くなるものかと、某政治家が憤慨していた。



新聞職工の罷業
同盟休刊の批判

桐生悠々　小川未明
戸田博士　惠美東臺
松井柏軒　和合亭人
岩野泡鳴　横山勝太郎

新聞職工の同盟罷工と新聞財政の改造

桐生悠々

□

歐洲戰爭を起點として、有らゆる方面に於ける世界の改造は正に準備され、正に實現されつゝある。如何に東海の天に孤立し、桃源洞裏、虚僞なる平和の夢を貪つて居た日本と雖も、いかでか此の世界的大潮流に押流されざるべき。最近到る所に續發して、貪婪飽くことを知らざる資本主義を威嚇しつゝある同盟罷工は、卽ち産業上に於ける此世界的改造に、單に一指を染めたるに過ぎない。勢の趨く所、如何なる邊に達すべきかは、一に資本家及び政府の、これに對する態度如何によりて、決せられるのである。最近東京に演出されたる新聞印刷職工の同盟罷工の如きは、卽ち其一例であつて、新聞紙が社會の公器であり、而して平生同盟罷工に對して、大部分これを是正しつゝあつた關係上、世人はこれが解決に對して、一齊に、新しき何物をか期待する所あつたが、彼等は總に世人の期待を裏切つて、勞資俱に昔ながらの無自覺にして、時代錯誤の態度を暴露したのは、私共新聞事業にたづさはつて居るものに取つて、實に遺憾千萬なことであつた。かうして私共新聞同業者は此無自覺にして、時代誤錯なる態度の手前、社會に對して、最早顏向が出來なくなつたのである。

□

東京新聞印刷職工の同盟罷工に關しては私共地方に在る者は固より其眞相を明にしないから、以下論ずる所のものは穿つて詳ならざるの譏あることは無論の事であるが、而かも其結果よ

り見て、職工側に何等其要求を貫徹したるの跡あるを見ず、特に新聞社經營主の側に於て、將來續發するの虞ある同盟罷工を徹底的に解決せず、一時を彌縫し、依然として勞働の不安を貽したるの點に至つては、二者其愚を一にして居ると云はなければならぬ。

先づ職工側より、これを論ぜんに、彼等の要求は實に合理的であつた。啻に合理的であるのみならず、時代の要求に合致したものであつた。最低生活費の七十圓を保證すべき賃銀、及び八時間勞働の二部制は、ヴェルサイユ會議に於て決議されたる國際勞働協約の精神其儘を實現せんとするのであつた。國際勞働協約の條項を合理的と見、時代の要求と見るものは、何人たりとも、彼等の要求と主張を是正するであらう。私共は當初これを許るしたるときには、日本の勞働者とても、今日では抑々馬鹿にならないと思つて、我產業界の爲、實に人意を强うしたのであつた。特に彼等は勞働者中の智識階級であり、其職業上絶えず泰西の新思想に觸れつゝある結果、斯うした大膽にして新しき態度に出でたのは固より其所であるとして、徐ろに微笑を禁じ得なかつた。然るに彼等は此期待に裏切つて、僅々四日間を經ざる間に、早くも資本家の爲に屈服して、社會主義者の謂ふ所賃銀奴隷を以て自ら甘んずるに至つた。

□

罪は固より制度に在る。世界の大勢が勞働組合の必要を認め而かも大仕掛にして、且つ其結果の最も鞏固なる勞働組合の存在を認めて居るに拘らず、日本の政府のみが、獨り治安警察法第十七條を存置して、我勞働者に組合の創設を許さざるは、言語道斷の妙法である。此勞働組合が許されて居なかつた爲に、彼等が罷工間の生活を維持すると能はず、我に於て類例なき大仕掛の同盟罷工を宣言せるに拘らず、四日間を出でざる間に、早くも降を資本家の軍門に容れなければならなかつたのである夫に就けても、私共は思ふ、無準備の同盟罷工、卽ち勞働組合のない同盟罷工には、何等の效力なきは勿論、其結果は徒らに產業界の秩序を攪亂し、延いて一般社會に損害を與ふること、實に多大であることを。彼等の心情と周圍には固より已むを得ないものがあつたであらう。併しながら、たとひ如何に已むを得ない事情があつたにしろ、同盟罷工、而かも我に於ては、併て類例なき大仕掛の同盟罷工を敢てしながら、これが對應策たる資本家のロックアウトに一喝を食はされ、忽にして其旗を捲くに至つては餘りに意氣地なく、又餘りに輕卒の業であつたと云はねばならぬ、彼等にして一齊に同盟罷工を宣する以上、資本家にても負けては居らず、强硬なる態度を取り、場合によつては、反擊の手段として、今回見たるが如きロックアウトの擧に出づべきとは、豫め彼等の覺悟しなければならぬ事ではなかつたらうか。而して現在に於ける彼等の生活狀態を以てしては到底久しきに亘つて罷工を繼續すること能はず、特に資本家の

鞏固なる團結に基くロックアウトに遭遇すれば、到底これに應戰することと能はずとせば、彼等は同盟罷工を宣して、直にこれを取消すが如き陋に出です、別に平和的なる手段を講じて、資本家に要求する所あつて然るべしである。無智なるが爲に、此擧に出でたのか、夫とも資本家を見縊つて此擧に出でたのか、私共は固より其間の消息を知らないが、いづれにしても無準備にして、輕忽なる、同盟罷工を企てたるの一事に至つては、愚及ぶべからずである。

二

かくて彼等は此愚の爲に、一般社會に言ふべからざる損害と不安とを與へた。彼等が同盟罷工の結果として東京市には兎に角二三日の間は、一枚の新聞すらもなかつた。かくて帝國の首府は一朝にして眞暗闇となつた。市民は新聞を手にしないが爲に、日に變り行く社會の活事情を知ること能はず、先づ不安の念に襲はれ隨つて、これに對應して爲すべきことをも爲す能はず物質的、精神的に損害を被つたこと、實に若干なるを知らなかつた。

東京新聞の印刷職工は斯うした不安と損害を與へたることに就き、東京市民に對して連帶の責任を負はなければならぬ。然り、私共は斯うした無謀なる同盟罷工を以て、近代的犯罪中の最主要なるもの〻一と斷ずるに躊躇しないのである。近代的犯罪の如何なるものかは別問題なるが故に、其詳論はこれを他日に讓り、こ〻には唯其特徴の一二三を擧げて、以て勞働者及び一般世人の注意を喚起すると共に、今回企てられたる印刷職工の同盟罷工が一の立派なる近代的犯罪であると云ふ概念を明にしたいと思ふ。

近代的犯罪の第一特徴は、舊式の犯罪が一見何人が見ても以て犯罪と思惟するに足る獰惡なる事相を備へて居るに反して、これは世人の信用又は自己の權利を濫用し、若くは時代が認めて以て正當なる行爲となし、思想となす所の犯罪を、何人にも遠慮會釋なく、安んじてこれを行ひ得るに在る。第一の特徴は舊式の犯罪は其被害が個人的に一定して居るに反して、これは個人的に一定して居ない、即ち、Impersonalなるの點に在る。

印刷職工の同盟罷工は何等の殺傷を出さない、極めて平穩なる手段である。而して此權利若くは行爲は時代が認めて以て正當とする所のものである。それ故、印刷職工は安んじて、何人にも遠慮會釋なくして、これを斷行した。而して其結果は如何と云ふに、これが爲に損害を被つたのは獨り新聞社の經營主のみではない。東京市民の大半は擧げて其損害を被つた。近代的犯罪にあらずして何であらう。恰も官公吏の瀆職罪が、平生其權制若くは權政を行ふ際に行はれ。人々見て以て怪しまざるに拘らず、其被害が何人と限られずして、不定なる社會多數の人に及ぶが如くに。而かも印刷職工にして當初の主張を貫徹すべく、何處々々までも罷工を繼續し、新聞社經營主側をして、其

軍門に降服せしめたならば、一時は社會に不安と損害を與へたとしても、これによつて永へなる産業界と社會の平和を買得るが故に、一部其罪惡を償ひ得るのである。然るに彼等はこれを敢てし得なかつた。彼等の時代的犯罪はこゝに於てか、益確定するに至つた。

□

次に新聞社經營主側に就いて見るに、其思想と行動の頑冥にして、昔ながらの專横的態度を取り、産業の一大要素たる勞働者を謂ふ所賃銀隷奴視するの時代錯誤的なるは勿論、是亦一時を彌縫して、永久的なる會社經營の基礎を固むるの好機會を逸し、近き將來に於て、小なるものは終に其業を廢止しなければならぬ悲境に陷つたことを知らないのは、實に憫笑に値ひすと云はなければならぬ。

先づ彼等は職工より賃銀の値上を要求されたるとき、何が故にこれと妥協すべく、最善の道を取らなかつたか。最低賃銀の七十圓及び勞働八時間の二部制が、到底經濟の許さゞる所と見るならば、彼等は何が故に事情を打明け、會社の財政を公開して、勞働者の同情を請はなかつたか、暗がりに置かれる雇人は決して善い雇人とはならない。これに反して明るみに置きさへすれば、雇人は必ず善い雇人になるものである。彼等は職工の心理狀態を知らなかつた。賴むと云へば、賴まれるべく雇主よりも俠氣ある、而して聰明なる雇人の美しい氣分を知らなかつた。是が彼等の第一の失敗であつた。況や最低賃銀の七十圓と勞働八時間の二部制は、前述の如く世界が公認した國際勞働協約の條項を勞働者彼等自身が實現せんとするものなるに於てをや。時代の進運と諸物價の騰貴は、東京市に於ける勞働者の生活を向上せしめ、最低賃銀として七十圓を得るにあらざれば、彼等は最早人間らしき生活を營むことが出來なくなつたではないか叉日夜營々として働き、僅少の餘暇をも與へられなければ、勞働者は其精力を費ひ盡くし、其結果勞働の能率を減ずると共に彼等は其餘暇を利用して精神的に自ら向上開發するの望なきが故に、是亦勞働の能率を減じ、延いて高き生産を期待する能はず、資本はこれが爲に却つて不利益なる惡影響を來すのみならず、文化の向上も亦これが爲に阻止するの虞あること論を待たぬ新聞の經營主にして、此間の消息を明にするならば、彼等は此場合如何なる犧牲を拂つても、職工の要求を容れ、これによつて勞働の能率を高めねばならなかつたのである。然るに彼等は事茲に出でずして頑冥にも各社結束して、ロックアウトを斷行した。此時代錯誤の甚しきものであるのみならず、勞働組合なく、隨つて罷工間生活維持の資に窮する勞働者が久しからずして、彼等の前に屈服することを豫想して、斯うしたロックアウトを斷行したのは、ロックアウトの性質上正に然るべからざることは勿論の事であるが、實に殘忍酷薄なる事である。

□

果然、生活の貧に窮した彼等職工は、大膽なる同盟罷工を宣して、僅かに三日間を經過したる後、新聞社經營主の思ふ壺にはまり、續々來りて其復職を哀願した。經營主側が十萬圓の違約金をすら約して結束したる鞏固なる資本家の團體に、明日の生活費にすら窮する職工が、無條件同様に降服して、講和を哀願するに至つたのは、是非もないことではあるが、斯うした弱い者苛めの殘酷なる所業は、人道上斷じて容すべからざる大罪惡である。新聞社經營主側は啻に斯うした容すべからざる一大罪惡を行つたのみならず、益職工の弱味に附け込みて、勞働時間の短縮に關しては絶對にこれを拒絶し、唯僅少なる賃銀の値上を許し、而して其誓約の一條項として、今後は如何なる名義と雖も、斷じて同盟することを許さない旨を、勞働者に強いたのは、事實不可能なることを誓約せしめたるの愚を免れざるのみならず、其思想の如何にも時代錯誤的にして、封建時代其儘の頑冥固陋なる點を暴露したのは、世人の擧げて嗤笑して居る所である。

勞働組合の組織は今や世界に於ける産業界の大勢である。天下の新聞紙、特に東京の新聞紙は少數の例外を除き、擧げて此大勢に副ふべく、平生勞働組合の必要を絶叫し、治安警察法第十七條の撤撥を主張しつゝあつたではないか。然るに自己の足下に火がつくに至つて、急遽其主張を一變し、如何なる名義と雖も、同盟を許さゞる旨を勞働者に強ふるに至つては、餘りに利己的に餘りに撞着の甚しきものと云はねばならぬ。尤も新聞社の經營主と評論に筆を執る記者とは、多くの場合に於て、其人を異にするは勿論のことであるが、經營主が平生斯うした評論の新聞紙上に現はるゝことを默許し、或はこれを明に認めて居ながら、自己の利害に關する問題となるに及んで、卒然として此默許明許を裏切り、延いて社會に對する新聞紙の權威を失墜するが如きは、正しく新聞紙の自殺である。又此の如き經營主此の如き資本家の下に在つて、或は評論の筆を執り、或は報道の筆を執り、若くは編輯に從事して居るものが、これが爲に平生の主張を無視され、其言行を二つにされながら、何等の不平不滿もなく、今尚これに頤使されて居るのは、奇怪至極の事と云はねばならぬ。私共は東京新聞の印刷職工が其要求の容れられなかつた爲に各社相率ひて、大仕掛の同盟罷工を斷行したことを許るした。而かも平生職工よりも智識あり、且つ品位あり、人格あり、從つて社會上の地位が遙に其上にあることを自覺し、自任し居る新聞記者が頑冥にして利己的なる此種の經營主によつて其主張を無視されたることを憤慨して、同盟罷工を敢てしたとの報には接しない。否、個人的に其職を辭したるものすらも、未だ發見しない。新聞紙の權威は茲に二重に失墜し、而して新聞紙は茲に二重の自殺を遂げたものと云はねばならぬ。

□

東京各新聞の印刷職工は相率ひて、同盟罷工を企てた。而し

て東京各新聞の經營主も亦これに應戰すべく、相率ひてロックアウトを斷行した。かくして東京市は一時暗黑界と化し去つた當時市民が如何に不安の念に驅られ、如何に其方向に迷ひ如何に其生活の寂寥に苦んだか。而して如何に消極的なる新聞紙の難有さに味到したか。私共は今其事實を一々列擧するの煩を避けて、東京新聞の休刊中、地方新聞の一枚賣が十五錢と云ふ法外の高價を以て、賣買されたと云ふ一事、唯此一事を擧げて以て其間の消息を最も雄辯に語らせたいと思ふ。然り、新聞紙は今や生活の必須品である。市民の生活には一日もなくてはならないものとなつた。果して然りとせば、新聞社の經營主は何が故に、市民が新聞紙の難有味を消極的に味到した此機會に於て其商品の徹低的なる値上を斷行しなかつたか。此徹底的値上を斷行して、而して國際勞働規約の條項に基く。彼等職工の合理的にして、且つ時代の進步に副ふたる要求に應じ、一方勞働界の不安を醫し、其能率を增進すると共に、新聞事業界の平和を實現し、新聞紙の賣上代金其物を以て會社自身の營業を確立し、維持し、而してこれを向上發展せしむるの計畫を樹てなかつたか。私は實にこれを不思議とし、且つこれ齒痒く思つたものゝ一人である。彼等は禍を轉じて福となすの途を知らなかつた。否、爲し得るの能力と聰明とを有すべく、彼等は餘りに狼狽し、驚愕し、硬化し、且つ時代錯誤的であつたのである。

□

新聞紙は社會の公器であると共に、一方に於ては商品である。商品である以上、普通の營業的、經濟的、對政的原則によつて支配されなければならぬこと論を待たぬ。然るに、現在の新聞紙は夫自身の營業によつて維持さるゝべく、餘りに變態にして而して餘りに沒常識なる營業的經濟的原則によつて支配されて居る。是我國に於ける新聞紙の權威や、品位や、信用や、價値が餘りに低くして、且つ其發達向上を見ざる所以である。

新聞紙は社會の公器であるに相違ない。併しながら、夫自身に營業し、夫自身に利益を得るにあらざれば、到底存在することが出來ない。恰も國家の官公吏が社會の公器でないに拘らずこれに相當の俸給を與へて、其生活を保障しなければ、其存在を見ること能はず、賄賂其他の不正事情によつて、一身を支へなければならぬやうに。然るに新聞紙は社會の公器として、唯僅に營業税を免除されて居るのみであつて、夫以外には國家より何等物質上の報償を與へられて居ない。是新聞紙が其編輯以外營業上に大活動を爲さねばならぬ所以である。然り現在に於ては新聞紙の興廢は新聞紙の性質によつて岐るゝよりも、寧ろ營業の巧拙によつて岐れて居ると云ふも、決して過言ではない。

新聞紙が斯くして社會の公器と云ふよりも、營業品商品として取扱はれねばならぬことが決定さるゝ以上、原料に勞働と資本力とが加へらるゝに從ひ、其價を高くしなければならぬのは、經濟上の原則である。然るに、現在の我新聞紙は此原則を無視

して、法外なる安價に賣捌かれて居る。東京新聞の最高價なる者すらも、一個月六十五錢と云ふ安値で賣られて居るではないか。而かも、これは謂ふ所安價であつて、實際には今一層安く賣られて居る。特に靜岡等地方新聞と競爭する範圍に於ては四十錢、三十五錢の安値をすら唱へて居る。斯うした狀態で、東京の諸新聞は、何して夫自身の營業で立ち行くとが出來やうか特に近代に在りては、編輯費。通信費、營業費等は、時代の進運に伴ひ、益増加するの傾向あり、これ等の費用を惜めば、激烈なる新聞紙界の競爭場裏廢滅の運命を擔はなければならぬ。而して費用を惜まず、新聞紙に金をかけるもの例へば大阪の二新聞の如きが、年を趁うて益隆盛の域に赴くのである。

現在の新聞紙が如上多大の編輯費、通信費、營業費を投じながら、其最高價なるものすらも一個月漸く六十五錢であつて、何して其營業を維持して往くかと云へば、是は言ふまでもなく普通の場合に於ては、廣告代を以て其缺損を補つて居るからである。新聞の經營より廣告代を除外して論ずれば、新聞紙を多く賣れば、賣るほど新聞社の缺損たるのは、是皆世人の承知して居る所である。これと同時に、廣告代が多く上れば上るほど會社の利益が多くなり、利益が多くなれば多くなるほど、會社は、これを編輯費、通信費、營業費に投じ得る故に、其會社の發行に係る新聞紙は益其聲價を高め、廣告代もこれに伴ふて亦益高くなり、二重に會社の基礎を堅實ならしめ、其新聞紙は彌が上に向上し、發展するのである、併しながら、斯うした幸運に在る新聞紙は、先づ指を屈するに過ぎぬ。爾餘の多くは、或は權勢に阿附して其補助を仰ぎ、或は富豪に阿つて其寄附を仰ぎ、漸く其經濟を維持して居るとは、亦世人の夙に承知して居る所であらう。甚しきに至つては、紳士淑女の缺點を漁り、これを脅喝取財の種となし、或は廣告代の名義の下に十圓、二十圓の寄附を哀願し、强請して、漸く其日を暮らす新聞紙すらもある。新聞紙の權威や、信用や、聲價が日を趁うて失墜し往くは怪しむに足らぬ。

□

是皆新聞社が夫自身の營業によつて立ち往ける結果より生ずる所の罪惡であり、不利である。新聞紙の興廢が營業の巧拙によつて決定すると云ふ一事すら、編輯者の堪へ能はざる所であると共に一方社會の公器たる新聞の性質上、全然矛盾した事である。斯くして新聞紙に於て最權威すべき編輯が營業に隷屬するに至れば、編輯者は動もすれば其獨立性を失ひ、新聞紙の權威や、信用や、高價が地に墮ち去るのは言ふまでもない。是私共の業に既に忍び能はざることなるに、搗て加へて、自己の生活費、最低の生活費を得んが爲に、種々の悪辣なる手段を講ずる惡德新聞歳と共に增加し一般としての新聞紙の權威や、信用や聲價が世人の爲に甚しく値踏されつゝあるのは、私共の斷じて忍び能はざる所である。畢竟新聞紙の代價が餘りに安價にして

夫自身に營業し能はざる變態にして、且つ沒常識なる經濟によつて餘儀なくされて居る結果である。それ故、現在の新聞社は或時期に於て、新聞の値上代金其物によつて經營し得らるゝ程度にまで、其徹底的値上を斷行しなければならぬ。言ひ換へれば、各新聞社は從來の囚はれたる變態にして、且つ沒常識なる經濟狀態を一變して、これに根本的なる財政的の改造を加へなければならぬ。歐洲戰爭を一新紀元として、世界の有らゆる方面に於て、今や正に改造が加へられつゝあるに拘らず、新聞社の財政のみが獨り依然として舊態を維持し、これに根本的の改造を加へたるは、時代錯誤の甚しきものである。彼等はこれによつて或は一時の安を偸み得るかも知れないが、斯うした姑息の手段は永久に續くものではない。少くとも健實なる手段ではない。而して如上新聞紙の徹底的値上を斷行し、新聞社の財政に根本的大改造を加へるとは、東京各新聞の職工同盟罷工と、これに次ぐ各社のロックアウトがあつた爲に、東京市が忽焉として闇黑界に化し去り、市民が消極的に、新聞紙の難有味に味到したる際こそ、實に又なき好機會であつたのである。然るに彼等は終に此機會を逸し去つた。私共は當初東京の同新聞が休刊を宣言したるとき、此休刊はならうとならば、少くとも一週間或は二三週間繼續されることを希望した。何ぜなら、新聞紙の休刊其物によつて。市民と國民が消極的に新聞紙の難有味に味到するならば、彼等は容易に新聞紙の値上に贊成する可能性を生ずるであらうと思つたからである。然るに、新聞社側と職工側との時代錯誤的にして、不徹底なる妥協により、五日間を經て早くも新聞紙の發刊を見、勞働界の不安は依然として繼續され新聞社側の經營に關する不安も亦依然として、繼續さるゝに至つたのは、新聞紙界の將來の爲、私共の最も遺憾とする所であつた。

現代の我日本に在つて、時代後れ、時代錯誤的なるものが三つある。一は宮內省であつて、二は裁判所、三は平生社會と極めて密接なる交渉を有して居る新聞社卽ち是である。宮內省と裁判所が時代後れ、時代錯誤的なるは如何にもふさはしいことであるが、新聞社の時代後れ、時代錯誤的なるに至つては、私共の寛恕し能はざる所である。

□

東京の新聞紙は職工の同盟罷工を解決すると共に、否其罷工を解決すべく、徹底的なる値上を斷行しなければならなかつたのである堂々たる東京新聞が其最高價なるものすらも、一個月六十五錢とは滑稽至極である。これを地方に於て、四十錢、三十錢に競賣するに至つては、言語道斷の沙汰であつて、已自ら侮つて、而して後人に侮られ、終に其經營に大破綻を來たさずんば已まないであらう。

要言すれば東京の諸新聞紙は、此機會に於て、一個月少くとも、これを一圓に値上するの一英斷を施さねばならなかつたの

である。これを一圓に引上ぐれば即ち三十五錢の値上により、一容易に印刷職工の要求を容れ得たのである。而して勞働問題に對する理想的の解決法を、一般世人に教へることが出來たのである。率先社會の改造を實現し、世人を指導すべき任務ある新聞社にして、却つて資本の力を以て勞働者を壓倒し去り、今尚賃銀奴隷の範を垂れるに至つては、世事日に非なるの歎なくんばあらずである。若しも東京の諸新聞にして、三十五錢の値上を斷行すれば、一萬の發行部數を有するものは、一個月に三千五百圓の増收があるべき筈である。而して其使用する職工を假に五十人と假定すれば、其増收だけにて、職工の謂ふ所最低生活費の七十圓を産み出すことが出來るではないか。現在の職工の平均賃銀を一個月五十圓とすれば、これに二十圓を増賃しても、尚跡に五十圓を餘すから、總額二千五百圓の利益となる。此二千五百圓を編輯費、通信費、營業費に投ずれば、新聞紙の權威と信用と聲價を一時に高め得るのである。以上は一萬部發行紙數を有する新聞紙に就いて論じたのであるが、其増收は二萬部の發行紙數を有するものならば、一個月五十圓、三萬部のものならば七千五百圓、十萬部のものならば二萬五千圓と云ふ勘定となる。尤も發行部數を多くするに從つて、諸費の膨脹を來たし、單に數字に現はれたるが如き増收を見ることは不可能であり、且つ新聞紙の値上によつて、讀者の減ずることをも見込まなければならぬが、兎に角東京の新聞紙はこれを一個月一圓に値上することによつて、其經營に一安心の息を吹きかへし、其増收によつて會社の財政を根本的に改造し、職工の要求に應じて其最低生活費を保障すると共に、八時間勞働の二部制も容易にこれを斷行し得るのである。機會は尚おくれては無らぬ。新聞社側にして大なる覺悟と安心とだにあらば今に於てこれを斷行するも決して遲くはない。勞働組合なる職工の同盟罷工は、今や資本の壓迫によつて無解決の解決を遂げたるも、時代の進運と物價の際限なき騰貴は彼等をして早晩又復これを繰返さしむるに相違ない。而して其時こそは彼等は復讐の念を以て、これに當り、相當の結束力を養成して、彼等の爲にこれを解決せずんば已まないであらう。此場合、新聞紙の値上を斷行してこれに應じないものは、其頑冥なる態度に報ひらるべく、自ら廢滅の運命に陷るべきは疑を容れぬ。新聞紙に對する一切の改造に關しては私は言ふべく多くのものを有つて居るが、最早制限の紙數を越へたるを以て、一先づこゝに筆を擱くものである（十一日長野市の客舍にて）

人生觀社會觀倫理觀を意味しなかつた罷工

小川未明

十六新聞社の活版職工によつて團體的罷工が企てられたる結果、都下に於ける全新聞紙が四日間休刊したといふ事實は、兎に角最近の注目すべき事件である。日本の勞働者も既に昔日の勞働者でないといふことだけは、心ある者の感じたところであつた。

このたびの罷工は、其の原因を質せば物價騰貴によつて、各自生活の困難を來たした處から、賃銀引上を請求したので、即ち單純な經濟的目的としての運動に他ならなかつたことは、この頃、流行物となつて、日々諸處に大小幾つとなく起りつゝある同盟罷工と其の性質を同うするものであらう。

實際、朝から晩まで働いて、得た金が辛うじて家賃と米代を拂ふにしか足りないといふやうな生活狀態は、人間本來の生活意志から見て不自然であるばかりでなく、誠に間違つた生活狀態といはなければならない。而して、現時、我が國に於ける多くの無産的精神勞働者や、また無産的精神勞働者に屬する人々の生活の有樣の如きは、まさしくこの不自然な生活の反覆である。（こゝに言はなければならぬことは、世の中には偶然、いゝ境遇にあつて、こんな苦痛を知らずに、比較的樂な生活を送つてゐる人々がある。其等の人々には、今日の勞働問題も畢竟問題にはならずにすむといふことである）

たとへ、この生活の苦しみを、こゝに一人の勞働者が、驕傲な資産家の前に立つて、叫ばうとも、恐らく何の耳に入ることがあらう、資産家の眼から見れば、情を以て食はしてやつてゐるのだとしか見ない。而して、無力な意氣地のない、弱い人間としか眼に映らないのである。

こゝに於てか、同盟罷工の必要が起るのである。たとへ其れは理想的の手段ではないにしても、今の處、勞働者が資産家に對抗する唯一の武器はこれだけである。

しかし考へなければならぬことは、たとへ同盟罷工は自由勞働者の權利であるとはいへ、常にこの武器を賃金引上げのみに使用することは、勞働者の品性に關係すること少なくない。何となれば賃金引上げのみを以て、勞働者の現在の地位が決して高まるものでもなければ、其の生活が必ずしもより善くなるものでないからである。若し、彼等の運動が、一錢でも多く取れば取り德だといふやうな、淺薄な功利主義から一歩も出ることがなかつたとしたならば、却つて、今日の運動たるや勞働者自身を墮落の淵に導く時が、なくして止むものでない。

私は、常に、勞働運動の本然的に起るべきところ、必ずや、

人生觀、社會觀、倫理觀の上からでなければならないものだと思つてゐる。從つて、時期の至るまでは互に忍從と、謙讓と、勉勵と信仰とが生活になければならないと思つてゐる。此の如くして、體面的の理解から結合し成立した組合でなければ、最後に至つて賴るべきところがないと思つてゐる。社會の進化は一朝一夕にして決して來るものでない。若し、今日の勞働者にもつと教養があつたならば、恐らく妄りに騷がないであらう、而して、妄りに賃金値上のみを云爲しなからうと思はれるのである。

この意味から推して、新聞活版職工の罷業は、彼等がある目的に對する結束の案外に堅かつたことを思はせた以外に、あまり私には同感を惹くところがなかつた、寧ろ、其の罷工の時期を過つてゐるとさへ考へられたのである。

最近に至つて、一般新聞紙の論調は著るしく無產階級擁護に傾いてゐる。其れは不思議のないことで、たとへ新聞の持主は資本家としても、而して、假りに其等の人々の所感は知ることを得ざるとしても、新聞記者は大抵、無產智識階級に屬する人々が多いからである。

これを觀察するに、記者の立場は、一方に於ては資產家を助け、一方に於ては資產家の力を借りて、資產家に叛謀を揭げつゝあるともいふべきが、恐らく現時の新聞紙に對する時の所感であらう。

しかのみならず、近時の新聞紙は責務を果すべく多事を極めてゐる際である。たとへば食糧問題のために當局者を刺激して警告を怠らざるが如き、また變動しつゝある海外思潮を讀者に報導すべく力を盡せるが如き、吾人は實に新聞を透して、其の日の世界を知り、また其れによつていろ〳〵のことを考へさせられてゐるのである。しかるに無警告にもこの機關を停止したる職工等に幾分の責任なしと何うしていふことが出來やう、やがて其ことが、彼等のエゴイズムによるとも見られるのである。

更に、これを他の方面より觀察するに、ある社の如きは、同盟罷工の起ると同時に直に其の社に關係ある職工を解雇したといふことである。其のことは、もとより我國に於ける現代の職工及び職工組合なるものゝ勢力と實力とを見拔いてからのことであつて、致し方がないとも言へるが、若し、彼等職工間に結束があり、背後に組合があつたならば、何うするであらうか。さもなくば職工等に氣慨があり、而して、確固たる信念と熱情とがあつたならば、容易にそんなことは出來るものでない。彼等は相互扶助のために、何者も其の代りには應じないであらう其れが、また德義であるばかりでなく、是等の犧牲的罷業者により、やがては自分等の勞働條件のより善き改約が望み得らるるからである。

兎に角、背後に堅固な組合がなかつたこと、而して、其のための損失と、かゝる組合存設の急務なることは、更に、其の和

解に際して知られたのである。新聞社側では團體としての相談を拒否し、個々の職工について改約採用を主張したるが如きは全然組合を無視せるものに他ならなかつた。職工等は革新會の名を有する團體があるにかゝはらず、尙ほ其の要求に從はなければならなかつたからである。

私は、最後に新聞記者の態度について言及しなければならない。同盟罷工當時、記者等はいかなる態度を持したであらうか資本家側の味方であつたか、其れとも職工側の味方であつたか恐らく、彼等は經濟的には職工側に同感をしても職工等の態度に反感を抱いて味方となることを欲しなかつたであらう、思ふに境遇に於て、其の生活程度のあまり隔たらざることに於て、手足勞働者と、精神勞働者との差別はあるが、この兩者の生活は甚しく相似てゐるといふべきである。而して、實際生活上より得たる實感に於て、この兩者は必ず相結び付かなければならないものであると信ずる。けれど、其處には、智識階級といひ勞働階級といふ名目に於て、あまりに兩者は囚へられ過ぎてゐる。而して、互に階級的反感を抱きつゝある。

先に、著作家組合なるものゝ起れる時、私は、なぜ、獨り著作家といふ狹義の範圍と限らずに、新聞雜誌記者乃至はこれに附屬的關係を有する印刷職工間の等しく無產者といふことを條件にして、同意見の者をも容れなかつたかと思つたのである。たとへ、斯の如き組合は政治的の意味がなくして、單に經濟的の目的のための運動として設けられたものであるならば、尙更無產者の結合を精神的に堅くする必要がある。また、同じ職業の者必ずしも不幸の人々のみとは限らないことを知らなければならない。而して、人生觀や倫理觀を同うするものが。必ずしも同一の職業に從事する者ばかりとは限らないことを知らなければならない。私は、物質的關係の結合よりは、精神的理解の結合を自然とし、一層堅しと信ずるのである。

話は別であるが、奇異の感じを抱くものに、資產家の社會主義とも見做さるべき、所謂溫情政策が、新聞にはさながら貧民の福音の如くに紹介されつゝある事實である。けれど、かゝる慈善的の意味の政策は、中には美しい動機のものもあるけれども、中には善意にばかり解されないものもある。これを正當に批評すべき立場にあるものが卽ち新聞記者である。各新聞に於ける記者のこれに對する態度が、常に吾人の深い興味を惹く實にまたこの點に存する。（八年八月十三日）

新聞休刊事件の側面觀

惠美東臺

■之を一言にして蔽へば、其解決は甚だ不徹底であり、事件の性質も又極めて純正であつたとはいへない。殊に遺憾なるは聯合新聞社側が戰ひの標的を見誤つて、世間普通の資本家と同様なるかの如き印象を社會公衆に與へたことである。

■帝都の十五大新聞が忽然として其姿を消したといふ意外なる椿事は、其原因結果の如何に拘はらず、確に人文的驚異である。そが立憲治下の怪事たるの事實より論ずれば、政府の責任は直接にも又間接にも該事件に關與してゐなかつたといふ形式的理由を以て毫も批政の辯護に資することは出來ない。こは明らかに政府の方策が國民文明に及ぼしたる不良の反映である。學校其他の教育機關が一時閉鎖されたと同じ意味、同じ程度に於て批判さるべき國家の汚辱である。

■併し、玆には此の如き政治的見解を別問題として、專ら其事件の性質上から觀察するに、四日間の休刊に依て新聞事業の公益的價値が何程深く感得されたであらうか。如何にも一般世人は活社會から其耳目を奪はれて暗黑世界に投ぜられた感じを起したには相違なからうが、之と同時に更に見逃すべからざる事實として、公益を標榜する新聞社が自己の使用人に對して一種の階級的戰爭と同様の態度を執りしが如き聯想を與へはしなかつたか。若し新聞の經營が單に資本家對勞働者の關係の下に他の商事會社と同一に律せらるゝとせば、そは疑ひもなく所謂公益的事業たるの價値を喪失するものである。

■吾人の信ずる所を卒直にいへば、職工の同盟罷工を動機として行はれたる新聞社休刊事件は實に悲しむべき時代錯誤であつた。之より約一ケ月前、帝都各新聞社は印刷料紙の騰貴を理由として十錢宛の購讀料を値上した。其當時各新聞社は何れも申合はしたやうに製紙會社に對し印刷紙の値上を不合理なりとするの記事を掲げ、製紙會社の代表者と一旦交渉を斷絶したのである。現時の新聞經營者が誠に其言の如く公益的事業としての自覺と勇氣とがあつたならば、何故に製紙會社の反省を促すが爲に同盟的休刊を決行しなかつた乎。新聞社の戰ふべき標的は生活費の暴騰に惱める職工ではなくて、多額の收益を擧げながら尙且値上に値上を行ひつゝある資本家ではない乎。

■然るに各新聞社は政府當局の調停に依て製紙會社の要求に讓歩し一連四十三錢の値上を承認し、而して其對價を消費者に課すべく購讀料を改定したのである。一連四十三錢は一日八頁の新聞に對し約二錢五厘強にしか當らないが、各社は之を機會に十錢の購讀料を値上した。職工の増給運動は此點に微妙なる心理的作用が加つてゐることを忘れてはならない——斯くては資本家の暴利を援助する爲に新聞社が製紙會社に降服して一般

讀者の負擔を增加せしめた結果を齎らすではないか。

■言ふ迄もなく最近數年來各製紙會社及洋紙店は非常の利益を收め巨額の積立、配當、賞與等を行ひつゝある。其生産費に比較すれば寧ろ驚くべき暴利を占め一攫千金的の富を增加してゐる。苟も新聞事業の公益的價値を認識するならば、此の如き資本家に對してこそ旗鼓堂々として戰を宣すべきである。之が爲には假令半月乃至一ヶ月の休刊を餘儀なくさるゝ事ありとも其名分は正しく、其行動は道義的である、世人は必らずや翕然として新聞社の主張を支持し、休刊の全責任を資本家の暴慾に在りとするに相違ない。事茲に至らば有繫の政府も無論放任して置く事は出來ない。同時に世の資本家に强烈なる刺戟を與へて立派に社會的制裁を加へ得たであらう。

■資本家に弱くして勞働者に强き事が新聞事業の本質より見て至當なりや、それが果して公益的機關としての合理的態度なりや――單に勞働者のみならず、記者に對しても同樣である――從來新聞用紙は他の雜誌及書籍等の夫れに比し遙に低廉なる價格を以て供給を受けてゐる。これも公益的機關たるの本質よりいへば甚だ合理的でない。自分さへ善ければ他人は何うでも介はぬといふ思想である。此の如き不健全なる思想の下に製紙會社と妥協し來りしが爲に、新聞の公益的要素は益々減退し却て自ら資本家の壓迫に降服せざるを得なかつたのである。

■正直なところ、今度の休刊事件は世人をして大に不便を感ぜしめた割合に、新聞社側に對する同情が稀薄である。それは新聞社が資本家の味方なるを厭はずして消費者(購讀者)に負擔を轉嫁したからではなからうか。勿論職工の要求及行動にも幾多の缺點がある。殊に職工ならざる他の人物を會長に戴きて彼等に操縱せられた點は斷じて正當とはいへない。併し其境遇と心事とに想ひ到れば、前に資本家に讓歩して後に勞働者に對抗したる新聞經營者に比して寧ろ深く諒とすべきであると思ふ。

■幸にして僅々四日の休刊にて落着したとは云ふもの丶今後果して同樣の事件が再び演出せらるゝ事はなからうか、表面的に屈從したる新聞職工も、事實上に相當の增給を容認されてゐるから問題は當分再發の恐なしとしても、總ての職工が新聞の公益的性質を充分に承認し理解したか否かは尙大なる疑問である從つて事件の解決が徹底的であつたとは到底考へられない。否近來著しく發達し來れる勞働者の自覺運動を適當に啓發するよりも、普通の資本家に似たる態度に出でゝ勝利を誇るが如き事あらば、それこそ大間違ひである。此意味に於て吾人は各新聞社が率先して職工の代表者――記者は勿論の事――を新聞經營の要路に引き財政其他の計畫に參劃せしめるやうにしたい。勞働者の生産管理時代は尙遠しとするも、資本家に伍して經營分配の上に相當の發言權を與へることは三割五割の增給よりも遙に良好なる實績を擧ぐるであらう。

■最後に切言すべきは資本家の橫暴が今後も尙新聞社を惱ま

すに相違ないといふことである。現時の趨勢を以てせば印刷紙の値上は恐らく更に再三反覆されるであらう、現に新聞社以外の洋紙は最近にも又値上されつゝある。新聞社の聯合的威力を以て社會道義を發揚し得べき機會はまだ〳〵少くない。世の新聞經營者は公益事業の敵が資本家なりや勞働者なりやを見誤らさらんことを望む。（八・一三）

矛盾せる新聞社の言動

法學博士　戶田海市

現在の我が國に於ける勞働組合の實際的價値及び同盟罷工に對する事業經營者の態度を最も露骨に且つ正直に見せて呉れたのは今回東京市に於て演ぜられたる空前の新聞同盟休刊事件で有る。吾輩は實は此の事件に關し餘り込み入つた內情を承知せぬから確實なる判斷を下す事を避け度いが、單に表面に現はれた事實だけを見ても操觚者が平素社會の木鐸として主張する持論と今回の態度及び處置とは全く相矛盾して居るのを知る事が出來るので、世間の疑惑を生ずる點が少くないと思ふ。洵に社會研究者に取つては由々しき問題と云はねばなるまい。

吾輩が第一に不審に感じたのは新聞社側が職工側の革新會を團體として認むる能はず、個人々々に遇つて別々の交渉をしやうと公言した事である。即ち平素勞働組合の組織を力說して居る新聞社が何故に現在眼の前に現はれた勞働組合を否定したかが問題なのだ。恐らく其の理由の中には革進會なるものは法人資格を備へて居ないからと云ふ事も含まれて居たであらうが、勞働組合を認む可しと云ふは勞働者の團體に法人資格を與へると云ふ事が中心問題ではなく、雇主が勞働者の團結を快く認むるか否かが先決問題である。例へ法人資格を有する勞働組合が組織せられても雇主が之を認めず、矢張り個々別々の關係を以てしやうとするなれば其の形式だけは立派な勞働組合も何等の價値を有せぬ事となる。又雇主が勞働組合に自己所屬の職工が加入する事に反感を抱き寧ろ之を妨害せんと企つる場合にも前述の如き結果に陷るであらう。元來勞働組合は法人資格を備へると同時に重大なる物質的責任を生ずるもので、事が甚だ面倒になるが故に、西洋の組合法を制定して居る國でも必ずしも其れを適用して居ない。其れを楯にして現に今回の如く革新會なる團體が既に代表者まで選んで居るのに、之を認めずして個々別々の交渉をしやうと云ふのは、他の事業家ならば兎も角も、新聞社としては日頃の主張と甚だ矛盾しては居ないで有らうか。

或は其の理由の一として、今回の革新會なるものは少數者の結束で有て多數の者は雷同附和したものである、故に團體として認めず、と云ふかも知れぬが、是れにしても尙更平素の主張と矛盾を發見せざるを得ないのである。即ち新聞の治安警察法

第十七條に對する見解の日頃甚だ堂々たるに全く裏切りしたと稱すべき點がある。新聞の説く處は、治安警察法第十七條に制定する、少數の勞働者が同盟罷業を行ふ場合に他の勞働者を誘惑煽動するを禁止し違反者に臨むに刑罰を以てするが如きは酷法の甚だしきものにして勞働運動を妨害するものである。斯の如き法律は寧ろ撤廢すべし、否な今日の勞働者は既に誘惑煽動に依つて其の意志を左右せらるゝが如き幼稚なるものではない即ち治安警察法第十七條は既に時代に適合せざるものである、と日頃稱して居ながら、今回の事件に際しては明かに此の誘惑煽動を認めて居ると考へられる。少くとも職工の人格を無視した遣方で是れ又吾輩が矛盾せる態度なりと非難する所以で有る。

第三に、新聞は公益事業で有て普通の利益事業とは違う。公益事業に携はる勞働者が同盟罷業を企つるは社會の秩序を危くする者であるから、社會公益の爲め俊嚴斷乎たる態度を取つたのである。と云ふ理由を以て居るかも知れない。果して然らば益々新聞社側の態度は吾輩の意見と相容れない。誠に説の如く新聞は公益事業で之に携はる者も猥に同盟罷工の如き擧に出る事は社會を危くするものであるが、然らば其の際に於て斷然罷工職工を解雇し雇主の同盟罷工とも稱すべき工場閉鎖をなして一日も休刊するを許さぬ新聞紙が一齊に同盟休刊をしたのは不法行爲ではあるまいか。吾輩をして云はしむれば、斯の如き理由を以て勞働者の結果を禁止する理由とする事は出來ない。社會公益事業なるが故に寧ろ職工側に多少不法の要求ありとも寧ろ妥協的に出で、新聞は發行しながら交渉に應ずるのが當然であると思ふ。職工の結束に對し雇主側の結束も出來て居たのだから其の間に仲裁機關を設定して整然たる組織體となし秩序立つた仲裁に訴ふるのが當然取る可き手段ではなかつたか。社會の木鐸たる新聞經營者にして尙斯の如き態度に出でゝは社會の疑惑を招く點も少くはなからう。

○

企業家、資本家ほど世にも得手勝手な者はない、又世間も批判の標準を間違へて居ると思ふのは事業界經濟上の同盟罷業である。勞働者が組合を組織して其の權利を主張せん爲めに同盟罷業をなせば生產が停止せられると喧ましく云ふのだが、大なる企業家は常に最も不都合なる同盟罷業を企てゝ居るではないか、卽ち生產力の有るに任せて多數の生產をなせば品物の價格が下落すると云つて生產制限をする。百姓は米の賣り惜みをなし、砂糖商人は砂糖の買占めをやる、綿糸業者は品物を庫の中に隱してしまう、斯くして生產力を減殺すると同樣の手段を巡らせて物價を煽り立てる、是れ卽ち資本家の同盟罷業なのである。勞働者の同盟罷業は勞働力の賣り惜みであるが、彼等は企業家の如く資力を有して居ないから罷業が持久的でないから寧ろ社會に及ぼす影響は資本家の其れに比して小なりと云ふべしである。只勞働者は思慮が足りないから無謀の擧に出でゝ自他

を害する恐れがないが、其の代り資力がないから資本家ほど横暴な事は出來ない。

要するに勞働者の同盟罷業は、其の性質に於て眞相に見て、從來資本家の爲し來つた事と何等の擇ぶ處はない。然るに普通の實業家のする事は格別咎めずに、勞働者がなしたる故に不都合なりと攻め、怪しむべしとなすは普通實業家と勞働者を平等視する事の出來ない習慣から生じたもので、餘りに彼等を輕侮したやりかたである。一つ勞働者をも普通の實業家同樣に見做しては如何であらう。

近來各地に頻々と起る同盟罷業の結果を見ると其の大多數は勞働者が成功して其の要求の幾部分は必ず容れられて居るのである。然らば同盟罷業に至らぬ以前雇主の方で勞働者の要求を容れたなら、事件を未前に防いで双方の損害を少くする事が出來る筈である。雇主側としても勞働者の要求であると一度は刎ね付けて大事を誘起するのだが、是れが他の取引商人の要求で有たなら金利の高い資金まで融通して之れに應じて居るではないか。其れを一口に勞働者だと云つて馬鹿にして掛るから遂に事件を惹起する事になるのである。

同盟罷業の責任者は何者であらう。吾輩は必ずしも是れが勞働々のみの負ふべき責任でないと斷言する。要するに勞働者の自覺と共に資本家も亦自覺しなければならぬ。而して眼を擧げて時勢の變遷を仔細に觀察して見るがよからう。

新聞競爭の內面暴露

和合亭人

先頃起つた東京各新聞社製版部員のストライキに對し、今少しく適切に言へば、文撰工を中心とせるストライキに對し、世間では日頃横暴を極めて居る新聞社に此事の起つたのを、寧ろ痛快事として見て居る者があると云ふが、日本に於けるストライキの急先鋒は、造船工、活版工から起ると云ふ事は、誰しも氣付て居た所で、早晩來る可き事として此點は毫も怪むに足らぬが、只其來かたが豫期より早かつたと云ふ事が、差當りて注目せねばならぬ事實であらう。

歐洲戰爭は世界思想界に大衝動を與へた事は申すまでもなき事で、日本に勞働運動の漸々と起つて來たのは無論之に大原因するが、最近の新聞職工ストライキを促進したる、動機は、報知新聞が社員職工一統に對し、過分の臨時手當を配當した事が近因を爲して居る事は、外間には多く氣付かぬ所であらう。報知新聞の臨時手當を社中に付交したのは、七月六日であつたがそれ以前社中よりは寧ろ社外の大評判となつて、夫れから夫れと風の如く同業者間に傳はつた。

即ち各社とも之を機會に增給の要求が持ち出され、六月末から稍其體化して來た各社の製版組合も亦寄り〳〵增給運動の下

相談を始めることとなつたが、前後は判明しないが、東京朝日などが其先に此要求に逢ふた方で、其時朝日が、各社の振合を見て、必ずそれ以上の事をして遣るから暫らく待てと云つたのが甚だしく誤解の基となつた。と云ふのは、此時は既に職工組合が革新會と改稱し、著しく矯激な態度に變つて居たから、此朝日の回答を以て、イクラでも糶り上げ得るものと解し、鼻息頗る荒らくなつたことである。

而して先づ第一に勃發したのは東京日日新聞である、七月廿六日午後一時頃、日日新聞工場員一同は、給料八割増額、二部制（八時間勞働）の二條件を提げて幹部に迫り、解決までは活字を手にしないと云ふので半ば同盟罷工狀態を示した、幹部連の狼狽名狀す可からざる有樣で、一方には職工各部の代表者を撰ばしめて慰撫にかゝらうとすると、職工側よりは話にならぬ子供を代表として出し幹部を翻弄する。一方には二三社を訪ひて微溫的に新聞社同盟を策したが、是亦モノにならず、夜に入りて遂に六割増給、二部制實行に折合ひ、辛うじて翌日の新聞を出し得た。

次に提出したのは多分報知であらう、之は確か二十八日で、職工代表者と幹部との交涉の結果、一週間後即ち八月三日までに回答することとして之は平穩に終つた。次は萬朝、讀賣に對してゞある。

此に於てか前の朝日の回答が累をなしたのである、萬朝は職工の待遇に就ては從來決して朝日に劣らぬとの自信を持つて居た、事實又左樣であつたと云ふ、で職工連中は朝日では最低七十一二圓まで出すと云ふを楯に頑強に要求し、容れざれば同盟罷工すると云ふ態度を示した、斯の如きは現時新聞社の經營としては到底兩立し難きものであるを以て、兩社とも之を拒絕したので、萬朝は卅日の夕刊を遂に出し得なかつたが、其晩黑岩社長の悲痛なる演說に動かされ、革新會の反對ありしにも拘らず三十一日の朝刊だけは出し得たのであつた。

斯くて三十一日に至り、萬朝、讀賣の同盟罷工を動機として愈々總同盟罷工が行はれることとなつたのである。當日午前十一時頃より櫻川亭に會合した各社職工代表者は、萬朝、讀賣二社の同業を見殺しにする譯には行かぬと云ふので、同情罷工をやらうと協議中、恰も正午頃に至り時事新報も拒絕したと云ふ報があつたので、左なきだに熱して居た折柄とて『ソレ遣れッ』と午後一時を期し決行した。

之より曩き、各社經營者側では、築地精養軒に事務所を置て之が對抗策を講じ、（卅一日には和合亭に移つた）先づ各社の聯盟を策したが東京日日一社が、曩に六割増給を容れて問題を解決したと云ふので、風馬牛相關せずの態度を取りて容易に同盟に加はらうとは言はぬ。で各社聯合してから交涉すると、重役が居らぬので一存には行かねと云ふ名目の下に、對馬主幹が大阪に相談に行つたと云ふので一向に埒明かぬ。

其大阪に出向た對馬君が、折りも折彼の内田信也君が怪我をした列車脱線事件に阻まれて、時間を空費したと云ふ。さて大阪に着て見れば、社長本山彦一氏は山陰旅行中で不在の爲相談出來ず、會計係の某と云ふのを山陰に本山社長を追尾さしたから、それまで待つて呉れと愈々以て煮え切らない、東京日日が加盟しなければ朝日も加盟し兼ねると申出る、之は從來兩社の立場から當然來る可きヿで、朝日、日日が入らなければ時事、國民も加盟し難いと、却々纒りさうな形勢もない。

所が三十一日愈々同情罷工決定となり、今まで自分の社だけは解決した積りで、アワ能くば漁夫の利を占めて遣らうと狙つて居た東京日日も卷添へを喰つたので、一存では決し兼ねるとか、本山社長に會計係を追尾させたとか、色々の口實の下に免れやうとして居たのを一切忘れたかのやう。第一に面喰つて新聞同盟加盟を申出たので。譯もなく話が極り、例の違反者は十萬圓の罰金、機械差押へとの聯盟規約が出來上つたのである。東京日日即ち此點から言へば卑怯未練の贅六根性を發揮した、東京日日が聯盟促進に對する功一級とも言へる、が併し、日日の代表資格を有する某氏は、其後八月二日頃になり、休刊を苦痛として聯盟を破らうとした事實があり、同業間には殆ど鼻ツマミとなつて居るのは笑止千萬である。

新聞經營者の聯盟が出來ては、此方が強くなり、其後の經過は各新聞にも顯はれた通り、岡警視總監なども肝煎りて、形式から言へば職工側の敗北のやうであるが、實質に於ては各社協定增給率も定まり、且つ多くは犠牲者も出さずして濟んだから先づ引分と見るを至當とする。

只此に氣の毒なは革進會々長横山勝太郎君で、初めから何の理解もなく、只革新會の連中から少しお饒舌の出來る者を押立てやうではないかと云ふ漠然たる條件の下に白羽の矢を立てられ、漫然オイソレと引受けた結果、新聞社側からは誤解される、職工側からは馬鹿にされる、竟に手も足も出なくなつて逃出したヿで、之と反對に名を爲したのは鈴木富士彌君で、例のマルクス論を議會で遣つたに拘らず、初めから經營者側の味方となり、兎も角も無事解決の効を收めた、以上兩者は共に憲政會所屬代議士で、而も東京辯護士組合に籍を置て居るから更らに面白い。

以上は一般の經過であつて、ストライキ其ものは無論時代の反映に相違ないが、今回の事件を惹起すに至つた動機は、報知の臨時手當に發して、朝日、日日の極端なる競爭心が之を煽り而も朝日新聞は常に何事も金で解決し得るかの如き言動態度を示して居た事が端なくも累を爲したヿを見逃すヿが出來ぬ。

而して其收獲如何と云へば、從來東京の新聞社は紙の値上に反對せる以外、何事があつても同盟が出來なかつたのを、今度は完全に同盟し得た事は、新聞社側として最も目立つた收獲で殊に時事新報の如きは、些細な事でも強て一致を索り來つたの

が率先同盟を主張し出したのは、亦是時世の産物と致して遡からうか。更に職工側の収獲としては、僅かに一ケ月の間に、何等秘測の聯絡を有せざる東京市内の各社の工場員全部を團結し得たのは、我國勞働史上特筆大書す可き事實で、我國勞働界も立派に團體的行動を爲し得る事を具體的に示した事は、只に一時の増給ゝ贏ち得た以外の尊重す可き成功であるのみならず、資本家に對して甚大の教訓を與へたことを矜り得らるゝであらう。兎も角此運動は、世間で通り一遍に見て居る以外、或重大なる暗示たりし事を附記し置く。

新聞の同盟休刊に就いて

岩野泡鳴

食糧品と交通機關とに次いで新聞も現代の人間生活にはなくてならぬものになつてゐる。それが今回東京に於て殆ど前代未聞の同盟休刊をやつた。僕は丁度日光に避暑してゐた間に起つたことで、まだ詳しいことを内情に附いては聽いてゐないが、

第一に、諸新聞社が同盟して休刊するには、少くとも一度は各社の代表者が寄り合つたに相違ない。その席に於いて、どうして同盟休刊中だけ、假りに共通の一新聞を出して毎日の事件を讀者に報道するだけの責めふさぎをすることを相談し得なかつたのだらうか、突差のことでこれに思ひ及ばなかつたと云ふなら、そのあわてかたが思ひやられて馬鹿々々しい。若しまたそんな必要もないとして、それを相談しなかつたのなら、各新聞社が讀者に對する餘りの横暴、攻めないでは置けないのだ。どつちにせよ、天下の耳目を以つて任ずる新聞社なる物の、餘りにしろうと臭い無考へを笑はざるを得ない。

非常に行けば、各社から何人かの記者と職工とを選び、いづれかの社を借りて、論議ぬきの、事件報道ばかりの新聞を拵らへて假りに讀者へくばるべきではないか。その間の特別職工の賃銀は――若し職工が納得しないなら――その要求通りを新聞社としては拂つて然るべきであらう。また、職工に就いて云へばかかる非常な場合の假り新聞の爲めには、特別のこととして、もと〳〵通りで働らくだけの除外例を許してもいいだらうから。

以上のことは、たとへ新聞社がはが悪いにしても、また職工がはがよくなかつたにしても、一般の讀者としては新聞社に要求してよかつたことだと思ふ。が、新聞社はあわてた爲めか、それとも横暴の爲めか、兎に角、共通の假り新聞さへ出さなかつた。そしてあとになつて、ただ濟まなかつたと云ふ詫びを廣告したのは事實だ。まるで今の政府が事件のある度毎に當局として濟まなかつたと云つて居るのと大した違ひはないではないか！人民若しくは讀者にほんの氣休めを云ふにも程があらうと思はれる。官僚を攻撃する新聞社どもがまだその官僚趣味を脱

してゐないことを暴露したのであらう。

けれどもまた一方から云へば、職工の要求が餘りに無謀でなかつたら、如何にまだ官僚趣味をぬけてない新聞社でも、同盟休刊のやうな無謀なことはしなかつたらう。だから、この兩方の無謀を制裁する爲めの法律が必要になつて來たものと解釋される。同盟罷業も同盟休刊も程度のあることだらう。これ〱の場合に於いては、どんなに損害があつても新聞の休刊はできない、それを守らないつもりなら前以つて新聞を發行することを許さぬと云ふ法律が必要だ。かう云ふ性質の法律は、ひとり新聞のことに限らず。公共的なる事業にはすべて必要だと思はれる。

勞働者が必らずしも社會主義者にならなければならぬものではないと同樣、勞働問題の研究と云へば、必ずしも同盟罷業の高調をしなければならぬとは限らない。同盟罷業を正當に調和若しくは制限する考へもして行かねばならぬのである。そしてそれにはただ思想的、道德的制限を以つてするばかりでなく、法律的制裁を規定する必要がある。つまり、世界は勞働者や事業家の利益ばかりでなく、國民全體の利益にならなければ駄目だから。

勞働組合と新聞騒動

松井柏軒

□

治安警察法あるがため、未だ十分に勞働組合の組織をなす能はずといふ議論あり、此の法條の有無に關せずして、組合を作るに妨げなしとの說もあり、其の如何に拘はらず、今日直ちに勞働組合を設くるの是非は、吾人に於て尙ほ決定し得ざる問題也、吾人は聊か以て自から恥づると雖も、彼の半面のみを看て殊に例の歐米飜譯流に、輕々しく組合論を主張するものにも與みする能はず。

依て試みに組合組織の參考に資するがため、左に卑見の二三を陳述すべし。

第一　他の經濟組織の未だ十分ならざる時、夙く既に勞働組合のみを作るとは、大に考慮を要す、我が國の經濟組織は、未だ歐米の如く完備せず、例へば戰時中、米國製品が歐洲品に代りて急激に多く南米方面に賣行くや、米國品に粗製濫造多く、前途の信用にも關するものありしかば、紐育の銀行組合は、此の粗製濫造品に對して爲替取組は勿論、一切の金融交涉に應ぜずと決議したるに、其の粗製濫造の弊は頓に一掃せられたりき。我が國には未だ此の如き組織あらず、銀行家は假令組合の目を

流むも、俄かに粗製濫造家の依頼に應じて以て、不當の利を占むるを悦ぶの風あり、隨つて產業界に於ける各方面の風紀規律殆んど體を不成といふ狀態なる時、獨り勞働組合を設くる結果その組合の威力をのみ旺盛ならしむるも、例へば往年の米國トラストの如くならざるや否や、經濟組織は總て一車動けば多くの車輪同時に運轉するが如くならざる可らず、未だ其の作用なき時獨り勞働組合を設くるも多く效果なき乎、然らずんば却つて危險の虞なきや否や。

勞働組合の組織は、總ての組合員を向上せしめ、又其の利益を擁護し增進するを目的とするも、其の作用として最も起易きは同盟罷工とす、同盟罷工は勞働者の最も武器にして、組合は即ち此の武器を使用するに最便宜の機關なれば也、故に勞働組合の是非利害を判定するには、主として、此の同盟罷工を問題として研究するを要す。

勞働の性質よりいへば、同盟罷工は契約を無視し、法律を超越したるものにして、國際的には戰爭たり、個人的には兇行たり、政府之を行へばクーデターたり、之を用ゆるは實に萬已むを得ざる後に於てせざる可らざるも、勞働組合あるがため、却て容易に之を行ふ傾向なきや否やは、殊に注意せざる可らず

社會のためをいへば、勞働者と資本家とは、双互に相援助するを最善とすべく、產業の根本義より視るも、資本と勞力とは一致し協力するを當然とす、事業衰滅すれば資本家の損失するは勿論、勞働者亦失職者として生活の途を失ふ可ければ也、隨つて此の兩者は双互援助主義協調主義なるべくして、相反目し抗爭して、階級戰爭を爲すが如きは、實に事業經營の本義に叛するのみならず、又實に社會を破壞するものと稱せざる可らず勞働組合にして、若し此の根本目的に適ひ、同盟罷工の濫用を防止し、資本家の横恣を控制して、適度に勞働者の利益を擁護し得ば、其の利洵に大なりと雖も、實際に於ける事例は、未だ必らずしも其の然らざるを示すに似たり。

□

吾人は何よりも先づ東京に於ける新聞紙聯合休刊の事實を以て、組合論の有力なる參考資料たるべきを信ぜんと欲す。

各新聞社の印刷職工●一部が聯合して革新會なるものを組織するや、最初の趣旨は職工のために計りて極めて穩當なりしが如し、勿論其の組織は素より勞働組合と稱するまでに具體化せざりしと雖も、其の性質及び輪廓が組合の少くも第一歩なりしや疑ふ可らず。

或る新聞社の職工は、既に增給の要求を提出して悉く、若くば大部分聽かれて略々滿足したりしに拘らず、又或る社の職工は、增給の要求に對する決答を八月三日と限れるに拘はらず、こ革新會が其の最低賃錢を定め、且つ同盟罷工を決議するや、突如として七月卅一日の或る時刻を限りて同盟罷工を斷行するに至り、其の結果として各新聞紙をして、休刊の無責任大失體を

餘儀なくせしめたりき、既に增給の實行に滿足しながら、却つて罷工するは無意義也、未だ決答の豫定期に至らざるに罷工するは無法也、增給の要求を提出して未だ三日ならざるに、新聞社に幾んど考慮の餘地をすら與へずして罷工したるは、情誼を無視したる不親切也、職工として其の責任の大なるを自覺せざるに止まらず、却て斯の如きは、實に言語に絕せずや、未だ十分に組合を完成せざるも、衆を恃むの結果や乃ち斯の如し、若し組合の基礎固まり、罷工を繼續する準備と結束と十分ならば、其の結果竟に如何とするぞ、或は曰く、是れ組合不完全なるがため無恥無責任なる煽動者に乘ぜざれしのみと、果して然る乎、然らば組合は斯る弊害の發生を嚴重に防止する方法を立てざる可らず、知らず其の方法如何。

勞働組合あるがため、甲の組合罷工する時、乙丙丁の組合亦悉く同情と稱して罷工することあり、今春二月米國シアトル市にて造船職工の同盟罷業を企つるや、他の組合同情と唱へて之に呼應し、三月に入りて竟に總同盟罷工（ゼネラルストライキ）となり、爲めに資本家の純機關紙たるポスト・インテリゼンスを始め、全市の新聞紙及び一切の印刷業まで休止したるがため、市民の意思疏通の機關なく、市廳商業會議所等其の措置に苦めることありき、組合あるがため、同情と稱して總同盟罷工を行ふ結果、一切の交通機關を始め、給水其の他溫熱供給の諸機關をも休止せば、國民は覿面にその生活を脅はるゝに至りて、結果の戰慄すべき言語に絕へんとす、是れ組合の是非利害に就て最も考慮すべき大問題とす。

歐米には、現に組合中唯だ熟練職工にのみ篤くして、不熟練職工を疎外すといふ愁訴あり、組合員以外の勞働者を排斥して一歩も其の工場に入れしめざるあり、或はサボテージュ、若くば怠惰同盟を行ふあり、其の强橫恣睢、幾んどいふに忍びざるもの亦之あるため、非組合論亦少からず。

水火の欠く可らざるも尙ほ火災あり水變あり、利弊は總てのものに伴ふを以て、勞働組合も亦努めて利を進め弊を防ぐを要す、卽ち前に叙ぜる諸弊の如きは、必らず之を防止せざる可らず。

職工の智德を進めて、事業に對する理解、及び器械を重んずる德義（同盟罷工中と雖も、其の器械の手入を廢せざるが如き）勞力の生產に對する偉大なる勢力に伴ふべき責任の自覺を前提とし、且つその起り易き弊害を豫防するに非ずんば、勞働組合は寧ろ職工に利すると少くして、却つて產業の發達と、社會の康寧とに害あるに非ざる乎、吾人は記して以て組合組織の方法を研究する篤志家の考慮を望む。

帝都十六大新聞休刊事件顛末

横山勝太郎

頃者帝都十六大新聞の聯盟休刊は其の原因の如何を問はず、政治外交經濟軍事一切の報道機關を休止せしめ、一種暗黒時代を顯出した、以下少しく其顛末を述べたい。

▲革進會の實體

革進會とは帝都十五大新聞の整版部職工全部を網羅したるもので其趣意書には左の如き一節がある、

「眞性の自覺に基き最も自制ある團體を組織し以て穩健なる發達を旨とし先づ第一に生活の安定、業務の刷新、地位又は人格の向上等を圖る(上略) 吾々有志は公安を害し、又は秩序安寧を紊さんとするが如き忌はしき風潮に染みず、寧ろ斯くの如き惡傾向に對しては極力之を抑壓するの方策を採り以て最も愼重に且つ善良なる國民として社會に貢獻(以下略)」

又其綱領として擧ぐる所を見るに

一從業者の爲めに講演會、懇話會を開く事、二從業者の親睦を厚ふする事、三從業者の生活を相互に確保する事、四從業者の利害に對し一致の行動を採る事(後に會員は總てに對し行動の一致を計る事と變更したりと謂ふ) 五從業者の禍福吉凶を慶弔する事、六從業者の日用品其他の購買の便を圖る事、

とありて其趣旨目的に於て毫も間然する所がない。

▲予が革進會と關係せる顛末

六月二十日朝

多年の親友太田外三郎君突然來訪し今回革進會なるものが成立したから今朝 場の講演を望むとの交渉があつた、直ちに其會場たる京橋具足町櫻川亭に赴きたるに既に散會後なりしを以て其儘引返した(因に太田君も革進會の内容實質は多く知られざることは後に判明した)越して七月十四日頃右太田君再び來訪、其會長たることの交渉があつた、固く辭退したが時々の會合に於て簡短なる講演を爲す位にて他に特殊の任務もなきを以て枉げて承認して呉れとのことなりしより親友の懇請強て拒絶し難き事情もあり之を承認した、

然るに七月二十五日に至つて幹事の一人來り、予の寄稿した會報を持ち來り本日午前十時より櫻川亭に開く幹事會に出席せよとの申出があつて直ちに會場に臨み不肖が會長たることを承認したる旨を發表し、今後能ふ丈けの微力を盡すことを聲明した、これ不肖が革進會の席上に出席し數十名の幹事諸君に面會したる初めてである其後亦二回同會幹事の私宅に於て幹事會を開くとの通知があつたが又事故の爲め出席しなかつた

然るに七月三十日恰も明治天皇祭の祝日に當り不肖外出不在の所幹事二、三名、自動車にて來り緊急の用件ありと迎ひに來た外出先より直ちに會場櫻川亭に赴きたるに既に四五十人の會集あり皆幹事なりと謂ふ(所謂幹事は各新聞社職工十人に付一人の割合を以て選出するもの也)其語る所に依れば今朝以來讀賣新聞社及び朝報社の整版部員は一致同盟して八時間勞働、最低賃銀十圓の請求を爲し其要求を容れられざるを以て同盟休業を爲し居れり、又時事新報社に對しては同社の整版部一致して最低賃銀六十五圓の請求を爲し、社の回答期限は明三十一日正午とのことにて

あつた、

其處で自分は事の意外なるに驚き且つ革進會に謀らずして同盟休業を爲したるその甚だ穩當ならざるを聲明したるに數人の幹事は「御意見を御尤であると全く各社別々にやつたことで如何ともすることは出來ない」とのことであつた、尤も時事新報社の方は前述の如く明三十一日正午が期限で、朝報社の方は多分社側と職工側と圓滿の落着を視ることゝ思ふから暫らく革進會の干渉を見合して貰ひたいとの申出もあつた、が兎に角讀賣新聞社に對して同盟罷工が敢行されてあるのを拋擲して顧みない譯には行かぬから自分は會員と協議の上革進會の顧問たる加藤君と共に幹事六人を率ひ讀賣新聞社を訪ひ、石黑理事と松崎販賣部長に交渉を開始したけれども到底協調の目的を達することが出來なかつた、それで一先づ引返して種々協議をしたが議論百出到底解決の見込はない殊に讀賣新聞社の發販部を代表して居る幹事は兩三回社に歸りて協議を遂げたるも到底直ちに解決を得るの見込はない、然れども此儘に經過するときは明三十一日の讀賣新聞及び萬朝報の二新聞は休刊するの已むを得ざる次第なるを以て兩新聞社の發販部員に對し革進會の名を以て「賃銀問題の解決を後にし新聞の發行丈けは是非する樣に勸告すること」の提議を爲したるもこれ亦多數の容る所とならなかつた、然れども朝報社に於ては黑岩社長と職工の間に意思の疏通あり三十一日の市內版だけを印刷することの半妥協成立したとの報告があつた、是に於て結局七月三十一日に於て休刊の厄に罹りたるは讀賣新聞社一社となりし次第である

翌三十一日午後一時頃予等は各新聞社側の集合場たる築地精養軒に到り、新聞社側の顧問辯護士鈴木富士彌君に會見し、圓滿解決の餘地あるや否やを尋ねたるに「未だ二三社の代表者の出席しない者もあるが新聞社側の意向は非常に强硬だ」とのこと「然らば再會すべし願くは新聞社側に於ても二三社の代表者を招き其筋氏と協定したい」と述べたときに鈴木君は自分も同感だが一應新聞社側に諮る可しとのことなりしを以て自分等は會場に引上げ協議中鈴木君より話あり、

新聞社側に於ては革進會なるものを認めず、從て其團體の千長と面聞との交渉を拒絶す

との最後の通知に接した自分等は之を會衆に報告し革進會內部に於ける自分等に對する委任問題の協議は自然消滅の有樣となり會衆爲めに色めき渡つた。

これと前後して時事新報社の發版部員より我社の我々に對する回答期限は本日(三十一日)正午十二時までゝあつたが誠意ある回答に接するを得ざるを以て一同休業することに決したとの報に接し會場爲めに緊張し一面新聞社側に於ては聯盟の結束益々固ふして各社一齊に各發版部員に對し解雇の通知を發したりとの風說を傳ふるものあり、爲めに會衆非常に昂奮して新聞社の專橫を鳴らす者、同盟休業の已むを得ざるを論ずる者、會場の所々に分れて何事をか密議しつゝありしが革進會としては未だ何等纏りたる意見なるものを作る能はず、紛々擾々の裡に讀賣、萬朝時事等の同盟休業の飛報各社に傳播し遂に如何とも收拾すべからざるの紛亂に陷つた、然れども何等暴行等不穩の行動を爲すもの莫く、結局明一日の早朝より解雇せられたる發版員の一部は本橋の櫻木倶樂部に集會することゝなつた、然し自分は翌八月一日早朝此所に赴きたるに會員の入場者陸續相踵ぎ意外にも九百有餘名の來會を見、形勢極めて重大となつた、自分が所謂革進會本部の會合を見たるはこれを以て始めとし而してまたその終りなりしとは。

この昂奮したる九百人前後の群衆をして永く又屢々會合せしむるが如きは衛生上經濟上公安維持上甚だ憂慮すべきことである、又新聞社側に於

て革進會を認めずと曰ふも若し個々の會衆をして各新聞社と交渉せしむるが如きは事實上到底不能のことに屬するを以て各社一人宛の幹事を集め熟議を遂げたるも、八月一日午前十時革進會總會を開き自分は滿場に對し同盟休業に依り勞働者の絶大なる威力を發揮したることと同時に其の結果の極めて重大なることを述べ會長たる自分及び加藤君に對し無條件交渉を一任せんことを提議したるに幸に滿場一人の異議者なく『本會は斯問題の解決を横山加藤の兩人の全權に委す』との決議を爲し、自分等は直ちに新聞社側に交渉を開始せんとしたるも兩會をだに得るの見込なかりしを以て岡警視總監を訪問し居中仲介の勞を採られんことを懇請し總監之を快諾し數次交渉の結果、總監は新聞社側の意見なりとて、

一、各新聞社は各別々に各別々の職工を採用すること
二、賃銀は各社に於て各社大勢に於て適當と認めたる値上を爲すこと
三、各新聞社は適當と認むる時機に於て同一の日に新聞を發刊すること。

外に注意として、採用されんとする人は明日午前十時以後より申込を受くる事の順序なり可成速に發刊を見たき希望なることとの申添もあつた

此條件に關しては自分等は種々意見のある所を述べたるも最早交渉の餘地なしとのこととなりしを以て自分は加藤君と協議の上帝都に於ける十六大新聞の休刊を見たるは其影響することの極めて重大なるを以て兩人に於て全責任を帶びて之を承諾することに決し直ちに會場に返りて先づ各社從業員より選定したる二人の特別委員約三十人と共に一室に集りて此經過を報告したるに多數の硬論者ありて議容易に纏らざりしが種々懇談の結果該特別委員に於ても一人の異議を述べざることに決したるを以て即時總會を開き自分等は非常なる決心を以て事柄の經過を極めて詳細に報告し暫らく國家の爲めに忍んで此條件を承認せられんことを需めたるに幸に滿場一人の異議もなく拍手を以て之を承認したるのみならず、最後に革進會の萬歳を三唱し同日午後十一時四十分頃散會を宣告し極めて靜肅に散會した、

要するに東、報知、國民、の三社に對して使用せられたる勞働條件及同盟休業に對しては自分等は何等協議に參與したるものに非ず、誠心誠意を以て新聞を休刊することなからしめ徐ろに勞働條件の協定に入らんとしたる事實なり、これ結果して勞働問題解決の最善の方法なりしや否やは自ら論議あらん只だ夫れ自分等の關與したる事實の梗概は實に此の如き次第である。

▲其後の經過の大要

即ち八月一日午前十時頃始めて會員の總會を開き其夜十二時に垂んとするに際し不滿足なりしと雖も革進會としては全部解決を見たるものである、然れども前陳の如く幾多の不平不滿なる硬論者ありて八月二日に至るも容易に復社を肯んせざるもの二三百人の多きに達し芝區内統一教會其他數ケ所に夫々集會を催ふして善後策を議したるものありたるが結局各新聞社を通じて四五十人位復社せざるものと復社を許されざるものとを生じたるも八月四日に及んで聯盟各新聞社に於て各新聞發刊の準備整ひ四日の夕刊より全部發刊を見るに至りたる次第であるが、自分は責任上八月三日に到り革進會長の職は辭したのである、解雇せられたるまゝ採用せられざる從業員に對しては飽まで援助して就業の口を得んことを焦慮して居た、今の處多くの失業者もないが兎に角社會に對し多數の從業員に對し不明不徳を謝せざるを得ない、

▲自分の感想

（イ）以上の如く今回の同盟休業の事實に關

しては全く其謀議に關與せずと雖も各新聞社營業部員の同盟結束が如何に有力なるものであるか絶大なる威力を發揮したる點に於て各新聞社は勿論社會各方面に對し深甚なる注意を與へたることゝ思ふ、（ロ）其結束の成功、不成功、不平不滿は暫く別の問題として意外に早く進行して意外に早く終了した、此間所謂群衆心理の變轉の急劇なるに驚くの外は其い資本家並爲政家經世家の大に深く考慮を要する點であると思ふ、（ハ）營業部員が新聞休刊の事實を以て單に資本家と勞働者側の勞働爭議とのみ解せずして休業の結果は社會の不安を招き延ひて國家の一大不祥事たることを理解し勞働者側の同盟休業の結果が餘りに重大にして其國家問題であることを自覺した、（ホ）眞性の自覺に基き最も自制ある團體を組織し、且つ穩健着實を旨とし公安を害し、又は秩序安寧を紊さんとするが如き忌はしき風潮がなかつた、彼等は秩序ある勞働運動の先驅者として名譽を荷ふものである、

▲新聞社側の態度

新聞休刊の聯盟契約が出來て違約金拾萬圓印刷機の封印、發行停止の强制執行を爲すことの約款を見て自分は全く驚いた、斯くまでして社に使つて居た、職工等に對抗せねばならぬか道理を盡して諭さるれば理解するだけの能力は皆あると思ふ、聞く所に依れば右の聯盟契約は賢明にして法律知識の深き素養ある鈴木富士彌君の執筆に係るとのことである、この約款は經濟問題以上に超越したる社會指導の公の任務を有する新聞紙の休刊を約し、公の機關の不作爲を强制せんとするもので不法且無效の約款であると思ふ法律家たる鈴木君は如何にして社會の公機關たるの見地より違約したる場合印刷機械に封印せんとするか、法律の認めざる發行停止を如何にして强制せんとするか、抑も亦不作爲の義務を如何にして强要せんとするか、自分は暫らくの問題として大方學者の批判に俟つことゝする、

▲予の社會に對する責任

全く自分が輕率で深慮せずして會長たるの名義を承諾したのは新聞社及職工側に對しても社會に對しても申譯のない重大なる過失である、而して七月三十日に及んで二三社に對する同盟休業のことあるを聞き自ら能ふだけの努力は盡した考へであるが運命を阻止することの出來なかつたのはこれまた自分の責任で其る、只た首謀者である煽動者であるとの誣妄の事實に關しては死すとも服することは出來ぬ、（八月十二日）

勞働委員の噂

△國際勞働會議に、資本家を代表して行くのは、和田豐治が、一番よろしいと云ふので、農商務では、略人選も済んで居たが、イザ交渉となると和田は自信がないといつて辭した。そして松方幸次郎を推した。

△その推薦の理由に、僕は米國には八年も居たが、モウ英語も大抵は忘れてしまつた。それで毛唐の喧嘩の相手などが出來るものか。ソコになれば、推しの強い、語學の達者な松方に限る。松方ならヤンチャンデ、喧嘩上手で、持つてこいの嵌り役だと賞め立て、極力幸次郎を薦めたものだ。

△松方と云へば、國際汽船でゴタ〳〵の中心人物だが、相手もさるもの、幾度となく死生の間を潜つた苦勞人の山下龜三郎や中山節太郎だもの、この勝負何れに扇が上るか問題ダテ。

△政府側から、一番色氣のある勞働委員候補は犬塚勝太郎だそうな。彼は英佛の書籍は縱横に讀破するが、論戰する程會話が長所でない。それに政治家としての貫禄が缺けておるので、これは駄目だろう。

△和田、武藤兩元老の壘を摩して來た、紡績界の新進、大原孫三郎も、資本家側を代表するに適當した人物と云ふので、有力なる推薦者もあるようだが、君は社會問題研究所を開設して、勞働問題解決を希望して居る位だから、その有資格者の一人かも知れぬ。

△國賓派遣說には、農商務省で有力なる反對者と、競爭者が現れたゝめ、花佛の國も立往生の態で、日本に歸りもならず、米國へ渡る譯にも行かず、閉口頓首しておるゲナ、政友會あたりでも、國には些の同情もしないそうだ。

△友愛會からも誰か派遣したい希望もあるらしいが、當局者側ではそれを好まず、若し強いて友愛會から出すと云ふことならば、鈴木文治よりも學術的基礎があり、人格ある賀川豐彦を希望しておるらしい。

△外務省では、また自分の畑から委員を加へたいそうだ。その理由は、今の實業界や、勞働者などを出しては、第一外國と折衝が出來ぬこと、第二勞働記錄なぞをつくるに不慣なこと、第三外交談判にまづかろふといふこと、第四統率者が農商務から出たら、到底統御が至難なこと、第五巴里會議の眞相が不分明なこと等ソレヤ此れやで、隨分變なものになるだろふと。何處までも霞ヶ關の役人は圖々しい。そんなに外交官が腕があつたら、巴里會議でもモット働きが出來たろふに。

△兎に角、勞働委員の選定で、政府が間誤つくやうでは、對列強勞働策なぞは、講ぜられて居ないと見るが至當であろふ。會議の結果日本が再び巴里の二の舞ひを演ずることは明瞭な事實である。

済經時評



凡ての價値は勞力が生む
（マルクス）

關西の資本家及勞働階級の自覺程度

――並に利益分配上の混戰狀態――

本社關西特派員　近藤泥牛

勞働者優遇の必要は今や關西地方に於て何人も之を承認したり、松竹會社が官邊と協議し勞働者デーを設け、道頓堀五座を勞働者の爲に開放し、鴈次郎等進んで出勤し、斯る好い心持を以て登場演技したること從來になしと鴈次郎の述懷せる、又之に引續いて浪花節一派の藝人が、自ら費用を醵出して勞働者招待會を市公會堂に開き、幹部出揃ひにて勞働者に慰安を與へたる殊勝の心がけに動かされたるにや、大阪市内商店にても特に勞働者の爲に割引販賣をなせるあり、一方勞働者側にては、勞働デーに當り互に戒心して失態なからんことを期し、紳士淑女の觀覽よりも一層行儀よく靜肅なりしに徴しても、彼等が如何に階級的の信念の厚く、且つ自覺心の強きかを知るに餘りあらん、當日此狀況を實見したる林大阪府尹感歎して曰く、大阪は勞働問題の發祥地なるべきに、今日此狀況を見て、勞働問題の大阪に於ける解決の必ずしも至難ならざるを、眞實に悟れりと某巨頭實業家言葉を添へて曰く、勞働問題解決の難は、恐らく勞働者側にあらずして資本家側にあらんと、而して勞働者生活上の緩和手段として、所謂營利主義に基づく溫情主義大に行はれ、日用品必需品の廉賣住宅の廉價供給、割增金の給與、醫療設備等、物價騰貴と生活費膨張に伴ふ苦情を打消し得べき施設は、少くとも中會社以上に行はれ、大阪府市の官公吏も亦熱心に之が施設を怠らず、而も理解ある資本家中には之を以て自己

事業上必要なる當然の施設にして、之を恩惠と見るは不可なりと説明する人もあり、即ち資本家が自己の利益を擁護增進する上に於ての必然的負擔なり孜々營々會社の爲に流汗淋漓たる勞働者は、當然の報酬（若くは權利）として是等の施設給與を受くべきものなりと云ふ風に解釋することの資本家側に承認さるゝに至らんか、是れ勞働問題解決に數步を進めたるものなり。而かも前陳の如く斯る理解を有する資本家の極めて少數なることは明かにして、或は救濟といひ、或は溫情といひ、府市にすら救濟課の新設せらるゝありて、勞働問題と云へば失職者の救濟保護等消極的に走り、彼等を無人格者として取扱ふ方面にのみ力を注ぎつゝあるは勞働階級の理想と抱負を蹂躙する不法殘虐なる行爲として、心ある勞働者諸子に代りて、一言の抗議なかるべからざる也。

○

最後に吾人が天下に訴へざるべからざるは、紡績會社並に之と密接なる關係を有する綿糸布商人の橫暴と強慾なること是れなり、綿糸は今や開闢以來に無き高値を現はし、市場は強氣一方にて六百圓の絲價現出を理想として買ひ煽れり、之が爲に綿糸布消費者たる貴族富豪階級以下の大多數の國民、特に月給取階級や勞働階級の脅威せらるゝこと一通りならず、而かも少數の紡績會社と綿絲布商は福々の大成金なり、世人は米價昂騰を重大問題としつゝあるも、騰貴に苦しむ國民の多數なると同時に、米價の暴騰に好影響を受けつゝある國民も亦決して少數なりと謂ふべからず、是れ米價調節に反對の氣勢の起るべからず政府の勇斷に躊躇するも此點にあらんと想像せらる、然れども綿絲價暴騰の好影響を受るは全國數十の紡績會社と其指定商人たる綿絲同盟會員を中心とする綿業關係者の少數なるのみ、國民中の一小部分に暴利を貪る者あるが爲に、多數人の國民の正當なる利益は沒却さる、即ち綿絲布商は株式界の人氣を著しく刺戟し、諸株期米俱に暴騰の氣勢を示し、延ひて一般商品の價格引締を誘致しつゝあるは爭はれざる事實なり、果して然らばには紡績屋の橫暴強慾は、國民大多數の正當なる利益を沒却し、若くは破壞しつゝあるものと云ふも敢て不當の言にあらざるべし。

試みに綿絲原價の採算を見るに、二十手先物として原棉代三百二十圓工費五十五圓計三百七十五圓なるに、之が市場に現はるゝに及び五百圓以上六百圓を理想とせらるゝ位の暴利を占め

是等棉業者一ヶ年の利益合計三億八千四百萬圓の巨額に上るの計算は不當にあらざるべし、而も彼等が戰時五ヶ年中最初の一年（大正三年）を除く外は、連續して此好商盛を保ちつゝある天下無比の僥倖者なり、紡績各會社の今年上半期配當率は前期据置の位なるも、其連期累加の收益は之が處置に困難を感ずる程にて、決算表の作成に苦心の痕跡アリ／＼と表はれあるを發見するに苦しからず、即ち資產の評價を能ふ限り最小に見積り（戰前決算表と比較せば何人も首肯せらる）收益も及ぶ限り之を陰蔽するの方法を講じつゝあり、或紡績社長が、實際の收益は決算面の倍額なりと豪語したるは、蓋し僞らざる自慢話なるべし、而して此内狀を知れる株主は尚より以上の增配を強要し且つ增資をも決行せしめんとしつゝあり、事業上資金の需要あるにもあらざるに增資せんとするは、株式の濫造配當金平均の爲めにして、無用の增資を以て尚此上にも暴利を占めんとの株主の强慾根性を遺憾なく發揮するものにして、彼等の眼中には勞働問題の解決など云ふ觀念更になし、況んや勞働職工の賃銀增加など夢にも考え居らず、たゞ重役は世論の非難を恐れ、賃金增加の聲を大にすべく自ら進んで吹聽し、以て世論の緩和を期するものゝ如し、其心事の陋劣眞に唾棄すべきにあらずや。

今期間の收益にて投下資本の半ばを取返す程の暴利を占むる紡績會社は本年四月少許の增資を決行したるに過ぎず、彼等は揚言して曰く、好況時代に賃銀の値上げを行はゞ、不況時代に之を引下ること困難なりと、何ぞ夫れ自家的我儘勝手の打算なるや粒々辛苦の勞働者の汗の集積する利益をば、株主と重役と高級社員とにて獲得して平然たる、其無理解無同情には呆れざるを得ず、紡績會社中日本一の大資本（三千萬圓）を有する大日本紡績會社の今期役員賞與金六十萬圓なるに、職工保護資金は其半額の三十萬圓に過ぎず、資本金に於て第二位（二千五百萬圓）なる東洋紡績會社の役員賞與は四十萬圓にして社員恩給資金十萬圓、職工保護資金二十萬圓に止まる、之に對して資本金より云へば第四位（一千七百四十二萬七千圓）なる鐘紡は重役賞與三十萬圓なるも、同時に使用人職工臨時給與金（資金にあらず全部現金分配）三十五萬五千圓を支出せるは、多少寛恕すべき餘地なきにあらず、尤も大日本も東洋も若干の臨時賞與を提供し、以て勞働階級の不平を未發に防遏せるは言ふ迄もなし、之に關し茲に皮肉なる一挿話を記さゞるべからず、過

日東紡績會社に於て職工中の組頭級を招集し、重役より彼等平素の功勞を賞して曰く『本社成績の頗良好にして、且他社に見る如き資本家對勞働者の軋轢なき、是れ全く諸君の勉强と自制の結果なり』と、今時の勞働階級は斯る自家本位なる發言を其儘謹聽して受入れる程に無氣力ならず組頭の一人咄嗟之に答へて曰く『我等職工は機械同樣に働けるだけなり、製品價格の暴騰にて巨利を博したるは、經營者其人の手腕にして、吾等の與り知る所にあらず、此故に資本家には六割の好配當を行ひ、重役は半期賞與にて一と財産をこしらへる程の報酬を得らるゝは是れ當然なり、同時に我等が機械待遇は愚か、機械の如く原價の償却をもして貰へぬも亦當然として、此等は爾かく解決し自ら慰めつゝあり』と手酷しく一矢相酬ゐられたる重役一同は、爲に顔色遽に蒼白なりしと傳へらる、紡績重役と之に虐使せらるゝ勞働者側の精神上の違反以上の如し、床次内相の主唱する勞働者資本家の協調など、紡績界には到底望み得べきにあらず早晩勞働者が資本家に對抗して一大爭鬪を起すべき危險地帶は或は紡績界にはあらざるか、たゞ紡績使用の職工は其大部分纎弱なる少女なるが故に、未だ火の手の燃え上らざるならん、紡績女工が夜をこめて百度近き暑々たる室内、綿塵濛々たる裡にて咽せび、機にて頭を打ちては眠むき眼を醒まし、叱咤られ怒鳴られつゝ執業せる光景を瞥見し、何人か悽慘の感なきを得んや、然るに斯の如き辛らき勞働の報酬は果して幾干ぞ、女工一人一日平均僅に五十八錢五厘三毛に過ぎず（男工一人一日平均所得八十一錢二厘七毛）紡績女工の勤續時間短かく一ヶ年に五割以上の新陳代謝あり、而して病者頻出其多くは呼吸器病にて、中には到底健康の恢復すべからざる肺患に罹り、郷里に歸り不治の病體を抱へて死を待つ不運の犧牲者も少なからず、紡績工業にさゝぐる勞働は斯の如く年々幾千百の少女を犧牲としつゝある程に危險の伴ふ以上、其勞働の價値を認むること他工業より一段と深からざるべからず、同時に保健方法を完全にし粗食の譏ある食物の改良を行ひ、而して其勞銀の比率をば、他工業よりも遙に高からしむるが當然なるに、事實は全然之と反對にして、少女幼年の虐使酷遇の聲頻々として外に洩るゝ、紡績經營者の鬼畜も及ばざる根性には、何人か血涙の潸たるなきを得んや。（七月十日）

經濟界時評

中央企業會社新設

東洋製鐵社長郷誠之助男京都商業會議所會頭濱岡光哲君其他全國有力實業家の發企で近く資本金壹千萬圓を以て『中華企業會社』を設立すべく目下創立計劃中であるが其目的は日支合辨に據つて主として支那の商工業に投資する事丼に附帶事業として倉庫業、委託販賣、金融等を營む計畫であるといふ從來種々計劃された日支合辨事業に比して稍出色と認められるのは商業投資といふ看板であるが例の『中日實業』『東亞興業』同樣の境涯結果に陷入らぬことを切望する。

國際汽船の成績

成立以前から各種の悲觀材料に依つて其創立を危ぶまれて居たが國際汽船は去七月一日愈會社成立翌二日直ちに第一回拂込を了へて先づ一と安心と思ふ間も無く今度は重役問題でゴツタ返したが之も遞農兩相の調停で無事解決續て第二回拂込として船舶廿一萬噸廿五隻の提供を告げたが同社の經營方針は其所有船即ち株主の提供船五十萬噸を專ら内外傭船に提供し其傭船料收入に依るものであるが其收入見積りは最初の五ケ年間は噸十圓次の五年間は六圓平均とし支出は船費噸平均三圓の計算を立て向十ケ年の收支豫算を左表の如く作製して居るがこれに依つて見れば十年後には總ての社債及借入金を償還して尚大修繕費積立金一千九百五十萬圓と別に一千七百萬圓の剩餘金を有すべき計算であるが幾多の難關を切拔けて目出度く創立を告げた好運な同社苦い經驗を嘗めて居る同社は反て豫期以上の好成績を擧げ得るかも知れぬ。（表ロ單位千圓）

	收入	諸經費	利益
初年	三六、六六六	一四、〇〇〇	—
二年	五五、〇〇〇	二〇、九〇〇	二二、六六六
三年	五五、〇〇〇	二一、〇〇〇	三四、一〇〇
四年	五五、〇〇〇	二一、一〇〇	三四、〇〇〇
五年	五五、〇〇〇	二一、六〇〇	三三、九〇〇
六年	三三、〇〇〇	二〇、〇〇〇	三三、四〇〇
七年	三三、〇〇〇	二〇、〇〇〇	一三、〇〇〇
八年	三三、〇〇〇	二〇、一〇〇	一三、〇〇〇
九年	三三、〇〇〇	二〇、一〇〇	一二、九〇〇
十年	三三、〇〇〇	二〇、二〇〇	一二、九〇〇
計	四二一、六六六	一九九、〇〇〇	二二二、六六六

日本紡織の禍根一掃

日本紡織株式會社（資本金貳百萬圓四分ノ拂込昨年十一月創立）は主要製品都築式織機が多大の能率を有し且價格低廉なるが爲め業績良好なるにも不拘姉妹會社なる日本高速度鋼會社の窮迫が延ゐて同社に累を及ぼし財政逼切と共に其信用を失墜せんとするの状態に陷つた結果富田社長小椋專務の兩氏引責辭職し代つて太田茂賞氏入つて專務となり整理案講究中の處結局現在資本金二百萬圓を五分の一の四十萬に減資し根本的整理を爲すに決定し、定時總會に於て減資案を可決し重役全部を改選し社長に波多野友江氏を推した、之に依て高速度鋼との關係も全く斷絶し從來の禍根を芟除した譯であるが果して今後豫期の成果を擧げ得るや否やは疑問ではあるが兎に角同社今後の經營振りは相當注目に値ひするものがあらう。

東京現物團の破裂

は一言にして云へば神田鐳藏即ち紅葉屋の巍然たる勢力に對する他の仲間の反抗と見るより外は無

い兎に角紅葉屋と云へば財界に多少重視されて居る夫れ丈け常に五十歩も百歩も先きを行く譯であるから他の仲間には横暴に見えたのであらう其矢先きに各現物店に割當てられた東京市債がどうしても五十萬圓許り消化不能になつたので剩餘受託銀行の興業銀行へ返す事になつたのを紅葉屋がそれでは現物團の歴史ある體面を傷けるからと云つて單獨で引受けて了つて兎も角も世間に醜態を曝さずに濟んだのだが之が動機となつて今次の破裂に至つたのは一寸了解に苦しまざるを得ないと同時に折角有力であつた公共團體の最後としては甚だ面白からぬ次第である。

■日本麻糸の革進

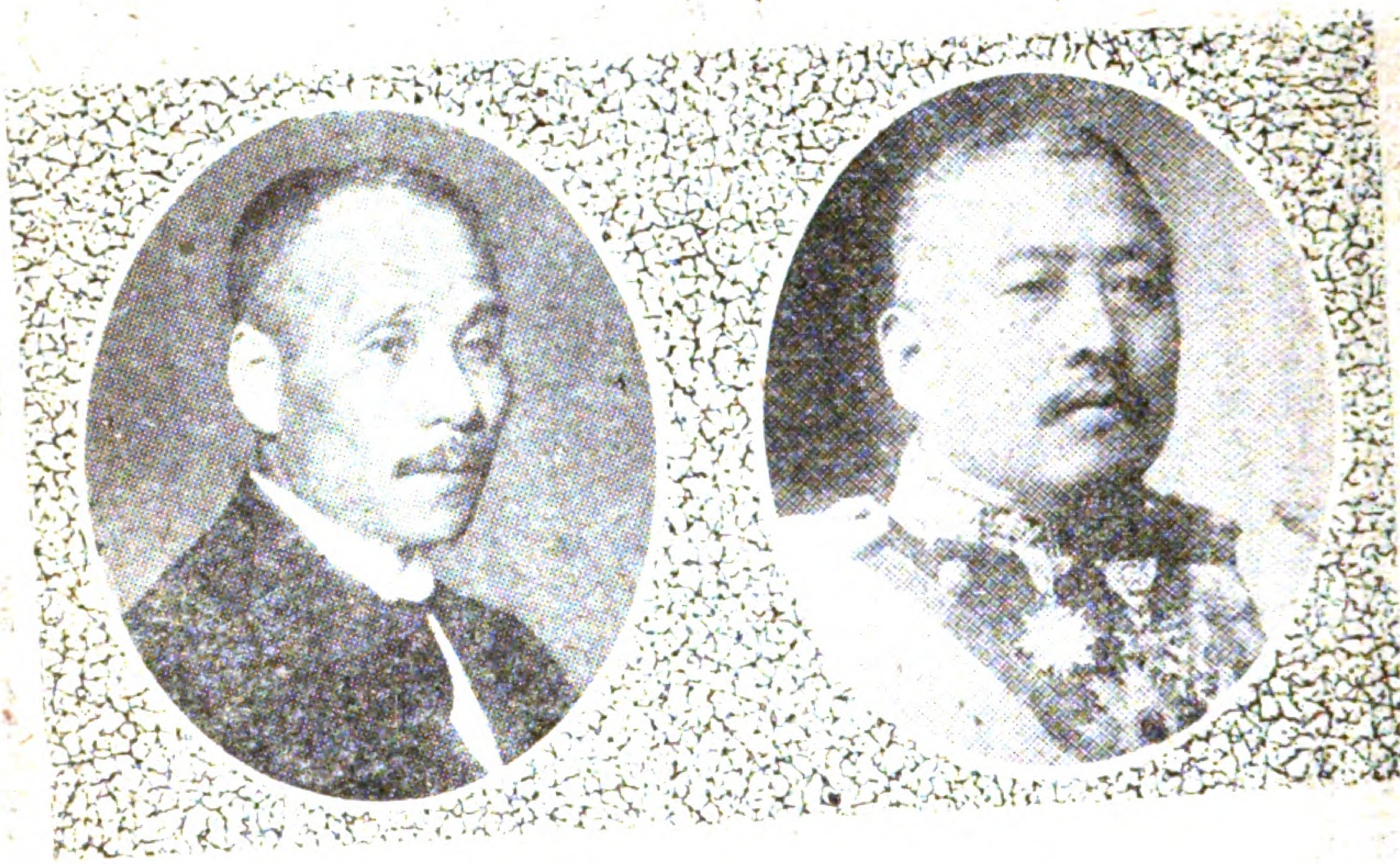
日本麻糸株式會社（資本金三百萬圓大正二年創立）は歐洲大戰の影響に依つて製品の賣行き旺勢を極め昨七年度の如きは上下二期共に年一割五分の配當を行ひ本年上半期も又大活躍を爲す可く栃木縣鹿沼町から東京日本橋箔屋町に本社を移し業務の大擴張を圖るの企劃中突如休戰となり以來我海外貿易の不振と共に製麻界も亦不況を呈し同社の如きも打撃を享けて其配當も前期より五歩減の一割と爲すの已むなきに至つたが茲數年間は海外各國共に自給困難の事情あると內地の消費は依然增加の趨勢にあるに鑑み更に社業の擴張を計るに決定し日本麻織物株式會社（資本金五十萬圓）を買收し從來の製品以外蚊帳、リンネル洋服地其他麻製品の製造加工を營む事になつたので同社の前途は同業者間に相當注目されて居る

■日本鋼管の近況

日本鋼管株式會社（資本金壹千六百萬圓）は休戰と共に鐵價の崩落と先約註文の解約に會し爲に上半期は利益の激減を見たる而已ならず第二期擴張工事中であつた年產四萬噸のスポンヂ工場其他新計劃一切を中止するの已むなき窮地に立ち至つたが其後反動來も一期を劃し財界一般の景氣は順次恢復の兆を示し來つたに伴れて鐵價も著しく盛返して來たので同社の業況も漸く安定を得即ち鋼板、鋼管、銑鐵等の註文は再び擡頭し今日では既に本年一杯の作業を引受け盡すに至つたで最近新に廿五噸の熔鑛爐一基を增設すると同時に近く薄板工場の機械据付をも完成すべく準備中である而して嚢きに同社に合併するに決した電氣製鐵會社の伏木に於ける工場の一部は既に完成し機械の運轉を行つて居るが九月中には同工場全部完成の見込みだと云ふ、斯くして休戰に依つて大なる打撃を蒙つた各種の會社が何れも曙光を認めて來たる事は我が財界の爲めに最も慶賀す可き事柄であるが同時に資本家たるものは戰時中の如き一攫千金の夢より覺めて誠心誠意事業の爲に自重すべき時である事を忘れてはならぬ。

■炭鑛業者の暴利

前述の如く本年度上半期に於ける各種事業は夫々相當の打撃を蒙つて居る（前號所載の暴利配當會社は別として）が獨り炭礦業許りは其採炭費が割合に嵩まなかつたのに反して炭價は却つて昂騰した關係から炭礦會社は何れも好成績を收めて居る其中でも某炭礦の如きは當期利益金四百六十六萬餘圓の決算報告をして居る實に異常な利益だと驚かれるが何ぞ圖らん四百六十六萬圓といふのは眞赤な僞りで實は極內輪の實收益が七百七十萬圓位なのだがそれでは戰時利得稅が非常に嵩むからあゝしたのだがあれでも四十五萬圓の戰時利得稅を支出したのだと空嘯いて居る尨大なる利益をよくも胡魔化しうせたものだと敬服するより外はないが各社の所謂決算なるものが多くこの類で世間へは一向利益がない〳〵と云つて居るやうでは勞働者の同盟罷業が現今の如く猛烈に頻發して止まる所を知らない有樣なのも身から出た錆で致し方があるまい。



齋藤實と水野錬太郎

山本實彦

蓋を開いたら、鎧甲にからまつた舊時代の軍閥、官僚が新時代の總督總監となり乃公は丸腰であると飛び出して來た。この二人のこころ次第で二千萬の朝鮮人が我々の強い味方にもなれば敵にもなる譯である。予は何よりさきに、その二人に東京日々所載の小説『沼の彼方』の一讀をすゝめる。

（一）

強いて狭い範圍の舊日本、即ち官僚と軍閥の出身者のみが日本の政治家である。爵位とか、階級とかの道を三太郎が山越しの如く、ウネリ〳〵歩いて絶頂に達し、或は胸間に綺羅星の如きメタルが積まれなかつたなら、それは統御の重みがないと否定する政治家があつたら、もうその人は世界の思潮を解せぬ、現代離れのした舊政治家である。改造後の時局を擔當して行くには不想應な型と稱せねばならぬ。

（二）

何が爲に長谷川總督は挂冠したか、山縣總監は辭任したか、騷擾事件てふ直接の責任を負ふたとは云ひ條、その源を究むれば、兩氏の思潮が、世界の思想より孤立し、軍閥政治が世界に孤立した飛沫ではあるまいか。世人は少くとも左樣な感想を以ておる。

然り、水原事件以來、軍閥主義の代表者、長谷川、山縣兩氏に向つて、鋭い民論の鋒は向けられた。虐げられた鮮民は憤激のあまり、米國人に哀訴したり、部署を定めて日本の政治家を問訪して意見を交換したりして、悶々の情を遣つた。既に彼等の決心はついておる。一死を賭して二千萬の憐む可き人々を救はんと欲した。その心情、その立場、たとへ彼等に忘恩の譏はあるにしても、事大主義の囚はれたる思想はありとしても、非臨に買つてやらねばならぬことが多い。況や、一身を犠牲に供して死罪尚ほ忍ぶべしとする一部志士の胸中は眞實であり、眞劍であつた。開放されたる政治を要求し、改造されたる組織の下に人類としての恵福に浴したいのは彼等の希望であつた。少くとも彼等が政治に對する叫びには虚僞はなかつた。彼等も人である、我等も人である。彼等の熱烈なる希望には、我等も、熱心に耳目を傾けねばならぬ。

（三）

海の彼方の二千萬人。たとへ海を隔てておるにしても、境は隔てておるにしても、歴史の行き方は別であつたにしても、經濟、政治の事情は異るにしても、平等なるは人類としての行き方である。人類としての行き方が最始であつて終極であらねばならぬ。且つそれが本源、元素とならねばならぬ。

彼等の要求する自治も許してやるがよい。經濟上の保證もしてやるがよい。そして道徳上に於ては、互に守ることが固くあらねばならぬ。

西伯利哈府にての出來事であつた。金放れのよいとか、金遣ひの荒いとかゝら、米國兵は日本兵よりも、評判がよかつた。酒舖へ行つても、商店へ行つても、米國兵は持てるが、倭小な、垢臭い日本兵には、手を延ばして握手を求める美人はなかつた。所が雪は深くなる、駐屯は長引いて年越になる、この間に忌はしき家庭上の出來事は、米國兵と露國婦人との間に持上つてくる。酒舖にても、婦女のために執拗なる米兵は嫌惡される。芝居小屋でも、商店でも、家庭では尚更のこと、米國兵が嫌忌さるゝに至つた。

垢くさい、泥くさい外形の醜は問はれなくなつて、心の錦、錦の魂の持主なる日本兵は朝日子の登るが如く、鮮かなる光を加へて來た。全く泥中の白蓮の如く。

强者はいつでも、何處でも、弱者の家庭まで蹂躙しやうとする獸心がある。此節制が旨く行かねば、假令形式上、自治を許して遣つたにしても、經濟上の保證をなしたにしても、圓滑なる政治が見られぬことが多い。一城の亂れでも、一國の傾斜でも、そこに婦女の弱みが、からんでおることに注目する必要がある。

長谷川氏や、山縣氏の政治振りの何れが惡かつたか、言論壓迫もあつた、鮮人壓迫もあつた、世界の思潮に孤立したのも原因であつた、在鮮内地人の惡辣も手傳つておる。宣教師團の煽動もあつたらう。しかし、それ以外、尤も有力なる原因と想像が

つくのは、「男女節操の蹂躙」ではなかつたらうか。

(四)

彼等には、自治を與へてもよい。參政權を與ふるも可である、その能力奈何によりては母國の宰相たらしむべきも、否むべきでない。

(五)

「一般朝鮮人に對して、新しい、頭を以て臨むことの必要なるは云ふまでもなく、從來の如く取締りと云つた樣な舊式の考へで臨んでは可けない」とは、水野君が時事記者に語つた抽象的空氣一新の宣言であつた。これは齋藤新總督の意思をも代表したものと見るが至當だらう。宣言が古くさつたレールの上を走つたものであるばかりでなく、水野君は非立憲内閣との評があつた。寺内々閣の内務大臣で、そして就任日淺き間に、米騷動が演ぜられ、新聞發行停止の鐵手腕を發揮した人である。内務大臣として氏を記憶するものは、新聞發行停止事件の發頭人として氏を印象するのみである。その人が「新しい頭」の所有者であつて、舊式の考へを云々するのは、あまりに虫がよすぎる。あまりに世人を健忘症と誤診してはいまいだらうか。そして「植民地に對して云々」の氏の言も聞いた。氏は植民政策について研究したことがあるだらうか。朝鮮を以て依然たる植民地と目しておるのであらうか。その頭で行つて所謂「空氣一新」が出來るだらうか。政治家には、自信と決斷は必要であるが、前揭水野氏の三行文字中、新しい頭とか、臨むとか、舊式の考へとか、植民地とかの句章中、階級的不快の念が籠つており、官僚的氣分の充溢しており、そして哲學的基礎に城かれたる文字は唯の一字でも發見することが出來なかつたのは、遺憾の極であつた。

(六)

齋藤氏は海軍大臣としては、過もなく、不足もない好紳士であつた。肌ざわりの柔い、そして律義一方で、友人に對しては懇到親切の將軍である。奥州型の策士風もなく、ヌーボーの裡に細心と熟慮を包む人格者で、あくまで噛り付き主義の官僚でもなければ、わからず屋の軍人といふでもない。同じ伊達侯の家臣であつても、後藤新平氏は衒氣滿々、稚氣縱橫、好んで策もやれば、内閣のブチ壞しもやる。堂々たる大厦にも這入りたければ、自動車でも飛んで走りたくもある。齋藤氏はその眼玉に落ちつきのあるが如く、總ての事物に對して、焦噪性を發揮することがない。否焦噪性がない。

原氏は性格に陰性を帶びておるが、政務には錬達、黨務にはより以上に得意の手腕がある。齋藤氏と同じく山本内閣に列していた。そして同じく岩手の出生である。

シーメンス事件で失脚したる齋藤氏は、鄉友であつて、僚友であつた原敬氏から、復活させてもらつた。

世人は、新總督は須く、武斷派に選ばずに文治派に選べと勸

告した。列强も軍閥政治から蘇れと忠言した。原氏を總理に鼓く内閣はその聲を天來の福音とばかりに聞いた。新しき足場を漁りつゝありし、政友會の有象無象は、文官總督、文官任用令改正の聲に共鳴して、「新しき漁場」でも掘下げが出來るかの感想を抱いて。煽り立て、犇めき立つた。

（七）

しかも期待は全然外れて仕舞つた。鶴の一聲に、村の竹籔に喧しかつた群雀の聲は、寂入るが如くに靜かになつた。白き表徵を紐で現はすならば、原氏の頭髮も白髮鶴の如しとでも評せんか。白髮の鶴は曰く、丸腰のまゝの任命で、それには、大將もなければ、海軍の力もない、それなら、何故に現役に服したか。何故に軍人から選ばなくてはならなかつたか。官制を改正する便宜上現役に服したのでもあろうが、現役に服して總督に任命したことにつき、列强は、丸腰しの總督の任命であつて軍閥政治でないと肯定するだろふか。國民は齋藤氏の就任に、喜悅の情があるであろふか。軍人以外に、七千萬臣民中に朝鮮總督たるの材がなかつた譯であろふか。

（八）

國民の總ては、軍閥政治にあき〳〵した。そして長谷川氏を以て最後の武官總督とおもつていた。原氏は七千萬の人民の福祉より、自己に便宜なる政治をなすために、國民全部の期待を裏切つた。齋藤氏にはいかなる經綸があるか。いかなる勇斷が出來るか。

（九）

誰しも、齋藤氏を以て野心家とは見ていない。シーメンス事件で、自己及び山本氏が豫備編入されたとき「自己は當局としての責任者なれば、當然休職、豫備に甘んずるものなるも山本氏には何等の責任がある、德義上内閣を退けばそれで政治家としての面目は丸潰になる。その上に休職、豫備は死屍に鞭つに等し」と八代氏に對して憤怒の色を見せたと聞く。曲直何れにありやは問はずとして、溫厚の氏がかくまで激するは以て先輩思ひの拂すべき誼の存するを見ることが出來る。しかし、この敦厚の溫情があるために、直に以て政治家に適任であるとは斷言されぬ。

政治家に尤も必要なるは現代の思想を了解する事と、守舊派の施設を片つ端より、改革し行くの大勇斷あることとこれである。兎もあれ三十歲以上の政治家は書籍の上にては現代の思想を知了し得るも、眞實了解の出來得るものは三十歲以下の靑年に俟たなくてはならぬ。それでこんな困難の時は思ひ切つて三十歲以下の靑年に一國の政治を托するのが尤も得策である。

或る一派では三十前後では、思慮熟せず、躁急猪突の時であるからと一笑に附するかも知れないが、破竹の勢は二十から三十にかけての時である、モウ三十五歲以上になれば、因循性、愛

個性の發達が多くなつてくるから、同天の事業は出來るものでない。

若し、今回でも講和全權に三十前後の少壯者を選んだならば、破天の傑動を樹てたかも知れん。その根本基礎となる大綱だけ、國民全體で決定しておけば、少壯者とて決して懸念を要すべき危道には立入るものでない。齋藤氏や水野氏に現代思想の研究が積んであるとは思へぬ。

十

齋藤氏就職中の消極的大失政と見るべきは、日露の役捕獲沈沒軍艦の引揚費、造船造兵修理費として每年數千萬圓の軍事費を要求したことである。捕獲軍艦に手を染めて、國費を水泡に歸せしめた費額は三億に近いものだらうと思はせる、それだけあれば精鋭なる一艦隊が出來るのであつた。

（十一）

捕獲軍艦はいくら修理したとて何等の戰鬪力を回復するものでない。たゞ老朽にして員に備はるのみである。國民の豫算に暗きのを奇貨として、こんな費用が國費として計上されて居るものならば、租税を強いらるる盲目の國民ほど悲しいものはない。帝國議會の諸君はいかにしてこんな費目ありしに氣づかなかつたのか。強いて當局が國民を愚にしたものでもなからうが、當局者に先見の明がなかつた結果、こんな破綻を來たしたものである。これ齋藤氏が政治的識見のなかつた一左券である。

德あまりあれば愚の如くである。齋藤氏は德望家として許してよいが、察々の明が之に伴ふかは大疑問とせねばならぬ。山縣と山本とは犬と猿であつた。寺內と齋藤とはどうであつたか。

齋藤氏の海軍大臣たるとは七八ケ年に迨んだ。しかし陸軍とは睥睨を連續していた。齋藤氏と陸軍大臣とは暗い、劍のある交際を續けていなかつたにせよ、次官以下の間には何れも小刀細工の流行し、暗い雲が附着して、晴々しい秋の日を望むが如きことは絕えてなかつた。怪しい雲、闇路の私語が七八年も續いた。齋藤氏の德がモット偉大なるものであつたならば、その怪しい雲、闇路の私語きは拂拭し得たのであらうが、それほどに偉大なるものでもなかつた。その結果はシーメンス事件てふ不祥事のつながりで引退を餘儀なくされた。

山本氏の代官として、幾代の內閣にも仕へた。そして部內の不平も出でなかつた。海軍部內は小和の海の如く、隱かな航海も七八年もつゞけた。これだけは齋藤氏の德望の映り香である。

（十二）

毀譽は互に半ばする、經綸の水際立つものも發見はされない。

原氏の執れる政策にも非難を加へた。しかし朝鮮を陸軍から取りあげ、そして半ば文官總督にした功績は認めぬでもない。が、しかし、それさへ「時代の歩み」に連れられたもので

る反對の軌道に走る。山縣、寺内氏の立場、心情も此際一考すべきものがある。

樞密院では、新總督には、その武官たると、文官たるとに論なく、兵馬の權を與へぬことにするらしい。この問題には別に意見あるも、須く保留しておく。

(十三)

新總督は、男爵閥にも侮る可らざる勢力があると云ふ。そして老骨のうちでは、可なり讀書もする側だが、こんなことは一向に總督政治に一生面を開く理由とはならない。

齋藤氏と水野氏の任命によりて、總督政治に一道の光明を認めることも出來ず。平凡にして無意義なる更迭に終つてしまつた。兩氏ともに。業に、既に、手腕のほどは試驗ずみとなつた半老骨であつて、殊に水野氏の吏臭深きことゝ、黨派心の熾烈なると、あまりに現實すぎて理想なきことが、今回更迭の興趣を片つ端から打ち壞して行くがやうである。

勞働者の觀たるマルクス（完）

スパルゴ 著
遠藤無水 譯

四

『それはマルクスがエングルスと共にコローンへ來た時分、私に話したのであつた。四月の終りだつたか、五月の初めだつたか私は今よく記憶して居ぬが、或朝わたしの家内が戸外から走つて來て、カルルが町を歩いて居るのを見たと言ふ。私は彼が待ち設けられて居たと云ふ事は聞いて居たが、併しそんなに早く五六日の間に來るのだとは思はなかつた。それで私はバルパラにそれを聞くや否や、取るものも取り敢へず倶樂部へ駈けつけた。すると倶樂部には其晩集會があつて、私は何となくもうカルルが確かに其處に居るに違ひないと云ふ氣がした。

『集會が半ば以上進んだ時、私はうしろの方で聲がするのを聞いて、振回つて見ると、丁度今カルルとエンゲルスとが、演壇の方に向つて來るのであつた。見ると二人の外に、若い華奢な、身の丈の五呎六吋ほどもある、伊達な身粧の、アポロのやうに美くしい、一人の男が一緒に居た。私は前に一度も斯うした若者を見たことは無かつたが、曾て聞いたり讀んだりした處からすると、それがフエルデ・ナンデラサアルで無ければならないと考へられた。

『彼等は孰れも此の集會で演説をした。ラサアルの演説は燃えるやうな情熱と詩韻とに滿ちたものであつたが、カルルの演説は極く落付いた冷静なものであつた。ラサアルは宛然、舞臺

で述べ立てゝ居る名優のやうで、カルルは丁度、講堂で講義をして居る講師のやうであつた。』

『處でハンズさん、お前さんラサアルにも會ひましたかえ』

と、青年は少し相手を押しつけるやうな調子で云つた。

『會つたとも、其晩。それから其後は幾度となしに會つた。カルルは親しく私をラサアルに紹介して呉れた。それから其晩は四人で――カルルとラサアルとエンゲルスとで、ビールを呑みに出掛けた。そして彼等は私に五年前に禁止された新聞のかはりに、今度新たに新聞を發刊する爲に、コローンへ遣つて來たのだと云ふ事を話した。金の用意は整つて、カルルが主筆でエルゲルスがそれを助けると云ふ事であつた。此の新聞は例の『新萊因新聞』で、フライリグレース、ヂヨーヂ・ウエールス、ラサアル其他多くの人達がそれに筆を執ると云ふ事であつたそんな譯で吾々はお互ひの健康と其の新聞の幸先を祝して大いに乾杯した。

『さて新聞は首尾よく發刊された。するとそれに壓迫を加へ出した政府に對して、カルルは忽ち攻擊の矢を放つた。中流階級なる其の株主等は、カルルは餘りに過激だつたのに不平を云ひ出した。カルルが六月革命の大失敗に就いて佛蘭西勞働者の肩を持つた時、彼等は此の主筆を退けやうとした。實際カルルほど民衆を感服せしめ得る人物は、外に無かつたからだ。

『私は或日、委員會――自分もその一員であつた――の報告を持つて事務所へ行つた。するとカルルは私を、露西亞の無政府主義の大立物ミカエル・バクニーンに紹介して呉れた。カルルは決してバクニーンと共鳴して居なかつた。それで二人の間には絶えず論爭が在つた。

『君、君はロバート・ブルユムに就いて聞いた事があるかえ。フライリクレースが彼に就いて書いた散文を君は讀んだかね。多分知るまいと思ふ。そのブルユムはだね、フランクフオルトの國民議院に屬する自由黨の一人で、穩和なデモクラツトであつた。一八四年の十一月の一揆がウインナに勃發した時分に、ブルユムは國民議院から派遣された。

『彼はウインナに行つて、革命運動の指導をした爲に、墺太利の軍隊に捕はれて、銃殺に處すべく獄に下された。私は能く覺えて居る。此の殘忍な處分の行はれたのは、十一月九日の夜であつた。吾々は公開の大集會を催うして居た。ホールの内は咽つ返る程の人であつた。私はカルルに眼を配つたが、彼の姿は見へなかつた。彼は御承知の通り素敵に忙がしい人だつた、毎

喚其の新聞の爲に澤山の原稿を書かなければならなかつた。

「カルルが會場に姿を見せたのは十時頃であつた。彼は沈靜な態度で演壇に身を運んだ。同志の中から拍手を浴せる者があつたけれども、彼は手を擧げてそれを制した。吾々は其時、彼の手に電報用紙の握られて居る事と、そして彼の顔がまるで死者のやうに青白かつたのを見止めた。吾々は其の瞬間、これは乾度何か重大な事件が起つたのだと感じて、忽ち非常な沈默は一同の上に壓し蒐つた。カルルが、讀み始めた時まで、コトンと云ふ響きさへ聞えなかつた。

「電報は極く短かい文面で、そして甚だ怖るべき内容であつた。ロバート・ブルュムは軍法に基づき、ツインナに於いて銃殺せられたり、それが全文であつた。カルルはそれを嚴かな音調で讀み上げた。私は今そのホールに於いて、まのあたり行はれて居る銃殺を目撃するやうな感がした。私は多分みんなが同じやうに感じた事と想ふ、其の數秒時間と云ふものは絶對の沈靜――悲痛の絶頂に於ける沈靜であつた。軈て吾々の寂寞は一種激しい怒りの咆吼に打破れ、そして一同は革命に向つて歎呼した。

「集會が濟んでから私はカルルに言ひかけやうとしたが、彼は振り向きもせずに大急ぎで出て行つて了つた。彼の顔は見るのが怖ろしい位であつた。彼は眞に人間の形を取つた革命其者であつた。私が彼の顔を見た時、私は彼が殺されたブルュムの復讐をする爲に生きて居るのだと云ふ事を思つた。

「ブルュムの死は果斷政略に依つて行はれたものであつた。國王は新内閣を任命し、議會を解散した。由來新ライン新聞は政府が市民から税金を徴收しやうとする總ての企てに對して激しく反抗せしむべく、全市民を覺醒せしむる處の記事を滿載して發刊されるに至つた。勿論それは戰ひを意味した。それは慘憺たる戰爭だ吾々は皆それを知つた。

「カルルは王の權威に反いて武裝すべく國民を煽動する事が國事犯だと云ふ事で逮捕された。吾々はそれが彼の上に恐ろしい結果を齎すのだと思つて、みんな心配した。處でまだ外に、カルルとエンゲルスと、それから新聞のマネーチヤーでコルフと云つた同志との三人にかゝる、誹毀罪に對する裁判事件もあつて、その裁判が開かれた。私は其時傍聽に行つて、カルルの辯護演説を聽いた。裁判所の廊下は人で一杯になり、カルルが其處を通るのを見るや彼等は垂木が揺れるやうな喝采を浴せた廊下に群がつて居る人達は皆斯う云つた、「若しもマルクスが國

事犯の裁判で例ものやうに演説を試みたならば、彼に罪を宣告する裁判官は在るまい」と。

『吾々が廷外へ出た時――あゝ私は言い落したが、カルルには三人の辯護士がついたのであつた――私はカルルに、同志は殘らず來て居るし、同志以外の人々も澤山來て居るが、皆な彼の辯護をして居ると云ふ事を告げた。彼はそれを聞いて喜んだ私はそう信ずる、併し彼が私に言つた事と云ふのは、「ハンズ君僕は屹度あれ以上よく遣るよ。僕がしくじらない限り、僕は檢事を土偶の坊にして見せるよ。」

『君は私が其後の二日間、國事犯の裁判廷に在つたと云ふ事を、賭ける事が出來る。私はカルルが這入つて來た時、彼の手を固く握つた。彼は振り回つて出來るだけ氣付かれないやうに目ばたきをしたが、併し一言も口は听かなかつた。政府側の辯護士等はカルルとそして、彼と共に引致された民主黨倶樂部の實行部員二名とを、極力追撃した。然し彼等の悪罵は主としてカルルに對してゞあつた。つまりカルルは彼等が寄つてたかつて打倒さうとする當の一人であつたが、孰れも愚かに見へるばかりであつた。

『總て檢事の論告が終つてから、カルルはやたらに說き出した。彼は堂々と演説をするのでは無かつたが、併し彼はいつもビールのコップを手にし乍ら、二三の友と對席して語る時のやうに的確に意見を述べた。彼は話し好きな輕い調子で、裁判官に對し法律の解釋をして、政府側の悧巧な辯護士が爲した辯論の大なる誤謬を指摘し、そして彼れ自身の方が辯護士等よりもずつと法律に明るかつた事を證據だてた。それから彼は少しばかり、彼等に政治講義をして與へた。彼は自分の見る處に從つて、政治問題の解釋――日頃の勞働者の立場からする解釋を試みた。

『私の傍に一人の老人が腰掛けて居た、其人は法律學の教授だと皆が云つて居た。彼は目ばたきもせずカルルに注目し、耳を澄まして其の一言一句を傾聽した。「偉い！ 偉い！驚くべき論理だ。」と、老教授はそう云つて、猶は「此人はどんな偉い法律家になるだらう！」と、感嘆に堪へぬ容子であつた。私は陪審官の顔に注意した。そして彼等は勿論みな中流階級の人間なんだが、しかもカルルは彼等の上に深い印象を與へて居る事は彼等の顔色で充分に讀めた。老判事でさへも、カルルの論理が求刑論告を愚にし盡した時、我を忘れ顔を傾けて微笑した。老判事は眼前の一人物の驚くべき頭腦を讃歎して居たのだと云ふ

事は、君にも讀める筈だ。

『軈て三人の被告は、陪審官に無罪を宣告され、カルルは大變感謝された。陪審官は一人の代表者をカルルの許に送つて、自分等は非常に興味あり且つ有益な講義を聽き得た事に對して爰に、「博士マルクス」に感謝を表するの決議をしたと云ふ事を申越した。私は全く君に云ふけれども、カルルに就いて其後は從前よりも鼻が高かつた。私は眞ツ直ぐに家へ歸つて、私のトレフエスに於ける知人六名に手紙を書き、法廷に於けるカルルの大演說に就いて一切報告して遣つた。それと云ふのは、君も御承知の通り、カルル自身は故郷へ一言だつてそんな事を知らして遣らないからね。私は其の古い町に居る凡ての人々に、カルルは今や世界に於ける偉名を博しつゝあると云ふ事を、知らしたがつたのだ。

『政府は其の裁判以後、カルルに對して非常に怖れを懷くに至つた。そして次の五月ライン地方一圓に渉つて革命運動が勃發した時に、當局者は新聞を禁止し、カルルに普魯西亞追放の命を下した。

『吾々は之に對して何うして良いかを考へる爲に、實行部委員會を開いた。カルルは、彼が卽日巴里へ行く事、そして細君や子供は翌日出發する事を主張して、それを實行する事になつた。エンゲルスはアンネツク・キンチル、カルル・シュルツなどと共に、階級鬪爭を爲すべくバヴアリアのパラチネエトへ行く事になつた。新聞關係のあらゆる負債は償却されて、將來攻擊を受けるやうな不名譽な事は、一つも遺して無いと云ふ事を、カルルは吾々に告げた。

『新聞の負債が如何にして支拂はれたかを吾々が聞いたのは其後ずつとあとの事であつた。カルルは自分の妻に屬する一切の金目の物を質に入れ、錢になりそうな家具や其他を殘らず賣拂つて、それで其の負債を拂つたのであつた。考へて見ると其等の負債は全然個人カルルの負債では無いのだから、若しも支拂はずに立去らうとするならば、彼の追放は何よりも良い理由にする事が出來たのだ。然しカルルはそう云ふ性質の人物では無く、全く太陽のやうに正直な人であつた。新聞の負債を自分が脊負つて、それを支拂ふのに自分や家族を切詰めると云ふ、そうしたのがカルルの人物であつた。カルルや其の家族が、コローンで其の新聞を維持する爲に、食膳を固い麵麭だけで濟ました事は、一度や二度の事實では無いのだ。私の妻バルバラは一度カルルの家内や子供が、喰物が足らないで居たのを發見した

それを家へ歸つて私に話したのを聞いて、私も妻もそれが爲に一晩中泣かされた事があつた。』

『だけどもハンズさん、誰か同志の中で助ける人が無かつたものかねえ？』

『うむ、それよ。それが到底駄目なんだよ、君。カルルが自負心の強い人で、それからエニーが又一段と強い婦人だつたからね、助けなんか受けないんだ。バルバラと私とが顏を鳩めての相談に、「迚も放つて置く譯に行かないから、何處から送つて來たものか先方に知らないやうにして、お金を手紙に封じ込んで遣りませうよ』とバルバラが云ふ。カルルは私の手筋は知つてるが、バルバラの手筋は知つてない。そこでバルバラが短かい手紙を書き、彼女が溜めて置いた金を殘らず爲替にして封じ込んだ。「これは博士マルクスと其の家族が必要なる事を知り、篤實なる一同志より贈呈するものなり。」といふがバルバラの書いた文面だつた。其時私達に、カルルやエンゲルスには未知の、一人の若い同志が在つて、それが幸ひ明朝その事務所へ行くのであつたから、その手紙をカルルに渡して貰ふ事を頼んだのであつた。

『私達夫婦に取つて其日は、カルルが其金を受取つて呉れたと思ふと、幸福な日であつたが、然し君驚くぢや無いか、それが少しでも彼に役立つたと云ふ事を、私は信じないのだから。カルルはねえ君、その金を使はず遣つて了つたんだぜ。』

『えツ、遣つて了つた、子供のパンを買ふべきその金を、彼は一體それを何うしたんだね？』

『それを私は明くる日に聞いたんだがね、カルルは其晩、非常な苦境に居る貧しい病人の同志を訪問して、暫く話しをして歸りがけに、病らつて居る亭主に何か滋養になる物を買つて遣つて呉れと云つて、その細君の手に金を握らして來たと云ふ事だ。しかも其の金額は、吾々夫婦がその朝送つた儘だつたと云ふのだ。

『カルルの平常はその通りであつた、彼は私の一生に知つた人の中で、最も親切な溫かい心の人であつた。彼は自分自身の苦痛は默つて忍んで、決して不平を洩らさなかつたが、併し若し他人の悲慘を目擊しては、それを觀過ごす事の出來ない人であつた。彼は戸外で餘所の子供が泣いて居るのを聞いても、何事を措いても出て行つてだまして遣つた。私は彼が町で足を踏み停めて、よく遊び戯れて居る子供たちに注意をしたり、泣いて居る子を其岩丈な腕に抱き上げて賺したり、その顏を彼の胸

に押しあてゝ泣き止んで居る子供のある事などを、幾度となしに見たものだ。彼は決して自分の懐中に金を持つて居る事は出來なかつた。有りつたけの錢はいつも町で會ふ子供を慰める爲に出して了つた。彼が毎朝事務所へ通ふ時分に、いつも二三人から五六人までの子供が彼に絡まりつき、此の笑顔で親切に頭を撫でたりして與れる餘所のオヂさんに戯れついて居るなどは敢て珍らしくなかつた。

『カルルが巴里に行つてからは、私は暫く彼から便りを聞かなかつた。私はバルバラと共に、何うして手紙を與れないのか一時氣懸りでならなかつた。すると或日、彼が巴里へ立つてから約三個月頃、倫敦から一通の手紙が來た。開封して見るとそれが彼の筆であつた。彼は再び巴里を逐はれて、二十四時間以内に同市を去らなければならない事になつた結果、家族と共にキャンバーウエルの安宿に滯在して居た。彼の手紙に據れば萬事有望に進んで居ると云ふ事であつたが、然し其の手紙には彼等が當時苦しんで居た酷い貧乏と難儀とに就いては、一言半句を書き表はして無かつた。

五

『それから二三個月後に、私は二三の同志と共に、コローンの官憲といけなくなつた。吾々は檢擧される筈だと云ふ事を聞き、且つ逃れる道の無かつた事を知つた。それで私は妻と相談の上、直ぐ引拂つて倫敦へ行かうと決心した。無事な同志に僅かばかりの品物を買つて貰つて、それを旅費にデエン街に居るバルバラの姉の許を指して出發した。私は自分達の落着いた家の直ぐ隣りにカルルが住んで居やうとは夢にも知らなんだ。

『處が事實はさうであつたのだ。誰あつて私に彼の事を話した者は無い、私も家の者が誰あつて彼の居る事を知つて居やうとは思はなかつた。處で到着後數日して、私は彼の通るのを見たので、走つて出て呼び止めた。彼は私が一目見て、胸を刺されるやうに感じた程、痩せてそして窶れて居た。それでも彼は私を見て非常に喜び、兩方の手で私の手を固く握つた。カルルの握手は、その相手に、世界中で自分が一番カルルに愛されて居るのだと云ふ感じを抱かせる握手であつた。

『暫く話して居る間に、カルルは自分がそのやうに衰弱して居る譯を、それとなく私が充分悟れるやうに物語つた。私は若し彼の感情を傷ける憂ひが無いのなら、それを聞いて思ふさま泣くのであつた。君、カルルと其の美くしい妻のエニーは、屢

々、喰べる物も無く、寐る處も無かつたそうだ。私にはそれが彼等がどんな風に生ひ立つたか、生活の苦勞など丶云ふものを露知らず、何不自由なく寧ろ裕かに暮すやうに出來て居る事を知つて居て見ると、一としほ悲慘な事に思はれた。

『併し私が本統に彼等の悲慘な事實に就いて知つたのは、彼から聞いたのでは無かつた。彼はそうした境遇に就いては勗めて隠す性分の人だつた。私はカルルのやうに、自分の悲痛な方面を暢氣にして見せる人のある事を、絶對に聞いた事が無い。然し私のバルバラの身內で、多分バルバラの伯父だつたと思ふ同じ家に居たコンラッド・シレエムは、カルルとエニーが倫敦へ來て以來の親しい交際であつたそうだが、彼はカルルの生活に就いて私の胸が裂けるやうな話しを私にして聞かした。彼等が倫敦へ來ると間もなく、小さい方の子供が出來たのであつたが、其時彼等夫婦には產婆や醫者を頼む金も無ければ、赤ン坊に安物の搖籃を買つて遣る金さへ無かつたと云ふ事だ。

『そう云ふ貧乏が數年續いた。私はよく毎日のやうに、頭を惡くし足を傷めそして遂に數ケ月入院するに至つたまで、始終往復してカルルを訪ねる事にして居た。バルバラは當時、金持の家の洗濯物をするのが仕事で、それに出て行つた。そして結局吾々夫婦は、思ふやうに我が敬愛する老カルルを助ける事が出來なかつた。それで私達は丁度、カルルをそのやうに憔悴させ年寄らして居た處の貧乏に就いて、何にも知らなかつたやうな有樣であつた。私は若しあの子供達に慰められるやうな事でも無かつたら、カルルは其の苦勞の爲に壽命を縮めて終うだらうと思つた。子供達は彼を若く元氣にさして居た。彼は數日の間喰物として唯だ乾いた麵麭の外に手に入れる事が出來なかつたが、それにも拘らず彼は、町へ出ると大童になつて笑ひ興じ、口々にマルクスの爺ちやん、マルクスの爺ちやんと叫んで寄つて來る子供の群を、自分の着物に絡みつかせて居た。

『彼は時々病院まで私に會いに來て與れるのであつた。彼はいかに疲れて居やうが、弱つて居やうが、能く來て與れた。そしていつも私と愉快さうに時を過ごした。私は顏色を讀まれぬやうにして、大變に機嫌が好いと云ふ挨拶をして居た。彼は私を樂しませやうとして、別に運動上に元氣づくやうな事も無かつたのだが、それでも矢張り運動に關する氣の引立つやうな便りを齎らしては私に話したり、そうかと思ふと又、私ばかりか同室の患者までが吹き出して大笑ひをするやうな、色んな戯談まで云つて聞かした。

『私は或日カルルに、其の病院の下の片隅の寢臺に居る、小さな獨逸人の少年の事を話して聞かした。それで彼はその少年を見舞つて遣らうとしたが、併しもう望みは無かつたのだ。看護婦が私の處へ來て、あの哀れな子供さんは、飛んで了ふより外ないのだと云つた。それを私がカルルに告げた時、カルルの眼からは頻りに涙が流れて、あゝ哀れな子供よ、若者よと彼は溜息を吐いたそして彼は階下に降りて行つて、一時間、もつとにもなつたらう、頻りに何やら少年と話して居た。其時であつた私はその少年の笑ひ聲が病院の長い廊下を傳つて來るのを聞いた。それ迄と云ふものは、病院で彼の笑ひ聲を聞いた者などは無かつた。と云ふのは、誰も此の哀れな寂しい少年を見舞つて與れた者が無かつたからだ。

『其後よくカルルは、自分の時間を其の少年と共に費やした彼は本を持つて來て、やさしい母親のやうな調子でそれを少年に讀んで聞かせたり、いろんな爲になる話しをして聞かせたりした。それで少年は病らつて居ても非常に幸福で、カルルに會ふのが何よりの樂しみ、いつも彼はカルルにそう呼べと云つて教へられた「ニック小父さん」をキスするのであつた。後に其の少年が死んだ時、カルルは丸で自分の子にでも死なれた時のやうに泣いて、とう／＼墓地まで見送つて行つた。』

『あゝ、ハンズさん。偉大な立派な人であつたねえ。彼は宇宙大の心を心として居た人に違い無い！』

『私はカルルの講演を聽く爲に、獨逸共產黨倶樂部へ行つたものだ。何でもあれは數年あと、一八五六年の冬の事だつたと思ふ。カルルは三四年その倶樂部に遠ざかつて居た。彼は倶樂部に集まる人々の黨派戰に堅き果て、そしていつも暴力革命ばかり叫んで居た頭の熱い連中を嫌つたのだ。私はカルルが此の倶樂部に遠ざかつて居る其間は、キンケルやキリヒや其他ローマンチツクの中流階級者が、其處に幅を利かして居るのを屢々見たカルルは私に斯う云つた「何の事ア無いよハンズ君、みんな泡沫さ。全然泡沫ならざるは無い。彼はぢきに革命を口にするそれは其の言葉が如何にも大きくそして印象的に聞えるからだが、然し決して彼等を疎かに待遇してはならない。鐵砲玉の革命主義者" Popgun revolutionist "と云ふは彼等の事だ。」

『そう云つた風の事を私は、一八五六――五七年頃に、カルルが其の倶樂部でした經濟學に關する講演で聽いた覺えがある彼は例の陪審官達に說いたと同じやうな事を、例の冷靜に落付いた調子で、教師の如くに吾々に講義した。そうして聽て彼は

吾々がどんなによく理解して居るかを見る爲に、質問を發したものだ。そして彼の講演に注意して耳を傾けて居なかつた事を示した者は、一種の小言を聞かされものだ。カルルは其の人物をまともに見て、「同志何々君、君は本統にあの講演を傾聽したのか？」と云つた。彼は結構な教師であつた。

『私はカルルの事務が方々少し改まつたと思ふ。エンゲルスも亦た彼を助けた。孰れにしても彼と彼の家族とは郊外に移り私は其後あまり彼に會はない。私の家族は其頃ではずつと大勢になつて、子供たちに着せたり喰はしたりの爲に、私は二三年運動から身を引いて居た。それでも私は日曜には時々カルルを訪問した、そして其時いつも吾々は、運動關係の範圍に起つた總ての事に就いて能く話し合つた。私はよく自分で買へるだけの上等の葉卷煙草を土産に持つて行つた、そしてカルルはいつもそれを賞翫した。

『カルルは大の煙草好きであつたからね。彼の口に葉卷が咥へられて居らぬためしは殆んど無くそして、怖ろしい安物を彼は吹かして居た、それで吾々の間では、彼の葉卷を「マルクスの繩の端」と唱へて居たもので、彼の葉卷はこの名の如く粗末なものだつた。彼に取つて喫煙は怖るべき事件であつた。と云ふのは煙草が安かつたからだ。彼は全くそれが爲に健康を害して居た。だから私は能く「彼に上等の葉卷を一函持つて行くのは、運動を助ける所以である、つまりそうすれば、彼にお馴染の「繩の端」を喫はせずに濟むからだ」と云つたものだ。

『氣の毒なのはエニー！彼女は私が葉卷の一函をカルルの許へ持つて行く度毎に、大變嬉し相だつた。「ねえハンズさん、彼が煙草を喫はなければならない間中、上等なのを喫ふと云ふのは結構なことですわ。彼が喫ふ安いヤクザ煙草は、本統に彼の身體に良くありませんの。」氣の毒な事さ、ねえ君。カルルがヂッと辛抱して來た貧乏と云ふ奴が、彼の壽命を少しづゝ刻んで居た大きな原因だと云ふ事だ。エニーは知つて居るのだ。そして私も亦たそれを知つて居る。エニーの言葉では心臟を刺されるやうであつた。』

『あゝ、彼は殉教者であつたね、ハンズさん――自由の爲の殉教者であつた。そして「殉教者の血」は常に目つ到る處に於いて教會の種子だ。』と、若い同志は沁々云つた。

六

老ハンズはしばらく沈默した。彼は恰かも魂を奪はれた者の

やうになつて、自分の椅の上なる壁の肖像を見詰めた。青年も亦た沈黙に落ちて、彼はチツと老ハンズを見守つた。フト老ハンズの面に、不思議な微笑が波打つた。とう／＼その沈黙を破つたのは老ハンズであつた。

『君、あの萬國勞働同盟に就いて、君は勿論聞いて居るだらうね。カルルが此の寫眞を撮つたのは、丁度あの萬國勞働同盟の出來た時だつた。彼は幾年も前から長い間、私に寫眞を呉れる約束だつた。そして彼が日曜日に愈々この寫眞を私の處へ持つて來た時、彼はいかにも、思慮ある者のやる事としては餘りに感傷的の事柄だと考へたかの如く、いゝ加減恥かしさうであつた。『ハンズ君、直ぐ見飽いて了ふだらうよ』と彼は言つた。

『あゝ私の記憶では、あの午後の事が、全く昨日や一昨日の事のやうだ。二人が椅子を並べて煙草を吹かし乍ら話したのはデンナーの後だつたが、其時カルルは私に斯う言つた。『ハンズ君、私は時代が少し動いて來たと思ふ、それは運動に關係する事でだ。吾々は團結を要するよ、ハンズ君。全勞働者は同盟しなければならぬ――同盟し得る――同盟しなければならぬ！佛蘭西と獨逸の勞働者が萬國博覽會に行つた事に於いて、吾々は好出發點を得た。ブルヂヨアジイは其進路を展示した。實行されなければならぬ。」それからカルルは私に、此の運動は何う云ふ風に船出をしたら好いに就いて說明し、私は彼に自分も之に加はつて出來るだけ力を盡すと云ふ事を誓つた。カルルはいつも共同者の助力を要求した、そして大抵彼は私の處へ來て、私が加はつて或る動機を先發するやうに、私を引入れたものだ。

『亞米利加に於いて大市街戰の勃發した時その道が開かれたカルルはクラツドストン及び中流階級が、一般に南方の奴隷の持主の肩を持つた其の遣方を憤慨した。知つての通り彼は單に奴隷に味方したばかりでなく、大統領リンコルンを愛した。彼は飽くまでリンコルンの稱讃者であるらしかつた。或日彼は私の處へ來て、落付いた態度で、而も極めて熱心に『ハンズ君、グラツドストンの奴隷持主に對する呪ふべき惡魔的援助を、吾々は何とかする處が無くてならない。吾々は大統領リンコルンに對して、亞米利加に於ける勞働階級は、彼の正當なる事を知り且つ感じて居る事を、彼に敎へなければならぬ。それにハンズ君。アブラハム・リンコルンは吾々に屬する人物だ、彼は勞働階級の子だ。』

『カルルはリンコルンの稱讃でモツト多くの意見を述べ、そして彼は獨逸の社會主義者が南北戰爭に赴いて、孰れも北軍に

投じたと云ふ事は、如何に誇るべきであるかを私に語り、又彼れ自身が其の舊友で、フレモントの下で戰つた處のヰーデメーエルと結ばんとした事を話した。その事では全くカルルは熱心であつた。何人であつても此の南北戰爭が、それまで一週間五弗で記事を送つて居たニューヨーク・トリビューン——私はそれが其の新聞の名だと思つてる——の彼の唯一の收入がフイになつた事から、カルルは飛んだ禍だつたと云ふ事を彼に納得させやうとしても、それは全く出來ない事だつた。

『彼は私に求めて、吾々の同盟でグラッドストンの罪を責めリンコルンを後援すると云ふ決議をしろと云ふ。私は吾々の同盟で斯樣な決議をするのは、英吉利に於ける勞働者の團體の嚆矢だと信ずる。併しカルルは其處で中止しなかつた。彼は此事を別の勞働の協會と共に、萬國勞働同盟に取入れた。そして集會は全國に渉つて開かれた。かくてカルルは、英吉利に於ける思潮をして、リンコルン側に傾けさした處の人がカルル・マルクスであつたと云ふ事を、世人が殆んど知らなかつたと云ふ其の地盤を維持して之を遣り遂げた。リンコルンが氣違い役者のブースに殺された時、カルルは全く口惜し泣きに泣いた。彼は見事な演說をした、そして全國の集會で採用された處の決議文を草した。あゝ、それから君、リンコルンは其の怖るべき戰時に於いて吾々が與へた彼の援助に對して感謝を表し、そしてカルルはリンコルンが同盟本部に宛てゝ送つた感謝狀を私に見せた。

『カルルは凡て此の調子であつた。彼は常に勞働階級を指導して其の爲すべき事を爲さしめ、又常に他の國民をして聲價と光榮とを贏ち得しめた。彼は一八六六年に、普通選擧を要求する勞働者の總ての會合の、設計を樹て指導をしたけれども、彼は決して自分に其の聲價を取らなかつた。彼に於いては總てが終極の目的の爲であつて、決して現在の光榮の友では無かつた。數年間、彼は自分の時間を擧げて萬國勞働同盟に盡し、そうして敵はよく「運動から富を得て居た」ものと彼を誣ひたけれども彼は其の遣つた一切の運動では一ペニーも取らなかつた。

『私はカルルに就いて奴等がいろんな虛僞を拵らへるが、彼に障つて堪らなかつた。諸新聞はよく、吾々はそんな事實の絕對に無かつた事を承知して居るけれど、萬國勞働同盟の「內密」の事として、「硫黃同盟」に關する話しを書き立てた。カルルは暗殺と血の革命を計畫して居るのだと云つて非難されたが、此の一事は他の何事よりも以上に彼が憎まれ恐れられた原因であつた。常にそうした惡口と戰つて居た彼は、「奴等に吾々の運動を

破壞するのが目的で、探偵とそして隱れた敵の有力者だ」と言つた。實際彼は自分の本領を守つて、キイトリングに反對し、ヘルキツクに反對し、バクーニンに反對して來たでは無いか。

『一八六二年にラサアルがカルルを訪問した時、私は彼と共に居た。其時私は、武器を取つて革命を起さうとする企ての愚かな事に就いての、彼の意見を具さに聞いた。ラサアルは其の少し以前に、カルルに大尉シユワイゲルトを送つて、擧事に用ふる彈丸を買ふ金を調達して、此の大尉を助けて吳れと彼に手紙で賴んだ。カルルは此の計畫に關しては何事を爲す事も拒絕した。そしてラサアルはそれに對して怒つた。彼はカルルを罵つて斯う言つた。『君の遣方は僕に取つて悠長に過ぎる。何うしてそんな事で、何事でも爲すに足る丈に强固に、平民階級の政黨を發展させる事が出來るものか。』

『其時カルルは笑つて斯う云つた。「そらア仰せの通り全く悠長だ。然し吾々が革命に要する處のものは知識だ——彈薬では無くて知識だ。吾々は耐へなければならぬ、忍耐は吾々に當つた鬪だ。菌は一夜にして成長し一日にして枯れる。樫は育つに百年を要するが壽命は千年も續く。吾々の要求するのは樫だ。菌ではない。」……』

『いかにもマルクスは其の通りだ、ねえハンズさん』と青年は更に言葉を續いで、『如何に耐忍でそして遠くを見る明があつたらう！處でラサアルのそれに對する考へは何うであつたかしら』と、相手を見た。

『彼は遂にカルルを理解しなかつた、と私は思ふ。兎も角もカルルは私に、ラサアルはあれきりで自分と交誼を斷つたと云つた。二人の間には、君も解する通り、爭いは無かつた。唯だラサアルが、自分とカルルとは其の意見に於いて非常に懸隔のある事を悟つたのだ。カルルは能く、「ラサアルは全く賢い男だ併し彼は丁度我儘息子のやうに、十一時に十二時の鳴る事を要求する」と云つた。處で斯う云ふ點では、ラサアルのやうな人が世間に幾らもあるテ、ねえ君、そう云ふ手合は樫の樹が菌のやうに一夜にして成長しないと承知せぬ。

『私は萬國勞働同盟には最後まで、ヘーグの大會が終つてから、其の本部をニユーヨークに移す事の決つた時まで、とゞまつて居た。それは併し私には非常に辛かつた。私にはカルルが誤つて居るものゝやうに見えた。私は、同盟本部が亞米利加に移されて、それをカルルに告げられた時、萬國勞働同盟は既に實際的に死んだものと考へた。然し彼は私の感想を見拔いて、」

自分一人悠々自適する事が出來ず、私に次のやうに云つた。

「ハンズ君、私は君等の卒直なのを怖れる。萬國勞働同盟はいろんな事情の下に總括される事は出來ない、唯だ、成るやうに成つた。ハンズ君、成るやうに成つたのだ。私の健康は甚だ賴りない、そして私は略ぼ、吾々の戰鬪の關係する全範圍で、する事とした。私は唯だバクーニン及び其の一派との戰ひは猶ほ續けたい。若し私が此の戰ひから退くならば萬國勞働同盟はバクーニンの司配に歸して了ふ。私は此の組織が、バクーニンと共に此の地に在つて榮えんよりは、寧ろ亞米利加に於いて滅びん事を是認する。ハンズ君、その方が上乘だ、ずつと上乘だ。」

『その意見を聞いた時であつた、私は此の數ケ月の間に如何にカルルが年寄らしくなつたらう、もう間もなく吾々はカルルを失はなければならぬのだと、そう思つた。』

七

『然し彼はそんなに早く死にはしなかつたね、ハンズさん彼は其後十年以上も生きて居た。そして十年は隨分長い時間であつた。』と、青年の同志は言つた。

『あゝ、十年だ！併しその十年は、どんな歲月であつたらう少し教へて吳んないか。』と、老ハンズは震え聲でそう云つて、更に續けた。『ねえ君！ 病弱と悲慘――全敗の十年、それが何であつたらう。その根が虫に嚙まれて居る草木のやうに、彼の衰へて行くのを私は見なかつたが。咳が出て來ると、體軀が片々に振えるのを私は見なかつたが。いゝえそれ處ぢやない、彼がいよ〳〵死んだと云ふ事を聞いたら、喜ばしい事だと――彼れ自身の爲に、最早や苦痛の去つた事は、喜ぶべき事だと――私は屢々考へて見た事があるでは無いか。

『そうだ。彼は十年生きて居た、併し彼は其間彼になし崩して死んで居たのだ。彼は其間ずつと苦しみ拔いて、一刻々々が苦痛であつた筈だ。「オー、ハンズ君、私に若し「資本論」と云ふ仕事が無かつたら、もう疾に私は終焉を告げたんだ。」私の腕に摑まつて、二人がハムステッド・ヒースを步いた時、彼は私にそう云つた。」幾年となしに、苦しい思ひをして生きて居るのは、地獄だよ。併し私は、「資本論」を完結しなければならん。私は今まで、運動上に、これほど意味ある事を、何もして居ない。そして此の仕事は、誰にも出來ない仕事だ。私は唯だこの書物の爲に生きて居なければならん、自分の一息々々が苦しみ

なんだが。」

『然し彼は結局、その仕事を仕遂げるまで生きはしなかつた資本論の第二巻と第三巻の出版は、エンゲルスに遺された仕事であつた。その仕事を仕上げべくエンゲルスが生存して居たと云ふ事は、社會運動に取つて實に非常に有難い事であつた。全くエンゲルスを措いて、外にそれを仕遂げ得る人は無かつた。殊にエンゲルスはカルルと双子の兄弟のやうであつた。同志の中の或者は、幾分それを嫉んだ事も屢々あつて、カルルとエンゲルスは「シャムの双子」だと噂した位だが、併しそれは誰人にも區別は立てられなかつた。若しエンゲルスに對する關係がそうで無かつたならば、カルルはあれほど長く生きても居なかつたらしい、彼の仕事は半分も仕遂げられなかつたに違ひない。私はカルルに親しんだほど、それほど深くエンゲルスには親しまなかつたが、それでも私はカルルの爲にと、それから彼が常にカルルと歩調を合して遣つて居たその遣方とで、私はエンゲルスを愛した。

『最後の二年に就いては、私は平氣で語る事が出來ない——私は始終、一方の室にはカルルが病んで寢て居るのを見るし、もう一つの室には癌腫で苦しんで居る彼の妻、いとしいエニーを見て居た。全く恐ろしい事であつた。それで私はいつも家を出掛ける時に、今日こそは二人が死んで、そしてその悲慘から永久に離れたと云ふ事を聞きたいがと、それを望んで居るのであつた。然しエンゲルスだけは、カルルが快くなるだらうと考へて居るらしかつた。彼は私が或日、カルルは迚も生きられないと云つたら、ひどく怒つた事がある。けれどもエニーが死んだ時は葬式の跡でエンゲルスは、「フライツツヒ君。マルクスも今は御仕舞だ、彼の一生も亦た終つた」と私に言つた。そして私はエンゲルスは眞理を語るのだと思つた。

『それから聽てカルルが死んだ。彼はアーム・チェーアに凭つて死んだ。一八八三年の三月十四日、午後の三時頃だつた。私はその夕刻エンゲルスから知らせを受けて、メートランド公園外の家へ駈け付けた。そして其夜私は、ベッドの上に横たはつて居る彼を見た。彼の唇には昔の懐かしい微笑が漂つて居た。私はエンゲルスにも、哀れなエレーノル・マルクスにも、一言も云ふ事が出來なかつた。唯だ默つて彼等の手を握りしめてヂツと泣き出さうとするのを抑へて居た。

『それから愈々土曜日の正午、彼はハイゲート共同墓地の、妻と同じ墓所に埋葬された。エンゲルスがその墓の前で、カル

ルは偉大なる哲學者であつたと云つて、演說をして居る間に、私の心はトレフエスの往時に彷つて居た。もう一度二人が子供の時代に返つて、或は仲よく遊び戯れたり、或は彼が少女のエニーと遊ぶ事から喧嘩をしたり、もう一度學校の庭に寄つて、彼の語るいろんな噺に耳を傾けて居るのであつた。そして私はカルルと共にもう一度、あのカルルが哀れな老敎師ヘール・フオン・ホルストに關して書いた詩を聲高に歌ひながら、二人で故郷の町を練り歩いて居るのであづた。

『舞臺が一變して、私はバルバラと一緒にビンゲンに行つて居た。二人してカルルとエニーの顔を見て笑つて居る、カルルはポケツトから御飯粒を拾ひ出してじようだんに笑ひ興じると新妻のエニーはそれを見てきまり悪るそうに顔を赤らめた。エンゲルスが墓前で何を話したのか、私はそれを語る事が出來ない心が遠く離れて居たので、私は全然それを聞かなかつた。私は唯だ生きて居るカルルを考へて、土に歸しつゝあつた死體のカルルに就いては考へる事が出來なかつた。

『舞臺は再び廻つて、今度は自分がコローンに歸つて居たやうだつた。カルルは判事陪審官に向つて、勞働階級の爲に辯じて居る。私はヂツとそれに聞き惚れ乍ら、氣違のやうに喝采するやがてその良師に腕を取られて、私は其場を出た。

『あゝ、君、その午後墓地を迹に家へ歸つて、その冷たい地下に横たはつて居るカルルの事を偲ぶのは、私に取つて恐ろしい恐ろしい事であつた。太陽は最早や私の爲に輝やかなんだ。そしてバルバラや幼い子供バルバラの小さいグレチエンでさへも、私を樂しませる事は出來なかつた。エンゲルスが墓所で言つた通り、カルルは大なる哲學者であつたに違ひない。然し彼は實に偉大なる人間、偉大なる同志にして友人であつた。人々は彼の記憶を新たにしやうとして、赤銅の記念牌を建てやうと打語らう。併しそれは愚かな企てだ。小さな人物の記憶はよく赤銅の記念牌で生かされる、併しカルルの如き人物には記念牌は要らない。人類の自由の爲の大なる苦闘の繼續する限り、カルルの名は各人の心の中に生きて居る。

『長い月日の間で此の苦闘が終りを告げた時、幸福な男や女が過去に於いて吾々が耐へた處の苦しみの時代の驚くべき心情を讀む時、その時始めてカルルの記憶される事が止むだらう。その時になつたら、此の貧弱なるハンズ・フライツツヒの私がカルルと共に學校へ行つた事、私と彼とが一緒に遊んだり喧嘩をしたり、殆んど六十年間、私が彼を愛した事は、誰にも認められまい。併しそれは兎も角も彼等は決して、私が知つたやうにカルルを知る事は出來ないのだ。』

『もう一度老人が沈默に落ちた時、涙は彼の双つの頬を逆つた。そうして若き同志はしほらしく其の節くれ立つた片方の手で唇を抑へて、暗い戸外へ出て行つた。（完）



監獄挿話

面會人控所

伊藤野枝

一、靜かな讀書生活

受附の看守が指した直ぐ向側の『面會人控所』の扉は重く閉されてゐた。龍子は新しい足駄の齒がたゝきにきしむのを氣にしながら靜かに步み寄つて其の扉に手をかけた。重い戶が半ば開くと、直ぐ正面に同志のMの蒼白い顏が見えた。

此の控所は、東京監獄の大玄關の取りつきの右側で、三間ばかりの奧行をもつたそのたゝきの土間にそふてゐる細長い室であつた。這入つて左へ突き當つた廊下へ上る扉口と入口を除いた外は、此の九尺に三間の細長い室の三方の壁には面會人の腰をかける爲めの幅の狹い木の腰掛けが、恰度、棚のやうな工合に取りつけてあつた。廊下へ上る扉口と向き合つた南側の、前庭に面した壁の上の方に大きな窓が一つ開いてゐた。

Mは其の入口の正面に腰をかけてゐた、室の內には、傘や、下駄や、スリツパが、二三足おいてあつたが、面會人はMを除いた他には、三つか四つ位の子供を縞目もわからないやうな汚いねんねこで脊負つた女房が一人隅つこにうづくまつてゐる外には誰もゐなかつた。

『もう濟んで？』

思ひの外に人もゐず、ひつそりした室の內にMを見出した龍子は直ぐMの傍に腰を下しながらきいた。

『いや、まだです。僕は午後から——今S爺がY君に會つてゐる處』

『Sさんが？　さう、ぢやあなたはWさんに會ふのね』

『えゝ、僕がY君のつもりでしたけれどSさんが先きに來てさう云ふ手續きをしてゐたもんだから——』

Mは昨日みんなで極めたのとは少し手順が違つて來た事を龍子に說明した。それから二人は、昨日、此處の未決にゐる四人

が裁判所へ出た事を知つて、何うかして遇へないまでも皆んなでゐるのを知らせたいと思つて半日其處の假檻の前に立ちつくしてゐた事や、思ひがけない四人の收檻についてのいろんな事を話し合つた。

『Mさん、あれも囚人のゐる處?』

開放された廊下への上り口から見える中庭の向ふの低い屋根を壓して高く聳え立つた家の側面が、フト龍子の注意を引いた。それは一と目見て、封建時代の古い牢獄を思はせるやうな頑丈な木造の建物だつた。黑つぽい褐色のぬり色が風雨に曝されて如何にも古めかしい色をしたのも、丸太を横に積み重ねたやうなその外壁の上の棟近くにある僅かに光りを採るばかりの、まるで動物の檻のような感じの四角な横木をはめた小な天井裏の窓も、Eが不斷から云ひ馴らしてゐる『牢屋』と云ふ感を其のまゝ現はしてゐるとしか見えなかつた。で、龍子は、嘗つて此處の未決檻に多勢の同志と一緒にゐた事のあるMに聞いた。

『いゝえ、あれは違います。あれは乾度看守やなんかのゐる處でせう?囚人のゐる處はあのもつと向ふにあるんです。僕等の同志の行く處は大抵四檻と八檻と云つて一番左側の棟になるんです。』

Mは其處からは見えない檻房の位置や構造などに就いて委しい說明をしながら、自然にいろんな事を思ひ出すと見えて、呑氣な檻房生活の話をして聞かした。それは龍子も屢々Eからも聞いてゐた。龍子はMの話を聞きながら、Eから聞き知つた此の中でのいろんな挿話を思ひ出すと、今此處の獨房の何の一つかに胡座をかいて讀書をしてゐるEの姿をまざ〳〵と見るやうな氣がするのだつた。

『半年や一年なら…………。』

牢屋の話が出るときまつてEはさう云つた。

『遮斷生活も偶にはいゝもんだよ。ああ、暫く本を讀まないな…………。』

いろんな、下らない雜事におはれ通しで、疲れた時などは、彼は本當に靜かな、何んの煩ひもなく讀書三昧に暮らせる檻房生活が、染々としさうな調子で、よくさう云つた。

『Eは此の間N警察で會つた時に、二三ヶ月讀書が出來さうだなんて呑氣な事を云つて笑つてゐたけれど、他の三人は何うしてるでせう。Nでは皆んな一緒だつたから元氣がよかつたけれど、別々になつてからはきつと心細くなつて悄氣てるかも知れないわね』

龍子は、廿代の半ば以上を獄中にゐて、其處の生活には馴れ切つてゐると云ふよりは親しみをさへ持つてゐるＥの事を考へると同時に、此度初めて、さう云ふ經驗をする他の三人の人達の事も心配になつた。

『何あに大丈夫皆んな平氣ですよ。それに未決だもの、着物はうんと着てゐるし、毛布もはいつてるし、辨當なんかいゝのが入れてあるし。Ｕ君は先刻Ｈ君が會つて差入れの事を云つたら、萬國史と辭書がはいつたのならそれでもう申分なしだと云つてゐたさうですよ。Ｗ君だつてさうだ、悄氣てるとすればＹ君だが――何あに、そんなに心配したもんでもありませんよ』

『其のＹさんよ、彼の人ぢや昨日もＴさんに散々當てこすられたり嫌味を云はれたりしたんですよ。Ｔさんでさへあゝだから他の人達は何んと云つてるか知れないわ。何うしてまた、うちの三人と、方角ちがひに歸る筈のＹさんが一緒になつたのか知らないけれど、飛んだ人が仲間になつたわね。ＴさんなんかまるでＥが無理にでも引つぱつて行つたやうな事を云つてゐるけれど、ＥとＹは初めてあの晩、あの集會で會つた位のものぢやありませんか。それをわざ〳〵引つぱつて歸らうとするなんて事はなささうに思へるけれど。

Ｙは、現在日本でのソシアリストの首領とされてゐるＴ氏とＫ氏を便つて最近に地方から出て來た青年だつた。そしてＴ氏の經營してゐるＢ社で働いてゐた。ＥとＴ氏とはいろんな點で從來は深いつながりを持つてゐたが此の五六年ＥのアナーキストとしてのＥ旗幟が鮮明になると同時に思想的にも、感情的にも二人は折れ會ふ事が出來なくなつてゐた。自然、古くからの情實にからまれた同志が何方にもよらずさわらずにゐる外は、二人の周圍に集る顏ぶれも違つて來てゐた。で、Ｙの名前はかねて聞き知つてはゐたが、ＹがＥに會つたのは、數日前の同志の集會の席で會つたのが初めてなのだつた。そして、其の夜遲く其處から歸る途中淺草のＮ警察に止められたのだつた。ＥとＨＷの三人は同じ龜戶の一つ家にゐるのだから一緒なのは不思議はないが、日比谷へ歸るべきＹが一緒だつたと云ふ事は、他のものはどうしてもわからなかつた。しかし、それをＥやＷがわざわざ引つぱつて行つたものとは考へられなかつた。しかし二日前に龍子がＴ氏に會つたときＴ氏は、わざわざＥが其處へ引つぱつて行つたかのやうな口吻で、Ｅの無謀を非難がましく龍子に當てつけた、少くとも、Ｙと云ふ連れのある際に無謀な事をしたものだと云ふ腹は明らかに龍子に見せつけられた。Ｅの

無茶』は、もう大分永い事、T氏達の間では、Eに對する唯一の批難だつた。しかしEにはまた、其の無茶にはちやんとした理由があるのであつた。龍子はT氏のその腹を見せられても侮蔑をこそ感ずれ、別に腹立たしいとは思はなかつた。しかし、もう一段、くだらない感情の爲めに晦まされたT氏を見せつけられた時には、彼女はいろんな複雜した憎惡と憤りを感じずにはゐられなかつた。

二、意味の解らぬ收檻

E達が何んの爲めに收檻されたのか。その本當の理由を知つてゐるものは、其の收檻された人達以外には誰れも知らなかつた。勿論新聞紙の無責任な報道が全然あてにならないと云ふ事は、少し物わかりのいゝ人なら誰でも知つてゐる。

『何にをしたんです？　一體――』

彼女はN警察で會つたとき、食後の煙草を呑氣らしく吸ひながら、何彼と差入れや其他の事を彼女に注意してくれるEの言葉のとぎれるのを待つて聞いて見た。

『何んでもない事さ――』

彼は笑つて彼女の問ひには取り合はなかつた。他の三人も、それに就いては、たゞ默つて笑ふばかりで何んにも云はなかつた。そして、龍子も、それで重ねては何んにも聞かなかつた。

普通の人の生活では、それは決して『何んでもない事』としては通らない事だ。けれど、Eや龍子の生活にはむしろ有りがちな、と云ふよりは、始終折さへあれば、何にかの名で降つて來るにきまつた、小さな災難だつた。否災難として受取るには餘りに必然的な事としてさへ考へられる程のものだつた。で、彼女は、それに就いての大げさな心配や昂奮は一切しない事にかねてから心をきめてゐた。そしてたゞ、そう云ふ際にすべき事は、出來るだけのカムレエドシツプをつくして、不自由な處に拘束されてゐる人達の爲めに盡すと云ふ事のみだつた。

T氏は、さうした事に對しては一番理解のある人でなくてはならなかつた、また、實際ある人だとも聞いてゐた。然し、龍子の前のT氏はさう云ふ溫かさを持つた、首領らしい寬大さなどは少しも見る事は出來なかつた。Yのみよりの人から、此度の爲めに持ち込まれた苦情を受ける迷惑と不快さを愚痴つぽくまた皮肉に彼女の前に並べるのだつた。そして、此の數年前の××事件も矢張りEの先立ちになつたさわぎで、皆んなは高々五六ケ月か二三ケ月と高をくゝつてゐたのに二年、二年半など

ゝ云ふやうな長い刑期を受けねばならなかつた、と云ふやうな事を、何の爲めに云ふのかと怪しまれるやうな調子で、龍子に話すのだつた。取り方によつては、龍子が、さうした最初の經驗に、案外平氣でゐるのを小面憎くゝ思つて脅すのかとも思へるし、『Eの無茶』の結果が、此處もまた、どの位他人にたゝるか知れないのだぞ、と云ふ腹とも思はれるのだつた。龍子は、さう云ふ言葉を聞くと一層忌々しさがこみ上げて來るのだつた。例へ何んにも知らないYが卷き添へを喰つたからと云つて、それは、さう云ふ危險な人達や場所に近よつたY自身の不用意からで、何もY氏の知つた事ではない筈だ。それで迷惑を感ずるなら、その迷惑を拒絶すればいゝ。その迷惑を何にも未練らしく龍子の前に並べる事はないではないか。龍子は、眼前に腰をかけて皮肉らしい態度で話してゐるT氏に對する反感が湧き上つて來るのだつた。

それのみではない。T氏は、斯う云ふ場合に初めて、出遇つた龍子が、何一つ。何にも彼もさう云ふ事に就いては知りつくしてゐるY氏に教へを受けようとせず、何處までも一人で、凡てを爲やうとするのが寧ろ憎い感じを起させたらしい。差入れや、其他の細々した事に就いて、一々彼女に聞き糺した。

『飯なんか、どうするつもりか知らないが三度々々入れる必要はありませんよ、彼の中では。そんなに食べるもんぢやないし一度位は彼處のも食ふ方がいゝんだ。それに、金だつてどうせ續きはすまい、あんまり最初よくしてそれが續かないと、最初の親切が何んにもならんから――』

『えゝ――』

それはもつともな事には違ひなかつた。彼女だつて、その位の事は最初から考へてもゐたし、Eにも注意されてゐた、で、食事の差入れは朝夕二度、朝は輕いパンと牛乳、夕飯には少しいゝ辨當ときめてゐた。金――それも續くまい、と見くびられゝば猶の事、どんな事をしても、皆んなが未決にゐる間は續けなければならないと云ふ決心が固くなるのだつた。一つ一つさうしてT氏と龍子の話は龍子の反感を高めて行つた。ほんの一寸した事でも、さうした種類の侮辱を耐へる事の出來ない龍子は、自分の胸が煮えかへるやうなおもひを、此の老爺の面前に叩きつけてやらうかと思つた。しかし、はしたない眞似はしまいとおもふ他の氣持が、E氏との古い複雑な關係を思ひ出させて、やつとその激した心持を取しづめた。丁度、其處に、他の同志が一人顏を出して、彼女と一緒に、監獄の前まで行から

と云つてくれた。

外に出て、同志のやさしい慰さめの言葉を聞くと、龍子は今まで、耐へ〳〵てゐたいろいろなおもひが、一時に湧き上つて來て、熱い涙が、とめどもなく頰を傳ふのだつた。彼女は道を歩きながら、幾度もハンケチで顔を覆つた。そして、一しきり溢れ出て來た涙が皆んなが留守になつてから四五日間感じた事のない、物がなしい、たよりなさが、今はじめて、染々と感じられるのだつた。T氏に對する反感は、それ以來此の二三日の間、物にふれ事にふれて龍子の氣持を熱くするのであつた。

今も、龍子は、それをおもひ出してゐた。

『どうせ、何んとか彼んとか云ひますよ。何あに、云ふ奴には勝手に云はしとくさ、Y君だつてさう悄氣てゝすまい。出來ちやつた事何に云つたつて仕方がない。』

Mは煙草に火をつけながら靜かな調子で云つた。

『Tさんもそんなにわからない事を云ふ人ぢやないんだけどなあ、E君の事と云ふと妙に變るんだなあ。』

龍子は默つてうつむいた。そして、せめて未決にゐる間だけは、皆んなの世話を、どうかして自分の手で續けたいと切に思ふのだつた。殊に、Yの世話は、一切T氏達の手を退けるようにしたいと云ふ氣持が、次第に募る反感と一緒に強くなるのだつた。

三　地獄の扉の音

『ガターーン！』

控所の直ぐ近くの室の入口の重い扉が、力一杯に手荒くブッケるやうにしめる音がした。龍子は思はず眉をよせた。

『まあ何んていやな音だらう？　まるで體がすくむやうな音ね』

本當に脅かすやうな音だ。あれがきつと囚人をしめ込む音なんだ、と龍子は思つた。きつと彼の音が誰れの宣告よりも確實に囚人の魂を脅かしたり冷笑したりするんだと思つた。

『…………、あの音を聞くと實に、…………暫くあの音を聞かなかつたなあ。』

Mは微笑しながら、龍子の言葉をうけてさう云つた。

『しかし、彼れぢやまだ駄目だなあ、監房の扉は、とてもこんな扉とはくらべものにはならない位あつく頑丈に出來てゐますからねえ、もつとずつと重い重い音がするんです、そして鍵の音がガチャ〳〵しないぢや、本當の氣持は出ませんね。』

Mは遠のいた自分の獄中生活を染々今、その音で思ひ出したやうな調子で話し出した。

『狹い獨房にポツンと一日中座つてゐるんですからねえ、一寸でも外に出るのはそれは樂しみなもんですよ、面會所まで出て來る途中なんか、隨分遠い處がありますからねえ、ブラブラ彼方此方眺めながら歩いて來るのはそれやせいせいしていゝ氣持なものですよ。』

二人が話をしてゐる處に面會を終つて歸つて來たS翁の大きな體が廊下の入口をふさいだ。

『やあー』

S爺と同志の間に呼ばれてゐる老人は、その肥つた血色のいい顏にいつものやうな穏やかな笑を見せながら石階を降りて龍子の方に近づいて來た。龍子が膝をかゞめて挨拶するのを受けて爺は叮嚀に見舞を云つた。

『何うです？　Y君は。元氣でゐますか？』

挨拶のすむのを待つてMが直ぐに傍から口を出した。

『え、えゝ大變に元氣です。皆さんによろしく申ましたよ、それから書物を入れて欲しいと云ふ事でした。えゝと——』

『あ、それは今日持つてまゐりました。Yさんが御自身で云つてらしたモウパサンの短篇集とゴルキイのカムレエドと雜誌を入れました。長くなるやうでしたらまた何か入れるつもりです。』

龍子がさう云ふとS爺は大きく肯きながら

『あゝさうですか、ではそれでいゝでせう何しろ、あゝやつて一日座つてゐるのぢやあ何うも讀むものが第一ですからな』

『左様です。で、寒くはないでせうか？』

『え、えゝ着るものも充分着てゐるし、毛布もはいつてゐるんで樂だと云つてました。しかし、何しろ火がはいらないんですからな。新聞に出ましたがなんて聞いてゐましたよ、出ましたよつて云ひましたら、そいつあいゝななんて云つてましたつけ。』

『出ちやあ困るんでせうがねえ。』

Mは煙草の灰をおとしながら笑つた。

『しかし、Y君もこれが機會になつて本當の決心が出來るかもしれませんね。それから、SさんはこれからB社の方へお出ですか？』

Mは少し改まつて云つた。

『えゝ、さうしようと思つてゐます。』

『では、B社へお出になつたら、僕はY君に會ふ筈で來たんだ

けれど、あなたが先きに會ふ事になつてゐたんで、僕はＷ君に會ふ事になつたんだと云ふ事をよくさう云つておいて下さいませんか。でないとまた神經の鈍つた人達が多いから、自分達に近い者ばかり大さわぎして、此方の近い者はうつちやつておくなんて云ひかねませんからねえ』

『承知しました。よく云つときませう。何うもその、皆んな吾々の仲間の人は、普通の人よりは矢張り神經質ですからな、えゝ、承知しました、よくさう云つときませう。』

爺は幾度かうなづきながら云つた。

『何卒お願ひします。』

『えゝ確かにそ云つときます。ぢや、私はこれで失禮しますから、何卒Ｅさんにお會ひになりましたらよろしく仰云つて下さい。何しろ、斯う云ふ事になつて來ると、またあなたが一番お骨折りですよ。まあ何卒何分よろしくお願ひしておきます。』

爺は龍子にさう云ふと、立ち上つて出て行つた。

『アーアッ』

爺の姿が見えなくなるとＭは不精らしく懐手をしたまゝで體をのばしながら大きな欠伸をした。

『雨があがつたやうだな』

たつた一つの高い窓にその時うつすらとたよりない日影が射してゐた。室の中には始めから、その窓の下の腰掛に究屈らしく座つてゐる子供を脊負つた女がゐるだけでひつそりしてゐた。ぢつと腰をかけてゐる裾の方から冷えて來るのが龍子にはつきり分つてゐた。Ｅは風邪を引いてゐた。去年の秋の初頃からその風邪はしつこくこぢれて、ぬけないでゐた。それだのに火の氣のない檻房に座つてゐてはどんなに冷えるかしれない。何よりも寒さに對しては意久地のないＥはどんな格好をして座つてゐるだらう。龍子は頻りに、此度はＥの體が心配になり出した。

『ねＭさん、毛布は下に敷いて座つてゝもいゝの?』

『えゝ、いゝんですよ。皆んな一枚づゝはいつてるんでせう?』

『えゝ、でも、この寒さに火の氣なしはたまらないわね、冷えるでせうねえ。Ｅはそれに去年からの風邪がまだぬけないんですからねえ。』

『大丈夫ですよ、彼處にゐる間は。とにかく氣持が違ふから風邪なんか抜けてしまひますよ、それに何んと云つてももう三月ですからね。もう一と月早いと、こんなもんぢやありませんよ。丁度いゝ時だ。これから二三ケ月や五六ケ月なら一番いゝ時で

すよ。』

Mは立ち上つて龍子の前をソロ〳〵往つたり來たりしながら云つた。

四　ハハア‥‥內妻ですな？

『もう何時頃でござんせう？』

ふと、隅つこに座つてゐた女が向き直つて聞いた。龍子はコオトのポケットをさぐつて時計を出して見た。

『一時に二十分前ですよ』

『あ、左樣ですか、何うもありがたう御座います。』

女は座つてゐた足を痛さうにのばしながら汚い下駄の上に乘せた。脊中の子は大きな坊主頭を母親の脊におつつけてよく眠つてゐた。その母親の櫛の齒のあとなど見えない油つ氣のぬけた、そゝけ方題な頭の毛や汚いねんねこで龍子の眼には、何うしても、その日暮らしの人足か立ん坊の內儀としか見えなかつた。

『隨分待ちますねえ』

Mはもちまへの優しい調子でそのかみさんに話かけた。

『えゝ、朝からですから、隨分長いことまちます。まだおひるつからのは、なか〳〵で御座いませうか？』

『いや、もう直きでせう。一時になつたら會はすでせう。』

『あ、左樣で御座いますか、何うもありがたう御座います。』

かみさんはそれで口をつぐんだ。丁度其の時に受附の窓口に洋服を着た一人の男が立つた。受附の男は何か頻りに聞き糺しながら面會の手續をしてやつてゐるらしかつた。龍子は直ぐに立つて行つた。その男が番號を書いた札を受取つて退くと直ぐ龍子は代つた。

『誰に會ふ？』

受附の年老つた役人はさも橫風に龍子の顏を睨みつけた。廣い室の中に縱橫に置かれた大きな机の前の彼方此方の顏が物珍らしさうに龍子の顏を老人の肩越しに覗いてゐた。龍子は爺さんの橫風な間にムツとして睨み返しながら、素つ氣なくE――の名を云つた。

『ア、Eさん――さうですか、あなたは？』

爺さんは急に態度も言葉使ひも改めながら、云つた。龍子はだまつて自分の名刺をさし出した。

『何う云ふお續柄で――』

『內妻――』

さう云つて龍子はふつとくすぐつたい笑ひを洩らさうとした。

『何あに、いくら女房ぢやないの何だのつて威張つたつて、裁判所に引つぱり出されたり、監獄に面會に來たりして御覽、内縁の妻にされつちもふよ。』

Eはよく二人の關係について冗談を云ふ度びに友達の前や何かでそんな事を云つた。

『アラいやだ。』

『あらいやだなもんか本當だよ』

『嫌やだわ内縁の妻だなんて。』

『嫌やだつたつてそれが事實ぢやないか』

『違ふわ』

『ぢや何んだ』

『何んでもないわ、いろだわたゞ――』

『ぢやあ若し裁判所で内縁の妻だなんて云つたら抗議を申込むか』

『えゝ、内縁の妻だなんてそんなもんぢやない。いろだつてさう云ふわ』

『さうか、そりやあえらいな』

さう云ふ事は幾度も／＼云つてゐた。そして二三日前、警視廳に、或友人と一緒に差入れに行つたときに矢張り其處の係りの巡査から同じ事を尋ねられた。

『あなたはEさんの何んです？』

巡査はぢつと龍子の顏をみつめながら云つた。何も彼も知つてるくせに――と思ひながら龍子は。

『一緒にゐるものです。』

と曖昧な答へをした。

『ハ、ア、すると内妻ですな』

巡査は至極眞面目くさつて書きつけた。龍子は巡査のその言葉を聞くと何かくすぐつたいやうな氣持と一緒に、何も彼も解り切つた事までも根掘り葉掘り聞かなければ承知の出來ない巡査が、その曖昧な答を馬鹿にのみ込みよく問ひ返しもせずに『内妻』としたのを妙な氣持で眺めてゐたが、ふつとEの何時もの言葉を思ひ出して、危くふき出さうとした。そして同時にその内縁の妻と云ふ文字が新聞の三面記事より他の場所では先づ見た事がないんだ等と思ふと、何んだかその言葉が無暗と感の惡い言葉に思つて仕方がなかつた。その晩歸つてからも、その次の日も、龍子はそれを思ひ出すと變な氣がした。しかし終ひ

にはだん／＼と其の氣持を誇張してゐるうちに擬惡的な興味が少しづゝ顏をのぞかし初めて來た。そして何時の間にか平氣で自分の口から『內妻』と云ひ得るやうになつたのだ。しかし平氣でさう云つた後から直ぐにポツと顏が紅らむやうな氣がした。

龍子が『七十二番』と云ふ番號札を受取つて控所に戾つた時には、外の控所から這入つて來た面會人が十人近くもゐた。そして後から後から三四人づゝゾロ／＼這入つて來て、何時の間にか、ヒツソリしてゐた控所の中は一杯になり腰掛には空きがなくなつた。龍子は席にかへると直ぐ時計を出して見た。一時はとうに過ぎてゐた。廊下にも書記や看守が往つたり來たりし初めた。

『ガターン！』遠く近く、扉の音が幾度も幾度も龍子の眉をひそめさせた。

五　地獄と思へぬ無邪氣な顏

控所の中の人間の半數は女だつた、かなり年增の如才ない如何にも目はしの敏く利きさうなキリツとした內儀さんや、勝氣らしい顏をした三十二三の細君や、柔かいムジリのはんてんに前垂がけの小料理屋の女中らしいのや、子供を負つた裏店のかみさんらしいのや、田舍の料理屋の酌婦と云ふやうなひからびた顴骨の出た顏に、まつしろに白粉を塗つたのや、あらい米琉の二枚小袖を上品に着た若い中流の家の細君らしいのや、その他十二三人の女が或ものは呑氣さうに連れと話したり、ひとりで默つて心配相に蒼ざめたり、オド／＼不安相にあたりを見まはしたり、澄まして人のみなりや、頭の恰好に目を留めたりしてゐた。

男は割り合に皆呑氣な話をし合つて笑つてゐた。廊下に上る石階の直ぐ左手に腰掛けてゐた四十四五の色の黑い肩尻の下つた一見區役所の雇と云つた風な顏付に稍々滑稽味のある顏をした男が、頻りに其石階にぬぎ捨てた足駄を氣にしてゐる。

『どうしたんだらうな本當に、もう出て來さうなもんだ。他人のスリツパをはいて行つて何時までも來ないなんて、困つてしまふな。もう直き時間が來るのに』

其の男は誰にともなく四邊に聞えるように呟いてゐる。

『何うしたんです』

直ぐその傍にゐる、どう見ても間違のない處は肴屋の親方と云ふやうな恰好をした大きな男が口を出した。

『何あに、私が此處にスリツパをおいて置きましたら、先刻此

の足駄の主が來て、それをはいて行つたきりに歸つて來ないんでさあ、私はまた直きに來る事だと思つて默つてましたけれどもう三十分ばかりも出て來ないんです。』

其の男は少し口を尖らしながら、しかし、その話の中味の事よりは、話の緒が出來たのを喜ぶやうな調子で云つた。

『さうですか、何あに、ぢや直き來るでせう。』

親方は何んだつまらない、と云ふやうな顔をして云つた。そして直ぐ一緒にゐる若い鳥打帽をかぶつた男と話し出した。初めの男は親方の態度にガツカリしたやうに一たん浮かしかけた腰を下ろした。そして自分の連れらしい六十位の田舍者らしい親爺を相手に話し出した。

『本當に大きな建物だなあ、あの塀が何町四方つて圍つてゐるんだからな。まあこん中に何の位の人間がゐるか知らないけれど、大したものだらう? それをたゞ、賄つたり着せたりするんだが大變なもんだなあ』

男は頓狂な眉を一層頓狂にしながら高聲に云つた。

『さうさなあ、矢張りお上にも無駄な費と云ふものはいるものだなあ。何んだなあ一日分だけでも、こちとらにすれやあ大したものだなあ。』

『さうさ、無駄と云へば無駄だが、これがなかつた日にや大變だ。しかし此の大きな構への中にあの自動車でもつてプツプーツなんて來る氣持は一寸いゝもんだらうなあ。俺達やとても一生懸りでも自動車で煉瓦塀の中に乘り込むなんて事は出來ないらしいな。』

『冗談ぢやありませんぜ』

親方がまた口を出した。

『自動車だつて色々ありまさあ、あの自動車は人間を乘せるんぢやありませんよ、ありやあなた——』

親方は得意になつて男の方へのり出しながら云つた、

『ありやあ。人間を積むんでさあ、まあ一つ降りる處でも乘る處でもいゝから見て御覽なさい。手錠をはめられた連中がギシ〳〵詰め込まれまさあ。外の自動車は知らねえが、此處に來る自動車だけは人間と云ふ荷物を積む自動車でさあ。自動車でのり込むと云やあ大層外聞はいゝけれど私なんかまあ眞平ですね。』

親方の眞面目くさつた反對には皆んながふき出した。Mと龍子も顔見合はせて笑ひ出した。親方もさも何の屈托もなささうな高笑ひをして皆んなの顔を見まはした。丁度其の時廊下を通

りかゝつた看守が一寸立ち止まつて『何事だ？』と云ふやうにギロリと白い眼を光らせて通りすぎた。龍子はその黄色い痩せた噛みつきさうな邪險な顔を見ると忽ち不快な感じに襲はれた。そして、皆んなの顔をまた一わたり見まはした。然し、誰も別に氣に止めてゐるらしい樣子はなかつた。隅つこの男と親方は頻りに無駄口を叩いて皆んなを笑はしてゐる。親方のまはりの人々は、邪氣のない親方の輕口で不快な監獄の面會所だ等と云ふことは忘れたやうにニコ〳〵してゐた。しかし、入口に近く固つた女連は、流石に皆んな心配らしい顔付きを隱すことは出來なかつた。親方の輕口よりは、早く時間が來て面會所に呼び込まれるのを一心に待つてゐるやうな樣子だつた。

『もう彼是一時だよ。早くしてくんないかなあ。すつかり腹が減つちやつた。』

　親方の傍にゐた若い男はさも待ち疲れたと云ふ顔をして大きな欠伸をしながら云つた。

『ぐず〳〵云ひなさんな。今に時が來れやあちやんと會はして下さらあ、お役人樣方あ今お晝のおまんまが濟んだばかしだ。おめえの腹なんかいくら減つたつてそんな事をお取り上げになるもんか。腹は夕方にならなくつちや減りやしないよ。』

親方は直ぐおどけた口のきゝ方をして若い男をねめつけた。

『親方あ減らないだらうけど――』

『おい〳〵おれの腹が減らないつて何時云つたい。俺はもう大ぺこ〳〵だ。減らないと云つたのはお役人樣の腹さ。お前も餘つ程人間がドヂに出來てるなあ』

『フフン』

若い男は仕方のなささうな顔をして外套のポケットに手を入れて天井を見上げた。

『併しどうも長いですねえ、私なども、朝七時からゐるんですよ、どうも一寸の面會に一日掛りでは全くよはつてしまひますね。仕事を休んで一日掛りで來なきやならないとなつちや、なかなかおつくうになつて一寸と云ふ工合には行きませんね。』

一番初めの男がまた口を出した。

『さうお手輕には行きませんよ。お上は何んでも几帳面だから――』

『几帳面ならもう始めさうなもんだな、一時まで待てばいゝ筈だつたんだ。』

龍子と同じ側に座つてゐた五十位の黒い前垂をしたあばたの爺さんが初めて其處で口を出した。

『本當だ。まご〳〵してゐるうちに日が暮れて仕舞はあ。早くしてくれないかなあ。』

若い男はさも不平らしく口を尖らして云つた。

『これで散々待たされた擧句に、漸々面會して五分と話が出來ないんだから嫌んなちやふよ。碌に話も何んにも出來やしねえ。五分や十分會はしたつて罰も當らねえだらうがなあ。』

此度は親方も一緒になつて不平を云ひ出した。

『私は此の前來た時に、どうも充分話が出來なくて用が半分しか足りなかつたから此度は二人連れで來ましたよ、二人がゝりで代りばんこに思ひ出しながら話をしたら後であゝさう〳〵なんて事がなくて濟みやしないかしらんと思ひましてね、規則通りの短かい時間でいろんな用を相談しやうとするんですからどうして――』

男は頻りに首を振つた。

『面會時間のお許しの出てゐる正味の處はどの位でせうな。』

あばたの爺さんが誰にともなく聞いた。

『さあ』

皆んなが顔見合はせたが誰も知らなかつた。

『自動電話は五分だなあ、あれよりやあどんな事をしても短かいね』

親方はまた皆を笑はしておいて、

『時に何時だい、もうそろ〳〵初まりさうなもんだなあ』

よく〳〵辛抱はして見たがと云ふやうな表情をして入口の方を見返つた。此度は誰も口へ出しては何んにも云はなかつたが、急にさう云はれて何かを待ち受けるやうな緊張した顔に戻つた。

六　スリッパ泥棒の恐縮

龍子は先刻から下半身の冷えがだん〳〵に體力にひろがつて行くのが分つてゐた。Mは皆んなの話を聞きながら笑ひ〳〵立つたり歩いたりしてゐた。

『面會所つてものは本當に面白いものね』

龍子はMが傍に腰かけた時に小聲で云つた。

『えゝ、一寸他ぢやこんな氣分は出ませんね』

Mもさう云つて頷いた。

『Eがね始終、裁判の傍聽と監獄の面會には是非行つて見ろつて云つてゐたのが、昨日の裁判所と今日の此處ですつかり解つたわ』龍子はさう云つてあたりを見まはした。

此處にゐる人は、兎に角此の未決なり既決に囚人としてゐる人と何かの關係のある人に違いない。親子であり、夫婦であり或は親族であり、友人であり、知人であらう。そしてそれ等の囚人の或者は詐僞、或者は竊盜、或者は强盜であり殺人犯であり、また或者は放火でもあらう。そして、それ等の囚人が世間からどんな眼で見られてゐ、その關係者がどの位、所謂世間を狹め、辱かしめられ、憎惡され、輕蔑をされてゐるかしれない。それを考へて此處にゐる人達を見まはすと面白い。龍子は默つてそんな事を考へてゐた。龍子は初め此處に這入らない前に、この室に這入つてゐる、或は這入つて來る囚人の關係者が、どんなに身體をすくませ、恥らつてゐる事だらうと思つてゐた。彼女自身は恥づべき何物も持つてゐなかつた。何故なら彼女の仲間の誰でもが、少し心のまゝに、無遠慮に行動するならば、監獄に投り込まれると云ふ事は殆んど當然の事としか考へられてゐなかつた。彼等が政府の意志に反した行動をする。その行動を政府が抑壓すると云ふのは分り切つた事なのだ。それ故、彼等の同志の一人として其處に行く事を不名譽な事だとか恥づべき事だとは考へてゐなかつた。寧ろ皆んなは、入獄した經驗を他人に話して聞かす事を一つの誇りのやうにしてゐた。そして又、自づと獄内での待遇が違ふように、世間の見る眼も普通の破廉恥罪と政治犯とは大分違つてゐた。それ等のいろんな事が自然に龍子の心の中にあつた。だから彼女は平氣で監獄の門をくゞつた。しかし、多くの人々はどんな氣持でこの門を潜りどんな氣持で控所の中で、各自の顏を見合つてゐるだらうと思つてゐた。

しかし、何んでもなかつた。幾分か堅くなつて遠慮はしてゐても、皆んなお互ひ同志に恥かし思ひをし合つてゐるやうな風には誰も見えない。誰も肩身を狹ばめて隅にかゞんではゐない。と云つて皆んながお互ひに自棄な氣持で相對してゐるのでもなければ、勿論同情し合つてゐるのでもない。本當に自然な心持でお互ひがどんな境遇にあるかなどは考へずにゐるらしい。龍子は其の控所の中で、知らない者同志が多人數落ち合つて待合はせをする何の待合所よりも安易を感ずるのを不思議に思つた。勿論樂天家らしいおしやべりな親方が大部分其處の空氣を和らげてゐると云ふ事もあるが、しかし、默つて知らない顏を見合はせてゐる隅の方の女連のどの顏にも、不思議と知らない女同志の、殊にみなりやものごしの違つた同志で表はす、侮蔑や、嫉妬や、その他あらゆる敵意が、殆んど見えないと云つてもい

ゝ位なのが龍子には本當に珍らしく思はれた。そしてもつと龍子を涙ぐましい氣持にしたのは、最初から此の室にゐた汚いみぢめな子供を負つた内儀さんに對する皆の氣持だつた。それは勿論同じ境遇におかれてゐるせいでもあるが皆んなの眼はこの室の中で一番貧しいその内儀さんにぢつとそゝがれてゐた。しかしその貧しさ慘めさに對して高ぶつてゐるものゝ一人もゐないと云ふ事は皆んなの態度で龍子にはハツキリ感じられた。兩隣に座つてゐる婦人は頻りにその脊中で眼をさました子供をからかつたり、そのかみさんの汚い顔に近づいて、優しい口をきあつてゐた。

初め、此處の室に這入つて來た時には、皆が皆不安さうな顔や心配らしい顔付をして、それ〲になじまない様子を見せてゐた。しかし三十分たち一時間たちするうちに、皆んなの氣持は何時か、すつかりほぐれて仕舞はないまでも、惡くなりすました處はなくなつて來た。默つて寒さうに身をすくめてゐる連れのない人達も、何時か他の人と話し出したり、またその親しさが現はせないまでも親方の輕口を皆んなで聲をたてゝ笑ふ事の出來る程安易な心持になつてゐるらしかつた。

話に紛れて忘れてゐたのをまた思ひ出したと云ふやうな様子で最初に口をきいた男は又頻りにはいて行かれたスリッパを氣にし出した。今にも自分が呼ばれたら困つて仕舞ふと云つてわざと皆んなを笑はすやうな滑稽な口吻でこぼし出した。しかし其の男がまだ口をつぐまない先きに、そのスリッパをはいて行つた男がその扉口へ出て來た。

『あゝ有りがたい〲、やつとこれで安心した。』

男は皆の方を向いて頓狂な聲でさう云つた。皆も思はず笑ひながらその男の足元を見てゐた。何にも知らぬその男はスリッパを自分の足駄とはきかへながら、けゞんさうに皆んなの顔を『何事です?』と云つたやうな表情で見まはした。

『あなたが、默つてそのスリッパをはいて行つたものだから此の人が大分心配しましたよ。』

親方が直ぐあごで『此の人』を指しながら説明した。

『いやそりやあどうも――』

その男はひどく恐縮しながら親方に一つお辭儀をして、直ぐあはてゝまたそのスリッパの主の方に向いて。

『どうもすみませんでした。誠にどうも――』

眞赤になりながら顔をさげた。

『どういたしまして。何にね、向ふへ上つて行くのに間に合ひ

さへすれやいゝんですよ。何あに。』

男は詫びられると自分も意久地なく赤くなつてお辭儀を返した。

『何あにあなた。失くなつたつてもと〳〵此の人のぢやないんです。差し入屋のでさあ。間に合はなくたつて面會が出來ない譯ぢやなし。あやまるに當りませんよ。』

親方のその冗談にまた皆が笑つた時には、氣まりを惡がつた人はもう入口を出かけてゐた。

丁度其の時、そのスリツパをぬぎ揃へられた廊下の扉口に脊の低い小柄な、頭の白くなつた如何にも看守らしい倨傲な顔付をした老看守が立つた。皆んなはそれを見ると急に笑ひを止めて『さあ來た！』と云ふやうな緊張した顔をして老看守の顔を見上げた。

七　父親を慕ふ可憐の小兒

『四十八番！』『四十九番！』

恐ろしく底力を持つたよく響く濁つた惱々しい聲が籠子を驚かした。

『あゝ、あれが囚人を呼ぶ聲だな』

籠子は直ぐにさう感じた。あの不快な壓力を持つた聲があの小さな體の何處に藏されてゐるのか？ 長い年月の間鍛錬されたその特殊な威壓的な呼聲に耳を覆ひたいやうな嫌惡を感じながら籠子はその看守の顔をぢつと見た。

看守は五六人の人を廊下に呼び上げると、その小さな鼻の上に乘せた眼鏡ごしに、ヂロリと不快な一瞥を殘された者の上に投げてその儘皆んなの後をおふて奥の方に這入つて行つた。

『隨分待たせたわね、もう二時半よ、四時になればもう暮れかかるのにね』

『何あに、初めれば直ぐですよ、どうせ一人五分とはかゝらないんですから。』

Mはいつも變らぬ呑氣さをもつてすましてゐた。

『しかしどうも何んですな。吾々かうして半日待つてゐてさへ隨分息屈なおもひをしますが、中にはいつて、口もきけず膝もくずせず、話も出來ず、煙草も吸へずと來た日にやあ何うもやり切れませんなあ』

あばなの爺さんは、呼び込まれた人達のぬいで行つた石階の下駄をぼんやり見て取り殘されたやうに立つてゐる男に話かけた。朝早くから待つてゐると云ふ男は、無論午後からの面會に

は自分が第一番に呼び込まれるものと信じてゐるらしかつた。それで一生懸命にスリッパをも氣にしてゐた。看守の姿が見えると第一番に腰を浮かして待つてゐた。しかし、どうした事か遂々看守は彼の番號を呼ばずに引つこんでしまつた。彼はぼんやりと立つてゐた。しかし爺さんに話かけられると彼は、あはてたやうに、そのぼんやりしたおどけた顏をふり向けて、直ぐそれを受けた。

『實際やり切れませんね。まあ一生こんな處には、はいらないやうに心懸ける事ですねハヽヽヽ』

『しかし、何時どんな事でぶち込まれるかも知れぬえな。災難つて奴があるからね。だが、何つて云つても彼といつても半年や一年なら我慢もしようが、五年十年となつちや事だね、こん中にもそんなのがゐるだらうけれど、そんなのは一體どんなつもりでゐるんだらう？　耐らねえなこんな窮屈な中にゐちやあ』

親方は直ぐ横槍を入れる。

『さうさねえ、まあこの中で生れた氣にでもならなくつちやとても辛抱は出來まいね。』

『こん中で生れた氣か——違えねえ、其處まであきらめりやあ大丈夫だな』

『あゝ、何んでもこれであきらめが肝心ですよ、人間これがなかつた日にや、この苦しみのしやばに生きてくることは出來やしませんや』

爺さんは短かい煙管を指の先でグル／＼まはしながら親方の方に首をつき出してさも覺りすましたやうな事を云つた。

廊下を折々看守が通つて行く。そして誰一人無關心で其の扉口を通りすぎては行かない。冷たい、底意地の惡い眼で何かをさがすやうにヂロリと控所の中をねめまはして行く。龍子はその度びに癪に障つてたまらなかつた。

『嫌やな眼をして見てゆくわね、どうしてあんな眼をしなければならないんだらう。彼んな奴等の眼には、此處の門を這入ると、誰でももう囚人に見えるんだわね、面會人まで囚人扱ひしなくつてもよささうなものだわね。』

龍子は、その反感を自分ひとりでは持ち切れずにMに云つた。彼女は再びさつきの老看守の聲の不快な壓力を思ひ出した。天井の高い細長い室、土と石の冷たい室、其處に火だね一つおかずに此の寒中數時間或は終日でも平氣で待たして置く役人根性が、龍子には憎くて耐らなかつた。しかしまた彼等が一歩此の城郭から出たら——何と云ふ慘めさ、小ささだらう？　それを

思ふと龍子は皮肉な笑ひを催さずにはゐられなかつた。せめてもの事に、威張れる處で威張れるだけ威張りたい彼等、たつた一つの彼等の誇り――あのみすぼらしい服や帽子や劒――の馬鹿々々しさ。

遠くの方で子供の泣き聲がする。と思ふうちに火のつくやうな激しい泣き聲がだん〱に近づいて來る。皆んなが一齊にはつとしたやうな顔をして廊下の方を向いてゐた。と其の扉口に眼には一杯涙をためて、半泣きになつた惨めなかみさんの姿が出て來た。その脊中では汚いねんねこは下の方にふみぬいて上半身を反らせた子供が、眞赤になつて手足をもがいて泣き狂ふてゐた。

『やだあ！　やだあ！　父ちやん！』

子供はありつたけの聲をふりしぼつて泣き叫んだ。龍子の胸は思はず何かにブツかつたやうにズシンとした。知らず〱涙が浮んで來た。

『お父ちやんはね、門の處で待つてるんだよ。ね、お止し、お止し、さあ泣くんぢやないよ。叱られるよね、ね。』

母親は汚い下駄の上に足をのせながら頻りになだめやうとした。しかし到底その聲が子供の耳に這入らうと思へなかつた。

控所の中は子供の泣き狂ふ聲で一杯になつた。入口に近くゐた二三人の女連は耐へかねたやうに顔をおほつた。流石呑氣な親方も暗然とした顔をして子供の顔と母親のオド〱した顔を見くらべてゐるばかりだつた。

『まあまあ可愛想に！　お父さんの顔が見えたんですか？』

入口に近く立つてゐた内儀らしい年増の女がふみぬいたねんねこに手をかけながら云つた。

『えゝ、一寸見えましたもんですから。それに此の子が不斷から親爺つ子なものですから。』

母親はとう〱耐へ〱た涙をポロ〱こぼしながら云つた。脊中の子は猶も父親を呼びながら反りかへつて暴れるのでとても工合よくねんねこを直して着せるわけにはゆかなかつた。子供は泣き續けながら遂々門の傍まで出て行つた。門に近づくに從つて激しくあばれ出して母親の足をよろけさせるばかりだつた。

『あゝ泣かれちやお母さんがたまらないわねえ。可愛想に』

『お母さんもたまらないだらうけど、それよりは、中にゐる親爺がどんなだか知れない。あの泣き聲が耳についちやり切れやしない。』

Mはその親爺の顏でもさがすように奥の方を覗きながら云つた。

『一體此處に子供を連れて來るつて法はありませんよ』

あばたの爺さんがさも苦々しい事だと云ふやうな顏をして云つた。

『本當にねえ、なまじつか顏を見せちや、父親にも子供にも、どつちにも罪ですわ、私はもう決してこんな處に子供を連れて來るものぢやないと思ひますよ』

勝氣らしい眼に一杯涙をためて立つてゐた內儀さんが相槌を打つた。

『何あに、もう一時間も早けや彼の子供はようく眠つてたんでさあ。時間が後れたばかりで生憎とこんな事になつたんですよ。』

今まで默つて一と口もきかなかつた隅にゐた木綿の紋付羽織に前掛けをしめた五十二三の男が突然口を出した。

『いやもう、此の中にはいつてる奴は本當に親不孝子不孝女房泣かせでさあ』

直ぐに爺さんは聲をおとしてさう云つたまゝ默てしまつた。その中にも奥から一人二人づゝ歸つて來た。やがてまた、先刻の老看守が代りの人々を呼び込んで行つた。

『おや、今五十四番の人が行きましたな、私は五十三番だけれど、どつしたんだらう？ 順番通りと違ふんですか』

Mの側にゐた男はあはてゝ立ち上りながら誰にともなく云つた。

順番通りぢやありませんよ。隨分後先きになりますよ。私は朝からでまだ呼ばれませんもの』

二度目にも呼ばれなかつた男は不平さうに云つた。

『へえ、それはまた長すぎますね、どう云ふものだらう？』

『どうもすつかり待ちくたびれましたよ、何あに、かうひまが入るのなら、また出直して來てもいゝんですけれど、今迄待つて歸るのも馬鹿々々しいしねえ』

八　竊盜犯人の若い女房

だん／＼に控所にゐる人數が減つて行くにつれて萬遍なく皆んなが口をきゝ出した。やがてMも呼ばれて這入つて行つた。

Mが行つて少したつと四十五六の男性的な粗野なものごしをした赤ら顏の、一見筋の惡い口入屋の嬶と云つた風の女が妙な苦笑を浮べながら石階を降りて小さな自分の包を取りに隅の方

の腰掛の傍に行つた。

『お會ひになりましたか？』

その包の番をしてゐた赤ん坊を抱いた細君が少しくゝみ聲の物和らかな調子で聞いた。

『えゝ、面會所で喧嘩なんです、馬鹿々々しいつたらありやしない。もう何んにも構ふもんか！』

吐き出すやうな亂暴な口調でさう云ふと日和下駄の歯をタヽキにきしませながら後もふり向かずに荒々しく出て行つた。

『ねえ、思つたよりやつれてゐないでせう、前より却つて肥つた位ですよあれなら。』

『本當にね、私しやもつと弱つてるだらうと思つたけれど、あれなら半年や一年位の處なら心配するがものあないわ。』

『えゝ、私ももう其處いらであきらめとかうと思ふの、自分でももう心配するなつて云つてるし。でも辯護士だけは私しつかりした人を頼みたいわ、本當に辯護士がいゝと氣強いんですものね。』

一と連れの女連はさう云つて話しながら、もとの處に腰をおろした。

『氣強いつてば、あのおかみさんはえらいのね、よくあれだけ思ひ切つて云へたわね、私驚いちやつた。』

『お内儀さんつてあの赤ら顔のですか？』

紋附の男が口を出した。

『えゝ左樣ですの、随分長い事云ひ合つてましたね、よく看守さんもまたあんなに長くそのまゝにしといたものね全くおどろいたわね。』

『どうしたんです？』

『あの御亭主さんが窃盗で何んでも七年の宣告を受けたんですつて。それが控訴したらあのおかみさんが何か證人によばれて云つた事が悪かつたんで十三年になつたんですつて。だもんだから亭主が怒つて、わざとさう云ふ風に誰かと腹を合せてしたんだらうつて云つてるんですよ。』

『へえ、窃盗で十三年、そんな長いのがあるんですかなあ』

『何んでも前科が五犯とか六犯とかなんですつて、であのおかみさんと一緒になつてまだ一年半とかしか經たないんですつて、それぢや氣心を疑ふのも無理もありませんわね』

『とかく、默つて座つてゐれや、さうでない事もいろ／＼氣がまはりますからなあ』

『左樣ですよ。それを何んとかうまく優しく云へばいゝもの

をねえ、そおれや、あのおかみさんの方が火がつく程怒つてどなり散らしてゐるんですもの。あゝ云ふえらい眞似はとても尋常一樣な者にや出來ないわねえ』

『全く驚いたわ』

二人の女は猶しきりにそのおかみさんの氣强い良人に對する亂暴な言葉などを取り上げて噂してゐた。

『あ、いけなかつたんだわ、彼の方はついぞ泣いたりなんかした事ないのに。』

年上の方の女は先刻まで一とかたまりになつてゐた仲間の三十位の丸髷の細君の姿が扉口に見えると直ぐ小聲でさう云つて眉をよせながら立ち上つた。細君は眞赤に泣きはらした眼を伏せて、手巾で鼻と口を覆ひながら降りて來た。

『如何でした？　よくなかつたんですか』

直ぐに前の二人は歩みよつた。

『えゝありがたう御座います。實は控訴するのは見合はしたつて云ふんで御座いますの、辯護士もいゝ方を二三人頼む事になつてゐるし、何うか控訴するやうにつて云ひましても聞きませんの。』

『まあ、どうしてでせうねえ、あんなに、あなたが心配してゐらつしやるのを御存知ない事もないんでせうに。それで、ぢや控訴なさらないともう直き既決におさがりになるんですね』

『えゝ、まだ一週間ばかりは間があるさうですけれど――』

『ぢやあなたもう一遍辯護士の方だの他の方からすゝめて御覧になつちや何う？』

『ありがたう御座んす。でももう自分で決心してゐるやうですから駄目でせうと思ひます。私もあきらめちやゐますけれど二年や三年の事ならどうでもしますけれど十年もの間子供を抱へてどうして行つたらいゝかと思ふと本當に何もかも分らなくなつてしまひますわ』

細君はさう云つてしまふと顔をおさへてまた激しくすゝり泣きを初めた。二人も慰さめかねて呆然と震へる細君の頭から肩のあたりを見てゐた。

『十年と云や長いやうですけれど、何あにあなた、私共のやうな老いぼれのこれから先きの十年なら心細いけれど、ねえ奥さんあなたのやうな若い方の十年は直ぐですよ。お子供衆があつたりしちやあ中々大變でせうが、中にはいつて苦役する方もなか〳〵お大抵の事ぢやない。まあ其處を一つお考へなすつて、氣長にお暮らしなさいまし。氣短かに考へ詰めちやいけません

よ。どうせ長い人間の一生ですからいろ〳〵な事があります
よ。』
暫くして何時の間にか向側に席をかへた爺さんが、體を前に乘り出しながら靜かな調子で云つた。
『ありがたう御座います。もうさうきまつて仕舞へば、私もその覺悟で子供のお守りをするつもりで居ります。本當にお恥かしいところをお見に懸けました。もう先達中から覺悟はして居りましたけれどやつぱりまだ女々しい考へがぬけませんで――』
細君はつゝましやかに顔を拭いて爺さんに挨拶した。そして前の二人連れの女と一緒に出て行つた。
『氣の毒なものですな、十年と云や、ずゐぶん長いものだが、屹度控訴すればまだ長くなりさうな事があるんですね、一體何をしたんでせう？』
紋附の男は爺さんの顔を見ながら云つた。
『さあ』
爺さんはさう云つて首を振つたなりで默つてしまつた。賑やかな親方がゐなくなつて、スリッパを氣にした男も何時まで待つても呼ばれないので悄氣てしまつた。控所の中は一時にヒッソリしてしまつた。

やがてMも歸つて來た。
『どうでしたWさんは？』
『えゝ、元氣でニコ〳〵してましたよ。これからゆつくり勉強するんだなんて云つてました。』
少し話すと、Mは今夜また會ふ事を約束して先きに歸つた。龍子のポケットの時計はもう四時近くを指してゐた。
『ねえ君、此の地所や建物も大變だが、此處の一日の經費だけだつて大したものだらうなあ、それが皆んな吾々の税金にかゝつて來るんだぜ。泥棒や放火を養つといてやるなんて實際馬鹿げてらね。こんなのが全國に幾つあるかしれないが皆んな合はすと大變な額だぜ』
『仕方がないやね、安寧秩序を保つて貰ふ爲めに拂ふ税金だあね、これがなきあ吾々安心して生きて行けないんだもの。併し本當に何んだねえ、世の中に惡い奴がゐなくつて、こんなものもなくなればいろんな方面の負擔も大分違つて來るね』
『違ふともさ。ところが惡い奴つてものはだん〳〵ふえて來るんで困るね。此處に這入る奴と來た日にやあ、此處に這入つてる間はかうして國家の經濟に影響を與へるしさ、出ればまた物騷な事をして人を苦しめる――し實際人間のカスだね。改心

するなんて奴はめつたにないやうだな。」

　三十分ばかり前から入口を出たりはいつたりしてゐた二人の揃いも揃つて薄い髯のボヤ〱生えた眼の細い、見るからに成り上りの小商人らしい狡猾な顔をした反つ歯と四角な口と持つた三十前後の男が、Mと入れちがひに龍子の傍に腰を下ろすや否や、傍若無人な態度で話し出した。其の横風な人を小馬鹿にしたやうな態度と、場所をわきまへぬか、或は侮視した、不謹慎な話しが忽ちに龍子を激怒させた。龍子は危く其の男達の面皮をはいでやらうと思つて向き直らうとした。しかし丁度その斜向ふに腰をかけてゐた爺さんの顔を見た時に、爺さんは如何にも皮肉な眼をして、ぢつとその不謹慎なおしやべりをしてゐる男の顔を見据えて居た。そして其の口が何か云ひたげにモグ〱してゐた。龍子はそれを見ると默つた。あの細いのみとり眼、あの鼻に口、あの卑し氣な輪廓、そしてあの尊大ぶつた容姿、あれが何んで不正を知らぬものと思はれやう？　龍子は猶もとがめるやうな憎しみの眼をぢつと彼等の上に据えた。彼女と爺さんの強い意地張つた眼に出遇ふと二人とも心持あはてゝ顔を見合つた。そして急に、チグハグな氣持をブツつけ合ふやうな間のぬけた他の話を初めた。

九　小窓から出たEの顔

龍子は定められた順番よりはずつと後れて五時近くになつて呼ばれた。例の老看守は龍子が廊下に上るのを待つて云つた。

『これから共犯者申し合はせて面會に來る事はならんぞ』

何んな場合にでもまだ龍子は、そんな亂暴な言葉で扱はれた事はなかつた。それともう一つ、『共犯者』と云ふ耳ざわりな言葉が龍子を怒らせた。看守は尋常な答へを龍子に待ち受けてゐた。しかし彼女は默つて何んにも答へずに濟まして看守より先きに歩き出した。

『分つたか、共犯者一緒に來ると、會はせないぞ、會はせても遲くなつたりするからそつちの損だ。』

しかし龍子はなほすまして歩いて行つた。廊下を直ぐ折りまがつて突き當つた處に、三尺位の引手のついた戸がズラりとならんで、一二三と番號が書いてあつた。

『七十二番は一號の前――』と云ふ指圖通りにその扉の前に立つた。彼女はポケツトから小さな手帳を引き出した。それは今、Eと會つて、話し洩らしてはならない用件を書いておいたものだつた。彼女が呼ばれその手帳を操つてゐるうちに、二號

では年老つた母親がその息子に會つてゐた。話し聲は筒ぬけに龍子の耳に聞こえた。息子は頻りに母親に詫びて、留守中のことをいろ〳〵指圖してゐた。やがてその話が終るか終らないうちに、隔ての戸のしめられる音がした。しかし息子はなを云ひ殘した事を大聲に母親に通じさせようとして云ふ。母親も二言三言返事を與へてゐる。と荒々しい看守の聲がその話をさへぎつた。耳の遠い老母はしほ〳〵しながらその戸を押して出て來た。

　入れ違ひに龍子が呼び込まれた。其處は三尺四方のうすぐらい箱だつた。その正面のしきりの向ふに網を張つた郵便局の窓口のやうなものがあつて戸が閉めてあつた。その窓口と龍子のはいつてゐる箱の間の狹い通路に部長が一人立つてゐた。

『何番？』

『七十二番』

『名前は？ あ、何んだE？ へえEさんが、珍らしいな何時から來てる？』

　部長は意外だと云ふ顏をしながら心持親しみを見せながら聞いた。

『一昨日からでせう？ 多分』

『何んで來たんです？』

『よく知りません。公務執行妨害とか云ふ話ですけれど。』

『え、一人？ 他には誰？ U、W、知らないな、へえEさんが來てるとは知らなかつた。』

　部長はしきりに首をかしげてゐた。

『まだ來ないな、一寸出て下さい、今直ぐですから』

　龍子はまた外へ出た。しかし直ぐ向ふの方に足音がしてEの暖をする聲がした。

『よろしい』

と云ふ許しが出て再び這入つて行くと部長は直ぐその窓口をあけた。Eの眼がギロリと暗い中で光つたと思ふと笑ひ顏がぬつと前に突き出された。

『寒くはありませんか？』

　龍子は 何から話して いゝか分らずに つかぬ口のきゝ方をした。

『いや寒くはない。どうしたい、うちには誰かゐるかい？』

『えゝ』

『早く用事を話さないと時間がありませんよ』

部長はペンを握りしめながら催促した。龍子は二三日間の事

をすつかり、それから相談すべき事をすつかり、何も彼も果さうとして急いで手帳の覺書を見ながら話した。Ｅは腕組みをして默つて頷きながら聞いてゐた。用事を話して了ふと、龍子は急にこれから何を話さうかと云ふやうなポカンとした氣持になつた。いろ〳〵話したい事がある。けれど何う云ふ事を話したらいゝか？　時間がないんぢやないか？　さう思ふと忽ちヂリ〳〵して來るのだつた。

やがて、一寸どうでもいゝ話が續いたのを見てとると部長は直ぐ、窓の傍のハンドルに手をかけた。

『もう別に話す事はありませんか、なければもうしめますよ』

『ちやまたね』

『あゝ』

Ｅの笑顔は直ぐかくされた。

『未決のうちは毎日會へますよ、また明日ゐらつしやい』

部長は役目をすますと一層くつろいだ調子で龍子に云つた。しかし龍子はその言葉を後ろに戸の外に出た。あの冷たい寒い室に半日待つての面會としてはあんまり馬鹿々々しかつた。それに、何處へ行つても誰の前でも、思ふまゝに寧ろ傲慢すぎると見える程に自分を振舞ふＥが、窮屈らしく拘束されてゐるのを見ては、龍子は何んとなく情ないやうな憤ろしいやうな氣持がしてならなかつた。しかし、看守にどなられて無理に引きはなされて悄々と出て行つた老母を思ひ出すと、まだ手加減をして扱つて貰つた丈けいゝとしなければならなかつた。

控所まで來ると龍子は急いで石階を降りた。室の中にはまだ五六人の人々が寒さうに肩をすぼめて話してゐた。外は小暗くなつてゐた。龍子は同志の男達の手にお守りをされながら待つてゐる乳呑の子供の事が抱きつくやうに思ひ出されるのだつた。

『ああ、遲くなつた――』

門を出て小走りに歩き出した龍子の頭の中には子供の姿と一緒に宅までの長い長い道順が焦れつたく繰りひろげられるのだつた。それと同時に、待たされた半日の時間が忌々しく惜まれるのであつた。



新聞職工の同盟罷業が生むだ悲劇

澤田撫松

都下十六新聞社の職工が同盟罷業を企てたので、數日間新聞の休刊を見るに至つたことは、天下公知の事實で、今更こと新らしく書き立てる必要はありませんが、この機會に於て、私は、資本家並に勞働者に反省を求めたいと思ひます。敢て今回の同盟罷業を指して言ふのではありませんが、現在の勞働問題は徹頭徹尾經濟關係で、何事も金錢本位で進退するのですから、その間に人情も道德も宗教も加味されて居ません。勞働問題がこの勢で進むで行つたならば、誠に寒心すべきものがあらうと思ひます。現に英國では資本家の横暴を牽制する爲めに作られた勞働組合が、今では資本家に負けない横暴を働いて居ると言ふではありませんか。社會は資本家のみで成立つことの出來ないと同時に、勞働者ばかりになつても亦困るであらうと思ひます。互に道德的の立場から讓り合つて、人類生存の目的に叶つた妥協點を見出すところに眞實の勞働問題があらうと思ひます。今度の同盟業罷も、道德觀念が足りなかつたのではなからうかと思はれます。何故かと言へば、これが儲けのある工場とか、株主に多くの配當をする會社とか言ふのならよろしいが、全く非營利的な社會事業とも言ふべき新聞社に對して、到底應じられない過當な要求をしたと言ふことは、道德的色彩を帶びた運動とは言はれません。殊に勞働者の味方となつて、勞働問題の解決を叫んで居る新聞そのものに對して、勞働者が鉾を逆にして

向つたと言ふことは、勞働問題の爲めに此上もない不利益なことゝ思ひます。此點から考へますと、勞働問題は單に經濟學者の理屈や、政治家の議論ばかりで解決されるものとは思はれません。資本家と勞働者との間に溫い人情が通つて、涙と思遣との情味が加はらなければ圓滿な解決は見られんと思ひます。

此意味に於て、私は、今度の罷業が生み出した悲劇の一二を紹介して、資本家並に勞働者の一考を煩したいと思ひます。

夫婦の會話

『お前さんどうするんだよ』

『何をだい』

『何だいじやないよ、米屋の拂ひをさ』

『米屋の拂なら一昨日したじやないか』

『一昨日やつてもまだあとに殘つて居るんだよ』

『この月末にやると言つておけ』

『この節の米屋はそんなことで承知しやしないよ。まだ内の米屋は長く取りつけて居るから幾等か待つんだけど、十八圓も滯つて居れば米屋の方でぐづ〳〵言ふのはあたりまへだよ。今朝も番頭がやつて來て、せめて此際十圓も入れてくれなければあとを持つて來ないと言つて居たよ。あとを送つてくれなかつたらどうするの、現金では買へないじやないか』

『一昨日二十五圓やつて、又十圓なんてやれる譯がない、まあ何とか言つて待たして置きな』

『待たすだけ待たしたんだから。金をやらなければ米を持つて來ないばかりさ、親子五人が餓死してもいゝのかい』

『そいつは困つたなア』

『お米が一升五十四錢になつたんだもの、親子五人で先月は二十九圓十六錢食たんだよ』

『そんなに食つたかなあ』

『まあ考へてごらん、お前さんが一日五合で一斗五升、私が一日四合で一斗二升。敬三が十五だもの、大人一人前は食べるんもの、これが一日四合で一斗二升、お照が十歲になるから一日三合と見て九升、お末は未だ六歲だから一日二合と見て六升それを合すと五斗四升で、一升五十四錢とすると一ケ月に二十九圓十六錢食べる譯になるじやないか』

『米だけでそなんに要るのかなア、先月の拂は皆で幾等になつて居るんだい』

『米屋が二十九圓十六錢、家賃が八圓酒屋が九圓八十五錢電燈が五十五錢だから、皆で四十九圓九十六錢になるのだけど日々の暮しにも金が要るから、拂ひが滿足に出來る筈がないじやないか』

『さうだな、月末に拂ふだけでそれだけになると、毎日の副食物代や子供の小遣をよせると一日に四十錢、一ケ月に十二圓は要るなア、さうすると一ケ月どうしても六十一圓九十六錢なければ暮して行かれないね』

『さうでしやう、要るのはそれだけ要るのに、入るお金はお前さんが社から貰つてくるのが三十六圓、敬三が給仕の月給として貰ふのが十圓。それに私が麻繋ぎで稼ぐのが四圓だから、みんなで漸つと五十圓にしかならないのだからさつと毎月十一圓九十六錢足りないことになるじやないか。それにこの月へ入つてから、お米が六十錢になつたから、この月は米の代だけが三十二圓四十錢かゝるよ』

『一合の晩酌を止めて、三度鹽嘗めて居れば幾等か倹約が出來るかも知れぬが、働く體にはそんなことは出來ないからなア』

『それに敬三だつて、何時までも給仕なんか、さして置いては末が案じられるし、當人もあんなに學校へ行きたがつて居るのだから何とか工夫をして學校へやりたいもんだね』

『そら俺も考へて居るんだ、俺達がこんなに勞働者々々々とやくざ者扱ひにされるのは學問がないからだ。俺は今更どうすることも出來ないから、切て子供だけでも學問がさしてやりたいと思つて居るところへ、今度話が持ちあがつたので、俺もまあ賛成したのだ』

『どれだけ月給が増すの』

『こちらの要求は十割と言ふんだから、俺は三十六圓の二倍で、七十二圓になる譯だ。それだけあれは敬三も學校へやれるし、どうかこうか食つて行ける』

『だけど、さううまく行くか知らん』

『さうさな、俺達の方ではそれだけなければ暮らして行かれないが、社の方ではかなり辛からうよ』

『だつて人を使つて居る以上は、食つて行かれる樣にしてくれないではね』

『さうだとも、俺達は機械でない、生きた人間だからね。食つたり飲んだり、しなければ働けるもんじやない』

表の格子戸が開いて、仲間の職工が二人入つて來た。

『だめだ〳〵』

『萬事休すだ』

『要求は絶對拒絶』

『仲間は無條件降伏だ』

『僕等は首謀者だつて言ふので放逐だ』

女は二人の方を向いて、

『夫のはどうでしやう』

心配さうに聞いた。二人は顔を見合して一寸躊躇して居たが。

『此家の大將も放逐の組だ』

『實はこれからどうするか、其の相談に來たのだ』

それを聞くと

『この物價騰貴の時に…………』

女の顔は見る〳〵青くなつた。

闇に咲く花

お時は豆腐屋の隣の路地を入つて、溝板の上を小走りに、奥から二軒目の格子を開けた。

『只今』

　聲をかけて上へあがると、二疊と六疊の二間しかない家は、ぼんやりとした五燭の電燈に照らされて、皮膚の色の悪い、瘠せた、六十位の婆さんが、穢い布團の上に寢て居る女の兒の枕頭に坐つて、よごれた團扇で蚊をおつて居るのが、此世の光景でない様に見えた。お時が布團の傍へ坐ると、寢て居る子供の額を覗き込むだ。

『又熱が出たか知ら』

袂から汗手拭を出して自分の額を拭くと、その手を子供の額へ置いた。

『あれから大變熱が出て、苦しがつて居たが。疲れたと見えて、今しがた眠つたとこだよ』

　老人は子供を扇いで居た團扇をお時の方へ向けて、生暖い風を送つて居た。

『社へ行つて工場長に話をしやうとしたら、大變なのよ、給料をあげて貰う爲めたストライキをするんですとさ、お金を借りるどころでないの、えらい騒ぎだつたから、何にも言はずに歸へつて來たわ』

　洗ひさらしの白地の浴衣に、メレンスと黒襦子のかなり汚れた寢夜帯を締めた姿は見窄しかつたが、色の白い、眼に張りのあるお時は、子供のある女とは見えない若さであつた。

『ストライキと言ふと』

　お時の言ふことが解せないので、老人はけゞんな顔をして居た。

『社の方でね、お給金をあげてくれないから、皆なが仕事を休むんだわ、それがストライキなの』

　老人は、お時の說明でストライキの意味は分つたが、孫の病氣と工場の紛擾とに胸を痛めずに居られなかつた。

『お前は、そんな仲間に入つてはいけませんよ、今でさへも暮しが六ケ敷いのに、社を出される様なことがあつたらどうします。親子が餓死せねばなりますまい。如才はなからうけれども、そんな仲間に加はつてくださるな』

　現在の生活を支へるに足りない收入でも、それを失ふと言ふことに極度の恐怖を感じて居る老人は、同盟罷業を謀叛かなんぞの様に恐れて居た。

『皆なが團結して居るんだから、私だけ仲間入りをしないと言ふ譯にも行かないけれど。この子の病氣をほつて置いて騒いでも居られないから仲間の集りには出ないで置きましやうよ』

　夫に死に別れたお時は、女事務員や電話交換手になつて見たが、孰れも收入が尠ないので、身を落して文選工になつてやつと姑と子供を養つて居たが、日々にあがる物價に、御飯を食べ

るだけさへ六ケ敷しいのだから、體の營養になる様な副食物なその食られる筈がないので。大人は瘠せながらも働いて居たけれど、子供は見る〳〵衰弱した。そこへ今度の病氣になつたのだから、早く醫者に見せて、手當をせねばならぬと思つたが、醫者にかけるだけの金の都合がつかないので、工場長に頼むで前借りをしやうと思つたら、同盟罷業の騒ぎで金を借りることが出來なかつた。此場合給料の値上け運動なんかして居る氣にはなれなかつた。給料が高からうが安からうが、そんなことは今かれこれ言つて居られない。只醫者を招くだけの金を貸して貰へばよいと思つて居た。けれどもその願ひは叶はなかつた文選の女工も男工と一緒になつて騒いで居たが、お時はその群には入らないで自分の家へ歸へつて來た。歸へる路すがらも、子供のことばかり考へて居た。熱が退いて、意識が明瞭になつて居てくれればよいと、そんなことを胸のうちに繰返くしながら歸へつて來ると、朝出た時よりは餘程險惡になつて居た。もう片時も猶豫して居られんので、金の工面を後廻しにして醫者を呼びに行つた。薬局生がお時の服装をじろ〳〵見て、往診に行つて留守だとか、今外來の患者があるから、見舞ふにしても餘程遅れるとか言つて、直ぐ行くと言つてくれる醫者はなかつた。五軒目に頼みに行つた小兒科の醫者が漸と來てくれたが、病氣は窒扶斯で、餘程用心せぬとあぶないと言ふのであつた、お時は身も世もなかつた。夫に死別れてからは、再婚を勸めてくれる人もあつたが、遺兒のお美津が可愛いのと、年とつた姑を養ふ者がないのとで、その日々々々を送つて、お美津が四才になる今日が日まで、獨身で暮して來たお時も、際限なくあがつて行く此節の物價では、この先、女の細腕で一家を支へて行けるかどうかを危ぶまずには居られなかつた。そこへお美津の病氣と工場の罷工が一緒になつて、金を借り出す道が絶えたので、頭がぐら〳〵して、どうしたらよいか急場を凌ぐだけの考へさも出なかつた。

『お薬を貰ひに行かねばならんが、持つて行くお金があるかい』

姑にこう言はれて、お時は胸を突かれた様な思ひをした。質種になり相な物は皆な持ち出して了つた後で、もう持つて行くものはなんにもない。工場の方は今の騒ぎで金を借りる譯には行かず、外に金の融通さしてくれる所もないので、お時は眼の前に愛兒の熱に苦しむのを見ながら、どうすることも出來ないのが、身を斬られるよりも辛かつた。その時、

『お時さん、お家かへ』

格子を半分開けて、内を覗き込むだ婆さんがあつた。名をお兼と言つて、女の周旋屋であつた。

『ハイ、居ます、子供がわるいもんですから』

お時は、いやな顔をして、愛想のない返辭をした。全くお時にとつてはこのお兼婆さん程いやな人間はなかつた。

『お前さんほどの容姿をして、活版職工なんぞになつて居るな

んで、もの好きにも程がある。お前さんの心掛け一つで、自分も樂が出來て、子供や姑にも不自由をさゝずに濟むじやないか』

お時の顏を見るとこうしたことを言ふのがお兼の癖であつた。それを聞く度に、お時は自分の頭の上を蹈み躪られたやうな氣がして、お兼の顏を見るのもいやであつた。

『一寸話があるんだがなあ、どうだらう後で來て貰へないか知ら』

お時は、病人を抱へて心配して居る今の場合にお兼の家へなど行つて居る暇なんかある筈がないが、あなたの家なんかへ行つて居られませんと口まで出かけたが、金の工面と言ふことが胸に浮ぶと自分でも判斷のつかない複雜な考が沸いて來た。

『あとから參ります』

明確な意識なしに、お時はこうした返辭をすると、お兼婆さんはうす氣味惡い笑をして歸へつて行つた。お時は帶を締め直して流しもとに立つと、棚の上に立てかけてある小さい鏡を見ながら、銀杏返しの髮を撫でつけて居たが眼には涙があつた。お美津の枕頭へ戻つて來たお時は、醫者が置いて行つた處方箋を帶の間に挾むで、

『お醫者へ行つて、お藥を貰つて來るわ』

と立うとすると、

『初めてのお醫者へ手ぶらでは行けまい、お金はどうおしだえ』

姑が心配そうに聞く、

『心當りがあるから廻つて見るつもりなの、どうにかなるだらうよ』

お時は鼻緒のゆるんだ足駄を引かけて表へ出ると、水淺黄に澄んだ夕暮の空に白い雲が漂ふて、西の方は夕燒けがして居た。お時は醫者の方とは反對の方向へ歩いて居ると、襟頸を白く塗りたてゝ、派手な浴衣を着た若い女に出會つた。體のこなしで、明るみへ出られない、闇に咲く花と言ふことが直ぐ分つた。お時は立ち止まづて、その女の姿の見えなくなるまで見送つて居た。毎はさうした女を見ると、なさけないと思つた。紅や白粉をつけて、綺麗に着飾つて居ても、大切な肉體を賣物にして居る樣では、どこに人間の權威がある、まるで獸も同じではないかと、心から輕蔑むで居た。それが今となつては、毎の考が根底から動搖した。人格とか名譽とか節操とか言ふ人間特有の名稱は、人間の胃袋に食物が入つて居る間のことで、一度胃袋が空虛になつて、人道を歩いて居ては胃袋に食物を充たすことが出來なくなつた時は、其所に人格も名譽も節操もない。早い話が、今度の同盟罷業だつてさうではないか、働いて取るのだから恩惠を受けては居ないと言へばそれまでだが、兎も角自分等が今日まで生活して來たのは雇主から賃金を貰つて

居たからでないか。それをくれる賃金が尠ないと言つて、同盟罷業をして雇主を苦しめると言ふことは、丁度虎使に使はれて居る虎が、貰ふ餌が尠いと虎使に噛みつくと同じことだ。今度の同盟罷業に自分は一緒になつて騒いで居るのではなけれど、表向きは自分もその中の一人となつて居るのだから、猛獸と同じなとをして居るのだ。こうして胃袋が空になつたが爲めに猛獸になつた自分は、もう闇に咲く花を輕蔑むことは出來ない。さうした女を獸として輕蔑むならば、雇主に噛みつく自分等も同じ猛獸と言はれても仕方がない。どうで人間は猛獸だ。唯胃袋に食物が充滿して居る間だけが萬物の靈長になつて居られるのだ。私達の樣に胃袋が空になつてはもう萬物の靈長でもなんでもない。人格も名譽も節操もある譯のものでない。こう思ふと、お時の足取りが俄に早くなつて、お衆婆さんの家へあかり込むだときは、顔に少しも不安の色がなかつた。

間もなくお時の家へ、お衆婆さんが藥を屆けたけれど、お時はその晩家へ歸らなかつた。

夕刊賣

『お母さん、今日もまだ駄目だつて』

今年十二になる夕刊賣りの仙吉は、空の籃をぶら下げて歸へつて來た。

『どうしたんだい、困ちまうはね』

髪を拢後卷にして、汚れた縞の單衣を着たお秋は手ぶらで歸へつて來た仙吉の顔を見てがつかりした。

『新聞社の方ではね、六割位なら値上げをしてもいゝつて言つてるんですけれど、職工の方は十割の値上げをしなけりやいやだと言ひ張つて居るんですつて、十割と言ふとお母さん二倍になるんだね』

仙吉は首に掛けて居た籃を其所へ投げ出すと、だる相に座つた。

『さうして給料の値上げ運動の出來る人達は幸福だ。私達の樣に、幾等物價が高くなつても、何所へも尻を持つて行く所のない人間ほど悲慘なものはない。お前達も腹をすかして居るんだからね』

澁茶色をして、所々に擦れ破れのある古疊の上に、痩せた軀を横たへて居る四才になるお新の寢顔を覗いて、お秋は眼に涙をためた。

『僕も新ちやんも、今朝饂飩を食べたからいゝけどお母さんは食べなかつたから、腹が空いたらう』

仙吉は血色の惡い母親の顔を眺めた。

『お母さんは大人だから、そんなに腹は空かぬけれど、お前は歩いて來たんだし、朝だつて、饂飩をたつた一抔しか食べて居ないからさぞ腹が空いたらうね』

力のない聲で、お秋は仙吉をいたはつて居た。

『ウン……そんなに空きやしない』

親に心配かけまいと、仙吉は空腹に力を入れて見たが、饑じさは紛らかすことが出來なかつた。お秋は六疊一室の家の中を漁り廻つたが、質草になり相な物は一點も發見さなかつた。途方に暮れてぼんやり立つて居たお秋は、隅の釣手が一つはづしてないので、だらりと柱に掛つてある破けた蚊帳に目をつけた。釣手をはづして、仙吉の前へ蚊帳を置くと、

『お前、疲れて居るだらうが、佐野屋へこれを持つて行つてお金を借りて來ておくれ、一圓は貸すだらうから、そして歸りに一升だけお米を貰つておいで私はその間に火をおこして置くから』

毀れた針箱の抽斗から質屋の通帳を出した。

『これを持つて行つちまうと。晩に新ちやんが困らしないかい蚊に食はれて、僕はかまはないけれど』

お秋は顏をそむけて、

『一晩ぐらひ私が扇いでやる。明日にでも夕刊が出る樣になつたら受け出してやります。

辯解めいたことを言つて居た。

『明日、夕刊が出てくれゝばいゝがね』

仙吉は獨り言の樣に言つて、蚊帳を持つて表へ出た。其所から三丁程離れた佐野屋の暖簾を潜ると、薄暗い店先に二人の先客があつた。

『コウ、番頭さんそんなことは言をねいで五十錢貸してくんねい、明日の晩は出すんだから』

印半纏を着た男が、男物の浴衣を出して談判して居た。番頭がどうしても三十錢より貸さないと言ふので、不承々々十錢札を三枚持つて歸へつた。

『番頭さん、今朝預けて置いた飯櫃を出しておくんなさい、四十錢此所へ置きますよ、ナニ利息が四錢、馬鹿々々しいが仕方がない、ハイ四錢、置きますよ』

浴衣を着たおかみさんが、腕まくりをしながら番頭から飯櫃を受け取つて蓋をとつた。中には麥飯が半分程入つて居た。麥飯の分量を眺めた上で、兩手で飯櫃を持ちあげて見た。目方を計つたのであらう、何等の異狀を認めなかつたと見えて、飯櫃を抱へたまゝさつさと歸へつて行つた。先客のうちがあいたので、

『これで一圓貸してください』

仙吉は持つて來た蚊帳を番頭の前へ投げ出した。

『さうですね、一圓は一寸六ケ敷うございますが、せい〲勉強いたしまして六十錢が一ぱいでございます』

蚊帳をいぢくりながら番頭が澁い顏をした。

『お母さんが是非一圓貸して貰らつて來いと言つたんだ。お米を買つて歸らなくちやならないから、ネー番頭さん一圓貸してくださいね』

仙吉は哀訴歎願したけれど、番頭は六十錢より貸してくれな

かつた。皺だらけになつた五十錢紙幣と十錢紙幣とを持つた仙吉は、米屋の方へ歩いて行くと、

『津村』

後から仙吉の名を呼ぶ者がある、振り向くと、仲間の傳三であつた。

『丁度いゝ所であつた、これから親方の所へ行くんだから、お前も來ないかい』

『僕は米を買つて歸らなけやならんから』

傳三は仙吉と並んで歩きながら、同行を勸めて居た。

出がけに、火をおこして待つて居ると言つた母親の言葉もあつたし、實際自分も腹がへつて居たから、仙吉は傳三に別れて歸らうとした。

『明日の相談もあるからお出でよ、用があるなら一寸顔だけ出して、直ぐ歸ればいゝじやないか』

傳三がたつて勸めるのと、親方の家も米屋の方角で、それ程遠い所でもなかつたから、仙吉は明日の相談と言ふのを聞くだけに行くことにした。二人が親方の家へ行つた時は、仲間の者が十人ばかり集つて居た。

『傳公、待つて居たんだよ、やア仙吉來たんかいこら面白い新客の爲めに一つ大きく張らうよ』

でつぷり肥つた親方の權藏は、傳三と仙吉を自分の右と左に坐らした。輪座になつて居た中央に、小さい四角な物體がころがつて居た。新聞が休みで、夕刊賣りの仕事がないので、荒んだ生活をして居る彼等は、親方の家へ集まつて丁半の勝負をして居たのであつた。仙吉は仲間の者が時々さうした遊びをすることを知つて居たが、一度もそれに加はつたことがなかつた。今日も初の中は見てばかり居たが。親方に勸められ、十錢張つて見ると、運よく勝つたので、六十錢の金を一圓にして歸りたいと思ふ心から、十錢張り二十錢張りして居る中に元も子も無くして持つて居た六十錢の金が一錢も手元に殘らなくなつた。

仙吉は泣き出しさうになつた。

『どうしやう、お米を買う金を無くしちまつて、家へ歸れなくなつちまつた』

仙吉が愚痴を零して居ると、

『誰だつて要らない金を持つて居る奴があるかい、勝負で取られてめそ〳〵言ふない』

仲間の中で兄株の吾平が呶鳴つた。今更負けた金を返してくれと言つたつて返してくれる譯もないから、仙吉は斷念めて其所を出た。自分は親の情けで今朝饂飩を一ぱい食べたけれど、お母さんは昨日から何にも食べて居ない。さぞ今頃は腹をへらして待つて居るだらう、炭だつて一ぺん飯を焚くだけしかなかつたのだが、もうそれも灰になつた時分だと思ふと、仙吉は何としても空手で歸へることが出來なかつた。仙吉は五臟六腑が沸きかへる様な苦しみをしながら、何所を歩くともなく足

に任して歩いて居ると、プーンと香ばしいに匂ひが、空腹の仙吉を襲ふつた。思はず立ち止まると、右手に莫大小一枚になつた男が煎餅を焼いて居ると、店先に女中らしい女が煎餅を買つて居た。風呂敷を廣げて、紙の袋に入つた煎餅を包むで居る傍に、五十錢紙幣が一枚と十錢紙幣が二枚あつた。一圓で釣錢を取つたのであらう。仙吉はそれを見ると、無意識に女の傍へ寄つて行つた。

『アレー』

女が聲を立てた。仙吉は其所に在つた七十錢の金を引攫つて駈け出したのであつた。

『泥棒』

『かつぱらひだ』

『捉いてくれ』

莫大小一枚の煎餅焼の男が二人、仙吉のあとを追駈けると、

『萬引だ』

『泥棒だ』

『捉へろ』

口々に叫けんで、彌次馬が一緒に駈け出すので、通りはゑらい騒ぎとなつた。多くの人に追ひかけられた仙吉が、四ツ角を右へ廻らうとした時、交番から飛び出した制服の巡査に捉へられた其所へ煎餅焼きの莫大小屋や彌次馬がやつて來て、仙吉を取り卷いて擲つたり蹴つたりした。巡査はそれを制して居たが、なか〳〵制しきれないので、巡査が仙吉の胸座を取つて、交番の中へ引づり込むだ時は、仙吉の體は血だらけになつて居た。

『宥してください、お米を買はなければお母さんや新ちやんが死じまう、宥してください、宥してください』

仙吉は兩手を突いて、血だらけの額を地にすりつけながら、泣いて宥恕を乞ふて居た。

與謝野晶子女史新著

山本鼎氏装幀

激動の中を行く

世界改造の警鐘は鳴り響く。人々よ深く自己を省察せよ。婦人よ覺醒せよ。社會よ古き衣を脱ぎ捨てよ。今や勞働問題は白熱的烽火を擧げて肉薄しつゝあり。聽け歌壇の女王論壇の花形たる女史の熱烈火の如く透徹氷の如き權威ある言葉を。而して思想と生活の混亂激動を突破して新生活を創造せよ。

四六判箱入美本
定價壹圓四拾錢（送料十二錢）

北原白秋氏著　矢部季氏装幀

白秋小唄集

定價壹圓六十錢　送料八錢

愛誦すべき小唄二百篇。裝幀絢爛華麗の極致

北原白秋氏編序及裝幀

歌集　木馬集

定價壹圓貳拾錢　送料八錢

歌壇の珠玉一千五百首。大正の新萬葉集

東京市神田區中猿樂町十五　合資會社　アルス　電話本局二九八八　振替東京二四八八八



美しい町（第二）

畫家E氏が私に語つた話

佐藤春夫

（E氏の話つゞき——）

我々はいつも忙しかつた。さうしていつも樂しかつた。足音を忍んだガルソンはもうストオブを焚きに來なくなつて、その代りには我々三人が何れも自分に近いところの窓を明け放すようになつた頃には、我々の仕事は加速度的に捗取つて行つた。その仕事に慣れて來た私達——私と老建築技師とは自分の机の前に來て坐りさへすれば自然といい考へが浮ぶようになつて來た。かうなると別だん何といふ決つた仕事のない川崎は自然、退屈であつたと見える。それに彼は我々の美しい町が出來上るのが待ち遠しくて待ちきれなくなつたものと見える——それは我々とても同じとであつたが。そこで彼は彼自身の爲に一つの仕事を思ひついた。

或る晩、我たちがいつもの通りに川崎の部屋に這入つて行つた時に、いつも我々が仕事にとりかゝる前にちよつとお茶を飲む例の大きな圓い卓の上には、鋭利に光つて居る鋏とナイフとが小さいのやら大きいのやら幾つか、物差しと一緒に置かれてあつて、その傍には我々が設計した家のうちの四つが、ボオル紙と糊とで大きな板片の上に建てられてあ

つた。その紙の家は高さ二寸ぐらゐで、それには設計と全く同じ數だけの窓や入口が唯の手慰みとは思へない程の克明さで穴を開けられ、それから私が考へて指定したと同じやうな色彩がその微小な家の外壁を油繪の具で色どつてゐた。それはまだよくは乾いてゐなかつた。さうして川崎の眼は物思ひに沈んだ人などと似通うたやうな嚴肅ともいふべき眞面目さで、ぢつとその紙の家の上に灑がれてゐた。この晩からは、川崎は我々が仕事に從事してゐる時間の間、それを彼自身の仕事にしてこの紙の家を丹念に拵へては並べてゐるのであつた。彼は子供のやうな熱心でその眞面目な遊戲に耽つてゐたが、我々も亦それが一つ出來上つた時に子供のやうな樂しさでそれを見入るのであつた。「ねえ、この小さな家には、これで一つ一つちやんとした間どりまであるのだから愉快ぢやないか！」さう、川崎は私たちに言つたが、實際その小さな家には一つ一つ間取りもあり、またそれが本當の地上に實現された後の夢をも含んで居た。彼は毎晩その我々以外の人々には馬鹿げて見えるであらうやうな紙細工に熱中したが、時々彼はその仕事を妨げられる晩があつた。といふのは例の金モオルに金ボタンのある服を着たガルソンが恭しく捧げた銀の盆の上へ名刺を乘せて訪問者のあることを知らしたからである。けれどもそれは本當に地上に出來る美しい町の仕事を妨げてゐるのではなかつた、反つてそれが捗つてゐるのであつた。その訪問者は、我々が美しい町のために要する土地の周旋人であつたから。さうして彼等は私たちの仕事をしてゐる次の部屋に行つてそれの相談を重ねて居た。

圓の卓の上の紙の家がだんだん數を增して來た時に、我々の無邪氣な熱心な空想家は、もう家ばかりでは滿足しなくなつて、そこに植ゑつけたいと私が思つたやうな形のさまざまな樹や叢草などをまでその板の上にこしらへ出した、それは針金やむしりほぐした毛絲などで器用につくられたものであつたが。それ程だから町のぐるりを一めぐりしてゐるあの道路や、それの外側に沿うた例の胸壁なども追々に出來て行つたことは勿論である。そればかりか、それら全體を取圍む川の水の代りには、その板の上に彼は鏡を敷いた、おもちやの家並がそこにそれの倒景を映し出すようにと。鏡があんまり

はつきりし過ぎて居て水面の效果を思はせなかつた時に、彼は鏡の表を半透明な擦りガラスにすることに依つて曇らせた。彼の所謂この美しい町のデッサンは——この紙細工の醉狂はだんだん嵩じて來て、私にさへも少々それが凝り過ぎるやうに思へる程になつて來た。一度こんなことがあつた。或る晩、私は老建築師から與へられた五枚の設計圖を見ながら、それらの家をどういふ順序で組み合せたが最もいいだらうかと、それらのコンビネエションを一つ一つ目の前に描き出して見てはそれの一番美しい又必然な形を捉へようとして、私がそんな時にするのが癖になつてゐたやうにスケッチブックをひろげて樂書をしてゐる最中に、突然部屋中の電燈が不意に消えた。「どうしたのだらう」私がさう呼びかけ、老建築技師が呟いた時に、暗がりのなかで川崎の頓狂な聲がして、電燈を消したものは彼であつた。彼は慌てて再び電燈のスヰッチをひねり返した。彼は彼の考へのなかに沒頭してゐて、私たちが同じ部屋のなかで仕事をしてゐたことを忘れて居たのであつた。さうして私たちがちよつとの間仕事を中止してもいいかどうかを聞いてから、微笑を帶びた聲で、圓い卓の方へちよつと來て見るようにと言つた。それから再び電燈を消したが、彼は何時の間にそんな仕掛けをして置いたのであらうか、その卓上の美しい町にはその家々のなかにはそれぞれに一つ一つのかすかな光があつて、それがそれ等の最も微細な窓から洩れ出して、我々の目の下には世にも小さな夜の街が現出してゐた。その窓といふ窓からこぼれ出す灯影は擦りガラスの鏡の靜かな水の面へおぼろにうつつた——そこにも彼の細かな用意があつて、その鏡が家に對して或る適當な角度をなして敷かれてでも居たのであらうか、たくさんの灯影はちようど水の面をかすかな風が滑走した後に漣が立つた時のやうに、細く長くそこに映し出されて居た。

「それから序に——」と言ひながら、彼は青い極くほの暗い電球の光をそれらの家の屋根に浴びせた。私たち三人が肩を竝べて、その月の光のなかの町を見下ろした時に、突然その町の上から指が一本下りて來て、小さな町の空地のところを指しながら、おづおづした老建築技師は寧ろ氣のない聲で言つた。

「さあ、もう灯をともしてもよくはありませんか。私はこのところの家の梯子段のつけどころを今工

夫中なので……」
……ことは一度あつただけである。いかに私たちだつて毎日おもちやの町を夜にしたり月夜にしたりなどした譯ではない。

電燈と言へば、川崎は美しい町の家がともす燈火に就て大分考へ込んだやうであつた。といふのは彼は其處へ他の町と同じように電燈會社から電燈を引き込むといふことに滿足しなかつたのである。さうすることに依つてその町の獨立或は孤立が妨げられるやうに思つたらしかつた。けれども彼はその町で町の人たちにランプを使つて貰はうとも考へない――「私はそれがどんな形ででも時代が後がへりするといふことを喜ばない。それは懐しみのあることではあるが單にそれだけのことに過ぎない。我々の眼が後方に附けられては居ないやうに、我々は前方をばかり見つめるべき筈だ……」と言つた。この空想のなかに理窟があり理窟のなかに空想のある友人は、また言つた「若し科學が完全に發達した時には、今我々が必要とするやうな大仕掛けな電燈會社（それは電燈ばかりとは限らないが）などに依らずとも、一軒の家に必要なだけの光りぐらゐは、ちやうど人がランプをともすのに費すと等しい程の手間と用意とで自分たちの電燈を自分たちの簡易な機械で灯す時代が來るに相違ない。ちやうどあらゆる家庭がミシンの機械を重寶しながら使用するやうに。その時初めてもろもろの機械は怖るべきものでも惡むべきものでもなくなつて、眞に我々の日常生活のなかで缺くことの出來ない愛すべきものになる。我々人間の生活が極致に達して合理的なものになるためには、我々の生活の半面である科學もそれ自身の方法その極致の發達を遂げなければならない。私の考へでは、今日あるすべての有用な機械が最も充分に發育を遂げた時には、あらゆる機械力はそのどんな類のものでも刻々に人の健康を腐蝕させなければ措かないやうな大工場だけでなければ動かないといふ風なものではなくなつて、例へばそれはよく愛育されて手馴らされた優しい野獸、馬や牛がただその美しい能力だけを殘して居て人を助けるやうに、さうして人々が愛情をもつてそれに近づくことが出來るやうに、あらゆる必要な機械は取扱ひ

やすいものになり個人々々の樂しい好きな手藝を最も機敏に手助けする最上の道具になる筈である。それでこそまたすべての機械工業が藝術に高められるために必須な一階梯ででもある。すべての機械工場は、言はゞ藝術上のミリタリズムではないか」と。彼はまた折にふれて、「今われ〳〵が生活してゐる社會的生活は、金錢の無限な勢力といふ可笑しく奇怪な言説――グロテスケンを中心にしてそれに附隨するところのグロテスケンのさま〳〵な種類で迫持ちになつてゐる醜惡な建築物で、しかも人々はその建築のなかで平然と住んでゐる。それの改造を叫んでゐる人々でさへもそのグロテスケンの一種をもう一つ加へてゐるに過ぎない」ことを、彼は好んで指摘した。しかし私は、一たいただ自分自身の興味にばかり沒頭して居て地上のことを思ふよりも雲の色彩や星の運行を見るやうに出來てゐて、彼がしたやうな考察に對してはあまり適しない性質である私は、彼の言ふことだけが果してグロテスケンの一種でなかつたかどうかを判斷するには充分ではなかつた。又、私は「何故」と言つて彼に反問をして彼の考察の邪魔をすることで、彼の考へを深めてやりもしなかつた。私はいつもつひ煙に卷かれて居たことが多かつた。しかし私は彼の言説の底に激しい潮のやうに流れてゐる夢見る人のパッションがあることを見て、それを私も彼とともに感ずることが愉快であつた。「この美しい町とても」と彼は或る時卓上の紙の市街を見ながら言つた「我々はたゞそれの形を拵へ得るだけである。その美しい町が本當に美しく樂しい町になるかどうかは、唯その町に住だ人たち各々の心がそれを成り立たせることが出來るだけであ る」とも言つた。

私たちは仕事に取りかゝる前や、仕事を終つてから雜談する時には、よく彼がそんな風な話柄を私たちに與へたが、その話柄に對して私よりもより多くの興味を起した人は、可笑しいことには老建築技師の方であつた。この老人のなかにはどうやら「自由民權」の思想が殘つてゐるのであつた。

私たち三人がそこに集つて、毎晩そんな仕事に耽るやうになつたのは明治の最後の年の二月初めであつたが、それが三年越しつゞいた。三年目の夏も終りになつて爽やかな夜がだん〳〵秋になつて來たこ

ろには、その仕事の大部分は先づ一とほりの見當がついて來た。川崎はこの計畫を最初から三期に區切つて居て、少くとも十年計畫であつたのだが、その第一期はその年の秋の初めに、豫定よりは寧ろ四五ケ月も早く來たのである。それには勿論あの老建築技師、横はつて平行し合つたり、喰ひ違つたり立上つて並んだり、それを上から押しつけたりさま〴〵に生きてゐる直線より外には一切何もない世界のなかで息をしてゐたあの老建築技師の異常な熱心が與かつて最も力があつたことは言ふまでもない。が、その第一期の終りが近づかうといふころには、川崎は彼の例の一流の理窟を言はなくなつた代りには、非常な性急でもつて私たちを追き立てた。苛立ちながら一段落を早く見たがつた。

それは第一期の設計がもう多分今晩で終るといふ晩であつた。私たちはその晩も徹夜をするつもりであつた——そのころになつて私たちはよく徹夜をしたものだが。夜がすつかり更けて來て、私には感興が加はつて來た。私は石で出來る橋の圖を書いて居たが、白く磨かれた御影石の橋には水がその下をくぐるやうにと三つのアアチがあつた。それが上げ汐で水嵩のました水の上へさかしまに映つて水が動くまに〳〵橋の影がみだれて搖れる……。私の目の前にはそんなものまでが見えながら私はその橋の圖を書いて居たのであつた。川崎は彼の圓い卓の方へ私たちを呼んだ。そこには殆んど完成してゐるあの紙の小さな美しい町の模型のそばに、シャンパンの罎が三本突立つて居た。それからシャンパングラスが三つあつた。大きな圓い卓を私たちがいつものやうに三方から取り圍んだ時に三つの杯が私たちの前に一つづゝ置かれて、川崎はそれのなかにその琥珀色の酒を注ぎ入れた時に、「私たちの顏を覗き込みながら」。

「さあ、飲まう！飲まう！」と言ひながら、彼は慌てた人の樣子で彼自身の前にあつた杯をとり上げると、すぐにそれを飲み干した。「いよ〳〵土地は買へるといふ段取りになつた……」

彼はつけ加へてさう言つたが、私は計畫がどうして成立せずにしまつたかといふことを言ふべき順序になつて來た。さう言つたからと言つてあなたは別段驚きはしないであらう。でもあの中洲の土地は今でも汚いごみ〳〵した場所として昔のまゝに在る以上は。驚かないばかりか、寧ろそれが何れはさうなることを豫期して居られた筈だ。ところが私と老建築技師との二人——いや彼自身をも加へて三人といふべきかも知れないが、彼のことは別として我々二人には全く思ひもかけないことであつた。一口に言うと、この途方もない男はそんな町などをこしらへる金などはなかつたのだ！

立てつゞけにシャンパンを飲んで、彼は叫ぶやうな聲を出來るだけ落ちつけて言つた——「私のおやぢも山師であつたが、山師の息子がまた山師なのだ」彼は自嘲の態度でさう言つてから、私たち二人の顔を、哀願する獅子のやうな目で見まわした。「私の父はね、以前、アメリカでは東洋に大きな商會を持つてゐるやうなことを言ひ觸らし、さうして東洋ではアメリカに大きな商會を持つてゐるやうなことを言つて、人を——私をまで瞞着して一生を送つた人だ。さうして死んだ時には、南アメリカに大きな金鑛を遺して行つた。それは嘘ではない。その鑛區は怖ろしく廣かつた。私は到底私の手では處理して行けさうもない穴だらけの父の生活の後始末を管理人から聞かされた時に、別だん惜しいとも思はずにその鑛山を賣ることにした。その廣大な鑛山の採掘權をさへ賣れば、私の父の負債は充分償はれて、その上にまだ巨額の金が私の手に這入る。金を持つてゐるといふことは現代では Everything だ。現代では金のあるといふことは偉大な天分の一つなのだ。いや、唯一のそれだと言つて見てもいゝ。金さへあれば革命でも出來る。その有難い天分を抱いて私は何をしようと勝手だ。それならば私は何をしよう？……十八であつた少年の私は、美術家にならうと志して居た私は、私の鑛山が賣れるまでの間そんな夢想を逞しくした上で、私の思ひついたものは「美しい町」の計畫であつた。私は生きて動く大きな藝術品としての美しい町を考へた。私は昔の人が神の殿堂を建立すると同じ神聖な考へで人間の住宅を考へやうと初めたのはその時からである。私は、金に飽かして建てられた永久的な石造の家々から成り立つて、

それが美しいリヅムをして並び重つた大きな市街が、世界のどこかの丘の中腹のやうなところにあることをよく空想した。空想好きな私の空想は限りなく延びて行つて、その幻の市街が變遷して行く幾つかの世紀のなかに屹立して、家々には苔が生えたり蔦蘿が纏つたりして町全體が自然のなかへ飽和されてしまひ、その町の人人は祖先からの風習で金儲けのために仕事をするのではなくただ好きな樂しみのために仕事をしてゐる。外の町から旅人が來て古城や古寺院を見るやうに、又その町が立てられた當初から持つてゐたといふ彼等自身のものとは全然反對な幾つかの習慣に驚くために、その丘のふもとの停車場へ下りる……。私はそんなことをまで空想に描いた。さうしてその空想を現實がだんだんと貧弱なものに征服して行つた。といふのは山師である私の父の鑛山といふのは、鑛區こそは廣いけれどもその鑛脈はもう盡きかかつて居るので、若しその鑛脈が盡きてしまつたならば、その廣大な鑛區のなかにもう一ぺん鑛脈が見出されるかどうか、それは頗る疑はしいと言ふのであつた。さうして最後に大きな翼で飛揚して居た私の重たい大仕掛な空想がさかしまに墜落した時に、その下敷きになつた私の幻の町はめちやめちやに壞滅した。といふのはその鑛山は結局廢坑が、縱横に穴をあけて居る空つぽの山なので、そんなものや二重の低當に這入つてゐる父の屋敷は、父の遺した負債を償却するには何の足しにもならないものだ、と彼等は言つた。さうして私には身を立てるやうにと言つて五萬弗の金をくれた。その迷惑な父の跡始末は獨逸から來た叔父が、父の弟が處理すると言つた。今になつて見ると、私は私の悪い管理人や叔父に騙られたのではなかつたとは確信できない。が、そんなことはどうでもいい。唯私の持つことの出來る金が五萬弗しかないと決つた時の私の失望を想像して貰ひたい。さうして、それはE君とTさん（老建築技師）とにはわけなく出來ることであらう――今の君がたの失望と驚きとこそは丁度私のその時のものと別のものでは無いに違いなからうから……。

「私が東京へ來た時には、私はかうして十萬圓足らずの金を持つて居たに過ぎない。さうして私にはそれ以上の何物も何處にもなかつたのである。二百萬圓？私はせめてはそれぐらゐでもいい、私がそれを

持てたならば、と絶えず心のなかでそればかりを思つた。さうして私は私のどこにもない——しかし空想のなかにだけはある二百萬圓を礎にして、その上へ私の幻の町を建てゝ行つた。しかもそれは結局幻の町であり、どうしてもその地上には實現されないものであることに一たび思ひ到つた時に、私はせめてはそれが人々の心のなかにだけは確實に在り得させるために藝術でそれを表現しようと思ふやうになつた。初めに、私はその空想をただ私の心のなかに浮んだ不思議な形の雲として、何か散文詩のやうにでも書いて見ようと思ひ立つた。私の慾望がそれだけであつたならば私は多分無事だつたらう——それはいかにも私らしい私に相應した事だから。けれども私はもつと本當に近いやうに小說にしてそれを書いて見たいと思ひ初めた。さうしてその次にはその小說がより事實らしくあるために、そのなかに美しい町を計畫してそれを成立させるまでの眞實の設計の記錄をも悉く書き入れようと企てた。さうして私の小說のなかではその主人公がそれらの計畫が完全に成立した時に、不幸にも死ぬことになるのである。さうしてそのためにその美しい町は地上のどこの地圖にも無い。私の小說の讀者はそのために私の作品が「詩の領域」のものであるか「歷史の領域」のものであるかを迷ふ。さうして卷を措いてそれがやはり「詩の領域」のものであることが解るにしても、私がそれのなかに灑ぎ込んであらうところの私の熱情のために、又私の全く理智的に合理な設計のために、若しこの作者にしてただ金をさへ持つて居たならば、彼はその熱情と設計書とさうしてその金とに依つてそれを本當にわれ〳〵の目に見える地上に建てたであらう、と私の讀者たちが信ずるやうに、更に願ふらくは私の熱心な讀者のうちに、好事の富豪があつて私の書物によつて動かされて、彼自ら立つてそれを實現させるかも知れない……。私はそんなことをまで考へたのである。さうして私は澤山の住宅建築に關する書物を讀んだ。そんな折ふしに、私のなかには私の父の山師の心臟があつて、その心臟が先づ私自身をだましたのである——私には、時々、自分自身がそれだけの金を現に自分の銀行の帳簿のなかに持つてゐるんだと思ひ込む瞬間があつた。その瞬間が幾分間かになり、それがやがて私が美しい町に就て想像する時間だけさう思へるや

うにもなつた。ちやうど晝間は忍從の生活に身を捧げるさゝやかな僧院の庵僧が、夜毎には淫蕩の貴婦人の衣飾つた情人として酒色に身を委せた若者であつたといふ物語の主人公のやうに、私はその美しい町に就て計畫する或る時だけ――それもやはり夜であるが――私は無限の富限者であつた。いや〳〵、夜だけではない。私はどうやらいつでも絶えずさう思へさうであつた。さうして私をさう思ひ込ませたものは、半ばは私自身であり、そののこりの半ばは私以外の他の私が會ふすべての人々であつた。一たい金のことなどに目をくれない、そんなものなどを少しも尊重しない私の思想とやりつぱなしな私の性癖とが、私を私が眞に持つてゐる財產の二百倍も三百倍もを持つてゐる巨萬の金持ちとして世間の人たちの目に私自身を映させたのであらう。さうしてそれも無理ではない、成程私は二百圓の金を世俗の人が二圓を尊重する程度に尊重したのだから。それに私はさうすることに依つて、他の人からより以上の金を卷上げようとする世間に有りふれた詐欺師ではなかつた。私は反つて、自分の持つてゐる金を、世俗の人が見て全く無意味だと思へるものゝ代價に蒔き散らしてゐる奇妙な山師なのだ。言はゞ私は私の空想を實感にする爲めに――私自身の實感を買ひ入れる爲めに投資したのだ。そんな商法が、もと〳〵世間にあつたにしても、それをこんなに全力的には私より外の誰もしはしない。それ故世俗の人には私は何の警戒も必要ではなかつたかもしれない。――あの馬鹿げた土地周旋人だけは別として。ところが私を手もなく大金持ちと思ひ込んだのはたゞそれらの世俗の人たちばかりではなかつた。私の氣の毒に思ふのは君がた二人だ。それの設計の記錄を私の作品のなかに織り込まうと思つて、それに要するさま〳〵な能力と知識とが私に不足してゐることに氣がついて、その助力を君がたに乞ひたいと思つた時に、氣の毒にも、君がたでさへも何の疑念もなしに私をそれだけの資格のある富限者だと思ひ込んだではなかつたか。尤も、その時には私自身でも些の疑をも抱かずにその資格を自分のうちに信賴してゐる時間でではあつたが。若しあの時、それともその後のどんな時にでも、「本當に君にはそんなことが出來るのか」と唯さう一言君がたの誰かが言つてくれさへしたならば、私は「いや、それは皆ほんの私の空想

だ」さういつて今言ふべきことをその通りにすべて正直に手輕るに告白出來たであらう。本當に私は君がたの誰かが、さういふ機會を一度與へてくれゝばいゝと、時々、それをどんなに願つたであらう。何故かといふのに、時折私にもいつかは、私はただ君がたをわけもなく僞つて出鱈目の希望を抱かせてゐるだけだと、殘らずそれを君がたに打ち明けなければならない時、今夜のやうなその時の來ることがよく考へられた。けれども私は自ら進んではそれを君がたには言へなかつた。不思議にも絶えず物に追ひかけられてゐるやうな不安な世界のなかには一種の精神的な引きしまつた快樂があるのを私は感じ初めた。それに私は私がさう打明けたがために君がたの熱心が碎かれるのを心配した。私は何れは見捨てやうとたくらみながら、薄情な男が娘を弄んで居たとは思はれたくはない。どうしても一緒にはなれないことを知りながらも、愛情に溺れてゐる者がただ一刻も長く愛を受けたいために、愛を偸んで、せつぱつまつてくるまで別れなければならないのを打明ける勇氣がなかつた若者に私は似て居る……。

「目を閉ぢると我々の目のなかにくつきりと浮き上つてくるこの美しい町は、出來上つて永い年月の後に崩れたと思つてもいゝ。或は出來て見てから我々の氣に入らなかつたから我々自身が破壞した。さうして後に思へばそれは決して破壞しなければならないものではなく、立派な惜しむべきものであつたのだ。いや、そんなことを言つて、今日になつてまだこの上に我々自身を僞らなくともいゝ。實在するものよりも幻の方が美しいといふのは、昨日までの私のやうな馬鹿の言ふことである。幻は美しい、さうして實在するものはもつと美しい。しかも我々の『美しい町』は決して出來ないのだ。私には金がないのだ。それに要する大切な天分がないのだ。私は天才があると自欺して、また人からもさう思ひ込まれて心の昂つてゐる藝術家が、身の程を忘れてうつかり途方もない大きな作品にとりかゝつてから自分に何の天才もない事を自覺して度を失つてゐるのにも私は似て居る。私には今、はつきりそれを自覺しなければならない時が來た。明後日の夜の七時になれば私は土地の周旋人が狡猾げな押しつけるやうな態度で私の確答を聞きに來るのに面會しなければならない。七十六萬何千圓の支拂ひに對して私にはもう三

萬圓もない。それは周旋人に支拂ふ周旋料の三分の一にちやうどよからう。私は彼奴を一杯喰はせてやつて、彼奴の俗惡な野卑な口もとが間拔けになることを見ることだけがこの場合ちよつと愉快でないこともない。私は三週間ほど前からK丸の乘船切符を買つて置いたので、私は明日のうちに日本から——少くとも東京から遁走するのだ。——私は初め君がたには何にも言はずに立去らうかと思つたのだが……。

「けれども、E君それからTさん。君がたが私にしてくれた仕事は皆決して無駄ではなかつた。私には私の幻の町は、君がたのそれぞれ私にしてくれた努力のために、一層はつきりと私の目に見えて來た。あなた方は私にいろ／＼ないゝ考へや知惠を啓示してくれたので私はそれを今こそ充分に描き出すことが出來る。私はそれをやはり本に書かうといふ考へは捨てないので、私のその本の題は〝Nisi Dominus Frustra.〟（主によつて建てらるゝに非ずば徒勞のみ）といふのである。それが書き上げられた時には、私はそれの獻身的な共力者、私と全く同じ大きな失望をまで敢て經驗してくれた獻身的の共力者、君がたを記念するために君がた二人に獻じやうと思ふのである。私のトランクは君がたがしてくれた仕事で一杯で、それより外には何物も殆んどない……」

川崎はそんな風なことを、寧ろ、だん／＼と落ち着いて來て、さうして自尊心の强い彼は彼自身を謝さうとする代りに、私たちを怯したり勞つたりするやうな尊大な口調でそんな風なことを言つた。けれども川崎の蒼白な顏色と淚を帶びて光つてる目つきとが彼の聲ヶ裏切つて居た。何も言ふべきことがなく、また何と言つていゝかわからない私たち、私と老建築家とはひたすらに押し默つてゐた。さうして私自身は何をしてゐたかは知らないが、老建築家は、をかしくもとつくに空虛になつてゐる彼の杯をふるへる手つきで、何度も何度も無意識に無駄に飲んで居た。川崎もたうとうそれに氣がついたと見えて、その空つぽの杯にシャンパンを注いでやりながら、その序に私の前の杯にも注いで「さあ、山師のために飮んでくれ給へ！」とそんなことを言つた。三人は深い沈默の底に沈み込んで、それが一時間であつたかもつと長かつたかは知らないが、その間彼の隣りの部屋に掛けてゐる鐘でぜんまいを卷くやうな仕

掛けになつてゐる柱時計が梟のやうな聲で一度時――四時？を報じて、そのうちに私は私が何の意味もなく睇視しつづけてゐた通りに面した窓が、鎧戸の隙間からほの白くなつて來るのを見て居たが、ふと私は今思ひきつて大きな聲で笑つて見たらば、このしんとしてゐる白堊のやうな大きな部屋で私の笑ひ聲がどんな風に反響するだらうか、とそんなことも考へたりした。

「さういふわけで」と川崎がその時に言つた、「私はもう多分今晩からは此處に居ない筈である。又君がたにも來て貰はなくともよい。それに就てＥ君、君のところへ私は夕方手紙を出して置いた。Ｔさんのところへも。――私は君がたにも何も言はないでこゝを引上げようと思つたものだから。……もう夜が明けて來て、電車も動き出したやうだ。私はもう君がたに歸つて貰はうと思ふ。――朝の十時には古道具屋が來る、私はこゝにある私の家具を皆賣り拂ふので。それまで一つぐつすり眠らうと思ふから……」

彼はさう言ひながら立ち上つて、私たちを促すやうに彼自身で部屋の扉を開けた。さうして先に立つて梯子段を下りながら、ホテルの男を起して表の戸を開けさせた。私たちは默々として彼と別れて、ホテルを出た。奇妙な一晩は全く明けて居て、しかし未だ日の出ない空からは朝靄が街の上に低く垂れて居て、その中に人の少しか乘つてゐない電車が動いて居た。私のへんな狀態に居た頭が一度に爽やかな氣持ちになつた。私はいつもとは別に變つた氣持ちではない積りであつた。けれども後に氣がつくと、川崎から思ひ掛けない言葉を不意に聞かされて、私の心もやはり少からず狼狽して居たものと見える。といふのはいつもなら私は老建築技師とは、輕く禮を交して、ホテルの前で左右に別れるのだのに、その時に限つて私たちは別れずに一緒に歩いた。とぼとぼと歩いて行く老人について私は自分の行くところとは反對の方へ歩いて行つてゐた、可なり長い間。私たち二人は肩をならべて、何といふのだかあの邊によくある或る小さな橋を渡つて居た。と、私たちがその橋を渡つてしまつた時に、今まで一言も口を利かずそのために私がその人が私の傍を歩いて居ることを殆んど忘れてゐた老建築技師は、不意に、あの持前のおどおどした聲で私に言ひかけた――

「あの人とは、もう今夜から會へないのです。けれどもあなたは、あなたは私にまだ會つて下さるでせう。私の友達になつて、どうぞ時々はやつぱり相談をして下さい、あの美しい町のことを。」

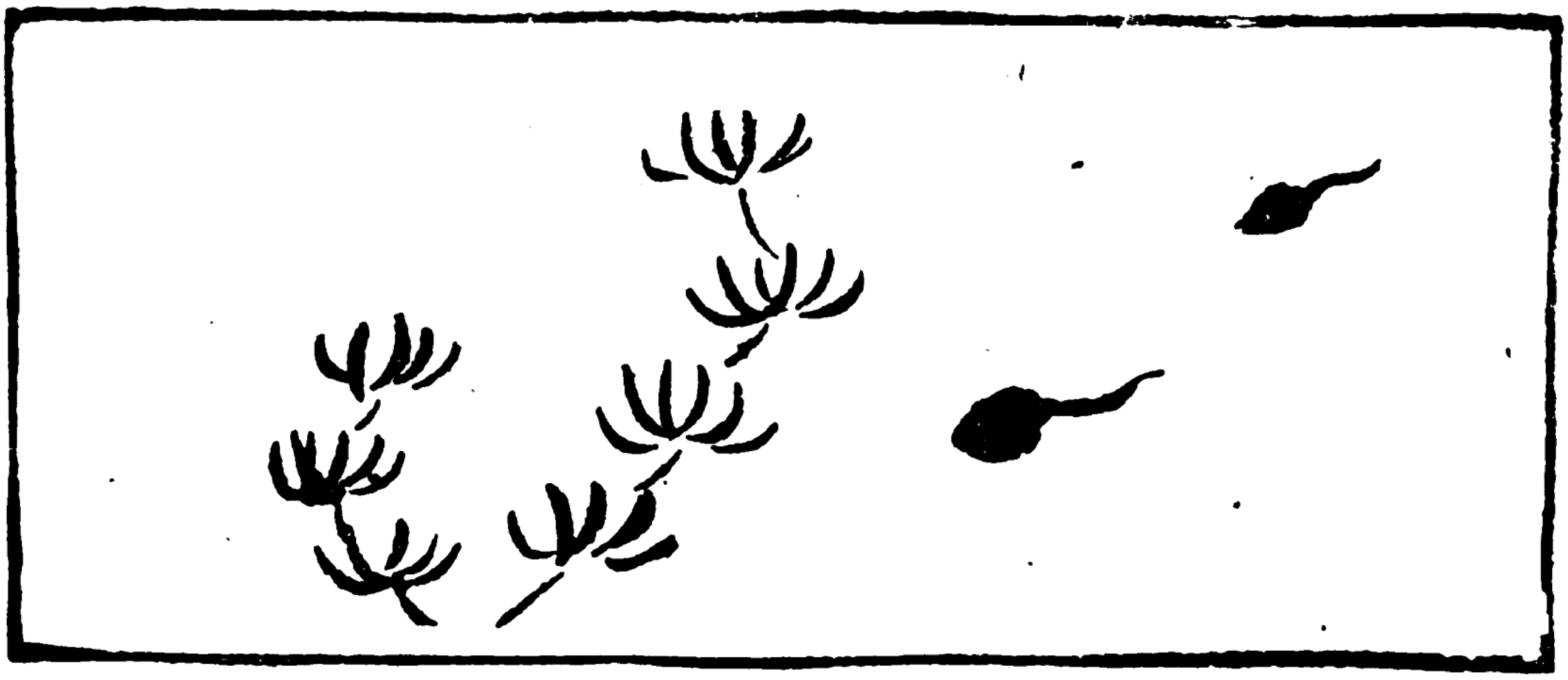
さう言つて彼は私の手頸を握つた。老建築技師に何か答へようとした時に、その突嗟に、今までは全く呆然として居た私の頭がこの機會で活動し出したものか、ふと私には今まで思ひも設けなかつた大變なことが思ひ浮ばれた。

「Tさん、あなたとは又ゆつくりお話しませう。私は今すぐもう一度ホテルへ行かなければなりません。今直ぐあの男に會　なけや！」

老建築技師T老人は、私が川崎に向つて怒つて居るのだと思つたらしかつた。私は私を引きとめようとするこの老人を押のけるやうにして、後をも見かへらずに早足でホテルの方へひき返した。私の目には、血まみれになつて白いシイツの上で呻吟してゐる私の友達が見えるやうに思つた。彼は獨逸へ行くと言つた。それは嘘だ。彼は死ぬつもりだ。「さうして私の小説のなかではその主人公がそれらの計畫が完全に成立した時に、不幸にも死ぬことになるのである」彼はさつきもさう言つたではないか。馬鹿な男がその身をもつてその小説を書かうとしてゐる?、彼のやうな男は死ぬことを何とも思はない……。或るロシヤの小説のなかにある「人が聞いたら俺はアメリカへ行つたと言つてくれ」と言ひながら、彼の顳顬に當てたピストルの引金を引く男を、私は思ひ出してゐた。思へば、彼の言つたことが何だか皆「死ぬ」といふことの謎に思ひ合される。私のところへ手紙を出したとも言つた。それが書き置きだ!? 私の心臓は高く鳴つて、私は私の心臓のひびきに追つかけられるやうに足早に歩いた。私のとりのぼせた心配のそばには、別に落ち着き拂つた心持があつて、あの日、「中洲！」といふ「Lucky idea」を持つてK美術倶樂部から川崎のところへ急いだ時に、やはりこんな早足で歩いたところは同じこの道ではなかつたかな……とか、やあ朝日が出て來たなどと思ひながら、地面に長く映じ出された自分の影を見ながら、自分の影を踏んで、その影を追ふやうに歩いた。急いだ。町角を折れてホテルを見た時に、ホテル

は未だしんとしてゐた。窓の灯はもう皆消えて居た。私は表の石段を飛び上つて扉を押したが、扉はさつき私たちが出た後で又閉められてあつた。私は未だ何事もなかつた？それとも誰も未だ發見しない？と思ひながら扉の側にあるベルを押した――長い間。

三年來の長い馴染のガルソンの一人が、目をこすりながらあの金モオルのあるユニフオムのホツクをかけながら、佛頂面で私を迎へて私を川崎の部屋へつれて行つた。部屋は私の豫想と反對に、しかし彼の習慣どほりに錠も何も下りては居ない。それを開けた時に、圓い卓の上には革の大きな手提カバンがあつて、あの紙細工の市街は、それの下敷になつてつぶれて居た。その大きな部屋の隣りの部屋、川崎が眠る部屋はひつそりとして、川崎は死んでは居なかつた。その代りには勞れ切つて死んだ人のやうに眠つてゐるらしかつた。私は私の過敏に病的な空想を自分で氣恥かしく思ひながら、川崎に大急ぎの用があると言つたガルソンの手前を繕つて、彼が起きてからでもいいが又出直すのが面倒だと言つて、いつも徹夜をした時の後のやうに、仕事をする部屋――いや、昨夜までは仕事をする部屋であつた部屋の片隅の長椅子の上に私は、しばらく睡ることにした。（未完）



ある職工の手記

宮地嘉六

私の家はどういふわけか代々續いて繼母の爲に内輪がごたくさした。代々と云つても私は自分の生れない以前のことは知らぬが、父の時代が既にさうであつた。父は早く實母に死なれて繼母にかゝつた。その繼母に幾人もの男の子が出來て、父は我が家にゐるのが面白くなくなつて遂に家を飛び出した。父は長男であつたが亡父の遺産を滿足に受けつぐことも出來なかつた。それは繼母の奸策の爲めであつた。

私も丁度父と同じやうな行き方になつたと云ふのは何と云ふいんねんだらう。私は長男であつた。繼母には二人の女の子が出來た。その女の子が私よりは大事がられて育つのを私は平氣で見てゐられなかつた。實のよくない繼母は私のさうした妹に對する嫉妬的な心理を知れば知るほど、私になほさらそれを見せつけた。尤も一年中そんなことばかりはなかつたが、兎に角私は家にゐるのが面白くなかつた。それに父までが繼母と同類のやうにさへ私には見へ出したのである。一年一年成長して行くだけ私の繼母に對する觀察は深刻になり、皮肉になり、父に對しては冷笑的になつた。同時に繼母の私に對する憎しみもあくどく、そして辛辣になつた。父もそれに隨從した。私の父は少し後妻に卷かれる方であ

つた。私と云ふ先妻の長男を家庭内で冷遇することが少なからず後妻の氣に叶ふので、父はさかんに私を冷遇して後妻に媚びる癖があつた。父は自からそれを氣づいてゐたかどうかは知らぬが、私はその頃まだ十二三の少年であつたが、父の愚劣さを認めてゐた。

父は私を家庭に置くことさへ後妻に遠慮して私を仕立屋の叔母の家へ弟子入りさせたりした。私は其所でも意地の悪い叔母の亭主に冷遇され、それでも一年以上辛抱したが、病氣になつて家へ歸つた。私は叔母の家へゐる間父のことをどんなに氣にして考へたか知れなかつた。私は家にゐると父をさほどに思ひはしなかつたが、家を離れると朝夕父のことを思はずにゐられなかつたのだ。父の善良なこと父が曾て私を誰れよりも可愛がつてくれたこと、父が一頃親類先の舊い借金に苦しんでゐた當時の心事を私は自分の記憶から呼び起しては父に對する感傷的な涙を味はつた。仕立屋の一年間はさうした悲しい日が多かつた。

然しそれほど心に思つた父も私が家へ歸つて病氣がよくなると、一日も早く仕立屋に行くやうにとすすめた。私は叔母の亭主といふ人が心から嫌ひであつた爲めに、仕立屋に再び行く程ならば何處か他の商店に奉公したいと父に云つた。間もなく或る呉服屋の徒弟にやられた。然し半年とは辛抱しきれなかつた。それなり一年あまり私は家に止つて家業の手傳ひをしてゐた。その頃私の家は佐賀ステーション前に宿屋を營んでゐたのである。家業柄私は家にゐればいろ／＼の役に立たぬではなかつた。尤もそれは小僧同様の役ではあつたが、例へば客の乘車券を買つて來てやつたり、ステーションまで手荷物を抱へて客を送つたり、夜になると泊り客を届け帳に記入して派出所へ持つて行つたり、その他いろ／＼の使ひをしなければならなかつた。

然し繼母と私との衝突が毎日絶えないので父はどうしても私が家に止まることを許さなかつた。私も强いて家にゐる氣はなかつた。寧ろ早く何處かへ行きたかつた。然し私は奉公は心から嫌ひであつた。自分は到底奉公に行つても長く勤まる氣づかいないと自分でも知つてゐたのである。若し年齢が許すな

らばステーションの驛夫か機關車乗りにでもなりたかつた。それなら勤まらぬことはないと思つた。人の家に住み込んで奉公してゐるやうな氣づまりな思ひをせずにすみさうであつた。然し其の頃私はまだ十三だつたので、その望みは叶はなかつた。

繼母と衝突して父に叱られると、それなり私は家を出て三日も四日も歸らないのが例だつた。さすがに父は心配するらしかつた。それがまた私にとつては好い氣味であつた。で出來るだけ遠い田舎の親類先を訪ね廻つて日を過ごした。目がふらついて倒れさうなひどい空腹を持ちこたへながら、田圃道の稻田のいきれの强い眞夏の暑い日中を辿つたり見知らぬ村の子供の群れに交つて小川に水を浴びたりして次から次に親類の家を泊り歩いた。然し到る先で直ぐ私の様子を見てそれと嗅ぎつけ、二日とは泊めてくれぬのであつた。

「そんなにして家を出歩いてはいかんがのう、早うお歸り、親に心配させるもんぢやないぞよ。これから來る時は許しを得て來るもの。そすれば何日でもをつて好えから。」と親類先の老人から云ひ聞かされるのが常だつた。

赤の他人でも私の實母のことを多少でも知つてゐる町の人は私の日常を見て氣の毒がつてくれた。

「ほんとになあ、お母さんが生きてゐなさつたらどんなにか仕合せぢやつたらうに、およしさんはみめよしで、好い人でなあ、せめてお祖母さんでござらつしやれば……」と、或る所では見も知らぬ老女が私を見て、しみ〴〵さう云つてくれることがあつた。私はそんな時は、嬉しさ過ぎてきまりが惡くて顏をそむけた。私の母方の祖母は女ながらに界隈では敬はれてゐた人で、町の年若い男女は讀み書きの稽古に通つて來てゐたのを、私はおぼろげながら記憶してゐた。私は母の死後六才時分までその家で育てられた。「亞細亞人種……阿弗利加人種……」と生徒達の讀本朗讀の聲を聞き覺えに私は覺束なくも口眞似をしたりしてゐた幼ない頃の自分を思ひ出す。教室の柱や壁には生徒達のいたづら書きの痕が黑々と染み込んでゐた光景を思ひ出す。机を幾つも積み重ねたその頂上に讀み書きの覺えの惡い、または行儀の

よくない生徒が坐はらされて兩手に煙りの立つ線香を持ちながら泣きしやくつてゐるおかしいさまを私はその時分毎日のやうに見た。母の實家は裏町筋から曲つた横町の、田圃寄りのさびれた古寺の前だつた。そのあたりには軒の傾いた貧乏士族の家がひからびたやうに並んでゐた。母の家は小さな塾だつた。祖母の死後私は旅先にゐる父のもとに引きとられた。その時は六つ位で、私は初めて父に逢つたのである。同時に繼母を知つた。父は私を引きとつて間もなく故郷の佐賀に歸つてステーション前で宿屋を始めたのだ。

佐世保の造船所へ行つて職工になる決心をしたのは十三の秋だつた。同じ町から行つてゐた年上の友達が職工になつてゐた。その友達は靑服のズボンをはいて黑セルの上衣を着込んで、鳥打帽を冠つて久しぶりに佐賀に歸つて來た。或る日手荷物を提げて汽車から降りて來る姿を一目見て私は直ぐに彼れであることを知つた。ズボンのポケットからズボン締めの帶皮へ時計の鎖をかけ渡したりしてゐる氣取つた風が少なからず私の目を引いた。

その頃の職工は決して今日のやうに勞働者、若しくは職工など〻頭から賤しめる風はまだ一般になかつた。それどころか、機械師とか、西洋鍛冶など〻云つて到る所で靑服姿を珍らしがつて尊敬する風だつた。職工自身でも自分の職業は立派で高尙であると云ふ誇りを抱いてゐたのだ。それは今日の飛行機や飛行家等が世間にもてはやされるくらゐに彼等はもてたのだ。それはその筈である汽車と云ふものが今の飛行機ほどに世人の感動と讃嘆の中心でさへあつたことを思へば機械職工が珍らしがられたのも不思議でないであらう。然し何事も最初の間である。誰れにでも出來るやうになると世間は珍らしがらなくなり、果てはその眞の値打をさへ馬鹿にするのだ。馬鹿にされるやうになると遂にはされる方自身でも自からを賤しみ侮るやうになるのだ――私のその友達が靑服姿で故鄕の町へ歸つて來た時分は、職工

の値打もも一都會人の目にはそれほどではなかつたが、私の目には珍らしかつた。私は彼が非常に立身して故郷へ歸つて來たのだと思つて見上げた氣持で彼に近づいて挨拶し、それから彼の家まで彼と二人がゝりで手荷物を持つて行つてやつたりした。彼は亡父の供養の爲めに歸郷したのであつた。一週間ほど滯在する豫定だつた。私はその間、彼の家を毎晩のやうに訪ねて佐世保の造船所の有樣を彼に聞かせて貰つた。どんなに重い鐵でも機械でも宙にまき揚げて運搬するグレンと云ふ機械のあること、大きい軍艦でも商船でも鯨のやうに引き揚げて修繕するドックと云ふものや日清戰爭で分捕りした軍艦や、いろいろの機械が置き場もなく造船所の海岸に轉がつてゐることなどを彼は話して聞かせた。

「僕等は毎日のやうに軍艦の中に行つて機械の修繕をするんだよ。士官にビスケットやパンを貰ふんで軍艦へ仕事に行くのがいちばん樂しみさ。」と友達は語つた。

「ほう、職工になりたいな僕も、軍艦の中はそんなに廣いかい。どれくらゐあるの幅は。」

「鎭遠なんかは二十間ぐらゐあるよ。それは廣いよ。」

私はさうした軍艦に乘り込んで行つて機械を修繕したりする職工はどのやうに偉いであらうと想像した。此の友達は旣にそのやうな偉い職工の一人になつてゐると思ふと私はいつまでも自分はぐづぐづしてゐる時でないと考へた。

「僕のやうな者でも職工になれるだらうか。」私は普通の少年と異つてゐる自分の性質上の缺陷や身體の虛弱を顧みながらそれを先づ聞いて見た。

「なれるとも。最初見習職工に志願するんだよ。それから三ヶ月すると一日十錢の日給になるよ。それから三ヶ月目毎に昇給するんだ。」

それを聞くと私は一日も早く行きたくなつた。彼と一緒にでも行きたいと思つた。

「僕は是非行くから、その時は世話しておくれなあ。」

「あ、するとも。でも君は家にそらんにやなるまいが。長男だらうが。それにひとり息子ぢやないか。」

「うんにや、家にをらんでも好え、僕がよそへ行けば家では却つて都合が好えのさ。」
私は思つた。今佐世保へ行つたら父も少しは私のことを心配するであらうと。自分を餘計者扱ひにして妹ばかりを大事に育てゝゐる彼等は少しは思ひ知るであらう。と思つた。ならうことなら佐世保よりもつと遠い旅の空へ行つて父を驚かせてやりたいと思つた。さうでもなければ後妻にまかれてゐる父を覺醒させ、そして眞實の親らしいものを父から呼び起すことは出來ないと思つた。今度家を出たら、生涯家に歸らないやうにしたいとさへ思つたのである。

その年の十月末に私は父に無斷で佐世保へ出奔した。佐賀から佐世保まで二十里位であつたがその時分汽車はやつと武雄まで通じてゐた。武雄からまだ十里の道を歩かなければならなかつた。父の知り合の人であちらで商賣をしてゐるのを私は多少たよりに思つてゐた。行きさへすればどうかなると云ふ氣であつた。
『茂ちやんだつて乾度何とかしてくれるに違ひない。』と私は曩に久しぶりで佐賀へ靑服を着て歸つて來た友達をも賴みにしてゐた。
武雄のステーションで汽車を降りると、その驛の運輸部に勤めてゐる叔父に見つかつた。『どこへ行くのだ。淸六。』叔父はさう云つて私をじろりと見た。
『佐世保へ、』私は多く答へなかつた。叔父の方でもそれきり何にも問はなかつた。此の叔父は父の異腹の弟で、數年前遺産分配についてごた〳〵を起した以來兄弟同士は前より一層敵視し合つてゐたので、さうした意味合から叔父は私に對しても强いて冷淡であつた。其の實彼は私を憎んでゐないのであつた。その叔父の心持はよく私には分つてゐた。彼は私の父と仲が惡い上に私の繼母にも少なからぬ惡感を持つてゐたのである。そして私が繼母の爲めに家庭で虐待されてゐるのをひどく憤慨し、私を不憫に思つ

てくれてゐることを私はよく知つてゐた。それにもかゝはらず彼が私の姿をプラットホームで見つけて、極めて冷淡に唯一言言葉をかけたきりで向ふへ行つてしまつたのは、事務が忙しい爲めばかりではなく、『あいつは子供ながら俺を見きと仲違ひになつてゐるので、親ぢの味方になつて矢張俺に對して敵意を抱いてゐるかも知れぬ。』と叔父は私を見た瞬間その折角の愛情を自から傷けてしまつたらしかつた。私にもその瞬間それに似よつたものが萠したのは事實である。父や繼母を呪いながらも此の叔父を見ると『父の敵』と云ふ感じを直ぐ私は感じた。叔父の愛情を解しながら強いてそれに應じまいとする頑迷さが私にあつた。何といふ不幸の一族であらう。

叔父は貨車の傍に立つて仲仕達が荷を下してゐるのを見ながら鉛筆を走らせてゐた。私はそれを一目見返して今一度叔父の横顔を遠く見てステーションの出口を出た。それから人の續いて歩いて行く方へついて、長い國道に出た。私が前夜いろ〳〵と寂しい道中を想像したのとは異つて、晴れやかな秋の日の輝く國道には旅人の姿が賑やかに續いてゐた。附紐のひら〳〵と長く垂れたメリンスの着物にくるんだ赤ん坊を負ぶつた里行きらしいかみさんや、爺さん婆さんの老人づれ、背負商人、青服を着た職工、お坊さん、田舍娘、さうした姿が黄や赤や青や黒やの點々を國道に作つた。

『お爺さん、一寸お尋ね申します、佐世保の方には此の道を行つて好えのでせうか。』私は直ぐ前に歩いてゐる老人に聞いた。

『好えともな、此の道を行きさへすれや紛れもねえぢや、早岐と云ふ所に着きますぢや、早岐から佐世保までは三里ありますぢや。わしも佐世保へ行きますぢやで、一緒にござらしやれ。』と爺さんはやさしく云つてくれた。で私は爺さんについて行くことにした。

『お前さまあ一人で佐世保へ行きなさるのかな。親ご達は佐世保へをんなさるのかな。』とつれ合ひの婆さんは云つた。

『いんえ、家は佐賀にあるんですが、私だけ佐世保へ行くんです佐世保へ行つて働くんです。』

「それは〳〵、まあいくつになんなさるかな。へえ、十三かな、大けえなあ。」と婆さんは云つた。

早岐までの八里の道はかなり長かつた。陶器の産地である有田へ着いたのは午頃だつた。谷川のへりの所々に石を搗き砕く水車小舍の響きが聞へてゐた。河原に棄て散らされた陶器の破片を私は珍らしく見ながら歩いた。町の家々ではいろ〳〵の形をした陶器が、竈へ入れられるばかりに仕上がつて列んでゐた。私は老人達と一緒に道ばたの茶店によつて晝飯をとつた。

夕方、もう日が落ちかけてゐる頃早岐へ行き着いた。私はそこで偶然知つた車夫の善作と云ふ人に出逢つた。此人はもと佐賀驛の構内車夫であつた頃、よく私の家の客を送り迎へしてゐたので、私の家の事情をも多少知つてゐた。三年前から妻子をつれて佐世保へ出稼ぎに來てゐたのである。私は此の人に出逢つたおかげで、あと三里の道を歩かずにすんだ。その上私は當分此の人の家に厄介になることにさへなつた。實は父の知り合ひの人をたよりにして來たのであるが、無謀な私は、ろくに其の所番地も知らなかつたので分る筈はなかつた。

「さう云ふことなら早うお父さんに手紙で知らさにや、いかい心配ぢやらう。まあ狹い家ぢやが當分わしの家へ置いてあげざあ。」と善作さんは事情を聞いて、いろ〳〵篤く云つてくれた。全く此の人に出逢つたのは私には何より仕合せだつた。善作さんの家は佐世保の街はづれの、所々に怪しい小料理屋などのある場末であつた。町の狹い道路のまん中には鐵道用の枕木が縦に二筋敷かれてあつた。これは二里ほどの山奥から海軍貯炭場へ石炭を運び出す車力の軌道であつた。道路には石炭屑がいつもこぼれ散らかつてゐた。それを町の貧しい家のかみさんや子供達が入れものを持つては拾ふのであつた。善作さんのかみさんも毎日それをのがさず拾ふのを私は見た。善作さんに二人の男子があつた。私より年上の權八は毎朝造船部へかん〳〵叩き（鐵の銹を叩き落す少年勞働者）に出て二十錢宛儲けて歸つた。次の弟は

まだ小學校に通つてゐた。私が行つて三四日すると天長節が來て街は賑やかだつた。天長節が過ぎると私も權八について造船部へ仕事に行つて見ることになつた。造船部の門までは町から小一里もあつた。第一の衛門を入つて鎮守府の內を通つて、大きな赤煉瓦の倉庫の前や山のやうに積んである貯炭場の横やをぬけたり、ボート納庫のある海岸へ出たり、赤ペンキを塗つたボイラの轉がつてゐる廣場を通つたりして、やつと造船部の門へ着くのであつた。その門口には私くらゐの年頃の少年が澤山來てゐて、二列に並んでゐた。てんでに汚れた風呂敷包の辨當を腰にぶら提げたり、肩から斜めに紐で提げたりしてゐた。私も權八の云ふまゝになつてその端の方に並んだ。その向ふ側には大人の人夫等が大勢列を作つてゐた。やがて伍長の帽子を冠つた目の黒光りに光る人夫係がやつて來て、それら少年の頭數を數へたりして、おとなしさうな、または氣のきいた顏つきの少年を片端からよりぬいた。その伍長の目に止まつた少年は運が好いのである。『鼻汁を垂れてる者には札をやらんぞ。』と伍長が云ふと少年達は一齊に鼻汁をすゝりあげる。すると伍長は一人〳〵氣に入りの顏を見出しては木の札を渡すのだつた。此の木札にありつけばその日の勞働が二十錢になるのであつた。私は最初の日から運よくその木の札にありついたそして權八の仲間達について海岸の仕事場へ行つた。そこには戰利品が澤山置いてあつた。目に入る物の悉くは私の小首をひねらせ、解らぬながらに驚嘆させる巨大な鐵の器具ばかりであつた。そこには長い大きな二本の鐵管が横たはつてゐた。それは旅順から分捕つた百噸グレンの柱だと權八は私に説明した。やがてその一端の横穴から少年達は一人〳〵頭から這ひ込んで行つた。權八の後から私も這ひ込んで行つた。兩端は直徑二尺位の圓筒だが、まん中になるほどふくらんでゐるのであつた。私は時々頭を打つつけながら中程まで這つて行つた。

『なるだけ中程の方へ行つた方が廣いから身體がらくだよ。』と權八は云つた。二十人あまりの少年は長さ三十間ほどの圓筒の中にそれ〳〵陣どつて蠟燭を輝かせながら、ハンマでコツ〳〵銹を叩き始めた。もう何も聞えないのであつた。鐵銹の粉と蠟燭の油煙とで管の內部は朦朧とかすんだ。

やがて晝飯時が來て外へ出てほつと一息吐いた。誰れの鼻の穴も鐵銹と油煙をしこたま吸込んでまつ黑であつた。皆は材木や鐵材の上に腰をかけて眞晝の太陽の下で海を眺めながら辨當を開くのだつた。私はさうしたひどい仕事を厭はず毎日やつた、そのひどい仕事がどれほど健康を害しようとも、遠い故郷の父及び繼母に對する反抗心の爲めには强いて忍び得た。私は一日も休まなかつた。「見ろ、俺は旅の空でかうして働いて生き得るのだぞ。」と云ふ誇りを覺えながら、息苦しい鐵管の中で終日ハンマをコン／＼云はせて仕事を勵んだ。

人は無力な弱者である間は何處へ行つても大して境遇の變化はないものだ。私が故郷を棄てゝ父や繼母に反抗する爲めに勞働者となり愉快に自立して生きようと思つたのは空想だつた。私が此の土地へ來てからの苦勞の量だけを故郷の父のもとにゐて忍ぶことが出來たら父はどのやうに私を賴もしい子としたであらう。私はなまなか旅の空へ飛び出した爲めに父や繼母に屈從する以上に他人に屈從し迫害され、さま／＼の苦勞を經驗しなければならなかつたのだ。他人の恩義に預ることは自分の家庭で父や繼母に冷遇される以上の氣苦勞を伴ふた。私は車夫の善作さんの家に殆ど小一年厄介になつて毎日造船部のカン／＼叩きに通つた。私は毎日働いた賃銀のうちから、その日／＼の食料を缺かさず支拂つてはゐたけれど、遠慮で窮屈だつた。それに私より一つ二つ年上の息子の權八に對しては常に彼の氣を損じないやうに心しなければならぬのであつた。權八は最初私が此の土地に來た當分は何かと私に親切だつた。然し彼は私以上に無知で、頑固で怒りつぽかつた。そして彼の氣を損ぜぬやうに勸めるだけ、それだけ彼はだん／＼不當な忍從を私に求めるやうになつた。全く征服された形で私は彼の云ふまゝになるより仕方がなかつた。然し彼の親達は私が權八の爲めにそんな氣苦勞をしてゐようとは少しも氣づかないらしかつた。權八は親達に感づかれぬやうに私をいぢめるからであつた。

彼は私より背丈は低くかつたけれど體格はがつしりして、私よりも力は强さうに見えた。仕事場からの歸りには必ず私が早い時は彼を待つてゐなければ彼は非常に機嫌が惡かつた。その癖彼は自分が早い時はどん／＼先に歸つた。其の他いろ／＼の點で私は彼の專横を忍ばされた。

或る日の夕方、權八と私は一緒に仕事から歸つた。街を歩きながら彼はいつもの調子で私に知つたかぶりを始めた。

「機關兵と水兵とは何處でお前えは見分ける。これはお前えには分るまい。」權八は私に云つた。彼は三四年も此の佐世保の土地へ居馴れてゐるので何かとくわしかつた。唯の水兵と三等兵曹とは服に異ひはないとか、服の左腕についてゐる山形は善行證であるとか、一等兵曹の直ぐ上は上等兵曹、それから準士官だとか、さうしたことを知つてゐるのを彼は私に誇つた。

「機關兵と水兵とかい。機關兵は服の左腕に螺鈴が附いてゐるよ。」と私は答へた。

「笑談云つてらあ、ねぢまはしが附いてゐなくたつて機關兵は機關兵だよ。ねぢまはしと櫻の花が附いてるのは、ありや機關兵の三等下士と云ふんだ。へん、知りもしないくせに——ねぢまはしが、ぷつちがひに附いてゐるのが二等下士だ。なんにも目印の附いてゐない機關兵を見分けることはお前えには駄目だよ。」

「そんならどこで君は見分ける。」

「俺あ直き見分けらあ。機關兵は瘦せて色が蒼白いや。水兵はまる／＼と肥つて色が黑いや。何故つてよ、機關兵は石炭のこなほこりや、油煙を吸つてばかりゐるから色が蒼白いに定つてら。わかつたかい。」と權八は鼻を動めかして云つた。

「あゝさうか、矢張君はくわしいな。」私も彼の海軍通には感心した。彼は軍艦の形を遠くから見てその軍艦の名を云ひあて得ることや、水雷艇の戰鬪任務や、帆檣の旗を見分けることや、また造船部內のことなどを知つてゐたのである。

私も彼にばかり知つたかぶりをされるのは確かに快くなかつたので、彼の知らない範圍で、彼に答へを求めてやらうと考へた。彼はまるきり學校へは行つてゐなかつたので文字を多く知らないのであつたそれに彼は文字が嫌ひだと云つてゐた。私はとある商店の看板に書いてある、彼の知りさうもない文字を指して彼に讀ませて見た。「極廉價調進」と書いてあつたが彼はそれが讀めなかつた。更に藥種屋の軒看板に「體裁高尚品質優秀値段格好」と書いてあつたのを彼に指し示して讀ませて見た。それも全部讀めなかつた。彼は急に默り込んで不快な顔色になつた。
「少しぐらゐ字を知つとるちふて鼻にかけるない。」彼は怒つた目つきで云つた。
「だつて君も僕の知らないことを訊ねるんだもの。」
「それがどうしたんだ！」彼は喧嘩腰で私の胸を突いて來た。
「お前えは誰れの家に今厄介になつてるんだ。お前えを初めて仕事場につれてつてやつたのは誰れだと思つとるんだ。生意氣云ふとひどいぞ。早く俺が家から出て行つてくれ。お前え見たいな厄介者はありやしねえぞ。おふくろがさう云つてらあ。朝早く起きてよ。ふん。十錢ぽつちの宿賃ぢや損が行かあ。」
權八はさん〴〵私に云ひたいことを浴びせた。私はさう云はれると一言も返せなかつた。

　權八はその翌日私の弱身につけ込んで、仕事場でも他の仲間の前で私をさん〴〵耻かしめた。少年勞働者の中でも彼は頑强で氣が荒いので巾をきかせてゐた、それ故他の少年等も彼の云ふことには一々尤もだと云つてそれに味方した。
「俺の家へ厄介になつてけつかる癖によ。そして俺が此の仕事場にもつれて來てやつたんだ。それに生意氣で仕樣がねえのさ。ぶんなぐつてやらうと思ふんだが、國の繼母にさん〴〵いぢめられて追ん出されて來やがつたんで俺あ可愛さうだから我慢してゐるんだ。」と權八は皆の仲間の前で云つた。

「やつてやるが好えさ。」と一人のおへつらひは云つた。

「お前んとこへゐるんなら喧嘩しねえが好い。おい清公、お前も生意氣をよして權八公と仲よくしねえな。その方が好いぜ。」と分別らしい顏で一人の少年は仲裁した。

「そりや僕だつて仲よくしたいんだから、云ふまゝになつてるんだが、それでも生意氣だと云はれりや仕方がないんだ。」

「何だと。もう一度云つて見ろ。」權八は私に飛びかゝつて來た。皆は留めた。

「今日の歸りに覺えてゐろ。此のまゝではすまねえから。」權八は私に云つた。

夕方の歸りに彼は私を待ち受けてゐた。

「早く逃げねえな。お前えひどい目に逢ふかも知んねえぜ。」と仲間が云つてくれた。私はもうすべて覺悟を定めた。相手の思ふ存分にさせてやらうと決心した。權八は案の如く二三人の仲間と一緒に倉庫の並んでゐる人通りのない草原に私を待ち受けてゐた。そして私に近づいて來て、いきなり胸ぐらをつかんだ。

「何をする」私も死力を出して組みついた。傍で見てゐた仲間は私の勢ひに少したぢろいだ。私は都合よくそこの草原の掘り返へされた窪地にまで彼をひた押しに押して押し倒した。それから暫く上になり下になりしてから起き上がつて、更にまた組み合つた。此の時私は手から離さず握つてゐた辨當箱にふと氣がついたので、ふり上げてがんと一つ權八の横頭に打つつけた。血が彼の横顏いつぱいに流れ出した。私はそれを見て驚いた。權八も自分の血に驚いたらしかつた。

「しまつた。大變だ……。」さう思つたが相手が離すまで私は彼の胸ぐらを握つたまゝであつた。此の時通りかゝつた一人の水兵が分けてくれた。權八は仲間にとりまかれて傷の始末をしてゐる間に私はどんどん馳り出した。一足早く歸つて權八の兩親にそのことを云つて詫びるより他はないと思つたのだ。

「大變なことをした。俺は權八の父にどう云つて詫びよう。こんなことになつてはもうあの家には置い

ては貰へないのだ。」私は家へ向いて馳りながらも氣が氣でなかつた。

家では權八の母親が夕餉の仕度をして私達の歸りを待つてゐた。私が唯ならぬ樣子をして走り込んだので彼女は怪訝な目顏で迎へながら尋ねた。私のシャツはぼろ〳〵に裂けてゐたのだ。

「どうしたの。家の權八はまだかい。」彼女は此の時私の喧嘩の相手が誰れであるかを知る筈はなかつた

「權八はどうしたの。」かみさんは更に不安げに訊ねた。

「權八さんは後から歸ります。おばさん私は權八さんと喧嘩しました。許して下さい。」私はさう云つた。權八の頭に傷を負はせたとは口に出して云へなかつた。そこへ私より一足遅れて權八が一人の仲間に伴れられて頭を手拭で繃帶しながら歸つて來た。かみさんはそれを見ると忽ち色を變へて狂氣のやうになつた。

「おや、どうしたのだえ淸さん、お前さんは權八の頭に傷をつけたの。え、それはどうしたわけだね。さあわけを聞きませう。さあ……。お前さんは誰の世話に今なつてをるか分つてゐる筈ぢやらうがの。お前はよくも權八の頭に傷をつけた。さあ、どうしてくれる。」とかみさんは目を釣り上げてがなり出した。

「すみません。すみません、おばさんゆるして下さい。」私はひた詫びに詫びた。

此の時權八は自分の母親が好いあんばいに私をがなりつけるのに力んで何時の間にか、そこの土間にある下駄を振り上げて私に打つてかゝつた。私はそこでは手出しをせずに打たれてやつた。そこへ父親の善作さんが歸つて來た。

「お前さん、まあちよつと御覽よ此の通り權八は頭に傷をつけられて、何ちふ義理知らずものもあつたものでせう、それ、此所にゐる。此の厄介者が……。」とかみさんは亭主に私の亂暴をあくどく訴へた善作さんは唯默つて、私の顏をあまり見ないで、目をぎろつかせたが、いきなり權八をどやしつけた。

「手めえが惡いんだからだぞ。喧嘩なんかしやがつて、てめえのやうな奴は出て去せろ、打たれて痛え

くらゐなら何故喧嘩なんかしやがるんだ。』と善作さんは我が子の權八を續けさまにひつぱたいた。母親はそれを見ると一層我が子に同情して『お前さん。そんなに自分の子を打たんでも好え。それはあんまり……の。』とかみさんは權八を善作さんの手から引きもいだ。

『何、てめぇまで。』と云ひさま善作さんはかみさんをも續け打ちに打ちのめした。私は善作さんに抱きついた。

『どうぞ許して下さい。私が惡いんですから。權八さんの惡いんではないから、許して下さい。』と私は善作さんに詫びついた。近所の人は寄つて來た。そうして、かみさんを引つぱつて伴れて行つた。やつと事は鎭まつた。私はどうしてよいか分らなかつた。然し善作さんは私に對して何にも云はなかつた、却つてやさしい調子で、

『さあ風呂へでも入つて來るが好い。これから喧嘩をせんやうにの。』と云つた。私にはその一言が身に強く響いた。私は吃度かみさんから怨まれるに違ひないと思つて非常にその夜中心配した。然し翌朝は常のやうにかみさんは朝飯の仕度をして私達二人を仕事場に出してくれた。まるで、何事もなかつたやうに、かみさんは私にも常のやうにやさしかつた。そして出しなに云つた。

『仲よくしなさいよ。喧嘩をすればあの通りお父さんがやかましいから、よいかえ。』さう云つて二人を送り出してくれた。

『昨日のことは許してくれたまへ權八さん。僕が惡かつたから。』私は途々云つた。

『いんや俺が惡いんだ。』二人は其の時だけはそれですかつり仲なほりをした。

私は時々故里のことを思ひ出さずにゐられなかつた。どうかした日は妙に父のことが案じられた。私は佐世保へ來てから一度父には手紙を出した。善作さんの家に厄介になつてゐることを知らせてやつた。

父からはあらためて善作さんに宛て丶何分頼むと云ふ手紙が來た。私にも別封で來た。それには私が無斷で家出をしたことについては小言らしいことも書いてなかつた。唯、奮發して一人前の人間に早くなるやうにと書いてあつた。私は父や繼母に對する反抗心で以て勞働の苦痛をも押し通して旅の空の心細さも割合に感じなかつたが、以前から父想ひの苦勞性であつたので、仕事をしてゐるまにも直ぐ父の面影が私の目の前に浮ぶのであつた。妻に媚びる愚かなる父の爲めに遂には旅の空にやつて來て下等な勞働者をしなければならぬ腑甲斐ない自分を思ふと齒ぎしりして故郷の空を睨みたい氣もしたが、その實私の心の中には父に對するほんとの愛情が潜んでゐた。私は父にうんと心配させてやらうと企て丶此の佐世保へ家出して來ながら、父を想ふことに於ては他の多くの子供に決して劣りはしなかつた。嘗て仕立屋の叔母の家に奉公してゐた時分だつて、私はどんなに父を思ひ人の知らぬいろ〲のことを案じわづらつたであらう。私は父の善良な性質をよく知つてゐた。父は他人に對しては謙遜であつた。自分から進んで爭論一つする人でなかつたが、家業上にいろ〲の紛擾が絶えず起るのであつた。その爲に旅にゐる私はどれほど父の上が氣づかはれたか知れなかつた。街を通つてゐても、或る店先などに人が大勢立ち塞がつてゐて、其の家で誰れかゞ爭論でもしてゐるのを見ると私は直ぐ國の父の上に思ひを馳せた。私の家はひと頃よくステーションの構内車夫に種々な手段で家業の妨害をされ、或る時は車夫等は酔つぱらつて父に喧嘩を賣りに來たりしたものである。ステーション附近の宿屋同士は激しい競走をやる弊があつて、双方が車夫を利用しては家業を邪魔し合ふのであつた。私の家はステーションの直ぐ間際で、場所としては他の宿屋を拔いてゐたので、それ故同業者はどうかして少しでも私の家に吸收される客を奪はうと努めた。それには必らず構内車夫を利用した。彼等車夫に法外の酒代を與へたり、時に酒をふるまつたり、いろ〲の懷柔の手段を用ゐた。その爲め構内車夫等は私の家の前にいつぱい俥を列べて客の寄り勝手を惡くしたり、他所から客を乘せて來る場合は他の宿屋へ送り込んだりした。その代り私の家の客が俥を雇ひたいと云ふ場合には構内以外の俥夫を呼ぶやうにしたこともあつた

さうした事からます〳〵構内傭夫等と私の家とは面白くなくなつた。尤も構内傭夫の中でも私の家に味方よる者も少數はあつたけれど、性質の荒い傭夫は悉く他の宿屋に買收された形であつた。父がそれ等の亂暴な傭夫の横理屈に對して飽まで自分を抑へて彼等の機嫌を取つてゐるのを私は屢々見た。然し私は今に父がこらへかねて何か非常なことをしはしないであらうかといつも氣は氣でなかつた。私の父は決してさうしたことの出來ない人でないのを知つてゐたからである。私の父は若い時分繼母のはからひで勘當同様の姿で家を出され、放浪中は土方の群れにも交つて刄ものの間を潛つて來た人であることは聞いてゐた。それが私の母が來るやうになつてからは一變して生れた町へ歸つて小商賣を始めたさうであるが、私の母の死後再び自暴自棄になり、私を祖母の手元に置き去りにして他國へ飛び出し、荒い仲間と一緒に生活してゐたのであつた。然し再び故郷の町へ歸つてステーション前に宿屋を始めてからは家業に忠實であつた。傭夫等がいかに暴れ込んで幾度喧嘩を持ちかけても父はおとなしく下から出てゐた。唯一度或る夜のこと父が拔き身を提げて傭夫等のあばれこむのを待ち受けたことがあつた、然しその時は事なくすんだ。その時ほど私は心配したことはない。私はさうしたことが私のゐない間にも屢々起つてゐはしないであらうかと折々案じずにゐられなかつたのである。その實私は父には少しも手紙を出したくなかつた。父からもあまり來なかつた。

カン〳〵叩きの仕事が一時杜絶えて少年勞働者が全く不用になつたのはそれから間もなくだつた。私はその日の食費が拂へなくなつた。然し國の父に云つてやる氣は無論なかつた。今更云つてやれないと思つた。で餘儀なく私は大人の勞働をも無理にやつて見た。石炭擔ぎや、山こわしの土工の群れにも入つてやつて見た。けれども私の身體では續かなかつた。で私は豫て聞いてゐる納屋住人夫になるより他に方法はないと思つた。納屋住み人夫といふのは造船部の常用人夫で、これはどんなに人夫が不用にな

つても喰ひはぐれのないものであつた。そして直接工場に入つて職工の手傳ひをするのであるから職工等に知り合ひも出來、職工になる手蔓を得るにもよいと云ふことであつた。で私は善作さんにそのことを相談した。

「納屋住みをするといろ〳〵惡いことを覺えるちふから、わしがさう云ふ所へ入れたとでも國のお父さんに思はれてはすまぬが、どうしたものか。」と善作さんは云つた。然し權八との喧嘩以來、かみさんは私をよく思つてなかつたし、私の窮屈がつてる風を知つて善作さんも強いては止めなかつた。

　私は或る日山の手の谷あいにある納屋に賴みに行つて見た。そこには藁屋根の掘立小舍が三棟あつた。岩崎組、平野組、山田組と三つに分つてゐたのであつた。私はそのとつ附きの平野組に入つて行つた。人夫達は皆仕事に出拂つて一人もゐなかつた。家には親方とかみさんとがゐた。色艶のよい愛嬌のある小肥りの、筒袖袢纏を着た若いかみさんが私をあいそよく迎へてくれた。親方も人柄であつた、私が事情を話したのでかみさんも主人も同情してくれた。

「よくまあ親ご達があるのにあんた一人で來なさつたよなあ。親ご達も隨分おぢや‥‥」とかみさんはしみ〳〵云つた。

「まあそんなわけなら置いてやるから來るが好い。納屋にはお前さんのやうな小供は入れぬことになつちよるが、まあ置いてやらう。」と親方は云つた。私は嬉しかつた。その晩から住み込んだ。その夜十人ばかりの人夫達に一々私はおぢぎをして挨拶を云つた。

「おとなしさうな小僧だ。」などと口々に云つてくれた。皆やさしいもの堅さうな男達ばかりだつたので私は多少安心した。彼等は丸太をぶつ切りにした木枕を並べて一つの蒲團の襟と襟とに二人宛枕違ひに寢た。障子越しの三疊には一組の夫婦が寢てゐた。私も誰れかの蒲團に入れて貰はねばならなかつた。

「わしの蒲團へ入れてやるから來な。」と人のよささうな爺さんが薄暗い壁の方から云つた、私は構はずそこへ入れてもらつた。昨夜まで權八と寢たより氣樂にのび〳〵と私は足を伸べて寢た。

「好いからもつと足をお伸べ。遠慮しねえでおのべ。風をひかねえやうにな。」と爺さんは頻りに云つた。さう云つてゐるうちに爺さんはもう鼾の音をさせてゐるのだつた。

翌朝から皆と一緒に起きて親方について造船部へ行つた。

「今日一名補缺をつれてまゐりやしたから、どうかお願ひ申しやす。」と親方は事務所の前に立つてゐる役員に云つてゐた。

「あゝさうか。」役員はうなづいた。其所には岩崎組、野村組、山田組の人夫が別々に並んだ。役員は人員の數を調べるとそのまゝ默つて事務所へ引つ込んだ。それで手數はすんだのである。

私はその日から木工場の手傳にまはされた。これは昨夜一緒の蒲團に寢た爺さんが親方へ頼んでさうしてくれたのであつた。いちばん氣樂な仕事であつた。爺さんはもう長い間木工場の手傳人夫をして、何處には何があるとか、何號の小舍には欅の板が何枚あるとか、職工達の誰よりもくはしかつた。木工場のことゝ來たら此の爺さんに訊ねさへすれば分ると云ふほど調法な爺さんであつた。爺さんはまるで孫かなどのやうに私を木工場の職工達に紹介した。おかげで私は早く皆の職工達に親しんだ。仕事といふ大した仕事はなかつた。鉋屑が溜ればそれを目籠に押し込んで外へ捨てに行つたり、職工達が墨を曳いた大小の木材を鋸切り場へ持つて行つて、挽いて貰つたり、晝飯時が來ると、ぐら／＼沸いてゐる藥罐の湯を小桶に分けて職工達の食事をする場所々々に持つて行つたりするだけのことであつた。私は爺さんの云ふ通りになつてゐれば間違ひなかつた。鋸ぎり場に行くといろ／＼の珍らしい機械があつた。板に鉋をかける機械や大きな欅の丸木を荒挽する機械や上下の車輪に張り渡されて非常な速さで廻轉してゐる鋭利なリボン鋸や水車のやうに廻轉してゐる車鋸や鋸の齒を一本／＼金剛砂砥で研いてゐる人間よりも巧妙なる機械やを私は一つとして感心せないで見ることは出來なかつた。さうした調法な機械が

發明された爲めに人間の勞力と技術がどれほど侮蔑を蒙つてゐるかを私は少しもまだ感ずるだけの頭はなかつたのである。人類の生活を幸福にする爲めであらねばならぬ幾多の新式な生産機械が資本家の獨占となつて社會生活を不幸ならしめ、多數の人間を虐げつゝあることを私はその時少しもまだ感じ得る頭はなかつた。唯多くの珍らしい機械の前に立つて子供心に讃嘆するばかりであつた。

木工場では私は皆から可愛がられた。

『お前は職工になりたくはないか。何職工になる積りだい。木工になれよ。』或る日伍長は私にそう云つてくれた。實を云ふと私は大工は好かなかつたのである。毎日木工場の手傳人夫をしながらも大工になる氣は少しもなかつた。鐵工などのやうに黒く汚れずに危險も少ないのであるが、私は何故か鐵工が好きだつた。私は鐵工になつて黒く汚れるほど職工らしいと思つた。第一にハンマを振つて見たいのであつた。何故私は鐵工や機械工が好きであつたかは大したわけもなかつた。國に居る間ステーションの側に生ひ立つたので、毎日のやうに汽關車の運轉手の動作や、また機關庫の修理工場へ行つて職工達がエンヂンを組み立てたり、バイスに向つて長いヤスリを威勢よく使つてゐる姿や、斜に構へて長柄の片手ハンマーを振つてゐる意氣な格恰を多く見て、さうした仕事を好きになつたのであつた。私には大工と云ふ職業はあまりに平凡に思へた。鐵工や機械工の仕事にはいかにもエキゾナチックな感じがあるので、唯々好きだつた。

『私は鐵工か機械工になりたいんです。』とその伍長に云つた。

『さうか。大工が嫌ひなら仕方がないなあ。然し大工になる方が好いぞ。大工の仕事は街でも出來るし自分の家でも出來る。』と伍長は眞實に云つてくれた。私はよくその伍長の家に遊びに行つた。夫婦二人きりで小ぢんまりと暮してゐた。子供がないのでおかみさんは私に心切だつた。着物を縫ひ直しくれたりした。私も休みの日はいろ／＼の使ひをしてやつた。

『私は鐵工になりたいから、木工場の手傳ひをするよりも鐵工場の手傳ひの方へやつて下さい。私は少しでも鐵工を見覺えてから職工に志願したいのです。』と納屋の親方に賴んだ。

「そんならさうしてやるから、もう少し辛抱してゐな。」と親方は云つた。

「鐵工場の方はあぶねえからおよし。惡いことは云はねえから、それよりも木工場が汚れねえ上に氣樂で好えだ。木工場におとなしくゐさへすれば俺が組長さんにようくお賴み申して、初めから給金が貰へるやうにして、職工見習にしておくんなさるやうに話するだ、もう少しの辛抱だよ淸公。伍長さんだつてお前えを可愛がつてゐなさるだ。なあ、さうしな。それが好えだ。」と爺さんは頻りにさう云つて私が鐵工になるのを止めた。それでも私は鐵工が好きでたまらなかつた。ハンマを振るやうになつたらどんなに面白いだらうと思つた。石炭の煙を吸ふのがどれほど健康に害であるか、また每日多くの怪我人が出來るほどの危險の伴ふ仕事に對して、私は殆ど無頓着であつた。全く盲目的であつた。

　私は納屋にかれこれ一年あまりゐて爺さんと每晩同じ寢床に寢た。爺さんは私のことについては非常に心から、何かとさとすやうに云つてくれた。

「お前えは職工なんかになつてどうするだ。自分の靈魂（たましひ）を臺なしにするばかりだ。お前えは今が大事な時だから、よう考へるが好えだ。お前えは何にも分らねえから俺がよう云ふて聞かせるだよ。惡いこと云はねえから、早う國へ歸つて親ごの云ふことを聞いて家にゐるが好えだ。親に虐められるぐれえ何でもねえだ。あたりめえゝだ。世の中にはもつと人間を虐めて、すまし込んで俺達のやうな勞働者の生血を吸つてる資本家ちふ者がゐるだ。此所の造船所はお海軍さまの工場だからまだ〱職工は大事にして下さるが、どうせ職工になれや人間扱ひにやされねえだ。なあようく聞きな。好えかよ。船一艘造りあげるまでに職工は何人死ぬちふ豫算がちやんとしてあるだ。死ねばたつた三百圓貰ふきりだ。後に殘つ

た家族が貰ふだ。一つの船を造りあげるまでに平均二十人の職工が死ぬと見てあるちふだ。それも造船費用の中に入つてゐるだ。まるで消耗品と同じだ。死んでしまつて三百圓ぽつち貰つてどうしるだ。かけがへのねえたつた一つ命だもの、一艘の船のキールを据ゑる時からちやんと何百人の職工中の誰れかゞ二十人の死人の仲間になるに定つてるだ。お前えは鐵工が好きだと云ふけんど、お前えだつて鐵工になればその二十人の中に數へられねえもんでもねえだ。よう考へるが好えだよ。靈魂を臺なしにしねえことよ。好えかい清公。早う國へ歸るが好えだ。」爺さんは夜も寝てからこん／＼と云つてくれるのだつた。私は時々爺さんの仕事着の繕ひをしてやることがあつた。爺さんは針の穴へ絲を通すのに十分も二十分もかゝるのである。そしてまづい繕ひ方をするのであつた。

「お爺さん僕縫つてあげませう。」と私が云ふと、

「お前えに出來るものかよ。ぢやお前えがさう云ふなら頼むだ。」と云つて爺さんは私にそつくり針ごと渡した。私にはそれくらゐの針仕事は何でもないことだつたのだ。

「お前えはまあどうしてさう器用だ。うめえな／＼。女つ子も及ばねえだ。」と爺さんは感心して云つた

「僕は仕立屋に三年も弟子奉公したんですよお爺さん、襦袢でも洋服でも作つて見せませうか。」と私が云ふと爺さんは目を丸くして意外さうに私をまじ／＼見るのだつた。其の後私は爺さんに紀州ネルを買はしてシャツや、股引きをこしらへてやつた。

「何てお前えは好い腕だらう。お前えにこしらへて貰つたものは大事に着るだよ清公。」爺さんはほくほく喜んだ。

國の繼母が私にわざ／＼逢ひにやつて來たのは家出後三年目の春だつた。私はもうその時は造船部の職工になつてゐたので、とつくに納屋を引き上げて下宿屋住ひをしてゐた。日給も三十錢以上貰つてゐ

たので、どうにか自立が出來てゐた。然し毎日の仕事は激しかつた。ハンマを持つよりも重い鐵板を取り扱ふのが毎日の作業だつた。造船職工の仕事の多くは工場外の大空の下で爲すのであつて、冬は寒風に吹き晒され、夏は炎天に照りつけられるのがならひであつた。船腹の最も狹苦しい所へ入つて鋲打のあいばんをさゝれる苦しさ、さうした作業上の忍苦は、曾て繼母や父に冷遇される時の辛抱の幾層倍であつたらう。

逢ひに來た繼母は云つた。

「まあお前は丈夫で勉強してゐたのねえ。もうどのくらゐ月給を取るやうになつたのだえ。しつかり勉強してよくおなり。お父さんもそれを樂しみにしてゐてだよ。妾もお前がよくなるのを樂しみにして待つてゐませう。」繼母は猫なで聲でさも眞實の母らしい風を裝ふて、いろ／＼見えすいたことを云つた。私はそれを聞いてゐると、むづゝゆくて堪えられなかつた。然しまた俺にだつてこんな母が或にはあるのだぞとさも繼母を誇るやうな誇りをも下宿屋の人達に感じないでもなかつた。彼女はなか／＼盛裝してゐたので、ちよと見ては三十代かと思はれるほど若く美しく見えるのであつた。ルビー入の指環や、金の丸打などを兩の指に嵌め込んでゐたし、小さな婦人持の時計までも帶の間に挿めてゐた。黒縮緬の羽織の着こなしと云ひ、丸髷の似つかはしさと云ひ、何處の奥さんであらう、私さへも見それるほどめかしてゐた。「繼母よ。お前の爲めに家出をしてさん／＼俺は苦勞したのに……」と思ひながらも、旅でかうして出逢つて見ればさすがになつかしい、氣がせぬでもなかつた。

例へ眞の母でなくともかうした美しい身なりをした女と云ふだけでもちよつと惡い氣はしなかつた、卑屈な意味ではあつたが肩味が廣いやうにも感じた。翌日は工場長に許しを乞ふて、私は繼母をつれて工場の中を見物させたりした。油に汚れた作業衣を着た少年が先に立つて、その黒縮緬の丸髷の奥さん風の婦人を案内してゐるのを多くの職工等は目を丸くして見た。中には彼等特有の卑猥な聲を浴びせるのもあつた。私は少してれたりした。繼母はそれには平氣で、小褄をからげて、はでな長襦袢の蹴出し

を見せながら私の後からついた。

仲間達は私にそんな立派な母があらうとは豫想にだもなかつたのだ。職工にでもなるものは家が貧しくて親もない人間ばかりのやうに思はれてゐる中に、私がさうした貴婦人まがひの繼母を伴れて工場を見物させてゐるのを彼等は意想外に感じたのは無論であつた。私も此の時だけは繼母だと云ふいやな感じをなるだけ自から少くした。さう思ふことは私の此の場合の少さな虚榮心を、かうした立派な母のあると云ふ空虚な誇りとの矛盾を感じなければならなかつたからである。

『お母さん、あれが浮き船渠です。』私は一々さう說明した。彼女が珍らしさうに目を見張つた。

『まあ。』彼女は讃嘆するばかりだつた。今しも石垣の岸から二人の潛水夫が異樣な甲冑を頭にすつぽり冠つて、だぶ〳〵の潛水服を着て、便器のやうな形の大きい靴を履きながら船渠の底へもぐらうしてゐる所だつた。既に他の潛水夫は水にもぐつて、したゝか息を吹き上げながら作業をしてゐた。鯨形の水雷艇は次第にその浮船渠の爲めに持ち上げられた。エーヤポンがどん〳〵吐き出す海水の量だけ船渠は浮き上がつた。春の日光がキラ〳〵海を輝した。

更に私は每日自分が仕事をやつてゐる造船工場の方へも伴れて行つて見せた。中心のキールにフレムを取り附けた。組立中の最初の船體を私は手短かに說明して聞かせた。それは丁度擊劍士の被るお面のやうな形であつた。その骨(フレム)の上から鐵板を張つて、職工達は長柄のハンマで鋲つけにするのであつた。

更に私は機械工場の內部をも覗かせた。そこには多くの旋盤やシカル盤や、ボーリングマシンや、シアーピンやの機械が續いて遠く列んで、それ〳〵鐵や眞鍮を削つてゐた。ズボンのやうな調べ革はシャフトから機械へと雨のやうにはためき流れてゐた。その次の建物では大きな汽船のエンヂンが幾組も組立てられ、油にまみれた靑服を着けた仕上工等は長いヤスリを巧みに使つてゐるのであつた。

『まあほんとに珍らしい物を見せて貰つたよ。妾達のやうな女は一生のうちに見られないものばかりでしたよ』と繼母は見物してしまつてから嬉しさうに云つた。

彼女は翌日汽車で歸つて行つた。

繼母が私に逢ひに來たその同じ年の秋、父がひよつこりやつて來た。私が工場から歸つて見ると下宿の主人と酒を飲み合つてゐた。私は誰れだらうと思つたほど父の顔は妙に異つて見えた。私は何故か繼母に逢つた時よりも父に對してはぶあいそであつた。私はその一瞬間胸に云ひ知れぬ感じがこみあげて來たのであつた。父もさうらしかつた。私は少し涙さへも出さうになつたがそれを我慢した。

「お父さんがゐらしやいました。さあ、あなたも此所へおいでなさらう。」と下宿の主人夫婦は私の心も知らずに云つた。

「長崎まで用があつて行つたから、ついでにやつて來たんだよ。お前は達者でやつてゐたねえ。」と父は云つた。

「え……。」と私はそれ以上云へなかつた。私は強いて父にぶあいそをする氣はなつたが、下宿の主人の手前私は言葉を控へ目にしたのである。

夜になつて親子は宿を出て街へ行つた。歩きながらぽつ／＼話した。父は長崎の旅館で泥棒に逢つたことなどを話した。

「帶をやられたよ。然し大抵見當がついてるのでその内に出るぢやらうと警察で云つた。お前にやる積りの懐中時計が無事だつたからよかつたよ。それ、これはお前にやるから持つてゐて好い。」と父は歩きながら私に銀側の懐中時計をくれた。私はいらないと云つて突き返したいやうな悲痛なる衝動を感じながらも「ありがたうございます。」といたゞいて受けた。父からこんな愛情を今更見せられて、それを平氣で受けると云ふことは自分の家出以來の苦勞を無意義にするやうな感じもした。その實私は逢ひに來てくれた父を心からいとほしくも涙ぐましいほど感謝せずにゐられなかつた。それにだん／＼話をして

ゐる間に私には讀めたのであるが、長崎へ行つたのは別に所用があつたのではなく、何事か繼母との間に面白くないことがあつて、その氣晴しの積りと、且つは私に久しぶりに逢ひたい氣持もあつて、何處へ行くとも知らさず、家を出て來たらしい父の樣子が、私を一層センチメンタルな心持にした。

　私の繼母は既に長年の間內證の貯金を肥やすことにのみ努めてゐることは親類中に知れてゐた。それ故父は店の計算の上に合點の行かぬ穴を見出すのが常であつた。それも少々のことは默過したが、今度のことは我慢がならずにひと悶着起したのらしいが、かしこい繼母は巧みに言ひぬけたに違ひないのであつた。

「どうも困つたあまだ。」と父は私に云つた。父のさう云ふ訴へは多少私の歡心を得る爲めのやうでもあつた。なまなか後妻と妥協して、而も絕えずその後妻に裏切られながら、唯ひとりの長男を旅の空で苦勞させてゐると云ふことは、いろ〳〵の意味で自身の心を暗くし、寂びしく不安にし、世間態を恥づる氣持にまでもならせるに違ひなかつた。

　さう思ふと私は父をいたはりたい氣持でいつぱいになつた。

「どうだ、お前は何かほしいものがあるなら云ふが好い。これから寒くなるからメリヤスシヤツでも二三枚かつてやらう。」父は勸商場の前まで來るとさう云つた。

「シヤツは持つてるからいりません。」私は何故か父に買はせたくなかつた。

「どうだらう。お前が今一緖にゐる下宿人達に私から手拭か煙草でもやるがよくはないかの。」

「そんなことをしなくても好いですよ。」

「まあタオルでもやることにせう。」と父はさう云つて、勸商場のある店でタオルを買つた。それからスコッチのメリヤス、シヤツや、鳥打帽子や、半靴などを自分で勝手に見立て私に買つてくれた。

　その勸商場をぬけた所にレストーランがあつた。父は私をそこに伴れ込んだ。そしていろ〳〵洋食を命じた。父はビールをさかんに飲んだ。一方の室にある球突臺が丁度空いてゐたので、父は私と球を突

いて見ようと云ひ出した。私も仕方なしに承知して、親子はしたゝか拙いゲームをやつてボーイを笑はせたりした。

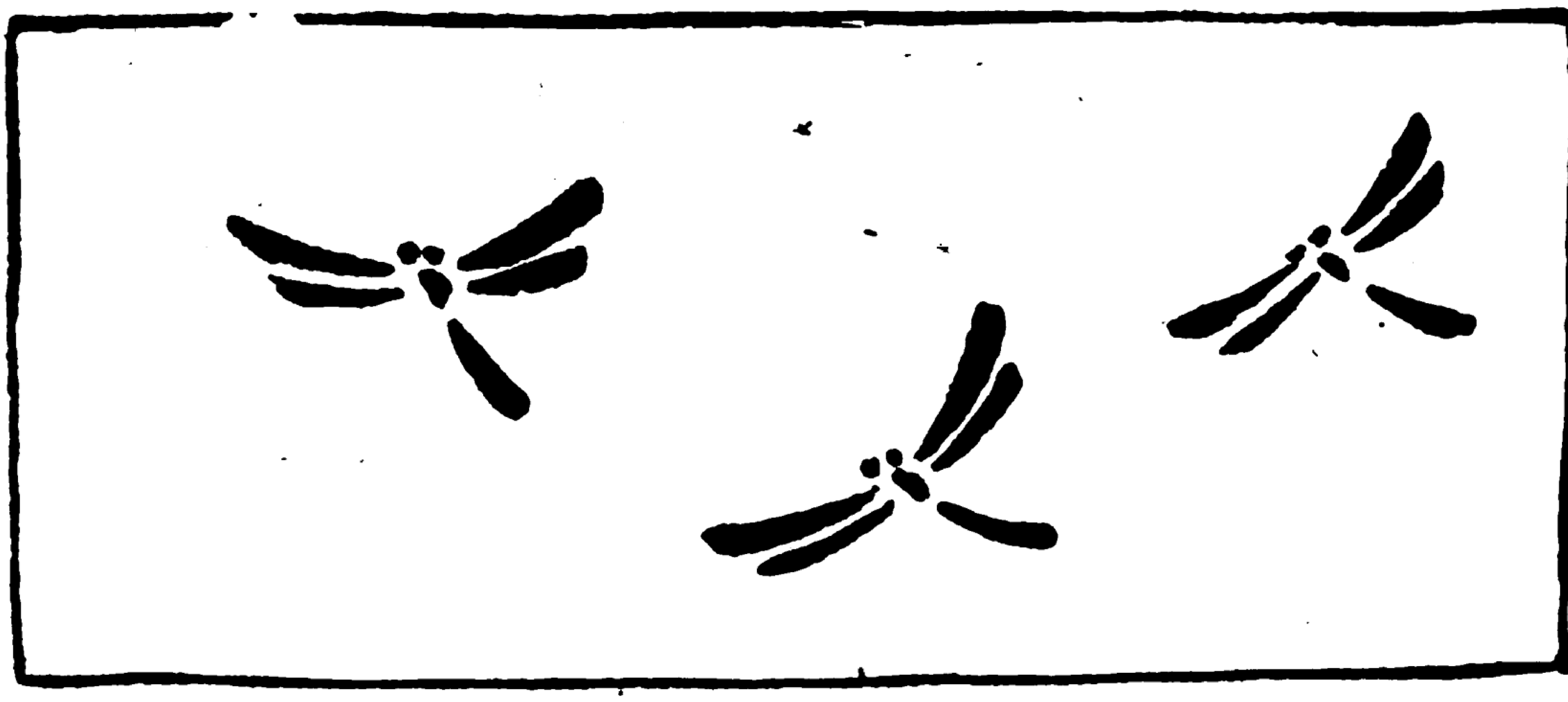
翌日は父を伴れて善作さんの家へ出かけた。父はそこで私の世話になつたことについて善作さん一家に厚く禮を云つてくれた。

私にとつて父は矢張眞實の愛情を持つてゐる父らしい父であつた。私は幼年時代に記憶してゐるやさしい愛情に滿ちた善良な父を久しぶりに見ることが出來た。私の父に對する反抗心は何處へか一時消えてしまつて、やるせない眞實の愛慕がそれと入り代つた。私は父と別れるのは何となく悲しかつた。父は二晩泊つて立つた。

「いつまでもお前が旅にゐては俺も氣になるから、いづれ家へ歸つて俺の代りをしてくれる者へでをつてくれにやならんで。」と父は別れ際に云つた。私はそれには默つて答へなかつた。

「歸つてなるものか……。」さうは思ひながら、また父が氣の毒でもあつた。實際私はもう國へ歸つて父の家業を手傳ふと云ふ氣にはなれさうもなかつた。それは此の上父を故意に心配させ、困らせたいなどと云ふ氣はなかつたけれど、私は既に或る一群の思想ある放浪職工等に親しんで將來の行動を共にすべく堅く誓つてゐたのであつた。それは目ざめたる職工の仲間であつた。私もその一人であつた。もう私には父や故郷を顧み慕ふてゐるひまはなかつたのだ。

其の翌年、私は或る同志に加はる爲めに關西へ飛び出した。それからのことは、あらためて他日發表するであらう。（完）



空望

谷崎精二

一

武志はかれこれ二年の間、ぢつと稲葉病院の一室に起臥して居た。

彼の健康状態は外部から見れば殆ど何の異状も無かつた。無論藥なども服用せず、飲食や運動に就ても何の制限も受けて居なかつた。病氣だと云へば病氣の様でもあるし、より多く又、病氣でないと云へば病氣でなさゝうでもあつた。從つて此の病院内でも、彼は患者ともつかず、普通の同居人ともつかない、一種變つた待遇を受けて居た。

何處と云つて特に惡い個所は無かつたが、彼が生來病弱な體質で、手足は細く皮膚は蒼白く、而して其の體格から推し量られる如く、非常に神經質だつた。彼の過度な神經質は全く母親からの遺傳であつた。彼の母親は幸ひに順境に暮して居られたのでよかつた様なものゝ、若し少しでも彼の女を脅かす様な事件が周圍に起つたとしたら──例へば夫が放蕩をするとか、愛兒が急病で死ぬとか──彼の女は乾度極端なヒステリイになつたに違ひなかつた。其れ程彼の女は常軌を逸した、理性で制しきれぬ、過度の神經を持つて居た。彼の女は全く神經だけで生きて居た

と云つても良い位だつた。女中が臺所で居睡りをして居るのが坐敷を二つ隔てた奥の間から、彼の女特有の神經でよくわかつた。而してそんな時、一方彼の女は非常に優しい、思ひやりの深い性質の所有者であり乍ら、やつぱり自分の神經を制しきれず、臺所へ立つて云つて女中に小言を云つた。

武志はさうした神經過敏な母親の特質をそつくり受け繼いで居た。七八歳の頃から彼はもう神經衰弱になつて、毎夜子供心にも不快な夢に襲はれて魘されたりした。其れから夢遊病患者になつて、眞夜中にむつくり寢床から起き上り、まるで無意識で家の中をさまよい歩いた。或る時はやはり夜中に彼の姿が見えなくなつて、兩親は大騒ぎを始めた。臺所、茶の間、土藏とすつかり家の中を探したが、何處にも彼の姿が見えなかつた。若しや雪隠の中へ落ちたのではあるまいかと思つて、父親は蠟燭をともして覗いてみたが、其處にも姿が見えなかつた。最後にやつと、彼が玄關の土間へ降りて、脱ぎ棄てた下駄の間に犬の様につくばつて居たのが發見された。

十三の時の夏、彼は友達に誘はれて大川端へ水泳の稽古に通つた。全然泳ぎを知らない子供たちは『ぱた』と名づけられて、始めの中淺瀬で一人々々教師に就て『犬掻き』や『平泳ぎ』や『拔手』の練習をした。武志も『ぱた』の組へ加はつて、三週間程稽古を續けて居る中にどうやら一通り泳げる様になつた。

『ぱた』の上級は丙組で、更に、乙組、甲組と分けられて居た。三週間の末に武志は友達と一緒に丙組へ編入される試驗を課せられた。其れは大川を向河岸迄横斷して泳ぐ事で、少し泳ぎ馴れた者には大して難かしい事ではなかつた。

二十人許りの『ぱた』の組が更に三つに分けられて、一隊づゝ泳ぎ始めた。水着を着て、白い水泳帽を冠つた教師が二人小船に乘込んで、一同の泳いで行く後から漕ぎ續けた。始めの二組は誰一人落伍者は無く、皆及第して、歸りには教師の漕いで行つた小船に乘つて戻つて來た。やがて武志が加はつて居た最後の一組の試驗が始まつた。

「用意！若し泳いで居る途中で苦しくなつたり、疲れて泳げなくなつた者は直ぐ手を擧げる事。向ふへ泳ぎ着きさへすれば、順はどうでも良いのだから、急がないで緩くり泳ぐ樣に。」

教師はかう訓誡を與へた。やがて合圖と共に一同はぽちやん〳〵舷から川の中へ飛び込んだ。七人許りの一團の中で武志は始め三番目になつて居たが、漸々後の者に泳ぎ越されて、到頭一番最後になつてしまつた。毎日泳ぎ慣れた川ではあつたが、深みへ出る事は始めてなので、中心へと泳ぎ出すにつれて次第に彼は或る薄氣味の惡い、手足が痺れて行く樣な不安の氣持に襲はれかゝつた。川蒸汽の通つた後から稍々大きな浪が打ち寄せると、其れを乘切る事が出來ないで、眼や、鼻の中へ水を打込まれ、どぎまぎして居る上泳ぐ方が益々下手になつて、身體が浪の中へ沈みかゝる。其れが又、何物かに足を下へ引張られる樣な不安を感ぜさせるのだつた。

「どうしたと云ふ事だ。皆はもうどん〳〵先きへ泳いで行つてしまつたぞ。第一、今迄一人だつて此の試驗に落第して、途中から船へ上つた者なんかありはしないんだ。自分一人泳げないなんて、何と云ふ恥づかしい事だらう。」

さう思つて彼は子供心にも自分を勵まし、手足に力を籠めて、速力を増さうとした。だが今度は急に心臟の鼓動が烈しくなつて、齒ががた〳〵顫へて來た。而して身體が眞直ぐになつて漸々水の底へ沈みかゝつた。「おや！」と思つた時、碧空と、川の面を輕快に行き交ふ、大小の船の影はもう彼の眼界から沒して、冷たい、蒼黑い、而して測り知れぬ深さと、物凄さとを湛へた水の層が彼を取り圍んで居た。

「おゝ！おゝ！」

彼は辛うじて片手を水面へ擧げて、護衛の小船の方へ振り乍らかう水の中で叫いた。水着を着た若い教師が其の有樣を見ると、直ぐ川の中へ飛び込んで沈みかゝつた彼の小さな身體を抱き上げた。水を少し呑んで、殆ど失神しかゝつた武志は、其れでも無事に船の上へ救ひ上げられた‥‥

其の日の夕方家へ歸つてから彼は四十度近い大熱が出て、五日間程まるで夢中で魘され通しだつた。

ぢつと寢て居ると、急にあたりの物が何もかもなくなつて、唯蒼黑い、冷たい、無限に擴がつた水が彼の身體を蔽うて來る。而して彼の身體がどん〳〵其の水底へ沈んで行く。堪へ難く恐ろしくなつて、手を振り乍ら助けを求めると、深い、深い、水の遙か表面にちよいと母の顏が現れる。だが母は『もう到底駄目だよ。私の力では及ばないから、諦めて沈んでおしまい。』と云ひたげな、悲しい顏をし、ぢつと水底の彼の顏を見下して居る……さうした、同じ樣な惡夢を、彼を幾度となく見續けた。一週間程たつてやつと熱は去り、どうやら床を出られる樣になつたが、無論もう水練には行かなかつた。其れのみか、其の後二三年の間彼は決して大川端へ足を向けなかつた。止むを得ない用事で兩國橋を渡らなければならない時などは、殆ど眼をつぶる樣にして急ぎ足で橋の上を通り拔けた。蒼い、深い、處に渦を捲いて緩やかに流れて行く水の面がちらと眼に映ると、彼は陸上を歩いて居乍らも、又あの時の樣に手足が痺れ、其のまゝ水の底へ引込まれさうな氣がして、不氣味な追懷に胸を顫はせるのだつた。

中學へ通ふ樣になつてから、兩親に勸められて彼は盛に運動やら、柔術やらに熱中したので、身體は少し良くなつたが、其れでも過敏な神經性だけは直らなかつた。頭腦は決して惡い方ではなく、豫習なども怠らずにちやんとやつて行つたが、教室で教師に名指されて、質問されたりすると、まるでどぎまぎしてしまつて、顏を赧くし乍ら碌に返事も出來なかつた。

彼の父は山の手でかなりの地所を持つた地主で、勿論資産も豐かだつた。子供は武志と、もう一人其の下に娘があつて、其の娘は横濱の或る大きな呉服商の息子の嫁に行つた。武志は中學を出てから高等商業へ入學したが、丁度彼が二十三になつた年の正月だつた。父がふと病氣になつて床に就いた。ほんの風邪のつもりで居たが、なか〳〵熱が下らず、醫者が血液の試驗をした結果、窒扶斯と決定して、駒込の病院へ入院した。看護に力を盡した効も無く、入院して三日目に父は遂に死んでしまつた。すると其の時、母親も亦發熱し出した。彼の女に病菌が傳染した事が發見された。悶え乍ら、苦しみ乍ら、死んで行つた夫と、生き殘つた息子との不幸を嘆ち乍ら、やはり彼の女も夫の後を追はねばならなかつた。

重なる不幸で武志はまるで氣が抜けてぼんやりしてしまつた。父方の親戚も、母方の親戚も、殆ど死絶えた頼り寡ない身の上だつたので、横濱の妹の嫁入先の人々が來て、葬儀萬端の世話をしてくれた。親しき者を我が家の中から永遠に見失つた時に感ずる、あの堪へ難い淋しさを抱いて、武志は永年召使つた二人の下女と共に單調な、張合の無い日を送つた。幸ひに一生涯遊んで居ても食ふに困らないだけの財産を遺されてあつたので、其の點は心配が無かつたが、彼はまるで生活の方向と、魅力と、青年に必ず附き纏ふ筈の、あの華かな空想の實現に對する熱意とを失つてしまつた。

父母の急死と云ふ事實からは、「生命の儚なさ」と云ふ様な事も考へられないではなかつたが、唯其れだけの意味では、其れはそんなに彼を不安にさせなかつた。彼は死ぬ事をそんなに恐れなかつた。だが突然父母を失ひ、彼等の愛から離れると、其れでもう全く生きがひが無くなつた事が、他に何物も彼の生活意志を支へ、勵ましてくれる物が見出されなかつた事が、彼には辛かつた。他の多くの人々の様に、其の日其の日の生活を本當に享樂して行く事が出來ないのが、彼を悲しませた。

もう卒業期が迫つて居たので、學校だけは其れでもどうやら卒業したが、他の學生たちの様に就職口を探さうと云ふ氣も無く、(勿論食ふに困らない爲めでもあつたが)依然として彼は無感興な、無目的な生活を送つて居た。學校を出てしまつてからは餘計爲る事が無くつて、一日々々が退屈でならなかつた。殆ど彼の唯一の親戚であり、相談相手である、横濱の妹が嫁した家の當主は、いろ／＼と彼の一身上の事に世話をやいて、學校も出たのだから此の際適當な配偶者を選んで結婚し、一日も早く新家庭を造つてもつと樂しい、華かな生活に入る様にと彼に熱心に勸めたが、而して彼自身もさうしたなら或ひは現在の堪へ難い程陰鬱な、味氣無い氣持が薄らいで、一時的にも生きて行く事が喜ばしく、望み多く感ぜられる様になるかも知れないと思はれたが、彼にはとても今迄一面識も無かつた他處の女を迎へて、其れと毎日同じ家で起臥する氣持になれなかつた。父の様に、母の様に、生れてから二十何年一緒に生きて來た者でない限りは、例ひどんなに優しい、萬事によく氣を配つてくれる女性があつたにして

も、とても人一倍過敏な彼の神經を、少しも苛立たせないで側に侍く（かしづく）と云ふ事があり得ないと思はれた。彼は知人の家へ行つて其の家の細君などに顏を合すと、まるで氣が臆してしまつて、視線を伏せたまゝ物も云へない程內氣で、はにかみやだつた。而して此等の人々に幾度會つても、どんなに優しく彼の意を迎へる樣に話しかけられても、彼の此の性分はいつ迄たつても直らなかつた。

勿論異性を欲する氣持も相當に彼にあるには違ひなかつたが、其れは唯「氣持」にとゞまつて居て、彼の眼を、唇を、其の全身を、衝き動かす程の强烈な生理的の要求にならなかつた。生來の脆弱な體格と、極度に過敏な神經とが、さうした要求を擦り減らし、抑へつけて、奔放な力を殺いで居る樣に思はれた。寡くとも日常生活で彼の異常な神經を惱ませられ、めちや／＼に突つき廻される苦痛を忍んで迄も、今急に異性を得たいと云ふ氣にはなれなかつたので、彼は結局此の勸告を斥けた。

二人の女中の中、一人はおみねと云ふ五十を越した婆さんで、もう十年以上も彼の家に使はれて居た。唯一つ鈍感である事が武志には不愉快だつたが、其の他の點では彼の女は召使としては殆ど缺點が見出せなかつた。正直で、おとなしくつて、其の上育ちも惡くないと見えて、應對や擧動が割合に上品であつた。武志の兩親も氣に入つて、よくおみねの面倒を見てやつた。而して彼等の死後、おみねは以前にましてまめ／＼しく働いてくれたので、武志は日常の細かい事にはそんなに不自由しなかつた。例へば彼が御飯のお菜にどんな物が好きで、どんな物が嫌ひであるとか、散步に出る時はどの着物を着て、どの下駄を履くとか、煙草盆は每朝綺麗に灰をふるつて、マッチの燃えさし一本でも決して殘して置いてはならないとか、さうした彼の性癖や、習慣やらをおみねはすつかり呑み込んで、一々彼の指揮を待たなかつた。

彼の家から直き二三町行つた處に秋葉と云ふ病院があつた。院長の稻葉氏はもう五十を越した老醫學士で、武志が生れた頃から今の處で開業して居た。比較的無口で、餘り患者の意を迎へる事はしなかつたが、本心は非常に親切な、謙讓な人で、醫學の方の素養もかなり深かつた。武志の一家では殆ど揃つ

て皆病身であつた爲め、二十年來此の稻葉病院の厄介になつて、死んだ彼の父親は殊に稻葉氏の人格にも、實力にも信賴を置いて居た。

「先生、どうでございませう？私もやつぱり助かりさうもございませまいね。」

父の死後母が又床に就いて、病氣が同じく窒扶斯と決つた時、彼の女は苦しい息をつき乍ら診察に來た稻葉醫學士の顏を見上げてから云つた。稻葉氏は大丈夫、屹度直るからと云つて彼の女を安心させやうとしたが、彼の女は淋しい笑を浮べ乍らかう云つた。「どうぞ先生、私がもしもの事がありましたら、武志の面倒をみてやつて下さいまし。御承知の通り、あれは至極病身な子でございますから。」

實際武志も子供の時から稻葉醫學士にかゝりつけて、醫學士のみならず、其の細君や子供たちとも、昔からまるで親戚の樣に親しくなつて居た。細君は醫學士よりは十許り年が下であつたが、夫と同じ樣に無口で、だが又同じ樣に親切で謙讓だつた。子供は二人あつたが、最初の女の子は二三年前に大磯へ海水浴に行つて浪に浚はれて死んでしまひ、後には今年十三になる男の子が殘つて居るだけだつた。四年程前から細君の末弟だと云ふ、千葉の醫學專門學校を出た許りの靑年が稻葉の家へ來て、義兄と共に患者を診察する樣になつた。藥局の書生や、看護婦は彼の事を若先生と呼んで居た。武志は此の若先生（彼の名は近藤と云つた。）とも直き知合ひになつた。近所に親類も無く、親しい友達も無い彼は、夕飯後散步に出た歸りに稻葉病院へ立寄つて、若先生や、老先生の細君と世間話に時を費す事などもいくらもあつた。

二

兩親に死別れてから三月程たつた或る日であつた。武志は夜遲く散步から歸つて來ると、急に寒氣がして頭がずきん〳〵痛んで來たので、葡萄酒を二三杯飮んで直ぐ床に這入つた。翌朝眼を覺すと、寒氣はやはり薄らがず、身體を動かすのが大儀だつたので、何も食べずに又うと〳〵眠り込んだ。晝近く

になつて再び眼を覺し、やつと寢床を出て顏を洗つたが、食慾が無くつて何をするのも不快だつた。體溫器で熱を測つてみると三十七度六分程あつた。

「風をひいたかな。」

彼はさう思つて直ぐ解熱劑を飮んだ。だが次ぎの日になつても氣分はよくならなかつたので、彼は直ぐ稻葉病院へ行つた。

「又御病氣かね、武志さん。」

病院長は笑ひ乍らさう云つて彼を診察した後、ほんの輕い風邪だから一日二日寢て居れば直きよくなるだらうと告げた。

其の晩はよく眠られて、翌朝は殆んど平熱に復したが、夕方から又少し熱が出た。武志は直ぐ稻葉病院へ女中を走らせて、老院長の往診を求めた。

「窒扶斯ぢやないでせうか？」

彼は三日前、始めて微かな發熱を感じだ時から秘かに氣遣つて居た其の事を院長に打開けて、返答を求めた。

「はゝあ、又神經家さんが始まりましたね、窒扶斯の熱の出方はこんなものぢやありませんよ。第一腸が烈しく蠕動を始めるものです。」

稻葉氏はやんちやな赤兒を諭す時の樣な、幾分誇張した寛大さを見せて、笑ひ乍らかう云つた。

だが稻葉氏が歸つてしまふと、急に武志は腸が烈しく蠕動し始めたのを見出した。

「神經だ、神經に違ひない。」

彼はさう思つて強ひて自分の昂奮を抑へつけやうと努めたが、腸の蠕動はやまないで、熱も次第に高まつて來る樣に感ぜられた。

「やつぱり窒扶斯の兆候らしい。俺も恐らく助かるまい。」

彼はもう薬を飲んだり、體溫を測つたりする勇氣も無く、絶望的な氣持に陷り乍ら一夜をまんじりともせず病床で明した。

朝になると彼は直ぐおみねを呼んで、又稲葉醫學士を迎へさせた。

「腸が蠕動し始めたんです。而して熱も上つて來ました。」

蒼白い顔をし乍ら床の上へ起き上つて、武志は老院長にかう云つた。

院長は彼の身體をすつかり診察してから、自ら或るをかしさを禁じ得ぬ樣に、昨日よりは更に誇張した寛大さで笑ひ乍ら答へた。

「困りますね。どうしてあなたはさう神經過敏なんでせう。何でもありませんよ。そんな兆候はちつともありはしません。疑はしければ血精を取つて試驗をしてみますが、そんな必要が認められないのです。――とにかくもつと私を信じておいでなさい。」

何のごまかしも無ささうな、明快な老醫師の言葉を聞いて、武志もやつと安心した。而して其れから自分でも耻づかしい位氣分がずつと輕くなつて、次ぎの日の晩にはもうすつかり熱も取れ、院長や若先生に嗤はれたい爲めに彼は散歩がてら家を出て稲葉病院を訪れた程だつた。

だが其れから又二三週間たつた或る日の事だつた。眞夜中――と云ふよりはもう曉方近くに、武志はぼんやり寢床の中で眼を覺して居た。平常不眠症であつた上に、其の日は晝間二時間許りうと〳〵と晝寢をしたので、彼は餘計眼が冴えて眠られなかつた。一時過ぎから雨がしと〳〵降り出して漸々雨勢は強くなり、トタン屋根はざあ〳〵忙しい音を立てゝ其れが妙に彼の氣持を滅入らせた。亡き父の事、母の事、金もあり、暇もあり、相應の學才もあり乍ら、早くから生活の欲望を失ひかゝつた彼自身の事、いろ〳〵な事が取り集めて一時に思ひ出された。而して其れが雨の音と一緒に愈々彼を淋しく、憂鬱にさせた。彼にはそんな場合に氣持を引立たせてくれる、唯一つの華やかな思ひ出も無かつた。

彼は床から起き上つて一時的にでも氣分を晴れやかにする爲め、葡萄酒の壜を取つて來て飲まうとし

た。だが其の時急に心臟がどきんと大きく鳴つた。續いて『くう』と云ふ樣な微かな音がして、其のまま心臟が鼓動をやめた樣な氣がしたかと思ふと、又忽ちどきん〳〵と烈しく鳴り始めた。

「どうしたんだらう、一體どうすればいゝんだらう？」

彼はすつかり狼狽して轉ぶ樣に階段を馳け降り、大聲を揚げて女中を呼んだ。おみねはびつくりして女中部屋から飛び起きて來た。

「水を持つて來てくれ。苦しい、苦しい。」

彼はやつとさう云つて喘ぎ乍ら廊下へ倒れかゝつた。

おみねは直ぐコップに冷たい水を一杯持つて來た。武志は其れを飲み干してほつと一息ついた。おみねの顏を見ると、急に氣が落着いて、心臟の鼓動も納まつた。

「まあ、びつくり致しました。どうなすつたのでございます？、稻葉先生をお呼び致しませうか？」

おみねは心配さうに彼の顏を覗き込み乍らさう云つた。

「いや、もういゝんだ。急に心臟がどき〳〵して來て息が苦しくなつたんだが、もう直つたから安心しておくれ。」

彼はおみねを女中部屋へ歸して自分は二階へ上つたが、いつ又動悸が高ぶつて來て不安な氣持に襲はれるか知れない樣な氣がして、とても安らかに寢つかれなかつた。夜が明けて雨も歇み、近所が賑かになつてからやつと氣が靜まつて、彼は重苦しい眠りに落ちた。

だが其の次の晩、又彼は眠られないで床の中でぼんやりして居ると、前夜と同じ樣に突然動悸が高ぶつて來て息苦しくなり、今にも失神しさうな不安な氣持に脅かされ始めた。彼は前夜と同じ樣に階段を馳け降りておみねを呼び、前夜よりもつと力無く、もつと蒼白い顏をして其の場に倒れてしまつた。

直ぐ稻葉醫學士が呼び迎へられた。別に心臟に故障があると云ふ譯ではなく、强度の神經衰弱から脅迫觀念に惱まされたものだと云ふ診斷であつた。而して實際此の馴染深い親切な老醫師に「何でもない

んですよ、ちつと確かりし給へ。」と励まされると、其れですつかり不安な氣持は失せて、どうやら眠れる様になれた。

二三日は無事で済んだが、又直ぐ其の恐ろしい發作が深夜に彼を襲ふ様になつた。突然の動悸の高まり、呼吸の切迫、而して聲を揚げて人の助けを求めなければ、其のまゝ息が絶えてしまいさうな極度の不安――幾度となくさうした事を繰返して居る中に次第に健康か衰へて、結局彼は自滅しなければならない様に思はれた。稻葉醫學士は非常に心配して、氣分轉換を計る爲め何處かへ轉地療養をする様にと彼に勸めたが、見ず知らずの土地へ一人で出掛けて行く事は到底現在の武志には出來さうもなかつた。仕様が無いので、結局彼は暫時稻葉病院へ入院する事に決めた。實際彼は今となつては稻葉醫學士が唯一の頼りになる人物で、片時も其の側を離れたくなく、而して又此の老醫師の側に居る限り、いつも心丈夫だつた。

入院したと云つても別に何處が惡いと云ふ譯でも無いので、武志は唯朝夕一回づゝ電氣マッサージを行ひ、消化の好い食物を取り、强壯劑を飲み、適度な運動をすると云ふだけの事だつた。一月許りたつと大分氣分が好くなつて多少體重も増し、夜もゆつくり眠られる様になつたので、もう大丈夫と思つて彼は退院した。だが家へ歸つてから二週間許りたつと、又武志は不眠症に罹つて、以前と同じ様に夜更けに胸苦しくなつたり、息がとまりさうになつたりし出した。自分の身體につくづく愛想を盡かしながら、再び彼は稻葉病院へ舞ひ戻らなければならなかつた。

暫くしてやつと健康が恢復したので今度こそはと思つて家へ歸つたが、直ぐ又同じ様な結果になつて、すごすご彼は病院へ戻つて來た。

「實に變な身體ですね。外國の醫學雜誌を讀むと、いろいろ特異的な神經性の病氣の實例が出て居るが、日本ではまあなたなどは珍らしい方ですね。仕様が無いから當分私の處へ來て居なさい。」

老院長はさう云つて半永久的に武志を病院内へ引取つて世話をする事に決めた。實際彼の、此の神經

性の病氣は『賴る者が無い不安』と云ふ樣な物に大部分根を持つて居るらしかつた。思ひがけなく殆ど同時に父母を失つてから、急に彼は生活が堪へ難く憂鬱で心細くなつて來た。唯一人の肉親の妹は他家へ嫁してしまつて、日夕相見る事が出來なかつた。女中のおみねは彼に親切を盡してくれたけれども、彼の女は目下でもあり、もう年老いた、弱々しい女だつたので、さう賴りにならなかつた。彼の近くに居て、彼に好意を持ち、進んで彼の賴りになつてくれる唯一の人は稻葉氏であつた。而して彼は稻葉氏の好意を謝して當分病院內に起臥する事となつた。家は一先づ疊んで、二人の女中には暇をやり、地所や、家作は管理が面倒なので賣拂つて金に替へた。幸ひ其の金額は武志が大した贅澤をしない限り、一生涯遊んで暮しても使ひきれない程だつた。

三

かうして二年程の月日がたつて行つた。武志は相變らず稻葉病院の一室に住つて、終日爲す事もなくぶら〳〵暮して居た。――朝夕電氣マッサージを掛けるだけで、其れもほんの氣休めで、大して效果はなかつた――其の他には何の治療を受ける事もなく、彼は勝手に方々遊び步いた。(だが夜だけは決して他處へ泊つた事が無かつた。稻葉醫師の側でないと、どうしても安らかに眠られない樣な、迷信的な氣持がいつ迄も彼を支配して居た。)老院長の家族は云ふに及ばず、藥局生や、看護婦などとも彼は次第に馴染になつた。食事なども彼は院長の一家の人々と同じ食卓で濟ます事が多かつたので、新しく來た看護婦などは武志をやはり院長の家族の一員の樣に思つて居た。實際何處と云つて病氣らしい處は外部から見えなかつたし、無口で、恐ろしくはにかみやであつたが、此の病院內の凡ての人々に彼が好意を持たうとして居る努力だけはよくわかつたので、此のおとなしい、上品な青年が一種變つた病氣を持つ「患者」である事を知らない人に說明するのは困難でもあつた。

二年の間には此の病院にもいろ〳〵の事があつた。或る藥局生は看護婦と通じて、病院の金を盜んで

逃亡した。若先生は患者から丹毒が傳染して、一時は生命危篤になつた。此の病院へ或ひは車で、或ひは擔架で運ばれた多くの患者の中には、すつかり健康が恢復し、喜び勇んで退院した者もあれば、命運描く冷たい骸となつて裏門から擔ぎ出される事になつた者も寡くなかつた。而して其の一人々々の生と死に或ひは空なる望みを繋ぎ、或ひは樂しい期待を掛ける親戚たちの姿をも、武志は或る氣兼ねをする心で遠くからぢつと見つめて來た。其等の人々が彼に與へた印象は、皆彼の淋しい心を愈々淋しく、愈々頼りなくさせるものだつた。此の世の中でどんなに幸福な者でも、どんなに頼り頼られる人を持つて居る者でも、いつ其の幸福が、其頼り頼られる他人が、奪はれてしまふかわからない。さう思ふと、頼り頼られる人を持つ事も、何の頼りも無い境遇に在る事に比べて、ちつとも幸福ではない様だつた。

「いや、然しそんな事を云つてはきりがありません。人生は其の不幸迄、死亡の手前にあるのです。其處迄頼り頼らせてくれる者があれば結構ぢやありませんか。——こんな病院などに居ると病人が始終出入するから餘計あなたの神經が刺戟されますよ。早く綺麗な奥さんでも探して樂しい家庭をお造りなさい。さうすれば夜恐ろしくて眠られなくなるなんて變な神經の發作はすつかり納まつてしまひますよ。」

若先生は彼が相變らず憂欝さうな顔をしていろ〳〵感慨を洩すのを聞くと、かう云つて彼を勵ました。實際彼自身が其氣になつたら、いつでも早速細君の候補者を探してあげてもいゝ、と云ふ事を老院長も度々彼に聞かせたが、武志はやつぱり不決斷な氣持に惱んで居るだけだつた。いつ迄稻葉病院の厄介になつても居られないし、自分でも一日も早く病的な神經を取り鎭めて、普通の人間と同じ様に日々の生活を享樂して行ける身分になりたいとは望んで居たが、さればとて今迄見ず知らずだつた女と突然同棲して、彼の人一倍過敏な神經に何の刺戟も與へられずに暮して行かれるだらうと云ふ事は殆ど想像し得られなかつた。二人が本當に頼り頼られる様になる前に、彼の神經が恐らくめちや〳〵に苛まれ、突き荒されてしまふに違ひなかつた。

病院に住んで居る數人の看護婦たちとも馴染になつて、內氣な彼が其の中に交つてどうやら世間話などをする樣になつたが、而して彼等の中には割合におとなしい、容貌も一通り整つた、彼に或る魅力を感じさせる若い女も居ないではなかつたが、やつぱり彼には彼の女等が何となく不氣味で、例へ氣持では恐しくなくつても、神經の障害物として怖ろしくつて、心底からは親しみきれなかつた。

「例へば俺があの女に戀して妻に貰い受けたとする——」

中で一番美しい、一番氣質が素直な一人の看護婦を選んで、彼はさう考へてみる。而して夜皆が暇になつてから診察室などへ集つて雜談に耽つて居る時、自分も其の場に連なつて密かに彼の女の樣子を注視する。白いつやゝかな齒並、大きな潤ほやかな、ぱつちりとした眼、水蜜桃の皮の樣に薄白いうぶ毛が生えた柔らかな頰、其等は皆美しく、皆魅力に富んでは居たが、いつ迄も見て居たら案外早く倦きてしまふかも知れなかつた。素直ではあり、上品ではあつたが、彼の女は細かい氣持の使ひ方では必ずしも武志の好みには一致しないらしかつた。何か少し喋つてくれゝばいゝのにと彼が思ふ時に、彼の女は却つてつんとして默り込んで居る。悲しさうな顏を見せて欲しいと思ふ時は、存外彼の女はのんきさうにげら〳〵笑つて居る。

「おや〳〵、結局俺の氣持にはぴつたりそぐはないよ。」

彼はさう考へて諦めをつける。而して實際さう云ふ風に彼の氣持とそぐはない女性が側に絕へず附き纏つて居るとしたら、彼の女が如何に美しくつても、心が優しくつても、彼の過敏な神經が到底其れに堪へられさうもなく思はれる。容貌や氣質の上の魅力の外に、何か大きな、超人爲的な機緣に動かされなければ、今の場合彼を勇氣づけ、其の憂鬱な雰圍氣から引き出して一時的にでも幸福にしてくれる唯一の原動力である戀愛さへも、結局彼の手には惠まれさうもなかつた。

四

二十許りの病室を持つた稲葉病院の建物は馬蹄形を成して中央に細長い庭を抱き込んで居た。庭には丁度各病院の窓の前に一本づゝ白楊や、プラタヌスが植えてあり、更に正門に面した、丁度馬蹄形の一部奥の處には小さな花壇と藤棚が設けてあつて、其の側には木製のベンチが向ひ合つて二つ置かれてあつた。

武志は朝夕此の庭を草帚で掃除する事を日課として居た。其れは以前抱車夫の役目であつたが、運動の爲めに武志が強いて自分から引受けたのであつた。而して實際せめてそんな事でも日課にしなければ、一日は彼に執つて餘りに退屈だつた。午前中は新聞などを讀んで何をするともなく過してしまふ。午後からは天氣が好ければ大概外出して賑かな町をぶら〳〵散歩したり、淺草へ行つて活動寫眞や歌劇などを見たりする。而して晩は病院の一室に閉ぢ籠つて讀書をしたり、看護婦や藥局生の仲へ立ち交つて世間話に耽つたり、或ひは又若先生の碁の相手をしたりする。其の間に病院へは絶へず幾人かの患者が運び込まれ、恢復を待つ樂しい笑聲と、絶望に脅かされる秘めやかな歔欷とが、相繼いで彼の耳へ掃き寄せて來る……

秋の末の薄曇つた日だつた。武志は夕方外出先から歸つて來て草帚を取り、日課の掃除を果す爲めに庭へ降りた。もう病室にはすつかり電燈がともつて、薄赤い光が窓硝子を透して兩側から庭へ落ち込み、葉が落ち散つた庭の立樹は根の方を其の電燈の光に曝しながら、梢をまだ暮れきらぬ夕空の色に浮かせて居た。

其の朝彼が丹念に掃除した筈であつたが、落葉や、紙屑がもうかなり眼に立つ程庭の處々に散つて居た。だがどうせ運動がてらに掃くのには却つて其の方が張合がある樣な氣がして、彼は隅の方から其のごみを綺麗に掃き寄せて行つた。

丁度左側の一番端れの病室の前迄彼がごみを掃いて來た時だつた。つい今朝迄空いて居た其の室に誰か入院患者があつたと見えて、硝子窓がすうつと開き、附添人らしい若い女が半身を現はした。年頃二

十六七の、すらりとした、顔も、手も、色が純白な美しい女で、其の細い腕も、つやゝかな庇髮の中に半ば蔽はれた小さな、髮のはつきりした耳も、始終微かにぶる〳〵顫へて居る樣なデリケートな感じを與へた。而して其の眼は大きく、ぱつちりして居て、何か秘かな願ひを持つた人の樣な、思ひの籠つた、だが何處か夢幻的な、優しい光を湛へて居た。

彼の女は今ひどく心配さうな、どんな些細な事が眼に觸れても、一種の迷信的な氣持から直ぐ其れに神經を脅かされさうな、おど〳〵した樣子を示し乍ら、片手に水の這入つたコップをそつと捧げて居た。而して窓から稍や斜めに二三間離れた處に佇んだ武志に彼の女の美しい顏をちよいと見せただけで、自分の方では殆んど彼の姿に氣が付かないらしく、コップの水を庭へ開けると其のまゝ靜かに硝子窓を閉めてしまつた。

武志はぼんやりして暫く其處で窓を向き乍ら立ち盡した。丁度活動寫眞のフィルムが盡きた後の白い布をぼかんとして見詰めて居る人の樣な、或る物足らないだらけた氣持と、だが又其のだらけ氣持の上へ除々にほごれて擴がりかゝる、今消え去つた許りの美しい幻影の再生があつた。

「何と云ふ美しい、而して感じの深い顏だらう！」

彼はさう思つた。單に「感じが深い」と云ふだけなら、此の病院へ住む樣になつてから場處柄だけに彼はいくらも「感じの深い」女性の顏を見た。だが喜びにつけ、悲しみにつけ、多くの女性は直ぐ昂奮の爲めに、其の優しさを、其の落着いた美しさを取り亂しがちだつた。憂ひに沈み、極度の昂奮にわななき乍らあんなにも優しい、殆ど夢幻的な美しさを保つて居た女の顏を彼は今迄見た事が無かつた。

「一體何者だらう？彼の女自身は確かに病氣ではなさゝうだ。誰の附添として這入つたのであらう？」

武志は翌朝診察室で電氣マッサージを掛けて貰ひ乍ら、若先生に前日ふさがつたあの病室の主の事を其れとなく問ひ質してみた。

「あの室の患者ですか、子供ですよ。ほんの四つか五つ許りの男の子で、流行性感冒ですが、熱が高く

つて肺炎に變ずる虞れがあるんです。お母さんが附きゝりで看護して居ましてね。」

若先生はさう答へて、子供の母親と云ふのは優しい、上品な人だが、不幸な境遇に居るらしい事、父親と云ふのは東京に居なくつて、何處か遠くから付送りでもして居るらしい事を彼に物語つた。

其の日朝も晩も、武志は庭を掃除する時に氣を付けてあの美しい婦人が居る室の方を見やつたが、其の窓はいつもひつたり閉されて、殆ど話聲一つ洩れて來なかつた。受持の看護婦に患者の樣子を聞いて見ると、子供は朝少し熱が下つたが、夕方から又急に惡くなつて、氷で頭を冷して居ると云ふ事だつた。武志は氣が落着かなくつて、時々そつと足音を忍ばせて病室の前の廊下を往來し乍ら室内の物音に耳を澄ました。子供の微かな呻き聲と、直ぐ何か云つて其れを宥めて居る母親の優しい言葉とが洩れて來る事があつたが、ドアはいつも閉されたまゝで、母親の姿を見る事は出來なかつた。看護婦でも出入する時にそつと廊下へ佇めば、室内の樣子を瞥見する事は出來たのだけれど、其れは又極りが惡くつて彼には實行し得なかつた。

翌朝子供の熱が更に高くなつて、肺炎に變ずるらしい懸念が強くなつたと云ふ事を、武志は若先生から聞かされた。中庭の花壇へと降りて行かれる樣になつた、診察室の横手の石段に佇んで、彼と若先生とが雜談をして居ると、折好く廊下をあの美しい母親が通りかゝつた、麗かな朝の日光の中で、彼の女は睡眠不足らしい、疲れた眼を眩しさうに瞬いて居た。壼間見ると彼の女は思ひの外脊の高い、骨格の確かりした女である事がわかつた。だが彼の女の眼鼻立ちが大きくつて、はつきりして居たので、其れは全體として決して不調和な感を與へなかつた。其の上看護に疲れた、物憂げな樣子が身體全體を一種弱々しい優しさで引括んだ、今の場合一層彼の女を美しくしなやかに見せた。彼の女の大きな、潤ひのある、魂其の物が覗き出て居る樣な深さと神祕とを持つた眼が、若先生の顏を辷つて武志の眼の上へ暫間止つた時、彼は胸をどしんと打たれた樣な氣がして思はず身體を顫はせた。

「坊ちやんはやすんでおいでゝすか？」

若先生はかう聲を掛けた。

「はい。ほんの今し方又うと〳〵と眠り始めまして。」

彼の女はきちんと足を揃へて廊下に立ち留つた。

「さうですか。では眼がお覺めになつたらちよいと知らせて下さい。後で又熱を計つてみませう。」

若先生の言葉を聞いて彼の女は叮嚀にお辭儀をし乍ら立ち去つた。

「肺炎と決るともう助かりさうにもありませんか？」

武志は若先生にかう質問した。

「さあ、子供の肺炎と云ふ奴は危險でね。殊にあの子供は前から衰弱して居られたらしいから、餘程氣を付けないと難かしいか知れませんよ。」

若先生は或るデリーケートな、だが惡意の無い推測を試みる人の樣な、ちよいと穿鑿的(インクィシティヴ)な眼を彼に向けた。武志は默つて眼を外し乍ら、どうかして子供がよくなつてくれゝばいゝと秘かに望んだ。

五

翌日武志はあの美しい母親の子供が床に就いて居る病室の受持看護婦から、子供が愈々肺炎になつて、病狀がかなり險惡だと云ふ事を聞かされた。看護婦は更に其の不幸な母と子の素性に就いても委しく彼に物語つた。子供の父は高等工業を卒業した電氣の技師で、二年程前情婦が出來て妻子を置き去りにして其の女と共に臺灣へ行つてしまつた事、取り殘された妻と子は此の病院の近くのＫ町に住む、遠縁の者の家に寄寓して、無情な父親の月々の仕送りで辛くも暮しを立てゝ來たが、此の頃では其の仕送りも杜絶えがちで、母親は今は殆ど無一文の有樣で、入院費用を調達する事に就いてもかなり心を惱まして居るらしく、入院した日に直ぐ臺灣の夫の處へ「子供病氣、金送れ」と云ふ意味の電報を打つたが、今朝又「タケシ（子供の名）キトクカヘレ」「スグカネオクレ」と云ふ二通の電報を發した事などを

武志は聞かされた。東京に親戚なども餘り無いと見えて、前の日の晝過ぎに五十近い女の人が訪ねて來たきり。他に見舞客も無いとの事であつた。

正午頃からぽつ／＼雨が降り出したので、武志は部屋に閉ぢ籠つて居た。夕方やつと雨が歇んだが、晴れさうな見込みもなく其のまゝ日が暮れかゝつた。

武志は藤棚の下へ木の圓い椅子を持ち出して、腰を下し乍ら濃くなつて行く夕闇の中で雨に濡れたまゝ、次第に其の色と形とを薄らがせて居る可憐なコスモスの花を見るともなしに見入つて居た。炊事場からはざあ／＼水を流す音と、食器がかち／＼觸れ合ふ響きとが賑かさうに聞えた來た。而して彼はあの美しい母親の子供が寢て居る病室の方を見返り乍ら、恐怖に近い、或る不思議な昂奮を感じた。

だが其處へ思ひがけなく其の美しい母親が現れた。彼の女は廊下からそつと庭へ降りて花壇の方へ近づかうとしたが、其處の闇の中に蹲まつて居る男の姿を認めると、ちよいと驚いたらしく足を留めた。

「如何ですか、お子さんの御容態は？」

武志は立ち上り乍らやつとかう云つた。作り聲をした樣に音調が妙に不自然な顫へを帶びて居る事が彼に感ぜられた。

「はい、有難うございます。どうも熱が下りませんで。」

彼の女は聲を潤ませ乍ら答へた。

「さうですか。其れはいけませんね。でも乾度直りますよ。直る事をお祈りして居ります。」

「はい、どうも有難うございます。」

彼の女は慇懃に頭を下げて立ち去つた。もつと何か話しかけたい樣な氣が頻りにしたが、實際のところ其れだけの事を云ふのが武志には精一杯だつた。而して彼の女の返答や、お辭儀が通り一遍の挨拶でなくつて、心から彼の親切を謝する樣だつたので、彼は甚だ嬉しかつた。若し神が何處かに在つて世界を照覽して居るのなら、而して其の前に膝まづいて祈る事が效果があるならば、彼は今神の前に膝ま

いて彼の女の一子の生命の爲めに心から祈りを捧げてもいゝと思つた。

其の次の日の午後、武志が散歩に出やうとして藥局の前を通りかゝると、あの美しい母親が其處で何か會計係の老人と話して居るのを見出した。彼の女は武志の姿を見ると顏を微かに赤く染め乍ら、お辭儀をしてそこ／＼に立ち去つた。彼は何氣無い風をして、老人に彼の女と話し合つて居た用向きを問うた。

『なあにね、今日は晦日ですから入院料の支拂ひをする日なのですが、尾瀨さん（其れが彼の女の姓だつた。）の處へまだお金が屆かないから暫く待つてくれと云ふお話なんですよ。旦那が臺灣とかに居るんださうで、今日も催促の電報を打つた樣ですが、氣の小さい人だと見えて大變心配してそわ／＼して居るんですよ。お子さんの容態も惡いんださうですし。お氣の毒です。』

老人はさう答へた。

武志はステッキを握つてぶら／＼賑やかな往來へ出た。秋の末で、雨上りの空はすつきり氣持好く晴れて居た。行路樹の葉は落ちて往來は左右が見通され、路面は丁度埃が立たぬ程度に乾いて、足を移す度に下駄の歯には輕い土の粘着が感ぜられた。

永い間平靜だつた、而して平靜である事を望んで居た彼の氣持に、あの美しい母親を見た日から或る不思議な昂奮と、秘めやかな希望とが投げ込まれた。勿論彼は彼の女の夫が愛兒の危篤の報知を受けて速かに立ち歸つて來るであらう事を祈つて居る者には相違なかつた。だが若し彼の女の夫が無情にも彼の女を見棄て、金さへも送つて來ないやうであつたなら……

『さうだ、其の時には俺が彼の女を窮境から救つてやる事が出來る。』

彼は思はずから口の中で呟いて、而して直ぐ自らの此の考へに恥ぢた。だが彼の女の美しい幻影はもう彼の眼が向く到る處に彼を待ち構へて居た。あの滑かな、純白な額、庇髪の下で絶えずぶる／＼顫へて居る樣なデリケートな耳、而して大きな、黑い憂ひを帶びた時に一層潤ひと美しさとを增す、二つの

眼──彼の女を愛する事は許されないか知れぬとしても、若し彼の女と同じ様なもう一人の女性があつて、彼の誠心籠めた愛を受容れてくれるとしたら、彼も乾度熱い幸福と、今始めて生きて行く事の歓びを感ずる事が出來るに違ひなかつた。而して二年ぶりで病院を出て、本當に頼り得る其の生涯の愛人と共に樂しい、華かな彼自身の家庭を造る事が出來るかも知れなかつた……歩き疲れて、何と云ふ事も無く近頃にない昂奮を感じ乍ら、彼は病院へ歸つた。

日が暮れてから彼は前日の樣に中庭へ出て藤棚の下に憩うて居ると、又あの尾瀬夫人が庭へ降りて來た。彼の女はほんの二三分間一人になつて冷たい戸外の風に吹かれ、惱ましい思ひで掻き亂された頭を休めやうとするのらしかつた。彼の女の美しい顏は前夜よりもずつと蒼白くなつて、ずつと憂鬱の色を湛へて居た。而して再び其の藤棚の下に武志の姿を見出して、驚いたらしく足を留め乍らお辭儀をした。

『如何です、其の後の御容態は？』

武志は前の日と同じ樣にかう問ひかけた。

「はい、どうも皆さまがいろ〳〵お面倒をみて下さいますが、もう諦めなければなるまいかと思はれます」

絶望の情を強いて押し隱した、靜かな語調で彼の女は答へた。

「でもまだ全然望みが無いと云ふのでもないのでせう。諦める覺悟は覺悟で、やつぱり出來るだけの看護をなされば、其れだけの報ひはあるだらうと思ひます。」

「有難うございます。──何しろ頑是無い子供なので、苦しむのを見て居りますのが母として辛くつてならないのでございます。其れに今迄父の事をまるで忘れて居りましたのに、此の一日二日急に父さんに會ひたいと請みまして……」

「お父さんはいらつしやらないのですか？」

武志は遠慮し乍らもう聞かずに居られなかつた。
「はい。臺灣の方へ參つて居りますので、度々電報を打ちましたのですが、返事も寄越しませんで。」
夫人は急に聲を潛めて俯いてしまつた。武志は溫かい同情の言葉をかけたいと思つたが、其の餘裕が無くつて、自分の胸のわな〱顫へるのを抑へつけるのがやつとだつた。

六

翌朝夫人の愛兒はもう全く絶望で、恐らく其の日一杯保つまいと云ふ事、而して子供は昏睡狀態に陷り乍ら、時々半眼を見開いて父を呼んで居るのが如何にもいぢらしいと云ふ事を武志は老院長から聞かされた。

好い天氣であつたが、武志は散歩にも出掛けないで終日病院で暮した。時折り中庭へ降りてそつとあの子供の病室の窓際へ近づくと、室内からは嗄れた子供の聲が微かに聞えて來た。其れは確かに『父さん、父さん。』と呼んで居るらしく、『靜かにして、靜かにして……父さんは直きに歸つて來ますよ。』と瀕死の愛兒を宥めて居る悲しい母親の聲もとぎれ〱に洩れて來た。武志は出來るならば病床に附きゝりで彼の女と彼の女の哀れな子供を慰めたいと願つたが、彼にさうする權利が無い事は明かであつた。どんなに此の場合、彼は自分が醫者であり、看護婦である事を望んだであらう……

小兒が全く息を引き取つたのは眞夜中の三時であつた。翌朝起きて看護婦から其の知らせを受けた武志は直ぐに病室を訪れた。

夫人は凄い程蒼白い顏をして、喪心した人の樣に茫然と死兒の枕許に佇んで居た。死兒は綺麗に顏を拭はれ、眼瞼を柔かく閉されて、白いベットの上に寢かされて居た。其の顏には子供と思はれない程の神々しさがあつた。病苦の表情はもうすつかり消えて、例へば水が水の中に溶けて行くのをぢつと見守る時の樣な、或る靜かな、最後の落着きが湛へられて居た。

「到頭お亡くなりなすつたさうで、殘念な事をしました。何ともお悔み申しやうがありません。」
武志は夫人にさう云つて、合掌し乍らぢつと暫く死兒の前に默禮した。夫人はお辭儀をし乍ら小聲で何か答へたが、彼にはよく聞き取れなかつた。
「あんなにお父さん、お父さんて、お父さんに會ひたがつて居らしつたのにねえ、本當におかあいさうに。」
側に居た看護婦が夫人を見返り乍らかう云つた。
「大變失禮ですが――」武志は夫人の側へ靜かに近寄り乍ら云つた。「若し何か御不自由な事がございましたら、御遠慮無く私に仰有つて下さいませんか。そんなに深いお馴染でもないのに甚だ失禮ですが、若しお金の事などで何かお役に立ちましたら――」
「はい、有難うございます。」
夫人は再び靜かに頭を下げた。
短かい沈默が續いた。武志は夫人が何とか云ひ出すだらうと期待して居たが、彼の女は其れつきり何とも云はなかつた。而して其れ以上彼の方から好意を押賣りする事は出來かねた。
「では又後程でも。」
彼がさう云つて室を出やうとした時だつた一人の看護婦があわたゞしくドアを開けて這入つて來た。
「尾瀨さん、電報でございます。」
夫人は看護婦の手から電報を受取つて、顫へる手先で封を開いた。
「おゝ、夫が歸るさうでございます！」
彼の女は強い感動を強ひて抑へつけやうとし乍ら、低い、だが力の籠つた聲でかう叫んだ。而して直ぐ又自分の眼を疑ふ樣に今度電報を讀み直した。
「まあ、ようございましたわ。其れて坊ちやんにも安心して眼をおつぶりなさる事が出來ますわ。」

先刻から側に立つて居た看護婦がかう云つたが、夫人は其れには返事もせずにづか／＼と死兒の前へ進み寄り、電報を死兒の胸の上へ載せた。熱い涙がはら／＼彼の女の美しい眼から流れ落ちた。

武志は默禮して靜かに病室を出た。

さうだ、かうなるのが當然だつたのだ。かうなるより外の事を自分が希ふ權利は毫も無かつたのだ。けれども、けれども……

深い溜息をつき乍ら彼は中庭へ降りた。夜半の風で枯葉が夥しく落ち散らされて居た。コスモスはもう萎れて、だが少しでも永く人の眼に觸れて居たい樣に、互に瓣の縮れた花を凭せかけ乍ら立つて居た。空しい望みを見捨てた武志は、更に幾年此の病院内であても無い生活を續けなければならないかを思ひ惱み乍ら、落葉を踏んでぶら／＼歩を續けた。（八、八月）

〰〰〰〰〰〰

編輯局より

■八月一日より印刷料三割値上と爲り、紙價又暴騰の爲め、心ならずも本月より定價を改正せり。然し頁數は從前よりポイント活字五十頁を毎號增加することゝなりたれば結局は、**內容**に於て**增加**せり

■七月號（勞働問題社會主義批判號）の盛況に次で**八月號**（資本主義征服號）も亦旬日ならずして**增版**の**請求**を受くるの盛況なりしを謝す。

■十月號**（秋季增大號）**は、更に新しき試みとして左の二大計畫を立てたり

社會主義研究號

新進創作家集

マルクスは勿論其の他の社會主義思想を網羅し新進の**專門諸大家**に依賴して研究することゝせり。之のみにても裕に**二百頁**の**著書**に相當する價値あることを切言して憚らず。新進作家集亦然り。約**四百頁**の**單行本**に相當する量を有し、双方合して**七百頁**の**著書**を讀者諸君の**机上**に**提供**することとなるべし。

毎月一日發行一回

改造定價

册數	定價	郵税
壹册	五十錢	二錢
半ヶ年	二圓九十錢	不要
壹ヶ年	五圓八十錢	不要

外國行郵税は一部十四錢增大號は別に定價を定む

廣告

▼廣告料は直接本社並に取次店に御照會願上候

▼廣告取次は便宜御依賴願上候

註文の注意

▼御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す

▼增大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す

▼見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用一割增の事

▼御拂込は振替によるゝを最も便利とす

▼新刊書寄贈其他編輯上の事は編輯所へ申出られ度し

大正八年八月二十七日印刷納本
大正八年九月一日發行

編輯兼發行者
印刷者　東京市南品川東海寺二四六　横關利藤太

印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿七番　秀英舍

本號限六十錢

編輯局　東京南品川東海寺二四六　改造編輯所　電話高輪一一九〇

發行所　東京芝區櫻田久保町七　改造社　電話新橋一五〇五　振替東京八四〇二

(改造第一卷第六號)(大正八年八月二十七日印刷納本、大正八年九月一日發行)

東京秀英舍印刷